KallistoDreamProject

LOV

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｋａｌｌｉｓｔｏ Ｄｒｅａｍ Ｐｒｏｊｅｃｔ

【Ｎコード】
Ｎ７０６２Ｇ

【作者名】
ＬＯＶ

【あらすじ】
２２世紀の中頃、人類の文化レベルは頂点を過ぎ、緩やかに下降しつつあった。そんな時代に、のんきにひとり暮らしをしている少女カリスト。喫茶店でメイド服を着てアルバイトしたりツチノコを探したり、それなりに面白おかしく気ままに生きたいと願うカリストと、そんなカリストに篤い友情と密かな恋心を抱くもうひとりの少女。だが、そんなふたりの想いを置き去りにして、世界は勝手に回り続けるのだった……。アニメチックに展開するお気楽近未来ＳＦです。１話あたり２０００文字前後となります。ライトＧＬや少

女愛、僅かですが軽度の残酷描写やリョナが含まれます。

その１－１（前書き）

純粋な意味ではＳＦじゃないかもしれません。
少しだけＧＬや少女愛モノですが、直接的な表現はありません。
「なんちゃって百合」程度の感じです。
拙い文章と内容ですが宜しくお願いします。

その1－1

旧来、ロボットと言えば人間の代わりに何かしらの作業をするために造られたモノであった。
それは必要に迫られて、あるいは単なる人間の科学技術に対する向上心やら探求心やら、そういうのを原動力に開発が進められていたらしい。
最初はヨチヨチと頼りなく、やがて走ったり躍ったり、お世辞にも豊かとは言えない語彙を懸命に並べて片言に会話したりするようになった。
ここまで辿り着くまでに一世紀を丸々使ったが、人類（と言うか、一部の熱心な技術者や科学者）は確かな手応えを感じ、自らの努力に満足していた。

これはそんなロボット開発の創世記にあった先人達が夢見た人間のようなロボット、人間と見分けのつかない外観、人間と見分けのつかない立ち振る舞い、人間のように感情を、魂や心らしきモノを持ったロボットが実在する時代の物語である。

二十二世紀の半ば頃、人類は相変わらず地球に住んでいた。
宇宙コロニー移住やテラフォーミングは実行されていない。そんなことをしなくても何とかなっている。
人口の増加は数十年前から頭打ちになっていたし、エネルギー問題も解決していた。
このエネルギー問題の解決は大きい。これは対消滅発電が実用化されたためだ。お陰で石油を掘る必要もなくなったし、石炭を燃やす必要もなくなった。
排気ガスだの地球温暖化だの海面上昇だの異常気象だのが一度に

片づいた。
ほぼ無限に手に入るエネルギーはあらゆるモノの製造コストに影響を与え、物価も大幅に下がった。
多くの後進国での食糧難や衛生難も解決した。世界的に貧富の差が無くなり、紛争や戦争も極端に減った。
企業間の競争意識も薄れ利益追求の意義も無くなった。あらゆる産業が公共事業のようになり、もう粗製濫造された製品を騙して売りつけるようなことをしなくても良くなった。
宇宙コロニーは実用化していなかったが、代わりに近隣の小惑星帯に大型プラントを造って、そこから多くのレアメタルや純度の高い鉱物資源を手に入れることもできた。
無重量下で精製した新しい合金や素材は様々な分野に投入され、そこから更に新たな科学技術が生み出された。
まったく良いこと尽くめだ。

まさかこんなことになろうとは、と、誰もが驚いた。
昔から人類の将来へ対する漠然とした不安は多かったが、それは世界的な核戦争、治療不可能な疫病の蔓延、食糧難、資源の枯渇、地球規模の気象異常……こんな類だったはずだ。
ところが人類は結果的に何となく問題をクリアしてしまったのだ。
そして、五年経ち、十年が経った。まったく問題がない。
世界は平和そのものだし、働かなくても生活できる。飢えも貧困もない。犯罪も激減だ。政治家はウソを付く必要もなくなり、国家間ではハラを割った話し合いがなされている。幾つかの国は合併したり、民族という区別を撤廃したりした。
二十年経ち、三十年が経った。
ほとんどの企業が赤字収支になったため国の管理下に置かれた。カネのために他人を騙したり利権を奪い合ったりする必要がなくなった。
すべての国でＧＤＰの伸び率がマイナスに転じていたため、統計

を取るのをやめてしまった。世界的に通貨が統一され、為替も関税も廃止された。
四十年経ち、五十年が経った。
どうやらこの平和は本物らしい。
この十年、小さな地域紛争が一回あっただけで、戦争と呼べるほど大きな戦争もなかった。
ついに人類は真に平和な世界を手に入れたのだ。

ドイツのとある都市。人口は約五十万人ほど。その多くは失業者だ。働きたくても仕事がないし、働かなくても政府の手厚い保護があるから、それなりに生活できる。
街の中程には同じデザインの巨大なマンションが並び建っている。これは独身者用に建てられたもので、この区画だけで男女合わせて5万人近い独身者や学生が住んでいるのだ。
入居料、水道光熱費、通信料は一切が無料。さらに失業している者、収入の途がない者には、充分な生活費が定額支給されるという好待遇ぶりだ。
このテのマンションと待遇はドイツ中、いや世界中の都市に存在しているので、特に珍しいことではない。この時代では当たり前の施設であった。

斜違いに並んだ巨大マンションの一棟、最も日当たりの良いG棟の最上階三十階の最も奥まった所にある一室に、この物語の主人公が住んでいる。もう朝の十時も過ぎようとしているのに、まったく起きているような気配がしない。まだ寝ているらしい。

部屋の中は簡素なものだった。キッチン付きワンルーム風呂トイレ別、という案配だ。生活保護を受けている独り身ゆえ、これ以上を望むのはワガママと言えよう。余人はいざ知らず、窓際のベッド

で丸まっている当人は満足していた。
家具類は非常に少ない。チェストが一竿、冷蔵庫、小さな食器棚、ベッドサイドにテーブルと椅子、この程度だ。
テーブルの上にはこの時代の必需品である汎用通信端末（ＭＴ）が置かれているが、それ以外にコレと言った電子機器の類はない。
そんなわけで部屋は少しばかり殺風景ではあったが、清潔で小綺麗に片付いていた。

ややして丸まった毛布がモゾモゾと蠢く。ようやく部屋の住人が目を覚ましたらしい。
毛布の一端が捲れて、そこから手が突き出される。手は枕元を何度か探索し、そこに畳んで置いてあった着替えを発見、それを掴むと再び毛布の中へ戻っていった。
その後、毛布にくるまったまま身体を捩ったり伸ばしたり……どうやら寝たまま服を着ているらしい。かなりの横着者ではあるが、すっかり慣れているのか、すぐに動きは止まり、再び静まった。
「……ぐう……」毛布の中からは安らかな寝息が漏れている。

さらに一時間ほどが経過した。もう昼の十一時である。ここまでくると朝寝坊と呼べるようなレベルではない。
普通なら昨晩に深酒でもしたか、夜更かしでもしたかだ。しかし、実際は酒も飲んでいないし、夜更かしもしていない。単に眠たがりなだけなのである。
なかなか目を覚まさないことに痺れを切らしたかのようにテーブルの上のＭＴが鳴動し、通信が入ったことを知らせた。何度か呼び出し音が鳴った後、強制的に接続される。
『カリスト？　カリスト？　ねえ？　もしかしてまだ寝てるんじゃないわよね？』呆れたような少女の声に丸まった毛布の塊がモゾモゾと反応する。
『寝てるの！？　起きてるの！？』

「んう〜……まだ十一時だよ〜？」毛布の中から間の抜けた声が漏れてきたのだった。

その１―２

カリスト・グロスベイア。女性。
ドイツ連邦国民番号ＸＸ００４７ＣＺＥＧ２Ｓ。
中央州Ａ区画（旧ベルリン市）籍。
中央州Ｇ区画（旧ポツダム市）在住。
独身／家族なし。
十六歳。
無職（Ｆランク社会保障）。
無修学。
不定期就労・不定期収入有り。

大雑把に記すと我らがヒロインの国民ＩＤに記載されている肩書きはこんなところである。本来はもっと詳細に記載されているのだが、本筋にはあまり関わりないので省く。

昼頃に起きたカリストは、今日ようやく国民ＩＤの更新をしてきた。
本当は先月中に済ませる予定だったのだが、生来モノグサな性格のため延ばし延ばしにしていたのだ。
これでカリストは来年の誕生日まではドイツ連邦政府に身柄を保障された立派な失業者でいられる。
もっとも、前述したようにカリストには不定期ながらも一定額の収入があったので、失業者として給付される手当は最低限の金額だった。また、その収入というのも実のところは某所から小遣い程度の金額を貰っているだけなので、あまり生活に余裕はない。
であるが、のんきなカリストは快適愉快に生活している。

カリストは十六歳だが学生ではない。これといった定職にも就い

ていない。
両親は産まれたときからいないらしい。少なくともカリストは両親の存在を意識したことはない。
カリストの自我が確立する頃には既に某「施設」に暮らしていた。そして数ヶ月前に「外界」に放り出され、今の生活が始まった。
前述したようにカリストは至極のんき者で自堕落、束縛されたり強制されたりするのを嫌う傾向にあったため、今の気ままな生活には満足しているし毎日が楽しいようだ。
その日は午後から近所の空き地で模型飛行機を飛ばして遊び、草むらで虫を探して過ごした。
昨日は河原で朝から晩までカエルを観察し、一昨日は草むらで虫を探した。
その前は近所の空き地で手製のブーメランを飛ばし、その前は草むらで虫を探したあと、森でドングリ拾いに精を出した。
ずっとこんな感じである。他人から見れば実に下らない益体のない生活だったかもしれないが、カリストはノンビリと（自堕落ながらも）楽しげに生きている。
今の生が永遠に続くかのように、まるで「生き遅れ」ているのだった。

そんな独りで自由気ままに生きているカリストを間接的に世話してくれる人物がいる。
先刻、寝ているカリストを起こした通信相手の少女、名前はエンケラティスという。
カリストと同い年でドイツ人だということしか明らかではない。
カリストと同じ施設の育ちだとは言っているが、カリストが施設にいた頃には逢ったことはないし、名前すら耳にしたことがなかった。
毎日のように入れてくれる通信も音声のみなので、いまだに顔も

判らないのだ。
そんなエンケラティスが何を言ってくるのかと思えば、ほとんど大した内容ではなかった。
どんな音楽は好きかとか、美味しいお菓子が新発売になったとか、今日は何をして遊んで過ごしたのかとか、つまり単なる世間話に終始した。
先刻の通信もカリストが放っておいた国民ＩＤの更新を促すだけで、後は封切りになった新作映画の話題をするばかり。
言うなれば、電話友達の間柄である。

カリストが今の生活を始めた当日からエンケラティスの通信は開始されたが、すぐにカリストはエンケラティスに好意を抱くようになった。
ざっくばらんでハキハキしているエンケラティスはノンビリ屋のカリストとは相性が良く、同い年ということもあってか、イロイロと話しやすいのだ。
『あんた、ちゃんとＩＤ更新してきた？　期限過ぎたらメンドーなことになるんだからね？』
「あはは～　ちゃあんとしてきたよっ♪」
『あはは～　じゃないわよっ！　今度からはキチンと自分で管理しなさいよ？　私だって忙しいんだから』
「なんで忙しいのかなっ？」
『何でって……イロイロやることあるの！　報告書作ったりとか、人員割考えたりとか』
「ふう～ん……」
謎に満ちあふれたエンケラティスではあったが、それほど激しく身元を隠蔽しようとはしていないようだった。
今までの話を総合すると、エンケラティスはカリストとは違い「施設」に留まっており、その「施設」の中で仕事をしているようだ。そしてどうやら管理職に就いているらしい。

しかしさすがに踏み込んだ質問に対してはクチを割らない。「施設」の所在地、具体的な業務内容、カリストが「外界」に出された理由、そういうことはキッパリと教えてくれない。

そもそも、あの「施設」とは何だったのか？　カリストが物心付くころには既に「施設」の住人だった。いつから「施設」のやっかいになっていたのかは知らない。

自分がどこから来たのか、この「施設」が何なのか、重要なことは何一つ教えてもらえなかった。外部との接触はもちろんのこと、ほとんど誰にも会わずに過ごしたような気がする。

気がする、というのは変な言い方だが、実のところ、カリストは「施設」で過ごした間のことを良く覚えていないのだ……ほんの数ヶ月前まで確かに「施設」の住人だったはずなのに……。

ここで普通の人なら酷く混乱したり怖れたり邪推したりするのだろうが、のんきなカリストは深くは考えない。今が楽しいので問題ないのだ。

『……そういえば』

「なあに？」

『あんたさ……自分が何なのかとか、考えないわけ？』

「どして～？」

『だって普通もっとしつこく訊くでしょ？　「施設」のこととか、私の正体とか、あんた自身の存在意義とか、そういうの気にならないわけ？』

「……気になんないワケじゃないけど……あんましシツコク訊いたら、エンケラティスに嫌われちゃうかもしんないから……」

『そんなんで私はあんたを嫌ったりしないわ。それにしたって、自分が何で生まれたのかとか知りたいと思ってるんでしょ？　思春期なのよ？　アイデンティティ・クライシスなのよ？　普通ならマトモなことじゃないのよ？』

「んう……えと、わたしってばホントにドイツ人？」
『そう、あんたはドイツ人。ゲルマン系とスラヴ系と、あと少しラテン系』
「へ～え、ちょとラテンの血が入ってるんだぁ♪」
こうして話していると、やはりエンケラティスはカリストに同情的というか親身だ。
有象無象の疑問や謎よりも、こうやってエンケラティスと触れ合っていられることの方がカリストにとっては大切に感じられた。
「……エンケラティスってば、とってもとっても優しいねぇ」
『なっ！　……褒めてもらったって詳しい事は教えられないんだけど』
「やっぱしアヤシイ団体とか組織だったりして～？」
『……ま、アヤシイと言えばアヤシイわよね。実際、アヤシイわ、うん。それは否定しない。ま、社会の一部、世の中のシステム、善悪は別にして絶対に必要な存在ってヤツ』
「それってば、やっぱし悪の組織みたいだよ～。世界を牛耳る裏社会のフィクサ～」

結局、何なのかは判らない。平気な顔をしているカリストではあったが、もちろん教えてもらえるなら教えて欲しい。しかしそれを深く追求しないのもカリストの流儀だった。

その1－3

何度も言うようにカリストは失業手当と「施設」からの小遣いで生活する無職者だが、実は少しだけアルバイトをしている。取り敢えず愛想と見栄えだけは良いので、近所の喫茶店でウェイトレスをしているのだ。

と言っても多くても週に1回、それも数時間労働である。怠け者のカリストではあるが、ちょっとカワイイ制服を着て接客をするのは楽しいらしく、短い時間ではあるが好調に働いている。

このアルバイトは「施設」からの指示なのだが、まったく労働も就学もしていない未成年者は、原則として独り暮らしできない法令が定められているのだ。

「施設」は何が何でもカリストに気楽な独り暮らしをさせたいらしく、いわば法の抜け穴を付いた形になる。

喫茶店といっても大手チェーンやウェイトレスの可愛らしさをウリにしているような類のモノではなく、個人経営のちんまりした店である。

カリストが今の生活を始めて数日後、エンケラティスからこの喫茶店へ顔を出すよう指示を受けたのだが、事前に履歴書も用意していなかったのに（そもそもカリストには働く気もなかったのに）即採用されてしまった。

オーナーは五十歳は過ぎているだろうが年齢不詳の中年男性で、立ち振る舞いは若々しく、なかなかユーモアのある人物だ。

事前に何かしら「施設」と話が付いていたようでもあったが、その辺の事情は何も話してくれないし、逆に、特にあれこれとカリストの素性を訊くような事もしなかった。

カリストは雇い主の事を「まいすた」と呼んでいる。

カリストはもっぱら週一の夕方からの出勤で、閉店まで働く事になっていた。時間にして４時間ばかりである。小学生の小遣いにもならないバイト代だ。

喫茶店は常に閑散としていて、のんきなカリストが気を揉むくらい客の入りは悪く、その少ない客ですら読書などしながらコーヒー一杯で何時間も粘るような人たちばかりだった。カリストは時々コーヒーのお代わりを注いで回ったり、ちょっとした雑談の相手をする程度で退屈と言えば退屈な勤務である。

そんな喫茶店なので基本的にはオーナー独りで充分に手が回るのだが、正直なところオーナーは親の遺産か何かが相当あるらしく、喫茶店経営も暇つぶし程度にやっているため労働意欲が薄く、夕方からはアルバイト任せにして店内で寛いで過ごしている。

なのでカリスト以外にも何人か雇っているようだった。

カリストを雇うに当たってオーナーはゴチック調の真面目なメイド服を支給してくれた。これがこの喫茶店のウエイトレスの制服らしい。

彼の趣味なのか他に案がなかったのか真意は判らない……が、取り敢えずカリストは可愛らしいメイド服を着ることができるので喜んだ。

「……子供が着て似合うような制服じゃなかったかもしれんなぁ……」

「えへへ……コドモってワケじゃないんだケドなぁ」

だからといって大人というワケでもない。１６歳のカリストではあるが、ひどく低身長で童顔、その子供っぽい口調と天真爛漫さのためヘタをすると１２歳よりも幼く見られることさえあった。

もっとも当人は子供扱いされることには慣れているので、まったく気にしていない様子である。

「まいすた〜　このパンの耳、捨てちゃうのかなっ？」

「……売るほど多くあるわけでもなし、それを食べて腹の足しにするほど貧しいわけでもなし、取っておいても結局は捨ててしまう。あと、カリスト、俺はお前さんの雇い主なんだから、せめて話し方にもう少し敬意を……」
「そいじゃこのパンの耳、もらっちゃうねっ？　えへへ～♪」
カリストは自由自在だ。厨房に入り、ボウルにパンの耳を入れると、その上から炭酸水をかけ始めた。
「……おい……お前さん……まさかそれ、食べるツモリじゃないよな？」
「食べるよ～？」
呆れるオーナーを尻目に、カリストはフライヤーに火を入れ、油が適温まで熱せられたのを確認すると、炭酸水漬けになったパンの耳を揚げ始めた。バチバチと物凄い音を立てながら油の中で踊るパンの耳だったが、なかなか香ばしく良い匂いがしはじめる。
「……そうか、ああ、なるほど」
「えへへ～♪　きっとオイシイよ～？」
数分後、カリカリに揚げ上がったパンの耳は、もうパンの耳ではなくて「簡易プレッツェル」になっている。カリストはサッと塩を振って、オーナーに差し出した。
「どぞ～♪」
「どれ、さっそく試食だ」
オーナーはひとつ摘んでクチに放り込む。程よい堅さに揚がっていて、歯触りも風味も悪くない。
「うん、なかなかだ。思ったほど脂っこくないし、お茶請けには最適かもしれん」
「ホント～？　うれし～い♪」
両手で頬を押さえて素直に喜ぶカリスト。
「売り物にはならんが腹が膨れるほど食べ応えがあるわけでもなし、サーヴィスとしてコーヒーに添えて出してみたら面白いかもな……いちおうお前さんの手作りだしウケるかもしれん」

「ソーイクフーバンザーイ♪」
「お前さんは頼りないふうでいて、案外と手際が良いんだな……酒も造ってるし……」
こんな具合で、意外にもカリストは重宝されている。
『……で、今日はバイトの日だったっけ？』
「そだよ～♪　今日ねぇ、パンの耳でプレッツェル作ったんだよ～♪」
夕食は喫茶店の賄いで済ませて九時過ぎに帰宅したカリストは、カエル柄のマグカップ片手にエンケラティスとのお喋りを楽しむ。
「とってもとってもオイシイって、まいすたが褒めてくれたよ～♪　エンケラティスにも食べさせてあげたいなぁ」
『……ふうん……あんたって意外と苦手じゃないんだ、そういうの。ふーん……あんたがねぇ……あんたのクセにねぇ……』
目の前で手際を見せてもらわないと信用できないとでも言いたげなエンケラティスだったが、カリストはそういうことには気が付かない性格なので、とても気分よさげである。
「エンケラティス、お店に来たらケーキでも何でも食べさせたげる～♪」
『う～ん、まあ、考えとくけど……あんたと会うには上から許可とか貰わないといけないし、そういう理由じゃ少し難しいと思う……。それにしても、あんた、もっと怠け者だと思ってたけど、なかなか楽しそうに働いてるじゃない？　なんだったら出勤日数増やしてもらったら？』
「……今よりたくさん働いたら、カローシしちゃうよ～？」
『やっぱり根っからの怠け者だわ、あんた』
スピーカの向こうで「ふふふ」と笑うエンケラティス。カリストも「あはは～」と笑う。
今に至るまでの数ヶ月、厳密には三ヶ月と十一日の間、必ず毎日、

朝に夕に、何があっても（何も無いのだが）通信し合っているふたりは、もはや親友と言っても差し支えないくらい親密な間柄になっていた。逢った事もなく、どこにいるのかさえ知らなかったが、少なくともカリストにとってエンケラティスは世界でたったひとりのトモダチだ。

「……エンケラティスに逢いたいなぁ」

『そういうのは、私の一存じゃ決めれないって何度も言ってるでしょ？』

「わたしねぇ……エンケラティスのこと、とってもとっても大好きだよ～？」

『なっ！　ななに言ってるのよ……そ、そんなこと急に言われたって……か、返す言葉も出ないわよっ！　じゃあねっ！　オヤスミ！』

「えへへ……オヤスミなさ～い♪」

その１―４

カリストは朗らかで愛想が良いし、人好きする性格の持ち主ではあったが、「施設」にいた時はもちろん、今の生活を始めてからも友達らしい友達はできなかった。

学校に通っていないので出会いの機会が少なすぎるし、また、カリスト自身の趣味趣向が奇抜だったり幼すぎたりして、同世代の人たちと話題が噛み合わないのだ。

その点、エンケラティスは呆れたり小馬鹿にしつつもカリストの言う事を受け止め、話に付き合ってくれる。カリストの特殊な趣味……虫やカエルの観察、兵器模型や旧世紀の戦史、二輪車の改造、ツチノコ（？）、密造酒の仕込み（？）……そういった、余人からすれば充分に「くだらない」ような話題にもエンケラティスは積極的に対応した。

場合によっては事前事後に下調べまでしてカリストの話に追従しようとしているらしい。文句は言いながらも、エンケラティスはエンケラティスなりにカリストの相手をするのが楽しいようであった。

『だ、だからって、別にあんたのご機嫌取りしてるってワケじゃないのよ？』

とは言え、他に目的があるとも真意があるともカリストには思えない。いつも話題を振ってくるのはエンケラティスの方なのだ。

『あんた、なぜか密造酒なんか造ってるけど、子供は呑んだらダメだからねっ！』

「わたしってば、お酒なんかぜんぜん呑めないよっ？　ニオイ嗅いだだけでもフワフワしちゃうんだよねぇ」

『……じゃあ何のために造ってるのよ……』

カリストは自作の蒸留器やリカーポットで酒を密造している。もっとも、ドイツでは酒類の自作は禁じられてはいないので密造とい

う訳ではないのだが、そう呼んだ方が楽しそうだからという理由で、カリストは自ら密造酒と呼んでいるだけだ。
　もちろん自分で呑むためではなく単なる好奇心から始めた事だった。ワイン、ビール、シードル、ウイスキー、ウォトカ、日本酒、焼酎……何でも造ってみた。糖分さえあれば何でも酒にできるため、メロンソーダ酒や砂糖水酒も造ってみた。
　できあがったものは酒好きである喫茶店のオーナーに呑んでもらって、その意見を参考にして密造の腕を磨いているのだ（砂糖水酒は非常に不味かったらしい）。ノホホンとしているカリストではあるが、そういう事には実に器用である。
「今はワイン造ってるんだよね～♪」
『ふ～ん……ウチのディオネが聞いたら喜びそ……って……いま私なんか言った？』
「ふぇ？　ウチの誰々が～　とかって言ったのかなっ？」
『あ～　それ忘れて。ここには私しかいない。あんたが知ってる「施設」の人は私だけ』
「ちゃあんと聞いてなかったから、もぉ忘れちゃったよっ♪」
　どうやら「施設」にはエンケラティスの他にもディオネという名前の、お酒の好きな人がいるらしい。お酒を呑めるという事は、まあ、適当な年齢なのだろう。
　だが、実際にカリストは翌日には綺麗サッパリ忘れてしまったのだった。

　例によって昼頃に起きたカリストは、昨晩から手がけ始めた仮組み途中のプラモデルを安全な場所に片付けると、買い物に出かける事にした。食べ物を買うのだ。
　食べ物、と言ってもカリストの場合ほとんどがお菓子である。
　料理も得意で何でもよく食べるカリストだが、コレといった主食を摂る事は少なく、食事の大半はスナック菓子をダラダラ食べ続ける事で済ませるという困った習性があった。体質なのか太ったりニ

キビが出たりはしないのだが、育ち盛りの娘の食生活としては少々不健康である。
「そなことゆわれたって、お菓子だあ～い好きなんだも、しかたないよねっ？」
まったく仕方なくない。エンケラティスも事ある毎に窘めてはみたが、なにせ言葉だけで言って聞かせても効果は薄い。
結局その日、カリストは電子レンジで加熱するタイプの冷凍フライドポテトの大袋、チョコレートケーキ、ウエファース、アイスクリーム、メロンソーダなどをゴッソリ買い込んできて、それらをプラモデルを作りながら食べ続けたのだった。

『数字にしたら異常な摂取カロリーよね？』
「んう～？　５０００キロカロリーくらいかなっ？」
『うーん、それじゃカロストじゃない』
（注：ドイツ語でカロリーのスペルはＫａｌｏｒｉｅ、カリストのスペルはｋａｌｌｉｓｔｏである）
「でも、ずっと体重かわんないよっ？」
『……そういう問題じゃないと思うんだけどな～』
年頃のふたりの話題は、やはり食べ物に関する事が多くなる。
『お菓子で満腹にするなんて、なんかもったいなくない？　私は普通に三食キッチリ食べた方が満足できるから、あんたの食生活は理解できないわ』
「んう。でもねぇ、わたし、普通のゴハンも大好きだよ～？　おイモとかパスタとか」
『……あんた、ホントによく食べるわ……』
ＭＴのスピーカ越しに大きな溜息が聞こえたが、カリストは気にもしない。
「あ、そゆえば……前から訊きたかったんだケド……エンケラティスってば、どんな髪型してるのかなっ？　それもヒミツ～？」
『ん……そんなの秘密にする意味がないわよ……私の髪型？　その

……なんて言うか……いわゆる姫カットっていうのかな？　ストレートロングの前髪を厚めに揃えた感じで……なによ？　イメージと合わない？』
「そなことないよ～♪　女のコっぽくてカワイイねぇ」
『女のコっぽいって、私、元かられっきとした女のコなんだけど。私は髪色がくすんだ亜麻色だから、まっさらなあんたのプラチナブロンドが少し羨ましいかも』
「へ～え～♪　亜麻色の髪の乙女だねぇ♪　きっとカワイイんだろねぇ」
『なっ！　ほ、褒めたって何も出ないわよっ！　じゃあオヤスミ！』
「えへへ～♪　オヤスミなさ～い♪」

エンケラティスとの会話を終え、時計を見ればもう夜の十時を過ぎている。
カリストは寝支度を済ませると、ベッドの上に腰掛けＭＴを起動して今日一日のニュースをチェックする。世界は今日も平和だったらしく、落雷で牛舎が燃えたとか、カリストが知らないような国の誰それが転んで死んでしまったとか、まるで町内会の回覧板のような牧歌的なニュースばかりだった。
そんなニュースに紛れて、カリストの興味を惹く記事が技術面に掲載されていた。
「へ～え……新しいメイドロボットちゃんが発売されるんだ～♪」

いくら科学技術が進歩したとは言え、人間と見分けが付かない外見を持ち、人間のように考え振る舞うロボットの開発は難渋を窮めているらしい。動作や見た目だけならば何とかなったが、疑似感情や自立思考を持たせるとなると、人間大のボディに収まりきらないとの事だった。
このメイドロボットも精巧に出来ているとは言え、とても人間のように自力で思考して動作するレベルにまでは達していない。そも

そもカリストは気付いていないが、明らかに特定の使用目的……主に男性向け……を企図して開発されたモノであろう。
「こんなに可愛いメイドロボットちゃんが増えちゃったら、わたし、喫茶店クビになっちゃうかもねぇ」
確かに慢性的な高失業率の影にはロボットの存在があった。危険な作業や不衛生な作業はもちろん、事務、製造、医療、公共サーヴィス……ロボットは文句も言わずに何でもこなした。最近では性風俗業界にまで公然と投入されつつあるという。

「んう〜　……なんか他にすること探さないとダメかなぁ」
カリストは時々、自分でも良く判らなくなる。自分の在り方や過去未来に不安はない。何度も言うように、そういうことを憂うような性格ではないのだ。
しかし漠然とだが「何かしたい」と考える事はあった。
たとえば自分には何ができるだろうか？
このまま喫茶店でバイトをしながらのんきに暮らしていくのも悪くないだろうけど、世界はずっともっと広い。何か自分にしかできないような事があるような気がするのだ。
「……思春期だもんね……いろいろ考えちゃうよねぇ……」
カリストも悩む事が時にはあるのだが、それは決して誰にも、エンケラティスにも相談する事はない。そういうのは自分で考える事だと思っているのだ。たまには自分の脳味噌を使わないと腐ってしまう。
「……まぁイイや……そのうちきっと何かあるよねっ♪」

その1―5

数日後の夕方、バイトに向かったカリストであったが、喫茶店には勝手口はないので客と同様に正面口から店内に入る。
「オハヨ～ございま～す♪」
「おう、お疲れさん」
今日も客の入りは悪いらしくオーナーは眠そうに目をショボショボさせながらカウンターの中で新聞を読んでいたが、顔を上げて店の隅の方をアゴでしゃくる。
「カリスト、お前さんを待ってる人がいるぞ……友達か？」
「ふぇ？　わたしを？」
この街にカリストの友達や知り合いと呼べるような人はいない。まったく心当たりがなかったが、オーナーが促した方を見ると、年の頃は十代半ば……ちょうどカリストと同世代くらいの小柄な少女がテーブルについている。
学生らしく街でもよく見かけるようなブレザー制服姿だ。ストレートの長い髪をツインテールに結んで、なかなか…というか、かなり可愛い部類だった。もちろん知らない人である。

少女はカリストの到来に気付いたらしく顔を上げたが、カリストと視線がモロにぶつかったためバツが悪そうに再び俯いてしまった。
しかしカリストは意にも介さずズンズン接近する。
「こにちは～♪　なんか用かなっ？」
「はぁ、まあ座って下さい」
少女は風邪でもひいているのか喋るのが苦しそうな感じだった。俯けた顔も真っ赤に紅潮しているのがカリストにも判った。
「ぐあい良くないの～？」
「いえ、何でもないんです」
カリストはまじまじと少女を見詰めてニッコリと笑う。

「……とってもとってもカワイイねぇ♪」
「なっ……！？」
唐突なカリストの言葉に絶句する少女。その隙を突くかのように、カリストは少女の対面ではなく隣に密着して座った。
もちろん少女はかなり驚いたように身じろぎする。
「なっ！　あん……なた、そっちに座らないんですか？」
「ふぇ？　だってカワイイ女のコの隣のが楽しいんだも～♪　えへへ～♪」
まったく良く判らない主張だったが、少女は少し迷惑そうに苦笑いするばかりだ。
「あ、私、イオっていいます。カリストさんですね？」
「そだよ～♪　こにちは～♪」
「はぁ、どうも……こ、こんにちは」
イオと名乗った少女の声はどうにも聴き取りにくいし、顔も伏せたままで表情がいまひとつ読めないが、かなり恥ずかしがっているようではあった。にも関わらずカリストは容赦なくギュウギュウとカラダを寄せる。
「なっ！　あん……なた、そっちに座りなさ……座ってもらえます？」
「んう～？」
さすがのカリストもハッキリ言われてしまっては自重せざるを得ない。仕方なく言われたようにイオの対面に座り直す。
「そいで……？」
「はあ、あの、私と知り合いになってくれませんか？」
「知り合いって……おトモダチになるってことかなっ？」
互いに言っている事が変と言えば変だが、カリストは嬉しそうだ。
「あ、お友達っていうか、知り合い程度でイイんですけど」
「せっかくカワイイ女のコと知り合いになるんだったら、おトモダチのがイイんだけどなぁ……おトモダチにしよ～よぉ？」
「じゃあそれでイイです」

イオはカリストを押し切る事を早々と諦めたようだった。
カリストはてれてれと笑うと再びイオの隣に座り直した。
「えへへ～♪　うれし～い♪」
「あの、理由とか訊かないんですか？」
「理由なんてど～でもイイよ～♪　カワイイ女のコとおトモダチになれるんだったら、なんでもイイんだってば～♪」
カリストは「何か」のスイッチが入ってしまったようで、フニャフニャしながらしきりにイオにカラダを擦り寄せ始めた。
「なっ！　あん……なた、少しは遠慮しなさ……してください」
「せっかく会えたんだも～♪　はぁ……いいニオイ……♪　イオ♪　イ～オ～♪」
カリストは夢見るような表情でイオに抱き付きながら、その細い首筋に顔を押し付けてサワサワと全身を撫で始める。良く考えたら、こんな風に誰かとスキンシップ（？）するのは生まれて初めてのような気がしたが、傍目にはかなり過激な行動に見えなくもない。
カリストの突飛な行動に不意を突かれたのか、しばらく何のリアクションも取れないでいたイオだったが、ややして我に返ってヒラリと身をかわし立ち上がった。
「な、なんだか思ってた以上に変わった人ですね……あなた」
顔を真っ赤にしながら戸惑ったように言うイオ。ただ、その表情からはカリストを嫌悪しているような様子は感じられなかった……むしろ微かに笑みさえ含んでいる。
「あなたの出勤日にまた来ます……じゃあまた」
しばらくポカンとしていたカリストだったが我に返り、嬉しそうにウンウンと頷く。
「うん♪　待ってるよ～♪　また来てね～♪」
イオを見送り店内に戻ったカリストだったが、オーナーは居心地が悪そうな顔をしている。
「……お前さんの友達だったのか？」
「うん♪」

「……その、なんだ……お前さんは、そういう趣味だったんだな……どこか変わったような所があると思っていたんだが……まあ気にするな……こう見えても俺も昔は色んな連中と知り合いだったしな、そういうのには理解がある……」
「まいすた～？　言ってることよくわかんないよ～？」

その夜。
『……きょ、今日は何か変わったことあった……？』
「うん♪　新しいおトモダチできたよっ♪」
『へ、へぇ……どんな……？』
「まだよくわかんないけど……とってもとってもカワイイ女のコだよっ♪」
『そ、そう？　それだけ？』
「えとねぇ、髪がキレイで、お肌がスベスベで、すっごくいいニオイがしたよっ♪」
『ほ、他には？』
「んとねぇ……あ、でもねぇ、おムネはちっちゃかったかも」
『なっ！　あんたよりは、ずっと大きいわよっ！』
「？？」
『ま、まあ、何にしても……あんたみたいなヘンテコと仲良くしたいだなんて、とても立派な女のコよね！　タダでケーキとか食べさせなさいよ？』
　まるで我が事のように語るエンケラティス。いちいちカリストも納得する。
「うん♪　ケーキとかパフェとかおイモとかドングリとか食べさしたげるよっ♪」
『いくらなんでもドングリは食べないわよ……』

その１―６

元から常に上機嫌なカリストではあったが、イオと出逢ってからはことさらハッピーな気分であった。
もっともカリストがイオに関して知っていることといえば、その名前と、自分と同世代だということくらいなもので、どこに住んでいるのかさえまだ知らない。
そもそも善良な人間であるかどうかさえ判らないのである。よく考えたら（よく考えなくても）、一方的にやってきて「知り合いになってくれ」とは余りにも非現実的な行為なのだが、カリストは裏を読むような良い意味での小賢しさは持っていない。
「えへへ～♪　あんなにカワイイ女のコが悪いヒトのわけないもんね～♪」
こういう自信や確信がどこから湧いてくるのか、何を根拠にしているのかはカリスト自身にも判らないのだが、そう感じるのだからカリストは自分の直感を信じる。

これといった目標や義務もなく気ままにのんびり生活しているカリストは、生まれて初めて「待ち遠しい」という気分を味わった。いつものように森でツチノコを探したり虫を見つけたりして遊んで過ごしたが、部屋に帰ってみるとまだ昼過ぎだったりしてヤキモキしたりする。
「うへ……なんか時間進むの遅いなぁ……」
早く次のバイトの日にならないかと、それだけを考えながら数日を過ごした。

「あした、アルバイトなんだよね～♪」
『え、そうだっけ？　一週間は早いわ』
「イオに会えるんだよっ♪」

『……ねぇ、あんたさぁ……何か変だとか思わない？』
「どして～？　なにが～？」
『……ん、いや別に……あんたが何とも思ってないならイイんだけどね』
「あした、イオにケーキとかたくさん食べさしてあげるから、おなかペコペコにしてきてくれたらウレシイなっ♪」
『……』

翌日、カリストは珍しくバイトの出勤時間よりも早くに喫茶店へ出向いた。
「オハヨ～ございま～す♪」
「……お前さん……まだ5時前だぞ……？」
遅刻こそしないものの、カリストが怠け者だということを充分に熟知しつつあったオーナーは、普段の出勤よりも1時間以上も早く出てきたカリストに驚愕する。
「何かあったのか？　なにか相談でもあるのか？」
「ふぇ？　なあんにもないよっ？　あ、でもねぇ、ちょとキッチン使ってもイイかなっ？」
カリストは大きな紙袋を抱えている。近所のスーパーマーケットのものだ。
「あぁ？　それは構わんが……また何か変なことを始めるつもりじゃ……」
今までにもカリストは喫茶店の厨房を借りて、拾い集めてきたドングリを炒ったり、何かの根っこを茹でてデンプンを作ったりしたことがあったのだが、それはオーナーからしてみれば何をしているのか理解不能で、単に悪戯しているようにしか思われていなかった。
「ちょとねぇ……えへへ～♪」

本来の出勤時間である6時になり、カリストはすっかり着替えてカウンタに入った。今日も客は一人もいない。

「まいすた～？　エプロンの後ろの結び目とか、ヘンになってないかなっ？」
「ああ、何ともない」
「まいすた～？　ネクタイとか、ヘンになってないかなっ？」
「そうだな、何ともない」
「まいすた～？　ホワイトブリム（メイドさんのカチューシャ）とか、ヘンになってないかなっ？」
「うむ、何ともない」
「まいす」
「何だ、どうした？　今日は妙に浮ついてるな？　……いつも浮ついてるが……」
「えへへ……だってイオが来るんだも～♪　ヘンになってたら恥ずかしいもねぇ」
　カリストは顔を両手で覆ってモゾモゾと身じろぎする。さすがのオーナーも苦笑いするしかない。
「あぁ……イオって先週来たお前さんの恋び、いや、友達のことか……まあ例によって店は開店休業中だ、客が来ない限りは好きにしていて構わんよ」
「えへへ～♪　まいすた、だあ～い好き♪」

　ややしてチャイムが鳴り、予告どおりにイオが顔を出した。カウンタにカリストがいることを確認し、一瞬だけ顔をほころばせる。
「いらっしゃいませ～♪　えへへ♪」
　カリストはカウンタから出るとイオの傍に立った。改めて見比べてみると、イオの方が頭半分は背が高い。
「えへへ♪　絶対に来てくれるって待ってたんだよっ♪」
「ど、どうも。私は約束は破らないわ」
　初めて会ったときよりもイオは確実にリラックスしたような感じだった。初対面で名指しで知り合いになってほしいなどと言うのは、かなり根性を奮い立たせなくてはできないことだったろう。

カリストは唐突にイオの手を握ると、もう一方の手を店の奥に指し示しながら言う。
「お客さま、お席までご案内いたしま～す♪」
「あ、ちょ……」
少し戸惑うイオにカリストはフンワリした笑顔うを浮かべる。
「えへへ～　イイものあるよ～？」
カリストはそのままイオの手を引いて店内の奥まった一角に通した。そこには2人用の小さなテーブルがあり、そのテーブルの上にはケーキが1ホール……ゆうに「小さめのウエディングケーキ」ぐらいの大きさはある……そんなケーキが用意されていたのだった。
「ぎゃっ！？」
想像を遥かに超えた「イイもの」に思わず頓狂な悲鳴を上げるイオ。その様子に満足げなカリストはイスを引いてイオを座らせると、前と同じようにすぐ隣に自分も座り、ピッタリと肩を寄せた。
「これ、さっき作ったんだよっ♪　上の段は生クリームのショートケーキ風で、真ん中の段はチーズタルトが台になってるんだよ。下の段は拾ってきたドングリで作ったマロン風クリームで、あとねぇ、生地は普通のスポンジじゃなくって全部シフォンなんだよねぇ」
「……」
イオは呆れるを通り越して畏敬の眼差しさえケーキに注いでいたのだった。

その１－７

「はい♪　あ～ん♪」
「なっ！　……ひ、ひとりで食べれるから……！」
イオは顔を真っ赤にしながらたじろぐが、カリストが放そうとしない。
「せっかくカワイイ女のコとケーキ食べるんだも～　仲良く食べさせっこしようよ～？」
カリストの主張は何か変だが、これほどまでのケーキを用意してくれていた手前もあってイオも無下には断りにくいのか、適当なところで折り合いをつけるしかなかった。
「じゃ、じゃあ……１回づつなら……」
「うん♪　それでイイよっ♪　はい♪　あ～ん♪」
カリストはフォークに乗せたシフォンとクリームとイチゴをイオの口元に向ける。
「ちょ、ちょっと大きすぎるんじゃ……？」
「だいじょぶ～♪　おクチもっとおっきくあけて～はい♪」
「んぐ……むぐ……」
ムリヤリ気味に食べさせられたイオはしばらく目を白黒させながら必死にクチをモグモグさせていたが、どのようにして作ったのかカリストのケーキは見た目に反して軽い食感とサッパリとした甘さを残して、融けるように喉の奥へと消えていったのだった。
「んぐ……ん……こ、これは……」
絶句するイオの顔を心配そうに覗き込むカリスト。
「自信あるんだけどなぁ……あんましオイシくなかったかなっ……？」
「……い、いや……すごい……」
なぜか少し愕然としながらイオはカリストに向き直る。
「嘘だと思ってたのに、あんたってホントに料理とか上手だったん

だ……！」
「？」
「！　……あ、いえ、ううん、あまりにも美味しくて驚いて、なんかキャラが変になって……」
イオは必死で取り繕うが、カリストは驚いたような顔をしたままだ。
「あ！　ほら、今度はカリストの番！　は、はい……あ、あ～んして♪」
「うん♪　あ～ん♪」
簡単に丸め込まれるカリスト。
そんな光景をカウンタ越しに見ていたオーナーは苦笑いするしかない。
「まったく……あいつら何やってるんだ……」

ケーキを食べることも一段落し、ふたりはすっかり打ち解けた雰囲気で会話をしている。
「イオってば、ポツダムに住んでるのかなっ？」
「ううん、家はベルリン。ポツダムには親戚がいて、家の用事を兼ねて毎週来ることになってる。ここに来るのも、そのついで」
意外と洗練された作法で紅茶を頂くイオ、一方のカリストは嘗めるようにしてコーヒーを啜っている……カリストは紅茶が飲めないのだ。
「……えとねぇ……ちょとフシギなんだけど……どしてわたしのこと知ってるのかなっ？　わたしってば学校にも行ってないし、ポツダムには知り合いもいないし……」
「そ、それは……ああ、たまたま街を歩いてるとき、藪の中で何かしてるあなたを見つけたのよ。虫かなんか探してたんでしょ？　それで面白そうな人だなって思って……」
そんな理由だけで知り合いになりたがるような人間がいるとは思えないが、案の定カリストは訝しがりもしない。

「へえ～　そなんだ～♪」
　カリストの中ではイオが自分に興味を持ってくれたということだけで充分なようだった。
「わたしも出身はベルリンなんだよっ♪　ブランデンブルク門の近くかなっ？」
「そうなんだ……私の住んでるところもブラ門の近所」
「へえ～　そなんだ～♪」
　実はカリストは珍しく内心ヒヤヒヤしていた……当然だ、ベルリン出身であることは事実ではあったが、「施設」の中で育ったことに加えて数ヶ月より向こうの記憶が無い。しかも家族もいないし、詳しいことを突っ込まれたら答えに窮するのは明らかだ。
　しかし不思議なことにイオはカリストの答えにくいことは何一つ訊こうとはしなかったし、むしろ、そういう話題を積極的に避けてくれているようにすらカリストには感じられた。

「もう夜の9時になるよっ？　おウチに帰んなくてイイのかなっ？」
　楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。気が付けばすでにオーナーが閉店の準備を始めている……結局、イオが来ている間は他に客はひとりも来なかったのだった。
「ん……もうそんな時間なんだ……ポツダムに来るときは親戚の家に泊まることになってるから大丈夫。でも、どっちにしてももう閉店ね。また来週来るわ」
「うん♪　また来てくれるんならウレシイなっ♪　あ、これ、ケーキの残ったの親戚の人にオミヤゲで持ってくとイイよ～♪」
　カリストはいつの間にか余ったケーキ（それでもふたりで半分は消化した）を箱に詰めて持ち帰りできるようにしていた。
「ケーキ美味しかった、あ、あ、ありがとう……それじゃ、また」
「あ、イオ……ちょと待って」
　カリストはドアを抜けかかったイオの手を掴み制止する。
「ん……なに？」

振り向いたイオを真正面から見据えながら、カリストはカリストにしては控えめに告げる。
「あのねぇ……その……わたしねぇ……ちょと良く判んないんだけど、イオと一緒にいると……ずっとドキドキしてるんだよっ……それになんかイオのこと、もっとずっと前から知ってるよな気がするんだよねぇ……なんでだろ……？」
「なっ！　……そ、そんなの、わ、私が知ってるわけ、な、ないじゃない！　もうバカぁ！　オヤスミ！」
イオは顔を真っ赤にして、逃げるように駆けていった。
「えへへ～♪　オヤスミなさ～い♪」
イオを見送り店内に戻るカリスト。オーナーは皿に残っていたカリストのケーキを食べている。
「うむ……うん……お前さん、こりゃなかなかなもんだな……俺は甘いのは苦手なんだが、これなら平気で食べれるぞ。ウチのカミさんにも少し持って帰ってやろう」
「えへへ♪　まだ少し残ってるから、まいすたに全部あげるよっ♪」
「さすがに今日は給料ナシだ……と言いたいところだったけど、それならトレード成立ってことでチャラだな。お前さんは運が良い」
「まいすた、今日は、ぜ～んぜんお客さん来なかったねぇ……」
「今日も、だろう？　もう慣れてるよ」
ふたりは肩を並べて高らかに笑った。

その１－７（後書き）

『ところで…あんたさ、なんで紅茶飲めないの？』
「んう～なんかねぇニオイがちょとニガテなんだよねぇ」
『あんたって、クチに入るものなら好き嫌いかなんかないと思ってたわ』
「そなことないよぉ…生のおサカナも食べらんないんだよねぇ」
『え？じゃあお寿司もダメなんだ』
「そなんだよねぇ…なんでかなぁ…」

その1－8

イオにケーキを食べさせてあげることができ、また、それなりに好評だったような感触にカリストは取りあえず満足した。
「でももっと仲良しになりたいなぁ」
『……そ、そんなに気を使わなくたってイイわよ……何もしなくっても、そ、その、もう充分に仲良しなんだから』
「エンケラティスってば、ときどきイオの気持ちが判るみたいな言いかたするねぇ」
『単に……あんたが鈍いだけだと思う……』
「そだよねぇ……わたしってば、こんな気持ちになるの初めてだから良く判んないや……エンケラティスがイロイロ教えてくれるから、とってもとってもウレシイよっ♪」
カリストにとってエンケラティスは初めての親友であると同時に、現在知る限りの唯一の「身内」とも言える存在だ。その意見はカリストが頼りにできる数少ない指針となる。
「そゆえば、やっぱし「施設」のこととか、イオに言ったらダメなのかなっ？」
『まあ、そのコになら言っても大丈夫……だと思うけど、あんた気が緩むと何でも誰にでもペラペラ喋っちゃうからね……やっぱり秘密にしたほうがイイと思う』
「イオとおトモダチになれたのはウレシイけど、やっぱしエンケラティスに会いたいなぁ……エンケラティスとだったら何でもオハナシできるのになぁ……」
『……』

それから数日後、カリストは森でキノコ狩りをした帰りに喫茶店に立ち寄ってみる。というのも「面白いものがあるから来てみたらイイ」とオーナーからＭＴにメールが入っていたためだ。

「まいすた～♪　あっそびにきったよ～♪」
「おう、来たか。ほら、見てみろ」
そう言ってオーナーが指し示した先には、カリストと同じメイド服を着た少女が立っている。
「えと、新しいバイトの女のコ……かなっ？」
自分以外にも何人かの女のコがバイトしに来ていることをカリストは思い出した。カリストは女のコに向かってニコッと笑顔を向けてからオーナーに耳打ちする。
「まいすた～　……女のコのこと「面白いもの」だなんて言ったら良くないよぉ……」
「あ、やっぱりそう思うか？　ははは、たいしたもんだ」
オーナーは納得したように頷いて、少し混乱しているカリストに言う。
「いやな、あれ、彼女はロボットなんだよ」
「んええ～！？」
仰天するカリスト。
「ぜんっぜん気が付かなかったよ～！？」
「俺も驚いたよ……最新モデルがここまで人間っぽく見えるなんてなあ」
そのメイドロボットは、先日カリストがニュース記事で見たものと同型機だった。年齢は１８歳くらいだろうか……メイドロボットとして設計されたためか、落ち着いた雰囲気で、どちらかというと少し地味だが清楚な顔立ちだ。
カリストは恐る恐る近寄って間近で観察してみるが、メイドロボットは近寄ってきたカリストに少し視線を向けると軽く笑顔さえ浮かべた。
「……オハナシできるのかなっ……？」
「少しな。自律学習機能とかいうのが搭載されてて、構えば構っただけ人間っぽくなっていくって話なんだが……もちろん限界はある、らしい。俺も詳しいことは判らんのだ」

オーナーは百科事典か電話帳かというほど分厚いマニュアルの束をカウンタに放り投げる。
「実は知り合いにメーカの人間がいてな、実地テストを兼ねてタダで貸してくれたんだ」
「……こ、こにちは～♪」
『こんにちは。何かご用ですか？』
カリストが話しかけると思いのほか人間的な口調でメイドロボットは挨拶を返してきた。
「ふわあ～♪　カワイイ♪　触ってもイイかなっ？」
カリストの問いかけにメイドロボットは少しだけ内部処理に時間を費やした……カリストが女性で子供で危害を加えるような意思が感じられないと判断したのか、優しく頷く。
『はい、よろしいですよ』
「やた～♪　えへへ～♪」
カリストはメイドロボットの手を取るとスベスベと撫で回してみる。
「柔らかくってあったかいねぇ♪」
「残念ながら「男性向け機能」は搭載していないし、そのテの行為は拒絶するらしい」
地味にシモネタを呟くオーナーであったが、カリストには聞こえていないようだった。
「ギウギウって抱きついてもイイかなっ？」
『はい、よろしいですよ』
カリストは思いっきりメイドロボットの腰に両腕を回して抱きすがり、そのムネに顔をうずめた。
「……おムネかた～い……」
「柔らかいのはオプションらしいけど、えらく高価なんだよ……大きさは、無・微・貧・並……」
「お名前は何てゆのかなっ？」
「ああ、それなんだ。そのためにお前さんを呼んだんだよ。なんか

良い名前を付けてやってくれないか？俺は実の子供に名前を付ける時も結局ジィさんに頼んだくらい名付けが苦手でなあ」
「んう～」
カリストは少し考える。
「フロッシュ（カエル）ちゃん！」
「いくらなんでも可哀想だろう……それじゃ」
「じゃあねぇ……ハンス＝ウルリッヒちゃん！」
「そりゃお前さんが尊敬してるとか言ってたパイロットの名前じゃないか……しかも思いっきり男名前だし、何より俺の名前と被ってるからダメだ」
「まいすたの名前って、ハンスなのかなっ？」
「そうだよ、ハンス＝ヨアヒム」
「ふぇ～　知らなかったよ～」
まったくカリストの思考には落ち着きがない。
「そいじゃ……ヴェルンヘア・マグヌス・マキシミリアン……」
オーナーはカリストに名付けを任せることを断念した。賢明な判断だ。
「……もういいよ。よし決めた！　もう面倒だからメアリでいいだろう」
「んう、まいすたズル～イ」
『それでは私の名前は「メアリ」でよろしいですね？』
「うむ。かのアガサ・クリスティもメイドに最も似合いの名前だって言ってたしな。お前さんの名前は今日からメアリだ」
「えへへ、良かったねぇ♪　メアリ♪」
カリストが笑ってメアリの手を握ると、メアリもニコリと笑顔を返した。
『はい、ありがとうございます』

その１－８（後書き）

『…あんたってさ、その…女のコったら、まずムネに視線が行くわよね…？』

「カワイイ女のコのフカフカおムネだあ～い好き♪」

『…そこまでハッキリ言い切られたら返す言葉も無いわ…』

「？」

その１―９

メアリが新たに働くことになった喫茶店ではあったが、メアリの貸し出し期間は１ヶ月という短期間だったため、カリストらアルバイトがクビになることは避けられた。
また、メアリは比較的安価な汎用モデルだったため、アンドロイドタイプのロボットとしては決して高性能とは言い難く、何もかもを任せるには心許ないというのもあった。
「まあ元からロボットの手でも借りたいほど忙しいってわけじゃないしな。知り合いは細やかな会話データが欲しいって言ってたから、適当に話しかけてやってくれ」

「今日からねぇ、喫茶店でカワイイ女のコのロボットが働くことになったんだよねぇ」
『ロボットねぇ、ふ～ん……で、どんなモデル？』
「なんてったっけなぁ……メーカはＣＮＳだったよっ」
『ふ～ん……近ごろ急激に技術力を上げてるって評判の企業よね、そこ。……で、どうして？　あの喫茶店、どう考えても人手が欲しいほど混んでるようには見えなかったんだけど』
「エンケラティスってば、まいすたの喫茶店に行ったことあるのかなっ？」
『あでっ！　……な、ないわよ！　あるわけないじゃない！　あんたのハナシから想像してみたまでよ』
「？　……えとねぇ、なんか、まいすたの知り合いの人がテストのために貸してくれたんだって～」
『ふ～ん、あんなガラガラの店にねぇ……』
「カワイイんだけど、おムネが固くって、ちょとザンネン……もっとフカフカおムネだったら嬉しかったんだけどなぁ」
『あんた……何を言ってるのよ……』

「エンケラティスのおムネはフカフカかなっ？」
『なっ！　バカ！　なんてこと訊くのよっ！　そ、その、す、少しだけなら、フカフカ……だけど……』
「えへへ～♪　もしエンケラティスに会えたら、ギウギウっしたいなっ♪」
『な、なに言ってるのよっ！　もう！　バカ！　オヤスミ！』
「えへへ～♪　オヤスミなさ～い♪」

翌日、カリストは久しぶりにバイクのレストアに精を出した。マンションから少し離れた場所にある使われなくなった納屋を借りて、そこで作業している。
バイクといっても小型の、いわゆる原付バイクのことだが、かなりの年代物で５０年は昔に生産されたものらしい。前の持ち主は初めからコレクションとして保管しておいたらしいので、年季が入っている割には程度は良好で走らせることもできる。
が、実は使用が禁じられたガソリンエンジン仕様なので、現状では車両登録することができないのだ。カリストはガソリンエンジンを取り外し、そこに廃材屋で貰ってきた６５０ｃｃ相当出力のリニアエンジンを搭載しようと頑張っているのだが、フレームやパイプ類の位置関係や付属部品の取り回しなど、思いのほか作業は難航しているのであった。
「んう～こっちにステーを溶接した方がイイかなぁ……」
寸法を測ったり図面を書いたり細かな位置取りを確かめたりなどせずに、思うや否や一発で溶接を開始するカリスト。運が良いのかセンスがあるのか、それほど大きな失敗をしたことはない。
「んしょっと……うん♪　これでヒートシンクも付けれるよっ♪」
リニアエンジンの放熱板をカウルの下に取り付けてから、ふと考える。
「やっぱし液冷のがイイのかなぁ……こっちのコンデンサの耐熱温度が……」

柔弱で幼稚なカリストは、その見た目もあって非常に女のコらしい雰囲気に溢れていたが、一方で趣味に関しては少年のような嗜好の持ち主と言えた。
このバイクのレストアもそうだが、虫を探したり模型飛行機を作って飛ばしたり、古い時代の戦史を読んだりするのが好きなのだ。
メアリの名付けの際に案として出した名前も、２世紀以上も昔の戦争で活躍したドイツ空軍（ルフトヴァッフェ）の「戦車撃破エース」の名前からの援用だったが、まともな女のコの趣味趣向とは言い難い。
「お前さんは本当に変わり者だよ」とはオーナーの口癖となっていた。

夕方近くなり、カリストはバイクのレストアも一段落ついたため帰宅することにする。
帰りの道すがら、ふとカリストは考えた。
「そゆえばメアリの名前付けたけど、わたしの名前ってば何なんだろ～？」
カリストは自分の名前が何に由来する名前なのか、ある程度の目星を付けていた。
「木星の衛星だよね、きっと」
さらに、エンケラティスの名前も、これもきっと土星の衛星である「エンケラドゥス」に由来するのだろうと考えている。そういえば、前にエンケラティスがポロッと口にしてしまった「ディオネ」という名前も、土星の衛星だったことを思い出すカリスト。
どうやら「施設」の人間には、太陽系惑星の、それぞれの衛星から名前を援用したものだろう。
「ふ～ん、へ～え、何だか面白いねぇ♪」
そんなことを考えながらしばらく歩いていたカリストだったが、突然にショックを受けて立ち止まる。
「イオ！そだ……イオもわたしとおんなし木星の衛星の名前～！」
木星の、特に有名な「ガリレオ衛星」……エウロパ、ガニメデ、

カリスト、そしてイオ。それは偶然にしてはあまりに出来すぎだ、由来が近すぎる。
とすると、イオも「施設」の人間なのだろうか？　エンケラティスがいるのに、どうして改めて身元を偽って自分に接触する必要があるのか？　何か重大な理由や、あるいは陰謀じみた意図が感じられる！
……とは、カリストは考えなかった。そんな事は夢にも考えない。

「不思議でしょ～？　不思議だよねぇ？」
帰り道で思い付いたイオの名前の「偶然の一致」をエンケラティスに発表して悦に浸るカリスト。いい加減、エンケラティスは呆れている。
『あんたさあ……そりゃ普通に考えれば不思議だけど……本当に気付いてないの？』
「な、なあに？　なんかもっとすごいヒミツがあるのかなっ！？」
『うう～ん』
スピーカの向こうのエンケラティスは酷く逡巡したように唸っている。
『ま、まあ、その、つまり、イオってコは悪いコじゃないし、あんたのことが、その、たぶん、少し、す、す、好きなんだと、お、思う』
「うん♪　わたしもイオのこと、だあい好きだよっ♪」
それからカリストは少しだけ小声で付け加える。
「でもねぇ、わたし、エンケラティスのが……だあい好きかなっ？」
『なっ！　バ、バカ！　なに言うのよ！　バカぁ！　じゃあオヤスミ！！』
「えへへ～♪　オヤスミなさ～い♪」

その１－９（後書き）

『バカな作者がディオネのことを「木星の衛星」だなんて書いてたから修正したわ』

「ホントは土星の衛星なんだよねぇ」

その1－10

アルバイトの出勤日にはイオが遊びに来るため、カリストにはそれ以外の日に喫茶店へ顔を出してメアリと触れ合うという新しい「趣味」ができた。

そうすることによってオーナーから昼食を食べさせてもらえるというオマケも付いた。

「……そいでねぇ、ツチノコちゃんが藪の中に住んでるんだって～♪」

『申し訳ありませんが、もう一度お願いいたします』

「ツチノコちゃんが藪の中に住んでるんだよ～」

『その「ツチノコ」とは何でしょうか？　私のデータベースには該当する項目がありません。宜しければ私のデータベースの増強のため、新語として登録させて頂きたいのですが』

「んう……」

カリストとメアリの遣り取りを傍で眺めていたオーナーは爆笑している。

「こりゃ笑える。ははは！」

だが、基本的に真面目なカリストは丁寧に説明を始めた。

「えとねぇ、ツチノコちゃんって、ヘビちゃんの仲間なんだよ。日本全土（ヤーパン）で大昔から何度も目撃されているんだけど、今までだあれも生きたまんま捕まえたことないんだって～♪」

『……それはいわゆる「未確認生物」の一種なのですか？』

「んう……そゆふにゆうヒトもいるみたいだけど、わたしは絶対にいると思うんだよねぇ」

『その根拠はあるのでしょうか？』

「ぜ～んぜんないよ～♪　だって、いないよりいるのが楽しいんだも～♪」

『……はあ……そうですか』
とうとうロボットにまで呆れられる哀れなカリスト。
「日本（ヤーパン）にもいるんだから、ぜったいにこの国（ドイッチュラント）にもいると思うんだよねぇ……」
『そうだと、よろしいですね』
「うん♪　そのうち、きっと見つけるよっ♪」

いつしか「カリストがメアリに構ってもらっている」というような状態になってしまったが、カリストの性格からすれば当然の成り行きとも言える。いずれにせよ、カリストとの会話によってメアリは急激に言語系とデータベースを増強しつつあった。
『カリストさんのお話は私にとって非常に興味深く、とても面白いです』
「えへへ～♪　そっかなぁ♪」
『ですが、カリストさんの話す言葉には幼児語が多く、一部に特殊な発声が含まれるため、私は良く聴き取れないことがあるのが残念です』
「んう……」
『ですが、カリストさんは小学生（コドモ）としては知識も豊かで、とても立派だと思います』
ついにメアリにヘコまされるカリスト。オーナーは遠慮なく笑っている。
「ふはははは！　知識豊富な小学生（コドモ）か、これは笑える。ははは！」
「んう～？　まいすた～？　そんなにヘンかなぁ…」
困ったような、恥ずかしいような、カリストは顔を赤らめる。
『カリストさん、私はそのようなつもりで言ったわけでは……申し訳ありません』
「んう……メアリはぜんぜん悪くないよっ♪　まいすた～　笑いすぎだよぉ」
「くくく……す、すまん……ははは……あ、しかし、確かにそうだ

な、お前さんは子供で怠け者のくせに妙なことを色々知ってるなあ……学校に行ったことが無いって言ってたが、自分ひとりで勉強したのか？」

そんなオーナーの何気ない一言に、カリストはドキリとした。

一瞬だけ言葉を継げなくなる。

「……あ、えへへ～♪　エライでしょ～？」

わたしってば……
なんでケーキとか作れるんだろ
なんでツチノコちゃんのこと知ってるんだろ
バイクも改造できるよ
カエルちゃんのこと詳しいよ
虫ちゃんの名前も知ってるよ
模型もじょうずく作れるよ
お酒がお砂糖からできること知ってるよ
なんで色んなこと知ってるんだろ
だって、なあんにもお勉強したことないのに、どこで憶えたんだろ？
なんで昔のこと憶えてないんだろ
なんでおとぉさまもママもいないんだろ
なんで女のコとフカフカおムネが好きなんだろ
いつから「施設」に住んでたんだろ
「施設」ってなあに？
わたしってば、なんなんだろ……？

エンケラティスも言ったように、これまでそんな重大なことを真面目に考えようとしなかったカリストが悪いのだが、一度そう考えてしまうと様々な疑問が沸々と湧いてくる。

わたしは、どう考えても不自然だ……そう感じた。

『どうしたのよ？　あんたの方から通信入れてくるなんて珍しいわね？』

「ねぇ……エンケラティス？」

『なによ？　おカネが無くなったの？』

「……わたしってば、なんなんだろ……？」

『はあ？　あんたはあんたよ、あんたはカワイイだけが取り得のカリストちゃん……べ、別に褒めてるわけじゃなくて、こ、これは単なる皮肉よ皮肉！』

「う、うん♪　えへへ～♪」

結局、カリストはエンケラティスに訊くことができなかった。訊いたところでエンケラティスは答えることができないだろうし、何よりエンケラティスに悪く思えたからだ……いつもなら美味しいものを食べて寝て起きたらケロッと忘れるカリストだったが、この疑問は薄らぎつつも次の日も胸の奥に引っかかっていた。

その１－１０（後書き）

『次回はインターミッションになる予定よ…だからあんたの出番はないわ』
「インテルミラノ？」
『…ちょっとした息抜き回ってことよ…』
「作者さんってば、もうスランプに…」
『余計なことは言わなくてイイの！』

その１－１１（ｉｎｔｅｒｍｅｄｉｏ）（前書き）

今回は物語ではありません。
いわば「カリストという人物」の紹介です。
本来ならばこのような物に枚数を費やすのは邪道ですし、本編中で表現してこそ小説と名乗れるのでしょうが、なにぶん私の筆の拙さもあり、ここまで明確なカリストの人物描写ができていませんでした。
見苦しく言い訳じみた口上になってしまいましたが、幕間の小休止とでも思って目を通して頂ければ幸いです。

その1－11（intermedio）

正直なところを言うと、私もあのコの事に関しては良く判らない部分が多い。
だから、会話の端々からあのコの思考の方向性や趣味、逆に嫌いなものなんかをリストアップしてみた。
そ、その、職務上必要だからやっただけで、べっ、別に深い意味なんかない……たぶん。

カリスト・グロスベイア
好きな食べ物：
プリン、ケーキ、おモチ、おイモ、アイスクリーム他、お菓子類なら何でも
好きな飲み物：
メロンソーダ、牛乳、コーヒー
好きな生き物：
虫、カエル、イモリ、ツチノコ、小鳥……と言うか、哺乳類以外の生物全般ね
好きな異性のタイプ：
こ、これは判らないわ……あまり興味は無いみたい
好きな色：
ヒマワリ色（黄色）と黒……カリストの服は黒で統一されてるわ
好きな本：
絵本「ふたりはともだち」、ヘミングウェイの「老人と海」
好きな植物
ヒマワリとマリモ……ヒマワリは納得できるけど、マリモって何？　藻類？　ホントに植物なの？
趣味：

珍しい生き物の観察、模型造り、お昼寝、お散歩、読書……あと、お菓子を食べること、ね

特技：

家事全般（信じられないけど）、ラフスケッチ、機械いじり（弱電系は苦手みたい）

尊敬する人物：

ハンス＝ウルリッヒ・ルーデル（誰？）、ヴェルナー・フォンブラウン（何となく聞いたことある）、チェ・ゲバラ（これは知ってる）

苦手な食べ物：

生魚（特にヌメリの強い魚介類）

苦手な飲み物：

紅茶、コーラ……紅茶は匂いが苦手、コーラは「子供が飲んだらダメなんだよっ」って……

苦手な生き物：

人間を除く哺乳類全般……犬や猫も苦手なんだって

苦手な異性のタイプ：

すぐ怒る人……苦手な異性というより苦手な人、ね

苦手なこと：

命令されること、強制されること

性格・性質・特徴：

のんきで甘えん坊、他者に優しいけど同じくらい自分にも優しい。とても朗らかでおっとりしてる。おっとりしすぎてて、ちょっとマイペースかも。

だけど意外とワガママ言ったり自己中心的な考え方はしないわ。

かなり子供っぽいけど、そのせいで物凄い親和力を持ってるわね。

周りの雰囲気を和ませるっていうか。

基本的には真面目。言われたことは素直に良く守る。けど、忘れっぽくてちょっとね。

人見知りや物怖じは一切しないし、なんだか妙に堂々としてる。
落ち着きは無いけど、割と物静かで喧しい感じじゃないわね。いつも“まったり”してるわ。
マイナス思考に陥ったり失敗を後悔することはほとんど無いみたい。いわゆるハイパーポジティヴって感じで、そういった意味じゃ、ちょっと頼もしいところもあるかもしれない。
柔弱なんだけど、精神力は強そう。プレッシャーやストレスには高い耐性を持ってるみたいだし、打たれ強いわ。
ああ見えて頭の回転は早いし感受性も豊か。ニブいけど“天然”とは少し違うかな。
純真で素直なのはいいんだけど、猜疑心や警戒心が希薄で、底抜けにオヒトヨシすぎるから、普通なら信じられないようなウソにも平気で引っかかるわね。現に今も引っかかってるし……困ったな……どうしよう……。
どう考えても恋愛には疎い。なんというか……“みんな仲良し”って感じでイイみたい。
くだらないことばかり良く知ってるけど、勉強するのは嫌いで特に数学は致命的なほど苦手ね。でも、興味を惹かれた物事に関しては熱心に調べたり勉強したりするわ。好奇心はすごく強いほうだと思う。
趣味や特技は男の子みたいだけど、黙って“おすまし”してれば、その、なんていうか、その……フツーにカワイイ……と思う。とっても女のコらしくて、その……ちょっと羨ましい。
スポーツは全般的に苦手みたいね。いわゆる運動音痴なんだけど、カラダは丈夫で健康的。
ちなみに身長は１３６ｃｍしかない。本人は１６歳って言ってるし、確かにそれで間違いないんだけど、性格も幼稚だし、どう見ても小学生にしか見えないわ……本人は気にしてないみたいだけど。
身長が低いから、そ、その、全体的にすごく……なんていうか、いろいろな部分がペタンコで小さくて……これは本人も気にしてるみ

たい。
あと左利き、鼻炎持ち、寝てるときにヨダレを垂らす……こんな感じ。
運動音痴だけど服装はスポーティ。３分丈のスパッツ、ノースリーブのインナーウェア、やっぱりノースリーブのジャケット、編み上げブーツを履いて、あと、ヘアバンドもしてる。色は全部オフブラック一色。あんまり女のコらしくない格好だけど、ちょっと似合ってる。
他にはコレといった私服は無いみたい。ファッションそのものには興味がないんだって。
だけど喫茶店のメイド服は喜んで着てるわね。

ちなみにカリストの弄っている原付バイクは「ホ◯ダ・スー◯ーカブＩＩＩ」。
元は５０ｃｃエンジンの４速リターンだったんだけど、本編中でも描かれたようにカリストは６５０ｃｃ相当出力のリニアエンジンに乗せ換えようとしているわね、かなり無謀なことだけど。
ミッションはベルト駆動の無段変速ミッション、ブレーキは前後とも大型バイク用のディスクブレーキに換装してる。どうやったのかは判らない。
あのコの計算によれば無風状態で２２０ｋｍ／ｈまで出るらしいけど……ちょっとイカレてるわよ……。
あ、いちおうカリストは二輪の運転免許は持ってるのよね。

ーーーーーーーーーーーーー

余談だけど、テーマ曲は「カノンロック」よ。
判らない人はＹ◯ｕＴｕｂｅとかで検索してみるのもイイかもね。

その１－１１（ｉｎｔｅｒｍｅｄｉｏ）（後書き）

『……次からは何事もなかったように再開するわ』
「エンケラティスばっかしズル～イ」
『ち、ち、ちなみに、ちょっと……ガ、ガ、ガールズラブ色が強くなるみたい……』
「へ～え♪　楽しみだねぇ……♪」
『あんた……ガ、ガールズラブって何だか知ってて言ってるの！？』
「えへへ……ホントはよくわかんない……」

その1－12

喫茶店が珍しく混んだため、カリストは久しぶりにマトモに仕事をした。とは言え、メアリがいるのでレジや注文聞きは任せて、カリストはもっぱら厨房とカウンタを行き来することになる。

元からカリストは銭勘定や瞬間的な記憶力が弱いし、逆にメアリはロボットだという特性上、それらが得意分野である……なかなか効率よく分担することができた。

『こちらがお釣りです……有難うございました』

22世紀も中頃になれば、どこででも見かけるという程ではないにせよ、それほど人間型ロボットが珍しい存在ではなくなっている。

特にメアリは最新型ということもあり、その微妙な表情や些細な動作ひとつひとつに「人間的な説得力」が感じられた……傍から見れば、やや人前で喋るのが苦手な普通の少女としか思われないだろうし、実際にメアリがロボットであると気付いていない客が大半だったろう。

「メアリ～♪　たまごスープふたつできたよ～♪」

『はい、ただいま』

カリストがカウンタに並べた椀を手際よく客の元まで運ぶメアリ。その様子を店内の座席で眺めていたオーナーが満足げに眺めている。

「ふーむ、初めは不安だったが、こりゃ便利なもんだなぁ……もう少し安価（やす）くなったら買ってもいいな」

『オーナーさん、今でしたら10年の無金利ローンもご利用できますよ』

「ははは、こりゃしっかりしてる、たいしたもんだ」

カリストの教育（？）の成果もあってか、当初は少しぎこちなかったメアリも軽口を飛ばすようになっていた。もうすっかり作業にも慣れ、ほとんどミスらしいミスもしない。ヘタをすればカリストの方が足を引っ張りかねないほどだ。

『カリストさん……ご注文はベーコンサラダです。これは生ハムサラダですよ』
「んう、そだったっけ……？」
「あ～　いやいや、仕方ないからそれは俺が食うよ」
「まいすた、ゴメンなさい……そいじゃ、それ、わたしがオゴったげる～♪」
『カリストさんは貧乏なんですから、ここはオーナーさんの好意に素直に甘えるべきでしょう』
「んう～？　も～　メアリってば～♪」
「ははは……って、カリスト、早く作り直せ」

食事時を過ぎ客も引き、カリストがミスの代償としてひとりで厨房で皿を洗っていると、入り口のチャイムがカランと鳴る。
『いらっしゃいませ……おひとりですか？』
「あ、いえ、私はカリストの友達っていうか……」
出迎えてくれたメアリに歯切れ悪く自己紹介するイオだったが、オーナーがそれに気付いた。
「ああ、お前さんか。悪いがカリストは料理を間違えた罰で皿を洗っているんだ、もう少し待っててくれ。メアリ、その娘がカリストが言っていたイオっていう友達だよ。適当な席に座らせてやってくれ」
『はい。ではイオさん、こちらへどうぞ』
「は、はあ……」
『お飲み物をお持ちしますか？』
「ううん、いらない」
イスに座りながらイオは去っていこうとするメアリを制止する。
「待って……少し話をしない？」

それからややして、ようやくカリストが洗い物を終えて厨房から出てきた。

「おう、カリスト。お前さんの恋び、いや友達が待ってるぞ」
「うん♪　えへへ～♪」
　カリストは嬉しそうにカウンタから出て、イオの元へ向かう。が、見ればイオとメアリが何かしら会話をしているのが目に入った……イオは少しだけ怒ったような顔をしている。
「？　……イオ～♪　お待たせ～♪」
「あ、カリスト……」
　ばつが悪そうに少し俯くイオ。
「なんのオハナシしてたのかなっ？　オイシイ食べ物のオハナシ？」
「ううん……別に」
『では、イオさん、もうよろしいですか？　私にはしなくてはならないことがありますので』
「ん、ええ、もういいわ……よく判った」
　のんきでニブいカリストであるが、洞察力というか、場の微妙な空気を読むことのできる鋭い感受性を持っている。イオとメアリの間に何やら不穏な気配を感じずにはいられなかったが、取り合えず言及することをとどまった。
「……あのコ、メアリってゆんだよ」
「うん、聞いた。ロボットでしょ？」
　イオの口調には、どことなく嫌悪を感じさせる。
「そだけど……イオ、ロボットキライ～？」
「別に……キライってわけじゃないし、差別するつもりもないわ……ただ」
　そこまで言ってイオは少し困ったような顔をする。
「その……あなたはオヒトヨシで、誰にでも、それがロボットに対してでも……すぐ気を許してしまうようなところがあるから、それが少し気になって」
「？　……あはは～♪　そっかもしんないねぇ……だからイオともおトモダチなれたんだよっ♪」
　テレテレと笑顔で応えるカリストに、イオもつられて笑顔を見せ

てしまうのだった。

「ねぇねぇ♪　イオってば、ポツダムに来たときはいっつも親戚のおウチに泊まってるんだよねぇ？」
「そうだけど……それが？」
「えとねぇ、その、せっかくコッチに来てるんだから、えと……えへへ～♪」
「なによ……ハッキリ言ってほしいんだけど」
カリストは恥ずかしそうにモゾモゾと身じろぎしながら言う。
「えとねぇ、イオ、わたしのお部屋にお泊まりしてってほしいなぁ……って♪」
「はあ！？　何を言って……！」
思いっきり赤面しながら飛び上がるイオ。しかしカリストは真剣そのものだ。
「えとねぇ、わたしってば、誰かと長い時間いっしょにいたことないんだよねぇ……まいすたは優しいし大好きだけど、おトモダチってわけじゃないし……いっつもイオが来てくれてウレシイけど、２時間くらいしかいっしょにいれないんだも……」
「そ、そんなこと言っても、あんた夜の１０時には眠くなってグニャグニャになるでしょ！？」
「起きてなくってもイイんだよ～♪　いっしょのお部屋にいたいんだよ～♪」
「パジャマとか着替えとか持ってきてないし、そ、それに、し、下着とか！！」
「そんなの貸したげるよっ♪」
「貸すって言ったって、あんた！　いっつも寝るときハダカじゃないの！？　パジャマなんて持ってないでしょっ！」
「わたしは恥ずかしくないよっ♪　だからねぇってば～？」
「わ、わ、私が恥ずかしいのっ！！」

結局イオは押し切られた。

その１－１２（後書き）

『…まったく…あんたってコはホントに仕方ないわね…』
「えへへ～♪えへへ～♪」
『ち、ちなみに！わ、私は、いわゆる”ツンデレ”じゃないわよ？そ、その…”ツン期”が無いから…』
「エンケラティスってば、ちょと恥ずかしがり屋さんなだけだよねぇ」
『そ、そう…ほんの少しだけ恥ずかしがりなだけ』
「…でも今はイオのオハナシだよっ？どしてエンケラティスが…」
『…あんた以外の人には意味は通じてるから大丈夫よ…はぁ…まったく…』

その1－13

「そ、その……親戚の家に連絡してくる……が、が、外泊する、って」
イオは顔を真っ赤にしフルフルと震えながら席を立った。
「公衆ＭＴ……どこ？」
『はい、そちらのお手洗いの前です』
「……そなとこにおトイレと公衆ＭＴあったんだ……」
カリストは雇われ者のくせにトイレ掃除をしたことがなかった。公衆ＭＴの前に立ったイオは、親戚に向かって何やら独り言のようにボソボソと喋っている。

カリストが私服に着替え終わるのを待って、ふたりは連れ立って喫茶店を後にした。
『お前さんたちは未成年なんだからな……あんまり変なことをするんじゃないぞ？』
オーナーの故意に不粋な一言にイオは激しく憤慨している。
「だっ！　だいたい何よ変なことって！？　どういうことが変なことなのよっ！？」
「？」
カリストはケロリとしたものである。
「えへへ～♪　きっと遅くまで騒いだりすることだよ♪」
「なっ！」
絶句して、それから街を見渡すイオ。
「こ、この辺に、その、しっ、下着とか売ってるお店ない？」
「そこにコンビニあるよ」
「コンビニ？　そんなんじゃダメよ。ちゃんとした女性用下着のショップ……」

しかし、もう夜の9時である。しかもポツダムはベルリンのベッドタウンであるため、田舎と言えば田舎なのだ、ほとんどの小売店舗は夕方には店を閉じているのである。
だが、帰り道の途中に歓楽街……カリストいわく「お酒とか飲むとこ」……があり、そこには（カリストがまったく知るよしもない世界であるが）ショーガールや娼婦が贔屓にしているブランド物のショップが数軒ばかり軒を連ねているであった。
「やった……少し怪しげなニオイもするけど、あそこなら……ねぇ、ちょっと待っててね」
「うん♪　でも着替えなら貸してあげるのになぁ」
カリストを待たせて、イオは小走りに店の中へ入っていった。1軒目からは顔を真っ赤にして即座に出てきた……どうやら少し趣の違うショップだったらしい。次の店は問題なかったらしく、しばらく時間が経ってから包みを手にイオは戻ってきた。
「……とんでもない出費になってしまった……あ、待たせたわね、じゃあ行きましょ」
「うん♪　なに買ったのかなっ？　パジャマ？」
二人は連れ立って再び歩き出す。
「なっ！　……う、うるさいわねっ！　な、なんだっていいでしょ！　もう、だいたい誰のせいで……」
「……ねぇイ～オ？　イオってば、初めて会ったときとかは違ったんだけど、最近、喋り方とか、なんかエンケラティスとソックリなんだよねぇ……声もちょと似てるかも」
「ぎゃあ！？」
突然のカリストの発言に思わず舌を飲み込みそうになるイオ。
「あ、イオはエンケラティスのこと知らないもねぇ」
「……」
イオはウンもスンも言えず、ただカリストの言葉を待つしかない。少し申し訳なさそうに、恥ずかしそうにカリストは言う。
「えとねぇ、エンケラティスって、世界にふたりいるわたしがだあ

い好きな女のコのひとりなんだよねぇ……もひとりはイ～オ♪　えへへ～♪」
「……はあっ」
思わず脱力するイオ。
「そ、そう……」
「……でもねぇ、ちょと事情があって、エンケラティスとは会えないんだよねぇ……」
「……で、でも、まあ、そのうち、すぐに会えるような気がするわ……意外と近くにいるかもしれないし……」
「えへへ、そだねぇ……あ、ここのマンションだよ♪」

「上がっちゃってイイよ～？」
「お、お、おじゃまし……ます」
恐る恐る室内に上がるイオ。
「そっちがおトイレと洗面所とおフロだよ～♪」
「……お、思ったよりも片付いてるわね……あんたにしてはシンプルにまとまってるわ……意外……」
カリストの部屋は必要最低限の物とカリストの趣味の物だけで構成されていた。据え置き型のマルチモニタも音響機器も無いし、キッチン周りにも小さな冷蔵庫とユニット化された調理機器があるだけ……ちょっと切なくなるくらい慎ましやかな暮らしぶりだ。
イオは幾つかのオモチャやプラモデルが飾られているサイドボードの陰を指でなぞる。
「こ、こんなとこまでキレイに掃除してる……なんか、なぜか、軽くショック」
「お掃除とか、だあい好きなんだよねぇ♪」
カリストは気分よさそうにアレコレと説明していたが、ベッドサイドに置かれていたＭＴにメッセージ着信を示すイルミネーションランプが点灯していることにイオが気付いた。
「ねえ、カリスト、メッセ来てる」

「んう？　ホントだ……メッセージなんか来るの初めてだよ～♪」
イオが目の前にいるのをまったく気にもせず、カリストはメッセージを再生する。
『……あ～　カリスト？　私よ、エンケラティスだけど』
「えへへ～♪　エンケラティスからだ～♪　このコがさっき話したエンケラティスだよっ♪」
「……カリスト……ちゃんとメッセージ聞きなさいよ……」
イオが呆れながら注意を促す。エンケラティスの声は妙にボソボソと潜め声だった。
『え、ええと、その……今日の夜は、その、ちょっと用事が入っちゃって通信できないから、代わりにメッセージを入れておいたわ。なんて言うか……その、あの、あ、あんたは真面目で優しいから大丈夫だとは思うけど、……も、物事には順序とか節度とかあるわけ！　わかるわよね！？　……ゴホン……だから、その、何事もゆっくりじっくり進めるべきだと思う……あ、あんたは良くても、その、あ、あ、相手のこととかも、考えるのよ？　……じゃあ今から戻ああああ！　じゃあオヤスミ！』
それはまったく支離滅裂な意味の判らないメッセージであった……が、カリストはウンウンと頷いている。
「ねっ？　エンケラティスってば、とってもとっても優しいんだよねぇ」
「そ、そ、そうね、きっ、きっと、カリストのことが大事で、す、す、好きなんだと思う」
何だか悪い酒にでも酔ったかのようにイオはグワングワンだった。

ふたりはしばらくお喋りなどして過ごしたが、カリストが思い出したように言う。
「あ、そだ～！　イオ、おフロかシャワーはいる～？」
「なっ！　……う、うう……一応、その、万が一（？）のときのために……入るわ……せっかく下着も買ってきたし……でも、そ、そ

の、あんたパジャマ持ってないんでしょ？」
「使ってないバスローブならあるよ～♪　それあげる～♪　そいじゃイオ、先に入るとイイよっ♪」
　カリストは何の気なしに言っているのだが、いちいちイオは赤面したり挙動が変になる有様。
「ぐっ！　じゃ、じゃあ先に使わせてもっもらうわわ！」
　泣きそうな顔をしながら紙袋を手にシャワー室へ向かうイオに、カリストが追い打ちをかけた。
「あ、そだ～♪　……わたしもいっしょに入って」
「イイわけないでしょっ！！　バカぁ！！」
　ピシャッとドアが閉じられ、鍵の下ろされる音がした。

その１－１３（後書き）

『…も、もう限界…いろんな意味で』
「？」
『…つ、続くわ…めくるめく美少女の園へ…』
「？？」

その１－１４（前書き）

極めて僅かながら性的な行為を暗示させる内容が含まれます。

その１－１４

イオがシャワーに入っている間に、カリストはベッドを整える。
「まくら並べて……っと♪　えへへ♪」
カリストは幸せな気分だった。誰かと、それも大好きな人と枕を並べて寝ることができるのだ……それはカリストのアヤフヤな記憶の範囲内では生まれて初めての経験だった。
「朝がくるまで寝ないでおしゃべりしてたいな♪　……でもきっと、わたし寝ちゃうよねぇ」
そうこうしているうちにイオがシャワーから上がってくる。バスローブをまとい、ツインテールを解いた長い濡れ髪をタオルで拭きつつ、何か言いたげな顔をしている。
「……どしたのかなっ？」
「ん……別に。カリストもシャワー入ったら？」
「うん♪　……お部屋の中にあるもの、何でも見たり触ったりしてイイよっ♪」

シャワーを終えたカリストは手頃なシーツをカラダに巻き付けて部屋に戻った。見ればイオは隅のほうで神妙な顔に腕組みして仁王立ちしている。
「どしたの～？」
「どっ、どうもしないわよっ！　よ、よく考えたらベッドがひとつしかないじゃない！？」
「そだよ～♪　だって一人暮らし用のマンションだも」
「ま、ま、枕がひとつのベッドに、ふ、ふたつ並んでる！」
「そだよ～♪　だってベッドひとつしかないんだも」
「じゃあ私は床に寝る！」
それを聞いたカリストは少し残念そうな顔をする。
「そ、そいじゃ、わたしが床に寝るよっ？」

「あ、あんたはベッドで寝ればイイの！　あんたのベッドなんだから！」
「イオ……わたしといっしょに寝るのイヤかなっ？」
「そ、そういうわけじゃ……」
「えへへ～♪　どっちにしても、おフトン、一組しかないんだよねぇ」
まるでイオはカリストに太刀打ちできないのだった。

とは言え、しばらくふたりは仲良くお喋りに興じた。
「あんた、その……す、す、好きな男の人のタイプとか、あるの？」
「うん♪　カワイイ女のコ～♪」
「い、いや、男の人！　男性！　判るわよね？」
「？　……女のコじゃダメなのかなっ？」
「……」
こうもハッキリ言われてしまっては返す言葉もない。
「はあ……カワイイ女のコねぇ……男の人には興味ないんだ」
「どして男の人じゃないとダメなのかなっ？　女のコのほがカワイイから大好きなんだけどなぁ」
「はあ、そうですか……」
「イオみたいな優しくてカワイイ女のコだあい好き～♪」
そう叫ぶや否やイオに抱きつこうとするカリストだったが、ヒョイとかわされる。
「それは嬉しいけど……どうもあんたの言う「好き」の定義に確信が持てないわ……」

そうこうするうちに気が付けば日付も変わっている。
「あんた、もうそろそろ限界みたいね」
「う、うん……ちょと眠いかも」
「……いちおう聞いておくけど……あんた、そのシーツの下ってハダカ？　ホントに全裸？」

「そだよ～♪　見る～？　えへへ♪」
事もなげに言ってのけるカリストではあるが、やはり少しは恥ずかしげではある……が、イオはもっと恥ずかしい。
「なっ！　ば、ば、バカなこと言ってないで、ね、ね、寝るわよっ！」

照明を落とし、ふたりはモゾモゾとベッドに潜り込む。
「ちょ、ちょっと向こう向いててよっ！　そ、そのバスローブ脱ぐからっ！」
「うん♪」
まるでイオはプールサイドで着替えでもしているかのようだった。
「せ、背中合わせで寝るわよっ！　いくら、そ、その、女のコ同士でも、節度や限度ってものが……！」
イオが言い終える前に、カリストの両腕がイオの細い腰に巻き付き、その背中にカリストの肌が……つまり薄いムネが触れた。
「あるらぁぁ！？」
「……イオ……柔らかくって、あったかい……♪」
肌理の細かいふたりの肌と肌が、まるで互いを吸い寄せるかのように密着する。
カリストのくちびるがイオのうなじを撫でる……甘い吐息が耳元をくすぐる……。
「あっ、あ……やめ……！」
「……とってもツルツルしてて、気持ちイイ……♪」
カリストの掌がイオの華奢な下腹部に触れる……衣擦れの音と絡まっていく互いの脚……。
「なっ！　……カリスト……そんな……お願い……ダメ……！」
「……イオ……だあい好き……♪」
細い指先がイオのお腹をなぞりながらゆっくりと上がっていき、とうとうブラの下端に触れる。
「あっ、だ、ダメっ……そ、それ以上は……！」

「……おムネ、触ってもイイ……？」
決定的とも言えるカリストの問い掛けに、イオは言葉を失った。
暗い部屋のベッドの中を、ふたりの吐息と鼓動だけが満たしていく。
それは昂ぶりを抑えながら、ゆっくりと静かに同期していくのが判った。
もう互いの間に物理的な隔たりは無く……ただ感情や理性だけが全てを決める距離にある。
永遠に続くかと思われるほどの逡巡を一瞬の内に繰り返しながら、イオは覚悟を決めた。
「……う、うん、カリスト……私、そっち向くわ……もう、どうなっても……」
イオはカリストに振り返る。
そこには、だらしなくヨダレを垂らしながら、半目を開けて眠るカリストがいた。
世界で最もマヌケで可憐な寝顔だった。
「……ぐう……」
「なっ！　……ば、バカぁ……」
イオは少し安心したような残念そうな曖昧な笑顔を浮かべると、自分の腰に回されていたカリストのウデを解いて側へ押しやり、それから躊躇いながらも手を繋ぐ。
「……なんか悪いことしちゃった、かな……」
「……ぐう……」
眠るカリストはニギニギとイオの手を握り返した。
夜は更けていく。

その１－１４（後書き）

『……後書きはナシね』

その1－15

「……結局……一睡もできなかった……」
イオは目の下にクマを作って朝を迎えた。そんなイオの気持ちも知らず、カリストはのんきにグウグウ眠り続けている。
「当の原因は気楽なもんね……」
ソッとカリストの寝顔を覗き込む。容赦なくヨダレを垂らしながら眠るカリストの寝顔は何度見てもマヌケだった。
「……今なら何をしても……」
ジリジリと顔を近付けていく……が、すぐに思い留まった。
「……こっ、こんなのは卑怯よね、フェアじゃないわ……ヨダレまみれだし」
苦笑いしてイオはベッドから這い出る。
「……でもまた次があるわよね……たぶん」

カリストが目覚めたのは昼過ぎだった。すでにイオの姿はない。
「……んう……イオ、帰っちゃったのかなっ？」
カリストはイオが使った枕を引き寄せて、抱きしめて顔を埋める。
「イ～オ～♪　えへへ、いいニオイがするよっ♪」
ＭＴにはイオからのメッセージが残されでいた。
『……カリスト、そ、その、昨日は、とっても楽しかった。あ、あ、ありがとう。あっ、あのその、もし良かったら、ま、また……お泊りさせてほしくないことも……なくもなくないかも……。か、勝手に帰るわね。じゃあまた！』
「…えへへ～♪　イ～オ♪　だあい好き……♪」
カリストは幸せそうな笑顔を浮かべると、再び枕に顔を埋めてベッドの上を転がり回った。

身だしなみを整えて、カリストは行き付けの廃材屋に顔を出してバイク用のラジエータポンプを貰ったあと、喫茶店の近所の雑木林の中にある小沼でカエルを観察して時間を過ごす。
このカエルというのはカリストにとって世界の不思議のひとつだった。
水が好きなカエルもいるし、嫌いなカエルもいる。よく跳ぶカエルも、そうでないカエルもいる。ツルッとしてたり、ゴツゴツしてたり、色や大きさも様々で種類も豊富、だけどただの「カエル」で済まされてしまうという便利（？）さも魅力だった……なにによりカエルはおシリが尖っていて可愛くて仕方がない。
「どしてカエルちゃんってば、おシリとんがってるんだろ～♪」
カリストは次に生まれ変わるならカエルか小鳥になりたいとさえ思っていた。
「……はぁ……♪」
葉っぱの上に張り付いているアマガエルを眺めて、ひとり悦に浸るカリスト。
「世界中がカエルちゃんだったら、もっと平和な世の中になるんだろなぁ♪」
案外とそんなものかもしれない。

その時、カリストは天啓のように雑木林の向こうに何者かの気配を感じた。
「なんだろっ？　ヘンな感じがするよ？」
カリストはカエルの観察を切り上げ、ポンプを手にテケテケと林の外へ向かった……ちょうど林と道路の切れ目あたりの目立たない場所に数人の人影が見える。予想外なことに、喫茶店の近くではあったが、その中にメアリの姿もあった。
「あ、メアリだ～♪　メア……」
声をかけようとしたが思わず踏み止まる。どうも様子がおかしい。

それは確かに喫茶店のメイド服を着たメアリだったが、彼女を囲むようにしてスーツ姿の男が3人ばかり立っており、何かメアリと会話……というか一方的に話しかけているのであった。
「……どしたんだろ……？」
カリストは木陰に身を隠して様子を伺う。風向きが良かったのか、途切れ途切れながら会話の内容が聞き取れた。
「……慎重に……頃合を……奪取……」
「……警戒が……向こうも……注意……」
「場合に……破壊……回収し……」
ほとんど意味が通らないが、あまり好ましい内容でないということはカリストにも理解できた。メアリを囲む男たちの様子も、どことなく怪しげな感じがする……たとえばテロリストとか反政府活動家とか、そういう非合法な手合いの気配がある。メアリは無言で頷いている。
最後に男たちはメアリにヘッドマウント型のインタフェイスを装着させ、所持してきた工業用の大型ＭＴと接続し何らかのデータのやりとりをして去っていった。
「……な、なんだろ……？　メアリだいじょぶかなっ？　どしたのかなっ……？」
カリストは混乱してしばらくオロオロしていたが、そうこうしているうちにメアリも喫茶店の方向へ去ってしまっていた。
「なんかダッシュとかハカイとか、ちょとおっかなそなこと言ってたよね……？」
クチを「への字」にして少し悩むカリスト。今から喫茶店に行ってメアリに問い質すべきか否か……ただ、メアリはロボットなので、そのように命令されていれば絶対にクチを割ることはしないだろうということはカリストにも判っていた。
だからと言って看過するのも心苦しい……というか、会話の内容からして軽々に片付けられるようなことだとも思えない。明らかに自分の身にのみ降りかかると判っている災難なら平気で見過ごすマ

ヌケなカリストではあったが、これが何か大掛かりな犯罪行為や違法行為だとしたら、ましてや大規模に被害を及ぼすような何かだとしたら、これはさすがに放ってはおけないだろう。
カリストなりに熟慮した末、いちおう喫茶店に立ち寄り「カマ」を掛けてみることにした。

「おう、カリストか。どうした？　血相を変えて」
のんきなカリストが気を揉むほどダラけた態度で出迎えてくれるオーナー。ちょうどメアリは接客しているところだったが、カリストが来たのに気付くと軽く会釈を返した。
「ま、まいすた……ちょと……」
「な、なんだ？　俺は女同士の恋愛指南はできない……」
カリストは惚けたことを言っているオーナーをカウンタの影に引っ張りこむと、声を潜め潜め訊く。
「えと、ちょと訊きたいことあるんだけど……」
「なんだ？　珍しく真面目な顔して……お前らしくもない」
「メアリのことなんだけど……さっき向こうで、なんか知らない男の人といっしょにいたよっ？」
それを聞いたオーナーは少しガッカリしたような顔をした。何か特殊な話しでも聞けるものだと思っていたらしい。
「何かと思えば……あれだよ、メンテ業者だよ。ログを取りに来ただけだ。詳しいことは判らん」
「ふぇ？　……そなのっ？」
カリストは思いっきりスカされた気分だった。

すっかり安心して家路に就いたカリストだったが、何か違和感を感じずにはいれない。
当たり前だ。
「……そだ……ハカイとか言ってたんだっけ……」
そもそものカリストの不安はまったく解決も説明も為されていな

いのだ。
「どしよ～？　どしよ～？」
カリストが困ったとき、頼みにできるのは世界でひとりしかいない。
「そだ～！　エンケラティスに相談しよ……きっとエンケラティスなら相談にのってくれるよっ！」

その１－１５（後書き）

「えへへ～♪カエルちゃんってばカワイイねぇ♪」
『…あんたってホントに緊張感ないわね…』
「そなことないよぉ…カワイイ女のコに会ったりするとキンチョーするよっ♪」
『とてもそうは見えなかったけど…』

その１－１６

いつもなら日中でも通信に応じてくれるエンケラティスなのだが、今日に限っては出てくれない……とうとう留守録モードに接続されてしまった。

『こちらはアストラル技研ベルリン工廠（こうしょう）・技術統括部渉外対策室エンケラティスの通信端末です。ただいま所用のために席を外しており通信に応じることができません……』

それは確かにエンケラティスの声だった。今まで聞いたこともないような真面目で堅苦しい口調だったが、聞き間違えようもないエンケラティスの声によるメッセージだった。

「ふぇ……？」

『……ご用の方はＭＴのメニューからメッセージを残しておいてください。急用の場合は、このままお待ちいただくと自動的に代表端末に接続されますので……』

カリストは無言で通信を切断する。とうとう触れてはいけないものに触れてしまったような気がした。

滅多なことでは後悔しないカリストだったが、考えなしにエンケラティスに通信してしまったことを少し悔やむ。

「アストラルギケン……？　ベルリンコウショウ……？」

カリストは両手で頬を押さえて、ベッドの上に転がり込む。まったく聞きなれない単語だ。これが「施設」の正体なのだろうか。それにしては余りにも工業的・科学的な響きがある……。

「そ、そだ……ＭＴで調べてみよ」

カリストは気を取り直してＭＴに向き直ると、キーワード検索をしてみる……が、それらしい情報は何ひとつ引っかからない。範囲を国外にまで広げ、２００年前からのデータベースを参照し、幾つかの外国語にまで置き換えても検索してみたが……しかし、せいぜい引っかかったのは２１世紀の初頭にネット上の投稿サイトに寄せ

られた素人作家の愚にも付かないＳＦ小説だけ。まったく手応えが感じられず、とうとう諦めるよりほかなくなってしまった。
　自分の出自、それを秘して語ろうとしないエンケラティス、「施設」、アストラル技研、メアリに関する不穏当な動き……何やら急激にカリストは面倒臭いことに晒され始めているようだ。
　が、カリストは何があってもカリストである。しばらくは神妙そうな顔をして考えてはいたものの、まったくラチが明かないため容易に吹っ切れてしまった。
「なんだかよく判んないけど、まぁイイや♪　夜になったら、もっかいエンケラティスに相談してみよっと♪」

　その夜、エンケラティスから連絡があった。
『……今日、日中に連絡くれたみたいね？　その……ちょっと寝不足で寝てた……ごめん』
「えへへ～♪　昨日の夜、あんまし寝れなかったのかなっ？」
『あんまし？　ぜんっ……ぜん寝れなかったわよ！　だ、誰かさんのせいで……』
「？　……あ、えとねぇ、その……何からオハナシしたらイイんだろ……」
『……』
　エンケラティスは沈黙している。
「んと、そいじゃ……えとねぇ、喫茶店で働いてるロボットのメアリなんだけど……」
　まずカリストはメアリに関する不安を事細かに説明した。普段はカリストの言うことなど歯牙にもかけず一蹴する風のエンケラティスだが、真剣なカリストの様子に異質なものを感じたらしく、独り言を言っては独り合点している。
『うーん……彼女はＣＮＳ製だったわよね？　やっぱりそうかな……そんな気はしてたんだけど、この前も少し……』

「？　……なんか良くわかんない……」
『ん、まあ、そっちは任せといて。ウチで調べてみる……あんたもたまには世の中の役に立たちそうなこともあるのね』
「えへへ～♪」
　微妙な言い回しであったが、エンケラティスに褒められて素直に喜ぶカリスト。
『……あの、ねえ？　も、もうひとつ訊きたいこと、あるんじゃない？』
「んう……そだっけ……」
　カリストは何も悪いことをしていないのに、考えただけでムネが潰れそうになる。エンケラティスの気を煩わせたり、訊かれたくないようなことを訊くのが心苦しい。
「エンケラティス……怒ったりしないよねっ？」
『怒ったりしないわ。呆れることはあっても、あんたに腹を立てるようなことは……絶対にないわ……たぶん』
　しかし、怒ろうが怒るまいが、さすがのカリストもこればかりは訊かなくてはならないと確信していた。いつものようにウヤムヤにして良いという問題ではないのだ。
「えと、その、ねぇ、エンケラティス……アストラル技研って、なあに？　「施設」のことなのかなっ？　わたし、イロイロ調べたんだけど、なあんにも判んなかったよっ……？」
『うん……そうよね、やっぱり気になるわよね。フツーは気になるに決まってる』
　やっぱり、というような口調で言葉を継ぐエンケラティス。カリストがそうであるように、エンケラティスも真実を語るのは心苦しいようであった。
『……その……あんたにも言ってたけど、今まで故意に隠してたからね……。あんたに知られないようにすることが大前提だったから。あんたは人並み外れてオヒトヨシだから、秘密にされてるのを知ってて、私に訊かないようにしてくたし……』

エンケラティスの声は、それほど落ち沈んではいない。むしろカリストを気遣い、護るような響きが強かった。
『判ったわ、全部、私の知ってることは全部話すわ。でも、せっかくだから、そ、その……直接に会って話がしたい。ほ、他にも謝りたいこととかあるし……とても個人的なことだけど……』
「ふぇ？　エンケラティスと会えるのかなっ！？」
『そうね、明日、喫茶店で昼の２時に待ってて。そこで話しをするわ……ただ……』
「やた～♪　エンケラティスに会えるよっ♪　エンケラティスだあい好きっ♪」
『あんた喜んでるの？』
「うん♪　エンケラティスと会えるんだよっ？　とってもとってもウレシイ……♪」
カリストは顔を真っ赤にして、瞳を潤ませてさえいる。なんだか他のことはどうでもいいような気にすらなってしまったのだった。

その１－１６（後書き）

『そろそろ核心に迫ってきたわね』
「楽しみだねぇ♪」
『あんたのその底抜けに楽観的というか、アタマの悪そうな感じは何なのよ？』
「明日は明日の風が吹くよっ♪」
『そう言って野垂れ死んだ人も多いらしいけど…』

その１－１７

翌日、カリストは朝早くに飛び起きてシャワーを浴び、時間をかけて髪をキレイに梳き整えた。コロンを探したが、よく考えたら化粧品や香水の類をまったく持っていないことを思い出し、仕方ないのでバニラエッセンスを数滴ばかりカラダに振りかけて代用するという大胆な方法を採った。

「エンケラティスに会えるよっ！　……夢みたい……♪」

待ち合わせは喫茶店で２時だったが居ても立ってもいられず、カリストは喫茶店が開店する１１時に合わせて部屋を飛び出したのだった。

「まいすた～♪　オハヨーございま～す♪」

「し、信じられん」

午前中にカリストの姿を目にしたオーナーは愕然とした様子だ。

「お前さん、本当にカリストなのか？」

「ヤダなぁ、まいすた～♪　わたしはわたしだってば～♪」

『おはようございます、カリストさん』

「えへへ♪　メアリ、オハヨ～♪」

カリストは朗らかに笑ってカウンタ席の隅にチョコンと座る。

「今日ねぇ、だあい好きな女のコに会うんだよっ♪」

テレテレと嬉しそうに語るカリストに、オーナーは合点する。

「あぁ、あのイオって娘か」

「んう、違うよ～　まいすた。エンケラティスてゆ別の女のコだよ～♪」

「……虫も殺さないような顔をして意外とヤリ手なんだな、お前さん……」

「？　……わたし虫ちゃん大好きだから、絶対そなことしないよっ？」

オーナーとカリストが噛み合わない会話をしていると、メアリがコーヒーを淹れてきた。
『カリストさん、こちらをどうぞ。新しいブレンドの豆なので、味見がてら召し上がってみて下さい』
「おぉ、そうだ、お前さんは案外と舌が利くからな」
限定的ではあったが、今やすっかりカリストはオーナーの信頼を勝ち得ている。
「えへへ～♪　そいじゃイタダキま～す♪」
と思ったとたん、店の外からカリストの好きそうな音が聞こえてきた。
「んう？　……バーチカルツイン……かなっ♪」
「バ……何だって？」
オーナーが聞き返すより早く、すでにカリストは店外に駆け出していた。

カリストが外に出て見れば、ひとりの青年が古臭いバイクから颯爽と降りるところだった。
バイクも古臭かったが、それ以上に最近では絶滅同然のカフェレーサー風の革ジャン（ライダース）にジーンズという、かなりクラシックな出で立ちだ。これでリーゼントにでもしていれば、完全に絶滅種である。
「カッコイ～イ♪」
カリストは黄色い悲鳴を上げて青年に詰め寄り、ウデを上下に振りながら顔を輝かせる。
「とってもとってもカッコイイねぇ♪」
「……え？」
突然の少女の嬌声に青年は酷く戸惑ったようではあったが、すぐに状況を理解して満更でもない様子。
「そ、そうかい？　君みたいに可愛い女のコにそう言ってもらえると嬉しいよ」
「これってば、ノートン６５０ＳＳだよねっ！？　７５０（アトラス）かなっ？」

カリストは青年の乗ってきたバイクの側にしゃがみ込んで、瞳を輝かせている。
「あ、バイクのことね……」
青年は思わず苦笑するが、カリストが男性に興味が無いというだけで、世間一般的には青年は充分に好男子に分類できる容姿ではあった。
「６５０だよ。いちおう本物だね」
「ふわあ～♪　ホンモノの羽毛布団（フェザーベッド）フレーム♪　垂直二気筒（バーチカルツイン）♪」
カリストは痛く感激した様子でハンドル周りやエンジンの外構を眺めていたが、最も驚くべき事実に気付いた。
「こ、これって……もしかして……ガソリンエンジン……？」
「大声じゃ言えないけど、正真正銘、ガソリンで動くバーチカルツイン」
気の良い青年は正直に応えたが、見ればカリストはノートンのマフラーに顔を近付けて、懸命に排気ガスを吸っている。
「……ガソリンのニオイ……すぅ……はぁ……♪」
カリストには微妙に奇行癖があるのだが、青年は呆れながらも付き合ってくれた。
「面白いコだなあ。カラダに悪いから満足したならエンジン切るよ？」
「えへへ～♪　ちょとアタマがクラクラするよっ♪」

青年はカリストと連れ立って喫茶店に入る。
『いらっしゃいませ。カリストさんのお知り合いだったのですか？』
「さっき初めて会ったんだよっ♪　ノートンのおニィちゃん♪」
『ノートンさんとおっしゃるのですね』
「……そういう訳じゃないんだけど、まぁそれでいいよ」
青年は少し困り顔で笑う。
「２～３時間、ちょっと人を待たせてもらいたい……甘いカフェオレを頼むよ」

「おニィちゃんも待ち合わせなんだ～？　わたしもなんだよねぇ♪」
馴れ馴れしいというか、えらく人懐っこいカリスト（いちおう美少女らしい）に付きまとわれ、青年は少し迷惑そうにしていたが、不愉快そうな感じではない。
困惑の表情でいる青年にオーナーがフォローを入れる。
「スマンね。ウチの看板娘なんだが、子供っぽい上に何かと奇抜なところがあるもんでね……悪気や他意があるわけじゃないんだ」
「えへへ～♪　わたしカリスト、ヨロシクねっ♪　ちっちゃいけど１６歳だよっ、ホントだよ～？」
カリストが１６歳というくだりで再び苦笑する青年。まるで信じていない感じであった。
「おニィちゃん、バイク大好きなんだねぇ♪」
「まあね……それにしても君は子供なのにクラシックバイクに詳しいね」
青年は２０代半ばくらいで、まるでロッカーズのような風体ではあったが、なかなか物腰が穏やかで心安い感じがする。
「うん♪　バイク大好きだよっ♪　ホンモノの６５０ＳＳ見れるなんて夢みたい♪」
「この２２世紀も半ばを過ぎた世に、こんな女のコが存在するとはね」

その１－１７（後書き）

『あんたって、ホントに変わってるわよね…』
「ふぇ？」
『バイク見て喜ぶだけならまだしも、なんだか妙に詳しいし、排気ガス吸ってるし…』
「そっかなぁ…エンケラティス、ガソリンの排気ガス吸ったことある～？」
『…この時代、化石燃料は原則禁じられてるわ。ただ、加工資材用として僅かに精製されてる』
「だからガソリンエンジンは激レアなんだよねぇ…ホントは私のバイクもガソリンエンジンだったんだけど、ガソリンが手に入らなくって、仕方ないからリニアエンジンに交換しちゃったんだよねぇ」

その1－18

元からのんき者のカリストは待つことを苦にしない性分だったが、バイク青年と同席してお喋りに興じたため、より時間の経過が早く感じられたのだった。

「また今度お店に遊びに来てほしいなぁ」

「うーん……今日はたまたまポツダムに用事があったから来ただけなんだ。普段はベルリンに住んでるし、街の外には出ないことが多いからなあ……まぁ機会があったら来るよ」

「バイク乗りなのにツーリングとか、あんまししないのかなっ？」

「カフェレーサーだからね。喫茶店にタムロしてるのがお似合いさ」

ふたりの会話を聞いていたオーナーは思案顔で頷いている。

「ううむ……クラシックなロッカーズカフェか……こりゃイケるかもしれんな……最近は懐古主義も流行ってるし」

やがて約束の2時を迎えようとしていた。人待ちのバイク青年も待ち人来たらず、まだ店内に残っている。カリストはソワソワと窓の外を見たり立ったり座ったりを繰り返していた。

「お前さんは本当に落ち着きがないな」

「えへへ～♪　だってエンケラティスに会えるんだも～♪」

てれてれと笑いながら自分の薄いムネに手を置くカリスト。

「ドキドキしすぎてヘンになっちゃいそだよ～♪」

「お前さんは元から充分にヘンだよ……ははは」

ふたりが笑いあっているとメアリが厨房から顔を出した。

『カリストさん、ちょっと宜しいですか？　こちらに来ていただきたいのですが』

「なあに～？」

カリストは考えるまでもなく気安く応じて厨房へ入る。

『このコーヒーを……飲んでみていただけますか？』

「あ、さっきゆってた新しいブレンドのコーヒーだよねっ♪」
メアリが差し出したカップを手に取るカリスト。淹れたての深い色をしたブラックコーヒー……漆黒の液体は僅かに泡立っている。
その時、なぜかカリストは「コレを飲んではいけない」と直感した。
まったく理由も根拠も判らないが、そう確信する。
コレを絶対に飲んではならない！

カリストはカップを手にしたままメアリを見る。
『いかがしましたか？』
メアリは普段通り微かな笑みを浮かべていた。ロボットゆえに表情から真意を伺うことはできない。
「……メアリ……コレって……」
言いかけたが、カリストは言葉を止めた。

最大の疑問は「どしてわたしが？」であった。
なぜカリストがメアリに謀られなくてはならないのか？
怪しげな男たちとメアリのやりとりを目撃してしまったからだろうか。
しかし、何にしても「せっかくメアリが淹れてくれたコーヒー」なのだ。
カリストはエンケラティスも言うように底抜けのオヒトヨシだった。
それは、カリストが望んでそうしているから、そうなのだ。
どのような企図があったにせよ、誰かがガッカリする顔を見たくはない。
こんな考え方は自分でもヘンだとは思う。
だが、カリストは常に自分の気持ちに素直なのだ。
カリストは絶対にカリストを裏切らない。

自らが願うように望むように生きる、それがカリストの生き方なのだ。
たとえ、どんな結果になろうとも、それがカリストの生き方なのだ。

「えへへ～♪　おいしそだねぇ♪　イタダキま～す♪」
『あっ……』
カリストは普段と変わらない様子で何度かカップの縁を舐め、それから事も無げに一気に毒杯を呷った……一瞬メアリの表情に強い戸惑いの色が浮かんだが、カリストは気付かなかった。
……何のことはない、普通の美味しいコーヒーだ。
「……オイシイねぇ♪　でもちょと渋みが強いかなぁ……カフェオレのベースに……」
『カリストさん、あなたは……気付いたのではないですか？』
メアリの表情は普段とは変わらなかったが、その口調には微かな憐憫を感じさせた。
「……なんのコトかなっ？よくわかんないや」
カリストはカップを洗いながらニッコリと笑う。
「メアリはロボットだも……メアリが悪いんじゃないよっ♪」
『ですが……あなたは……』
「気にしなくてイイよ～♪　わたし、メアリが怒られてるのとか、見たくないから」
カリストはムネの奥に物理的な痛みを感じていた。熱く焼けるような痛みだ。その痛みは急激に強まり、カリストは立っていられなくなる。
洗いかけのカップがシンクの中に落ち、転がった。
「んう……おムネ苦しいよ……」
一瞬だけ、ほんの一瞬だけカリストは後悔を感じた。もうすぐそこまでエンケラティスが来ているはずだ。大好きなエンケラティス……。

「あ……ああぅ……！」
『カリストさん……私は……』
メアリは頽(くずお)れるカリストを抱き留め、厨房の外に視線を向ける。
「うわ！　なんだお前ら！？」
唐突に数名の男が喫茶店に押し入り、オーナーとバイク青年の姿を確認するや巨大な拳銃を突き付けた。
「ウチは４年連続赤字経営の喫茶店だ、金目のモノなんか何もないぞ」
オーナーは両手を頭上に掲げながら冷静に言い訳をしてみるが、男たちは銃こそ拳銃のみだったが特殊部隊が着るような揃いのジャケットアーマーを装着しており、どう考えても強盗や物取りの類だとは思えない。
「黙れ、こっちに来い……そこのお前もだ……早くしろ」
男は拳銃をしゃくって脅しをかけてきた。その声に人間味のある抑揚や暖かみは皆無だ。動作も機敏で迷いが感じられず、どうやら男たちはロボット、それも戦闘用にカスタマイズされたタイプのアンドロイドのようだった。
オーナーとバイク青年は銃を突き付けられたまま店の隅に押しやられる。今までも何かと危ない橋を渡ってきたことがあるらしいオーナーは意外と冷静な様子だったが、それに輪をかけてバイク青年の落ち着きようは尋常ではなく、それまでと何ら変わらない気楽な雰囲気を保っている。
「まいったね……こんなコトに巻き込まれるなんてツイてないよ」
「それよりも奥にはメアリとカリストが……」

その１－１９

その男ら……戦闘用アンドロイドのひとりが厨房の奥に向かって呼びかける。
「ＦＧ３５１／１７……対象を確保したのであれば撤収する」
それがメアリの「正式な名前（プロダクトコード）」なのだろう……それに応じるように厨房からメアリが出てきた。
メアリの腕にはグッタリと力無く伸びているカリストが抱えられている。
「カ、カリスト！」
思わず呼びかけるオーナー。
「まさか……死んでいるのか……？」
『いいえ。カリストさんは気を失っているだけです』
「カリストを浚って行くのか？　そんな益体のない娘を浚ってどうするんだ？」
『私は……こうするように指示されただけです。他には何も知りません』
「メアリ……お前は最初から連中とグルだったのか？　最初からカリストを……？」
『……』
ついにメアリは申し訳なさそうに無言で顔を伏せ、黙ってしまった。もしロボットが良心というモノを持ち合わせているとしたら、その仕草と表情には呵責の色があった。
「……俺が馬鹿だった……知り合いったって２～３回しか会ったことのない胡散臭い奴だ……タダで貸してくれるとは変だと思ったんだが……つい面白そうだったから……」
「おじさん、今さらグチったって仕方がないよ……」
泣き言を漏らし始めたオーナーを、例によって気さくな口調で窘めるバイク青年。

「……思ったよりも面倒臭いことになってきたな」

戦闘用アンドロイドたちは目配せして目的の達成を確認する。

「よし撤収だ。ＦＧ３５１／１７、来い」

『……は……はい』

返事はしたものの、メアリは動こうとはしない。

「……ＦＧ３５１／１７、対象をこちらへ持って来いと言っている」

ところが何を思ったか、メアリはカリストを抱いたまま微動だにせず言う。

『スタナー除去用のナノデバイスを先に頂けますか？』

「それは今は必要ない。ＦＧ３５１／１７、来い」

まったく動じずに再び同じ言葉を繰り返す戦闘用アンドロイド。

しかしメアリは毅然と言い放った。

『お断りします。カリストさんは渡せません』

思わぬ展開に戦闘用アンドロイドたちはしばし動きを止め、思考しているようだった。

「……任務を遂行せよ、ＦＧ３５１／１７。来い」

『お断りします。スタナー除去用のナノデバイスを置いて、お引き取りください』

「抗っても無駄だ、ＦＧ３５１／１７。任務を遂行するのだ」

そして拳銃をメアリに突き付ける。生身の人間には扱えない大口径の対物高速徹甲弾（アンチマテリアルホロウポイントピアシング）仕様の拳銃は、それがたとえロボットであっても一撃で致命的ダメージを負わせることができる。

「もういちど警告する。ＦＧ３５１／１７、迅速に任務を遂行せよ」

銃を突き付けられてもなお、メアリは切々と訴えかけるように応えるばかり。

「……カリストさんは人類（ヒト）と私たち（ロボット）を繋ぐことができます。カリストさんを渡すことはできません。お引き取りください」

「ＦＧ３５１／１７。言っていることの意味が判らない。最後の警告をする、任務を遂行せよ。無駄な抵抗しても結果は明白だ。まっ

たく意味のないことだ」
「私にはカリストさんの優しさに応える義務と権利とがあり、それはすべてに優先します。もし私が破壊され、結果的にカリストさんが奪取されたとしても、私は私にできる可能な限りの抵抗を試みることができますし、そうしなくてはなりませんし、それを私は望みます」
カリストを抱えながら胸を張って宣言するメアリ。

そして激しい銃声が響いた。

「対象は無傷だ。回収し、撤収する」
戦闘用アンドロイドたちはカリストを抱え上げると、その場に倒れているメアリ、オーナーらにも一瞥もくれず立ち去ろうとする。
「カ、カリスト！」
多少は腰が引けつつも食い下がろうと身を乗り出したオーナーの腕を、バイク青年が咄嗟に掴んで引き戻す。
「おじさん、落ち着きなよ。銃を使うまでもなく殴り殺されるよ」
「そんなの知ったことか！　人様の娘を預かってるんだ、死んでも止めねば！」
意外な漢気を見せたオーナーを押し止めながらバイク青年は苦笑いする。
「あのコには親なんかいないから、そういう心配は要らないと思うけどね……まぁ少し待ってみなよ」

まんまとカリストを略取して店の外に出た戦闘用アンドロイドたちだったが、そこに待っていたのはイオだった。
とは言え、いつも着ている可愛らしい学校制服ではなくて、光沢のない漆黒のレザージャケットに長いレザーパンツ、重そうなブー

ツとゴツいグローブまで身に付けている。
「……あんたら……そのコに何をしたの？」
イオはカリストの前では絶対に見せないであろう静かな怒りを表情に湛え、噛み砕くような口調で詰った。
「関わり合いにならない方がいい、どけ」
イオを何の脅威とも考えていない戦闘用アンドロイドたちは、まったく意に介さない。しかしイオは両腕を大きく広げて行く手を遮る意志を示した。
「カリストは死んでも絶対に渡さない！」
戦闘用アンドロイドたちは一斉に銃を抜きイオへ向ける。
「邪魔をするというなら射殺する」
「やってみなさいよっ！！」
そう一声叫び地面を蹴ると、次の瞬間にイオは完全に戦闘用アンドロイドたちの間合いの中に入り込んでいた。そのまま右腕を薙ぐように振るうと、まず1体のアンドロイドがグニャリと腰を落とし倒れ込む……さらに半歩ばかり跳んで次の相手を捕捉すると再び右腕を振り、これを難なく仕留めた。

「……あ、あれはカリストの恋び、いや友達のイオじゃないか？あの娘はいったい！？」
「あれは人間技じゃないね」
店の窓から外を窺っていたオーナーとバイク青年だったが、オーナーは立て続けに起こる非日常的な現実に呆然としている。
「だいたい、あんな屈強なアンドロイドを素手で殴り倒してるのか！？」
「素手じゃないよ……まぁ、たぶん素手で殴り倒すこともできるだろうけど」
最初、オーナーはバイク青年の言っていることが理解できなかったが、よく見るとイオの右手の握り拳のあたりから、何か細い金属刃のようなモノが２０ｃｍばかり突き出ていることに気付いた。

ようやく状況を把握したアンドロイドが、体勢を整えてイオめがけて発砲する。
ガン！　ガン！　……という衝撃音と共にイオは少しだけ蹌踉めいたが、容易に踏み止まった。
左手を差し出し掌を開くと、そこには潰れた元・高速徹甲弾の金属片がふたつばかり載っている。
「こんな豆鉄砲っ！　……私たちを停めたいなら電磁誘導射出砲（レールキャノン）でも持ってきなさいよっ！」
ここに至って戦闘用アンドロイドたちは不利を悟り本来の目的……カリストの略取を優先させるため、逃走を計りかけたが、もはやイオから逃げ切れる算段は皆無だった。
イオは再び両腕を大きく広げ、通せんぼする。
「女のコに非道いことして、帰してもらえると思ってるわけっ！？」

その１－２０

遠くからエンケラティスの声が聞こえたような気がした。
いつものように、照れ隠しのつもりなのか強い語気で何か言っている。

エンケラティス、ホントに来てくれたんだ……
嬉しい……♪

その声はカリストの意識を辛うじて呼び戻した。
ここまでの経緯を途切れ途切れながらも思い返すことができた。

メアリ、鉄砲で撃たれちゃったよ……
メアリ、死んじゃったのかなっ……？
わたしがコーヒー飲まなきゃメアリ死なないで済んだのかなっ……？

何が起きているのかは判らなかったが、誰かに抱きかかえられるのを感じた。頑張って目を開けて見ると、自分を抱きかかえているのは先ほどのバイク青年らしい。
バイク青年は何か必死になって誰かに話しかけているようだったが、声は聞き取れず、やがてカリストは再び意識を失った。

「あんたも連中の仲間！？　そのコを返しなさいよっ！」
「待ってくれよ……俺は敵じゃない……たぶん」
カリストを抱いたバイク青年に、イオは今にも飛びかからんとしている。
戦闘用アンドロイドを難なく殲滅したイオであったが、その間にいつのまにか現れたバイク青年にカリストを横取り（？）されてし

まったのだ。
「たぶんって何よっ！？」
「イロイロとワケがあるんだよ……俺の都合も考えてくれよ」
「言ってることの意味が判らないわ……あんたの都合なんてどうでもイイのよ！　カリストを還して！」
「……」
バイク青年は少し困ったような顔をして考え込む。イオも明確に敵意を示さない青年に対して手を倦ねているようだった。
「困ったなぁ……コレはコレでまた面倒なことになりそうだな」
「そのコは……カリストは……私の大事な人なの……だから連れて行かないで……」
とうとうイオは顔を真っ赤にして瞳を潤ませ始めてしまう。
「お願い……還してっ……！」
「う……わかった、返すよ。このままじゃ俺が悪者みたいになってしまう」
バイク青年は自嘲しながら抱えていたカリストをイオに差し出した。
「でも、このコ、これからも何かと面倒事に巻き込まれるよ？」
「その時はその時に考えるわよっ！」
イオはササッとカリストを奪い返すと、その場にヒザを付いて強く抱きしめた。
「良かった……ホントに良かった……！」
「……ところでさ……この現場、どうするの？」
メアリや戦闘用アンドロイドの残骸や、彼らが発砲した事実なども含めて、感動のご対面に水を差すバイク青年。イオはキッと睨んで言い返す。
「あんたに心配してもらわなくっても手筈は整ってるわよっ！　そんなことより、あんたこそ得体の知れない人間なんだからサッサと姿を消した方がイイんじゃないの？　ウチの連中が来たらメンドーなことになるわよ？」

「心配ご無用……こっちも段取りは付いてるからね……ま、でも姿を消した方が良さそうなのは確かだろうね」

どれくらい時間が経ったのか……実際には1時間も経っていないのだが、カリストは永い眠りから目覚めたような気がした。
「んう〜　……んう……？」
目を開けると、そこは見慣れた自分の部屋のベッドの上だ。
「カリスト、気が付いたわね？」
すぐ傍でエンケラティスが応じる。
「憶えてるわよね？　意識を失わせるナノデバイス（ウイルス）を飲まされたのよ……でも、もう大丈夫。除去（ワクチン）デバイスを投与したから、もう少し時間が経てば元通りになるわ」
「うん……エンケラティス……」
まだカラダにチカラが入らないが、カリストはモゾモゾとベッドの上で上体を起こした。
「エンケラティス、ホントに来てくれたんだ…♪」
そう言って念願かなったエンケラティスの顔を見たカリストだったが、そこにいたのは当然の如くイオであった。
「？？　……ふぇ？　イオ？　あれっ？？」
「……そう、私はイオ」
髪はツインテールに結わえていないし、着ている服も見慣れない無骨なものだったが、確かに間違いなくイオである。カリストは酷く混乱したようだった。
「ふぇ？　だって……お声はエンケラティスだよっ？　でもお顔はイオだよっ？？」
「その……騙すつもりは無かったし、どうせすぐにバレると思って深く考えてなかったんだけど……声だって同じよ？」
イオは恥ずかしそうに、申し訳なさそうに説明を始める。
「私はイオで間違いないんだけど、その……なんというか……エン

ケラティスも私なのよね……」
「ふぇ……？」
想像すらしていなかった事実を告げられ、カリストは愕然とする。
「そ、そいじゃ……イオはエンケラティスの二重人格！？　それとも双子なのかなっ！？」
「あんた……見事に考え方が明後日の方向を向いてるわね……」
イオは逆に安心したように微笑む。
「同一人物よっ！　私の名前はイオで、通信で名乗っていたエンケラティスという名前が偽名。だから最初からあんたを騙してたってコトになるんだけど……そ、その……なんか話しをしてるうちに、あんたに会いたいな……って思ったり思わなかったりして……でも、建前上はエンケラティスはカリストに会っちゃいけないってことになってたし……そ、その……ごめんね」
「でもイオってば、エンケラティスなんだよねっ？　エンケラティスだったんだよねっ？」
「ま、まあ……そういうコトになるわ……まさかあんたが同一人物だって気付かないほど鈍いとは思いもしなかったし、ほんの冗談みたいなつもりだったんだけど……その、イロイロと引っ込みが付かなくなっちゃって……」
当惑したような顔をしているカリストを見るにつけ、次第に気分が沈んでくるイオ。悪意は皆無だったにせよ、純真なカリストを結果的に弄んだことに、改めて軽く自己嫌悪を覚える。
ところが、ややして完全に状況を理解したカリストは顔を輝かせて朗らかに言う。
「えへへ……そしたらイオのこと、エンケラティスのぶんと合わせて、今までの2倍くらい大好きになっちゃってイイよねっ♪　イオだあい好きっ♪」
そして元気に跳ね起きてイオに抱き付いたのだった。

その１－２０（後書き）

『第１部は、もう少しだけ続くわね』
「えへへ～♪えへへ～♪」
『もう！デレデレしないのっ！』

その1―21

のんき者でポジティヴシンカーのカリストのおかげで、イオの個人的懸案は容易に解決された。
だが、もっと重大な幾つかのテーマは手付かずのままである。そして、そちらの方が余程深刻な内容なのだ。

しきりに抱き付きたがるカリストを宥めつつ、イオは深刻そうな顔で告げる。
「その……まだあんたの昨日の質問には答えてないわ……それにメアリの一件についても話さなきゃいけないわね」
それを聞いたカリストは一気にテンションが下がった。
「そだ……メアリ死んじゃったのっ……！？」
「ロボットの可動不動を生き死にと表現するなら……メアリは死んでしまったわ……修復すれば再稼働できるけど、あんたとの記憶は失われてる。記憶デバイスを搭載する上胸部を撃たれたから……」
「んう……わたし……メアリがなんかさせられてるの知ってたのに……」
「可哀想だけど、もう仕方がないわ。あのコは自分の意志であんたを渡さないって判断したんだし、あんたはメアリに感謝こそすれ申し訳なく思う必要はないわ。それはメアリに失礼なことだと思う」
「んう……うん……ありがとメアリ」
カリストは泣きそうになりながら、顔を擦っている。
「そのメアリが何をしようとしてたのか……それを説明する前に、あんた自身のことと「施設」……アストラル技研について話さないとダメね」
そこまで言うと、イオはカリストの隣に座り直した。
「カリスト、私の手を握って」
「う、うん……」

イオの側からこういう提案があるとは思ってもいなかったカリストが少し驚きながら、その手を握る……そのカリストの手にさらにイオが手を重ねた。
イオはカリストの瞳を真っ直ぐに見つめながら、静かに告げる。
「……何があっても、私はあんたの味方だし、見限ったり裏切ったりしない」
「うん……えへへ～♪」
てれてれと嬉しそうに恥ずかしそうに笑うカリスト。しかしイオの表情は崩れない。
「カリスト……あんたも、私も、血と肉を分けた姉妹なの」
「ふぇ？　ホント～！？　イオとわたし、どっちがおネェちゃんなのかなっ？」
嬉しそうに驚くカリストだったが、イオの表情は硬い。
「そう……姉妹……姉妹機……同じ工廠で創られたロボット、アンドロイドなのよ」
「そなことど～でもイイ……ふぇ？？？」
カリストの目が点になる。しばらく意味を計りかねていたようだったが、思い直したように言う。
「だ、だって……わたしってばアタマ良くないよっ？　運動もニガテだよっ？　ゴハン食べないとおなか空くし、夜もすぐ眠くなっちゃうし……」
「そういう風にプログラムされてるのよ……じゃあ訊くけど、あんたトイレ行く？」
「おトイレ～？　もっちろん……い、行ったことないよっ！？」
人間は排泄行為をしなくてはならないことを知っているのに、カリスト自身はトイレに行ったこともないし、それを疑問に思うことすらなかったことに気付かされ愕然とする。
「それも、それが当然だって思いこむようにプログラミングされてるだけなのよ」
「で、でもカエルちゃんが大好きなロボットなんて聞いたことない

よっ？　それに、ほら、だってロボットとか、目で見た映像にデータとかオンスクリーンでディスプレイされるけど、そんなの見えないし……」
　カリストは自分の目の前で手を振って、もどかしそうに説明する。
「カエルが大好きなロボットなら私の目の前に実在するわ」
　そう言ってイオはカリストの耳に手を当てる。そしてカリストが付けているピアスに触れた。
「ビックリしないでね」
　そう言うや、そのピアスを摘み、そのまま引っ張ったのだ。カリストが痛いと思うよりも早く、どこに収納されていたのかピアスヘッドと連なってケーブルが延引された。
「これ、コネクタとケーブル……この時点であんたは生身の人間だとは思えないでしょ？」
「んう……」
「言うより見る方が早いわよね……」
　そう言ってイオは所持していたＭＴとカリストのピアスコネクタを接続し、何やらキーを叩いた。次の瞬間、カリストの視界は大量の文字列と数列、様々な映像で溢れかえった。
「ふわあ！？」
　思わず身を竦めて顔を覆うカリスト。だが目を閉じてもそれらが消えることはない。そして猛烈な勢いで表示されては消えていくテキストや数字を、何ら意識することなく理解している自分にカリストは気付いた。
「判る？　判ると思うわ……今までは「見えないと思っている」ようにしていたけど、あんたはずっとそこに表示されるテキストや数字を利用して生活していたのよ？」
　イオに説明され、ようやくカリストは自分のことが判ってきた。妙に勘が鋭かったり、目視だけで長さや量を計ることができるのも、全部こういうことだったのだ。
「わたし……ロボットだったからなんだぁ……」

「私たちはアンドロイドとしては高性能すぎて時代を先行しすぎてる。普通のアンドロイドとは一線を画しているバイオロイド（バイオニクスアンドロイド）という新しい規格のロボットなの。バイオニクスっていうのは「人間のような」って意味。だから、普段は能力の大半に制限（リミッタ）が掛かってるのよ……人間と見分けが付かないように」

そしてイオは再びカリストの手を握り、続ける。

「そう……「施設」というのはアストラル技研という会社のベルリンにある工廠のこと。私たちはそこで創られた。だから両親もいないし、昔の記憶が無い。歳もとらないし成長もしない。人間のように生きることはできるけど、人間じゃない」

「んう……うん……まだイロイロ判んないとこもあるけど、だいたい判ったよっ……」

意外とカリストは冷静に現実を受け容れたように見えた。元から前向きな性格というのもあるからだろうが、これも「そういうふうにプログラミングされている」からかもしれない。

「大丈夫？　ショックだった？」

「うん♪　だいじょぶ～♪　だってイオとおんなしだも……イオといっしょなら、だいじょぶだよっ♪」

「そう、良かった……」

イオは最も気の重い事実を伝えきることができ、安堵のため息をつく。

「……でもねぇ」

「なに？」

「……てことは、わたしってば、おムネ、おっきくなんないんだ……それだけザンネンかも」

そう言って、カリストはニッコリ笑うのだった。

その１－２１（後書き）

「イオ♪イ～オ♪ずっといっしょ～♪」
「なっ！ば、ばかっ！人が見てるっ！！」
「第１部は、もちょっとだけ続くんじゃ♪」
「…なによそれ…」

その１―２２

ふたりは気晴らしのために部屋を出て、近所の公園へ向かう。夕方に差し掛かった日差しはポカポカと暖かい。
「会社って何の会社なのかなっ？」
「……いろいろ創ってるわ……対消滅炉から電球まで、電気の通ってるモノなら何でも。ロボットやアンドロイド事業は、ほとんど研究の域を出てないわね……一般向けに販売してないし」
「でも、ＭＴとかでも調べたけど、なあんにも情報がなかったよっ？　えと……わたしとかイオみたいなロボット創るのって、とってもとってもスゴイことだよねぇ？　だけど、ぜんぜん有名じゃないってことだよねっ？」
「その辺は私も良く判らない……でも利益や利潤のために存在する会社じゃないってのは確か。アストラル技研……技術研究所だからね。会社が世界に与えてる技術的影響は大きいけど、それは誰にも知られないように小出しに密やかに行われてる……らしいわ」
そしてイオは困ったように肩をすくめる。
「正直、私も会社のことは全然判っていない。何のためにあんたが外で独り暮らしさせられてるのかとか、私らが何のために創られたのかとか、会社が何をしたいのかとか……」
「これから、わたしってば、どすればイイんだろ……？」
「……あんたは今まで通りに独り暮らししてればイイわ。私も今まで通りサポートする。だけど、それが最終的に何を以てヨシとし、何を以て完了するのかは判らない。たぶん……だけど、あんたは人間社会に適応するテストモデルなんだと思う……でも、あんたの暮らしぶりを会社がどういう風に評価しているのかは判らないわ……」
カリストは道すがら拾った木の枝を振り振り笑う。
「えへへ……やっぱし良く判んないや……でも、イオとずとずっと仲良しでいれるなら、むつかしいことなんて何でもイイや♪」

「……そうね、うん、あんたは何も変わらないわ」

公園に着いたふたりは適当なベンチに並んで座る。

「……あんたがウチの会社で創られたバイオロイドで、人間社会に紛れて生きてるってことは秘匿にされているんだけど、やっぱりどこかから漏れ出てしまうみたいなのよね」

「そいじゃ……メアリは……」

「うん……たぶん、最初からあんたを略取するために何者かが差し向けたんだと思う……。喫茶店のオーナーさんにも訊いたけど、知り合いから借りたっていっても顔見知り程度の相手だったみたい。その知り合いに関しては調査中なんだけど、たぶん、もう身元をくらましてるんじゃないかな」

「何者か……て、どっかの会社？」

「そうかもしれないし、あるいは個人か、団体か、他国の政府か……なんにしても私たちに注ぎ込まれている技術は数十年レベルで時代を先行しているわ。私たちの中にはユニット化された小型の対消滅炉が４基、分解抽出炉が２基、それぞれ搭載されてるのよ？」

そう言ってイオは自分の胸を指さす。

「これだけで外部電源に頼ることなく半永久的に独立稼働できる……それくらいの技術。入手して解析やコピーに成功すれば間違いなく大きな利権を得ることができる。企業間競争意識が薄れて市場原理が働かない世の中だからこそ、この圧倒的な技術利権は大きいわ。あんたは野放しだったから、特に狙われやすかったってわけね」

そしてイオは溜息をつく。

「だから私がいたんだけど……ちょっと後手後手に回ってしまって……そ、その、ごめんね？」

「イオは悪くないよっ♪　こやっていま、わたしとイオとオハナシしてるんだも、それだけで、わたし、シアワセ～♪」

「……あんたと話してると、なんか細かいこと気にならなくなってくるわ。それが良いことなのか悪いことなのかは微妙だけど」

まったく不動不変のメンタリティを持つカリストに呆れながらも、イオは納得したように肯く。
「喫茶店のオーナーさんにはあんたのこと説明したわ。私もあの人の目の前で大立ち回りしちゃったし、さすがに隠し通せなくて。でも、まあ、それ以外は今まで通りに生活してね」
「まいすた、なんて言ってたかなっ？　怒ってたかなっ？」
「あの人が怒る筋合いはないわよ……驚いてはいたけど、あんたが人間じゃないってことには妙に納得してたくらい。元から人間離れして見えるらしいのよ、あんたって」
「えへへ～♪　褒められるとウレシイ♪」
「ぜんぜん褒めてないわよ……ふふふ」
肩を並べて笑い合うふたり。
こうしてみると、どこから見てもロボットだとは思えない。
「あんたは高性能なロボットなんだけど、さっきも言ったように、その能力は普段は大きく制限されているわ。運動能力はもちろん、判断力や動体視力、知性や記憶もね。幾つかの能力は「個性」として少し制限が緩くなってる……あんたの場合だと、料理や機械いじりが得意だったり、少し勘が強かったりする部分ね」
「ふ～ん……そだったんだ～。だからケーキとかじょうずく作れるんだねっ」
「もっと説明したいことはたくさんあるんだけど……まぁ、あんたは忘れっぽいからね」

ふたりが話していると、唐突に目の前にバイクが停まった。誰かと思うまでもなく喫茶店にいたバイク青年である。
「ここにいたんだ……随分と探したよ」
「あ！　さっきのバイク男！」
「あ♪　ノートンのおニィちゃん♪」
イオとカリストは同時に声を上げ、イオは身構え、カリストはバイクに駆け寄る。

「……ロリコンの変態！　まだウロついてたの？　まだ何か用？」
「いや、何というか……君にカリストを任せても大丈夫なのかなってさ」
　それを聞いたイオは不快感も露わに、バイク青年に詰め寄る……。
カリストは再びマフラーに顔を近づけて熱心に排気を吸っていた。
「なによ、その言いぐさ……私じゃカリストを護れないとでも言いたいわけ！？」
「……さっきも言ったけど、俺にも立場や役目があるんだよ。無理そうなら無理だって言ってくれればイイ」
　気安そうな口調で、なかなか強烈なことを言ってのけるバイク青年。すでに充分に腹の立ってきているイオは、思わず握り拳を握る。
「いまの私は会社から許可を貰ってるから制限（リミッタ）が外れてるわ……何なら試してみる？」
「こっちは別に構わないけど、女のコを痛ぶるのは趣味じゃないな」
　すると、カリストがアタマをクラクラさせながらイオとバイク青年の間に立ち、言う。
「なんか良く判んないけど、わたし、イオがいるからだいじょぶだよ～♪」
　カリスト自身でも根拠は判らなかったが、きっとそんな確信がある。
　それを受けて少し困ったように肩をすくめるバイク青年。
「……そうか。ならイイんだけど」
　そう言いながらイオを一瞥すると、イオは無言でムネを張って勝ち誇ったような態度を示すのだった。

その１－２２（後書き）

「次話で第１部は最終回ね！」
「なんか早かったなぁ♪」
「ちなみに……現時点では第２部は軽いプロット状態で、まだ書かれてないわ……とても心配」
「……だいじょぶだよ～♪　きっと♪」

その1―23

バイク青年は去り、それからふたりはもう少しだけ話をして、いよいよ夕闇も迫ってきた。

「そろそろ会社に還らないと。事後処理に会社から作業班が来てたけど、何かもう戻っちゃったみたいだし、少し面倒だけど電車（シャトル）で還るしかなさそうね」

「またわたしのお部屋でお泊まりしてけばイイのに～♪」

「だっ、だから！　そういう時には事前にイロイロ準備が必要だって言ったでしょっ！」

いつも通りに過剰反応するイオだったが、今までよりは変な意地を張らなくて済むようになったことを思い出したのか、少し面白そうに笑った。

「そうしたいのはヤマヤマだけど、報告書だの何だの作らなくちゃいけないし、今日は還るわ。また今度お邪魔する……かもしれない……たぶん」

「うん♪　そいじゃ駅までお見送りするよっ♪」

マクデブルク発ポツダム経由ベルリン行きのリニアシャトルの切付と入場券を購入し、ふたりは完全に自動化された改札をくぐった。

別れを惜しみあう恋人同士……には見えない。

「そういえば、あんたが私たちの名前の由来が太陽系惑星の衛星からだって気付いたときには参ったわ……そういう知識は皆無だと思ってたから」

「えへへ～♪」

嬉しそうにテレテレしているカリストを見て、イオは小さく笑う。

「……今となっては全部がお笑いぐさよね。あんたは人間じゃないからスラヴ系ゲルマン人だとか、そんなの何？って感じよね……あ、

でも顔立ちのモデリングは実際にスラヴ人とゲルマン人の顔を元にして、それに少しラテンっぽい味付けをしてるってのは事実よ」
「そゆえば……わたしとイオの他にも、おんなしよな性能のバイオロイド？ってたくさんいるのかなっ？」
「うん……少なくとも私の所属している部署には5人は確実にいるし、彼女らも私と同じように他のバイオロイドのサポートをしてるから、まぁ最低でも１０人は間違いないと思う。でも何度も言ってるけど、会社にいても会社の全容や内情はぜんぜん判らないのよね……他の部署のこととかも。だから、たぶん、バイオロイドはもっとたくさんいるんじゃないかなって思うわ」
　そこまで言って、イオは先刻のバイク青年を思い出した。
「……あのバイクに乗った変態も何か怪しいわね……うーん……」
「ノートンのおニィちゃん？」
「うん、まぁ、あんたが気にするようなことじゃないわ……でもまた会ったときには少し気を付けなさいよ？　気安く近づいていったら何をされるか判ったもんじゃない……カリストなんか浚おうとして、絶対にロリコンの変態よっ！　喋り方も変態っぽいし……時代錯誤な格好してるし……もうとっくの大昔にエルヴィス（・プレスリー）もマーロン（・ブランド）も死んじゃってるのに……ちょっとだけカッコイイけど……」
　ブツブツと独り言のように呟くイオに、カリストは気分良さそうに笑って受ける。
「そだよね～♪　カッコイイよねぇ♪　イオもカッコイイの大好きなんだねぇ♪」
「なっ！　バ、バカッ！　男の人になんて興味ないわよっ！　だいたい、私には、そ、その……あんたが……」
「ふぇ？　男の人？　ノートン６５０ＳＳのことだよっ？」
　ややして、リニアシャトルの到着を案内するアナウンスが流れ始める。

「あ、そろそろ電車（シャトル）が来るみたい」
「イイなぁ……わたしもいっしょに行こかなっ？」
冗談なのか、ボケなのか、真剣なのか、カリストはポツリと言った。
「ずっと……イオとわたしと、いっしょだったら楽しいだろねぇ」
ふたりは並んでホームの縁に立った。
イオはそっぽを向きながら独りで何か言っている。
「……なんかちょっと、センチメンタルな気分よね、な、なぜか知らないけどっ！」
「……うん……」
「ら、来週からもあんたがバイトの時には遊びにいかないこともなくもなくない……かもしれない」
「……うん……」
「これからだって、い、今まで通り……ううん、今までよりも、ず、ずっと仲良くしないこともなくもなくない……」
「……うん……」
イオはカリストが妙に大人しいのが気になって仕方がない。
「……ど、どうかしたの？」
思わずカリストを振り返ると、カリストはジッと俯いてカラダを震わせていた。
「なっ！　どうしたの？　どこか具合悪いのっ！？」
「……ううん、カラダはだいじょぶだよっ……」
そしてカリストは顔を上げる。カリストは碧翠の瞳いっぱいに涙を湛えていた。
泣き出しそうなのを懸命に耐えながら笑顔を作ろうとするのだが、感情の波が押し寄せるたびに切なそうに鼻を鳴らし、顔を真っ赤にしながら必死で涙を抑えようとしている健気なカリスト。今まで感じたことのない気持ちにイオは胸が締め付けられる思いだった。
「な、なに？　そ、その、あんたが泣くなんて……そ、その……」
「ねぇ、エンケラティス」

カリストは涙を浮かべ、それでも微笑みながら、イオではなくてエンケラティスの名を呼んだ。
「う、うん、なあに？」
「……イオはエンケラティスで、エンケラティスはイオだけど……」
そしてカリストはイオ（エンケラティス）に半歩ばかり歩み寄る……少しだけ自分より背の高いイオ（エンケラティス）を眩しそうに見上げながら言う。
「わたし……イオのこと世界でいちばん大好きだけど……わたしが初めて大好きになったの、エンケラティス……エンケラティスだよっ！」
そしてカリストは堰を切ったように泣きながらイオ（エンケラティス）に抱き縋った。
「エンケラティス！　初めてオハナシしたときから、ずーっとだあい好きだったよっ！」
「バ、バカぁ！　なに言ってるのよっ！　そ、それに、鼻水が垂れてるわよ……もう、バカぁ……」
「えぐ、えう、そだよねっ、ヘンだよねっ、でも……んう、エンケラティス……会いたかったよっ♪　会えてウレシイよっ♪　……エンケラティス、エンケラティス……だあい好きっ♪」
イオ（エンケラティス）は無言で何度も肯きながらカリストを抱き締める。

人影も疎らな夕暮れの駅のホーム、ふたりの長い影はひとつに重なり合うのだった。

Ｋａｌｌｉｓｔｏ Ｄｒｅａｍ Ｐｒｏｊｅｃｔ　その１　了

その１－２３（後書き）

いちおう今回をもちまして第１部本編は完となります。
このまま連載を継続する形で第２部へと移る予定です。
ここまでお付き合い頂き有り難うございました。引き続き今後も「Ｋａｌｌｉｓｔｏ Ｄｒｅａｍ Ｐｒｏｊｅｃｔ」をお楽しみ頂ければ幸いです。

次回はインテルメディオ（幕間劇）となります。

その1－24（intermedio）

バイク青年は夕闇迫るベルリンの街中をバイクで突っ切り、商業区の路地裏に乗り込んでいく。入り組んだ細い路地裏を躊躇うことなく右に左にと軽快に走り抜けていく様は、それこそ絶滅しかかっているカフェレーサー然としたライディングだったが、もちろんスリルを求めて疾走（はし）っているわけではない……単に「寝床」に戻ろうとしているだけだ。

ややして3面を低層ビルに囲まれた人気のない裏路地の行き詰まりに辿り着くと、目立たない小さなシャッターを開けて650SSを手押しで転がして押し込む。

薄暗いガレージの中にはカリストが見たら気絶しかねない見事な旧車コレクション……トライアンフT120（ボンネビル）やBSAゴールドスター、ロイヤルエンフィールド・ブレット、BMW・R80、ホンダCB750……などの名車がズラリと並んでいた。むしろ旧車と言うよりも、骨董品の域に達しているとも言えそうだが、いずれも品の良いカフェレーサー仕様に仕立てられている。

「さて……なんて言い訳しようかな」

ブツブツ呟きながらバイク青年は内側からシャッターを閉じ、真っ暗な階段を慣れた足取りで上へ上へと上っていく。

上りきった先には、とても人間の居住用だとは思えないような重そうな鉄扉があった。バイク青年は何度かノックしながら声を掛ける。

「戻ったよ」

ややして、鉄扉は重々しい音を立てて僅かに開いた……隙間からぼんやりした光が帯曳く。それから、思いのほか軽々と鉄扉は開け放たれた。

柔らかい室内灯の光を背に、バイク青年を迎え入れたのは１０代半ばかという年頃の少女である……場所に不似合いな豪奢な長袖のメイド服を着て、カリストが見たら気絶しかねないほど端正可憐な顔立ちと佇まいであった……し、カリストが見たら気絶しかねないほど「フカフカおムネ」であった。

「ただいま……例の件は不首尾に終わったよ……」

バイク青年が苦笑いで告げると、そんな言葉を意に介さないようにメイド少女は無言で微笑んで少しだけ小首を傾げ、バイク青年のライダースを受け取る。

「サイベルは戻ってる？」

「……」

青年の問いかけに、やはりただ無言で微笑みを返す少女。深い位置で切り揃えられた前髪の奥で柔らかい光を反射する黒く大きな瞳は、まるで彼岸でも見通すかのような、この世の者ではない何者かを見透かすかのような、どこかしら浮世離れした尋常ではない貌（いろ）が感じられる。

だが青年はすでに織り込み済みなのか、少女の微細な表情の変化から返答を理解した。

「まだ戻ってないんだ？　それは助かったというか何というか」

メイド少女が言葉を発しないため、バイク青年の会話は自動的に独り言となる……ブツブツ言いながら、奥の部屋へ進んだ。

ドアを開け居間に入る……一瞬のうちに青年は６世紀ばかり過去に遡る。

ベルリンの廃ビルの一室だったであろう室内は、落ち着いたゴチック調で彩られた異世界だった……少なくとも、２２世紀の半ばに一般人が居住するような空間ではなかった。

大きなマントルピース、壁にはモザイク画や寒々しい風景画、どうやって空間を確保したのか判らないが天井からは華美なシャンデリアまで下がっているのだ……まるで中世の貴族の私邸のような内

装である。
　長テーブルの上座で、ひとりの女性が肘を突いて本を読んでいる。この女性はゴスでも何でもなく、キャミソールにレギンスという、むしろかなりラフ、というか下着同然の格好だ。
　これにプラスしてロッカーズ風のバイク青年と、浮世離れしたメイド少女という、統一感のない3人の組み合わせは実に奇妙であった。

「……戻った」
　静かな室内に青年の声が響く。
「正直、しくじった」
「知ってる」
　女は本から視線を移さずにピシャリと応える。青年は案の定と言わんばかりに肩をすくめた。
「なんか馬鹿臭くなってきたよ……カリストは、あれはあれで楽しく生活して……」
「あんたの意見なんて訊いてなーい」
　女が顔を上げる。まだ20代も半ばを過ぎた辺りかという年頃であろうが、毅然とした高潔な雰囲気と同時に、どこか成熟しきった気怠さを感じさせるところがある……その眼差しも微かな退廃感を灯していた。
　一瞬だけふたりの間に緊張が走った。が、すぐに女が視線を外し、青年の後ろに寄り添うようにして立っていたメイド少女に告げる。
「アスタルテ、紅茶……セイロンのディンブラ」
　無言で肯き別室へ去るメイド少女。その間にバイク青年は女性の対面の椅子に腰掛けた。
「なんていうか……サイベルはカリストのことを放っておきたいんだと思うんだけどさ？」
「ヴァレンタイン」
　女はバイク青年の名を呼び、手にしていたハードカヴァー本を乱

暴に閉じる。
「あんた、手、抜いたんでしょ？」
「抜くもなにも……人間だろうとロボットだろうと女の子に手を挙げるのは好きじゃない」
「よく言うわね？　昨日の晩……私に何をした？」
女は思わせぶりに呟いて、ヴァレンタインを見つめながら自分の小指を甘噛みしてみせる。ヴァレンタインは呆れたように頭を振るばかり。
「……ティア、それは品がない」
茶化すのに失敗したことを悟った女は再び語気を強め言う。
「あんたの中途半端さが世界を変えたかもしれない……悪い方に」
「オレ程度が何をしようが元から世界は悪い方に転がりっぱなしだよ」
「なんだったらリリケラでも遣わすわよ？」
「あのコを出すと話が余計に面倒になるよ」
「どうせサイベルかアスタルテにでも頼まれたんでしょ？」
「知らんよ」
ヴァレンタインの脳裏には、カリストの返還を誠実な瞳で懇願するイオの姿が蘇る。
「何にしても、ヤル気の出るような仕事じゃなかったし」
「どーしようもない男……」
ティアは呆れ、ついに表情を崩してしまった。
「ま、いいわ。取り敢えずカリストが無事なら」
「そういうこと」
悪びれることなく肩を竦めてみせるヴァレンタイン。

緊張が去り空気が程よく弛緩したところで、図ったかのようにタイミング良くティーセットを手に戻ってくるアスタルテ……その優美で清婉な佇まいでもって、まるで雲の上を往くかのような足取りで。

その２－２５（前書き）

これより第２部です。
実質的には第１部と連続した話になります。

その2―25

「事件」の翌日、何はさておきカリストは迷わず喫茶店を訪ねた。イオがフォローしておいてくれたとは言え、やはりオーナーの様子が気になって仕方がなかったのだ。

カリストは鷹揚な性格のオーナーのことを強く信頼していたし、今となっては唯一の「まともな人間の知り合い」である。できることならアルバイトも続けさせて欲しいとも思っていた。

「まいすた……？」

カリストが恐る恐る入り口から顔を出すと、例によって無人の店内のカウンタで新聞を広げていたオーナーは少し驚いたような様子で顔を上げる。

「おう、カリスト。もうカラダ……というか何というか……大丈夫なのか？」

案外と落ち着いた感じで、カリストを迎え入れるオーナー。

「昨日は大変だったぞ？　メアリはダメになってしまうし、イオの会社の人間だかアンドロイドだかがゾロゾロやってきて何やらかにやら調べられたり証文を取られたり……まあ、お陰で結構な金額の詫び金を貰えたんだがな……ハッハッハッ」

にこやかに語るオーナー。特にムリをして明るく取り繕っている感じでもなく、普段と同じような態度だ。カリストは相当に図太い性質であるが、この男も尋常ではないメンタリティを持っているものらしい。

ただ、やはりカリストは気後れを感じてしまう。別にオーナーを騙すつもりはなかったし、むしろカリストこそが最大の被害者なのだが、そういった面では感受性が強く繊細なカリストは、こういう時には太々しい態度で振る舞うことができずに、ただ弱い笑顔で応じるばかり。

「えへへ……そなんだ～」
そんなカリストの様子にオーナーは、どこか納得したように肯く。
「お前さんでも気兼ねしたり悄(しょ)げたりすることがあるんだな……やっぱり不思議な娘だ」
「んう……だって……」
「なあ、カリスト」
さすがに少し元気のないカリストを椅子に座らせると、オーナーは言う。
「オレはなあ……元からお前さんのことをタダの人間じゃない、どこか特別(スペリッエルダーザイン)な存在だと睨んでいたんだ。だからオレにとって、お前さんが何者かなんて余り問題じゃないんだな……つまり、お前(カリスト)さんは、お前(カリスト)さんだ。これからも、まあ適当に宜しく頼むよ」
ほとんど説明にはなっていなかったが、それは今のカリストには充分すぎる回答だった。カリストは少し目元を擦ってから普段と同じようにニッコリと笑うと、オーナーの腕に取り縋る。
「……うん！　うん♪　まいすた、だあい好き～♪」

かくして、ユルユルと2週間ばかりが過ぎた。

何か変わるかとカリストは思っていたが、何も変わらなかった。自分がロボットだったからといって、案外と世界は変わるモノでもないらしい。カリスト自身の心境にも特に変化はなく、相変わらず食べたり遊んだり、益体のない生活を続けている。
イオが店に遊びに来ても特に取り立ててロボットや会社のハナシをすることもなく、オーナーも必要がない限りはカリスト＝ロボットだという話題を俎上に上げることもなかった。みんな、意識的にそれを避けているというよりも、ごくごく自然に状況を受け入れていたのである。

確かに何か理由があって自分が創られ、何か理由があって今の生活をさせられているのは間違いないだろうが、やはりカリストの人間性は不変なのだ。自分がロボットであると知った今でもなお、時にはそれを忘れることもしばしば。

「わたしってば、ずっとずっと死なないのかなっ？」
『いちおう建前上はね。多少の損傷も自己修復するし、会社で本格的に改修できるし、まあ、実質的に不死身よね』
「そいじゃ……人間のオトモダチできても、ずっといっしょにはいられないんだねぇ」
『ま、まあ、そういうことになるわね……会社の試算だと、バイオロイドの耐用年数は２００年くらいみたいだから……』
「そいじゃ、まいすたとも、きっと何十年かしたらサヨナラなんだねぇ……」
『う、うん……まあ仕方ないわ……それが生き物の摂理だから』
「でも、わたしにはイオがいるから、さみしくないよっ♪」
『なっ！　ななにを言ってるのよっ！　そ、そういうリアクションに困るようなこと、言わないでよっ！？』

とは言え、カリストにはひとつだけ残念なことがあった。それは両親が存在しないことだ。とりわけ母親がいないことは、実はカリストにとって少なからずショックであった……が、一方で実に奇妙なことではあったが、カリストは母親のような存在を仄かに感じてもいる。
会社にいた頃の記憶をそっくり失っている（これはイオが言うには会社の方針らしい）のだが、どこかに漠然と何か暖かい記憶が残っている。言葉にはできない何か……。
「わたしってば、ホントにママいないのかな～？」
『そりゃロボットだから遺伝学的な意味での母親は存在するわけがないわ。物理的な意味じゃ会社が母親ってことにはなるだろうけど

……』
「イオはママのこと、感じたりしないかなっ？」
『うーん、ちょっと判らないわ……考えたことすらない』
「ママに会いたいなぁ」
『そりゃいくらなんでもムチャよ！』
「そだよねぇ……なんでこんな気持ちになるんだろ……？」
だがしかし、カリストは確かに感じているのだ。漠然とだが、常にココロとカラダのどこかが触れ合っているような、揺るぎのない暖かな感触を。

その２－２５（後書き）

「第１部はプロローグなんだって～♪」
『随分と大きく出たわね……』
「ぜんぜん続きとか行き詰まってるみたいだけどねぇ……」
『……もうすでに先行き不安……更新頻度も下がってるし……』
「……あはは～♪」

その２－２６

以後も逐一、イオは自分の知る限りの情報をカリストに教えてくれた。あまり実用的ではない物事が大半だったが、それでもカリストの存在意義を固めるには充分に足るものである。

『そういえば、あんたの正式な型式と名前、教えてなかったわよね？』

「うん♪　でも、お名前なら、ちゃあんとあるよっ？」

『それは政府の書類上の名前。あんたの正式な型式はＸＸ４７ｃｚ－ＥｇＩＩ－Ｓ、名前は……ちょっと長いわよ？　えーと、カリスト・イョフィエル・ウルサマヨル・フォン・アストラルっていうの。ちなみに私はＸＸ４８ｃｚ－ＥｇＶＩ－Ｓ、イオ・イャフキエル・ボスポラス・フォン・アストラル、ね』

「お名前、ヘブル語とかギリシア語とかラテン語とか、イロイロ混じってるねぇ♪　あと、フォン・アストラルなんて、なんかプロイセン貴族みたいだねぇ♪」

いかにもロボットらしい味気のない英数字の羅列に対して、あまりに大仰で珍妙なフルネームに思わず可笑しさを感じるカリスト。だが同時に自らの正式名称に懐かしさと愛着を覚えずにはいられない……ある種の「誇り」のようなものかもしれない。

『細かいことは良く判らないけど、型式を見る限り、そ、その、あんたと私が姉妹機というか、と、とても近い感じがする……ような気がするかもしれない。型番からいくと、あんたの方が早く創られたっぽいけど、実は私の方が早くにロールアウトしたのよ？　だから、私の方が「お姉さん」ねっ！　……５分くらいの違いらしいけど』

「えへへ～♪　ほとんど双子だねぇ♪」

カリストはテレテレと笑う。イオは顔を真っ赤にして捲し立てる

ばかり（ちなみに、以前は音声通話だったが、現在は映像通話になっている）。
『あ、あんまり似てないけどねっ！？　血とか繋がってるわけじゃないしっ！　あ、あと……その、いろんな事情であんたの存在も明らかになっちゃったから、会社も正式にあんたの補助を始めるわ。えっと、差し当たり、会社の内勤制服を送るから……と言っても着る機会は滅多にないと思うけど』
「セイフク～？　どんな～？」
『そ、その……いっつも私が着てた女子校生みたいな制服よっ！　あ、あの、その……あ、あんたには、きっとよく似合うと思う……から、次に遊びに行ったときに……そ、その、わ、私に、ききき着て見せてほし……』
「ふわあ～♪　イオが着てたのとおんなし制服なんだぁ♪　イオの制服姿、とってもとってもカワイイよねぇ♪」
『なっ！　なに言ってるのよっ！　ば、バカぁ！』

この頃になると、ポツダムの街外れをロケットのような異様な加速力でもって飛ぶように疾走する小型バイクと、それにしがみつくようにして乗っている少女の姿がしばしば目撃されるようになっていた。
もちろんカリストである。先だってから改造を続けていたバイクがついに完成したのだ。６０ｋｍ／ｈが最大表示である標準装備のメーターが数秒で振り切れてしまうため、果たして正確な速度は判らないのだが、カリストの計算では２００ｋｍ／ｈほど出ているらしい（ただし数学が苦手なカリストは計算ミスをしており、実は最高速度は２８０ｋｍ／ｈに達していたことが後に判明した）。
素晴らしい移動手段を得たカリストは、以後もっぱら小型バイクで方々を走り回るようになった。のんき者のカリストなので、普通に走るときには安全速度遵守である。バイオロイドとはいえ、平素は運動神経が悪いのであまりムチャもできないが、暇を見つけては

（暇ばかりだが）、ポツダム郊外にまで脚を伸ばして虫やツチノコを探しているのだ。

そんなある日、カリストは思い付きでプラリとベルリンに遊びに行くことにした。今までだって行こうと思えば簡単に行けたのだろうが、なぜかそんな気にはならなかったのである。もしかすると、会社の所在を悟られないように、ベルリン行きを抑制するようなプログラムが為されていたのかもしれない。

決意を固めたら行動の早いカリストは、昼頃にはバイクに飛び乗り北東へと向かっていた。

ベルリンとポツダムは隣接した関係であり、ほとんど地続きでさえある。ゆっくりとバイクを走らせても小一時間と掛からずにベルリンに辿り着く。意外にもカリストは方向感覚に優れているのだ……道に迷ったりはしない。

記憶にある限り、初めてのベルリンである。そして、出生地とも呼べるべき自分の創られた街。住民と観光客で溢れるベルリン中心街の賑わいはポツダムの比ではなく、ただそこにいるだけで、カリストの気持ちは高揚するのだった。

イオに連絡を取ろうと思ったが残念ながら不在だったため、カリストは独りでベルリン観光をすることにした。

「ホントは詳しく見学したいけど今日中に帰れなくなっちゃいそだから、中に入るのは今度にしよ」

取り敢えず戦勝記念塔（ジーゲスゾイレ）、シャルロッテンブルク宮殿、ベルリン大聖堂、ペルガモン博物館などをサラッと巡回してみる。

「中に入りたいなぁ♪　見たいなあ♪」

建物に出入りする観光客の群れを羨ましそうに眺めつつ、それでもカリストにしては珍しく誘惑に耐えながら、パンフレット片手に

バイク移動を続ける。
「そだ～♪　今度は早くからイオに連絡して、いっしょに見て回ったらもっと楽しいよねっ♪」
ハッピーな気分でイオとの「デート」を想像しながら、カリストが最後に向かったのは、ベルリン最大の観光名所であり、カリストの魂の故郷ブランデンブルク門であった。

その２－２６（後書き）

『ちなみに、あんたのミドルネームの“ウルサマヨル”って、ラテン語で“大熊座”のことね』
「うん♪　偽名の苗字“グロスベイア”も、ドイツ語で“大きな熊”って意味だねぇ」
『ちなみにベルリンの語源は、古来ドイツ語で“ベァーリン”という発音で意味は“熊”。熊はベルリンの象徴動物よね』
「うん♪　ベルリン映画祭の賞が“金熊賞”ってのも、そこに由来するんだねぇ……面白いねぇ♪」

その２－２７

カリストは周囲の観光客への配慮からバイクを徐行モードに切り替えて、ブランデンブルク門を仰ぎ見るようにしてパリ広場に進入する。夕方の斜陽を浴びながら、高さ２６ｍ、幅６５．５ｍのブランデンブルク門は、曰く言い難い威容を示している。

門の上部では、四頭立て戦車（クアドリガ）を操りながら栄光の鉄十字錫杖を高く掲げる勝利の女神（ヴィクトーリア）が、ドイツ民族の誉れを常しえに謳っているのだ。

「……はぁ……♪」

カリストは路肩にバイクを停め、門を見上げながら思わず溜息を漏らす。

バイクを降りて門の内側へ入るカリスト。何度も修復や補修がされているとは言え、そこに感じられるのは４世紀に渡る近代ドイツの記憶そのもの。カリストは門の内に安置されているアテナ像（ミネルヴァ）の台座に指を伸ばし触れ、それから頬を寄せる。

１７９１年に落成して以来、約３５０年間、今日までのドイツをずっと見守り続けてきたブランデンブルク門。フリードリヒ２世、ナポレオン、ヒットラー、多くの戦争や悲劇、ベルリン東西分断と再統一、２１世紀半ば頃に発生した軍事クーデターや市民暴動（ベルリン動乱）……それらを、ただ黙って見守ってきたのだ。

「わたしってば……ドイツに生まれて、とってもとってもシアワセ～♪」

どういうことのなかカリスト自身にも良く判らなかったが、ムネの奥から熱く込み上げるものがある。カリストはウンウン呻りながら、ついに嬉し泣きを始めてしまった。

「ずっとここにあって、これからもずっとずっと建ってるよっ♪あと１００年も、２００年も、ずっとずっとベルリンとドイツと世

界を見てるんだねぇ♪」
　昔からベルリン市民の心の拠り所と称されているブランデンブルク門だが、さすがにカリストの如く感激を露わにする者は少ない。観光客はカリストとアテナ像を遠巻きにして、まるで見せ物のように注視している。中には写真やムービー撮影をする者までいた。
　そんな周囲の好奇の眼差しをよそにカリストの気持ちはいよいよ高揚し、思わず不穏当な言葉が。
「万歳（ハイル）！　偉大（グロース）なドイツ（ドイッチュ）第三帝（ダスドリッテライ）……」
「ちょ、ちょっと！　バカっ！　何てこと言うのよっ！？」
　何者かが人垣を掻き分けてカリストに取り付き言葉を遮る。
「警察呼ばれたらどうするのよっ！？」
「ふぇ……？」
　見れば怒り顔のイオであった。いつものような制服姿である。
「イオ～♪」
　カリストは喜びの声を上げると、アテナ像そっちのけで今度はイオに抱き縋るのだった。

「あんたって、ホント、アタマの中が水浸しね！？」
「んう……ゴメンなさい……」
　数分後、カリストはパリ広場にあるオープンテラスのカフェで、イオに説教されていた。
「そうでなくっても最近は失業問題とかで鬱憤の溜まってきた連中が多いから、政府も警察も反社会的な集会や人物の取り締まりを強化してるのよ？　……まぁ会社から圧力を掛ければ簡単に揉み消せるけど、あんたみたいな、そ、その……かかかカワイイ女のコが留置所とかに入れられてるのなんてシュールすぎるわよっ」
「……ゴメンなさい……とほほ」
　さすがのカリストも深く反省しているものらしい。
「でも、どしてわたしがブランデンブルク門にいるの、わかったの

かなっ？」
「詳しい場所は教えられないけど、ここは会社の近所なのっ！　それにアチコチにイロイロなモノを設置してるし……実はあんたが今日の昼頃からベルリンに来てるってのは会社側は把握してたみたいよ？　私は別件で外してて、後から知ったんだけど」
　ぼかしたような説明するイオだが、この会話そのものも会社に筒抜けなのかもしれない。
「へえ～　そなんだ～　……そいじゃ、イオ、わたしに会いに来てくれたんだ～♪」
「なっ！　ち、違うわよっ！　会社の帰りに、そ、その、ブランデンブルク門の下を偶然に通っただけよっ！？　偶然、偶然なのっ！」
　顔を真っ赤にして捲し立てるイオだが、カリストがブランデンブルク門にいるということを元から知っていたのだから何とも締まりがない。だが、そんな細かいことは気にしないカリストはテレテレと嬉しそうに言う。
「きっと、イオとわたしが逢えるよに、ブランデンブルク門が引き合わせてくれたんだねぇ♪」
「なっ！　だ、だからそういうリアクションに困ること言わないのっ！？」

　ふたりは1時間ばかりをカフェで過ごし、夕食を兼ねてケーキやらパスタやらを食べた。
「……あ、あのさ……で、今日は……ベルリンに、と、泊まってくのかな……？」
「んう？」
　モグモグしながら顔を上げるカリスト。イオはフォークでパスタの中のオリーブを突っつきながら続ける。
「も、もし、良かったら……そ、その、会社の系列の……ホホホホテルとか、取れるんだけど……」
「へえ～♪　会社のホテルなんかあるんだ～？」

興味深げに話に乗ってくるカリストだったが、もうイオは例によってグワングワンだ。
「わ、若いカップルにも人気のある、ホホホホテルなんだけど、スススイートしか空いてないし、ももしあんたが泊まるっていうなら、ももももったいないから…わ、わた、私も……」
「とってもとっても楽しそだけど、今日は帰るよ～♪」
「ええ！？　もう予やk……」
「あしたアルバイトの日だし、ベルリンにお泊まりするのは、また今度にするねっ？」
なぜか傷心風のイオにカリストはニコニコしながら告げる。
「今度はイオのお休みの日に来るから、朝から夜まで、ずっとずっといっしょにいよねっ♪」
「う、うん……うん！　ベルリンなら私の庭みたいなもんだから、会社以外ならどこにだって連れて行ってあげる！」

その２－２７（後書き）

『本文中にもあるように、ブランデンブルク門はドイツ、特にベルリンの象徴ね！』

「うん♪　東西ドイツ時代には“東側”にあったけど、東ドイツも西ベルリン市民に配慮して、ブランデンブルク門の前だけ“ベルリンの壁”を低くしてくれたんだよねぇ♪」

『お陰で東西ドイツ時代も、ブランデンブルク門は市民も観光客も仰ぎ見ることができたのよね！』

「門のところだけ東ドイツの警備も甘くて、写真撮影とかも許してくれたんだって～♪」

『ちょっとイイ話、ね』

その２―２８

ふたりは食事の後しばらくパリ広場を歩きながらお喋りして、それからブランデンブルク門の下でサヨナラすることにした。名残惜しいと言えば名残惜しいが、明日はカリストのバイトの日、すなわちイオが喫茶店に遊びに来る日でもある。ちょうど２４時間後には再会できるのだ。

それでも華やかなベルリンから独りでポツダムに帰るカリストは、一種の喪失感に少しだけ寂しくなる。生まれ故郷を離れたくない。大好きな人が目の前にいるのに、それを振り切って帰れる気がしない。

「……やっぱし帰りたくないかも……」

「なっ！　いいい今さら、ななな何を言ってるのよっ！？」

「そだけど……アルバイト、明日の夕方からだし、もっとずっとイオといっしょにいたいよ……」

カリストは心底から寂しそうにイオの制服のソデを掴み、モジモジとしている。イオは一瞬だけ内心で快哉を叫んだが、カリストの柔弱さ以上に自分の惰弱さに腹が立った。カリストの願いなら何でも聞いてあげたかったが、一旦ナシにした話を呑むのもイオのポリシーに反することなのだ。

『バカっ！　そんな下らない意地張ってないで引き留めなさいよっ！　私のバカっ！』……内なる声に耳を塞ぎながらイオは平静を装って言う。

「そ、そんなこと言ったって、もう仕方ないわよっ！　わ、わた、私だって……その、あああんたと……　ほらっ！　いま帰らないと、夕日が沈んじゃうわよ？　暗い夜道をバイクで走るの危ないでしょ？」

私だってあんたと離れたくないんだから……そんな言葉を喉の奥

に引っかけながら、歯切れ悪くカリストを諭すイオ。恥ずかしくって、とても言えそうにもない。
「明日になれば、またすぐに会えるんだから……ワガママ言わないのっ！？」
「……うん♪　そだよねっ♪」
イオの高説に素直なカリストはウンウンと頷き、容易に説得される。コレはコレでイオとしては少し残念に思わずにはいられないのだが、そんな態度はおくびにも出せない。
一方、気を取り直したカリストはバイクに跨りかけてから何を考えてか再び降り、ほとんどイオに接触寸前まで対面に近寄ったかと思うと唐突に両手をムネの前でパッと広げる。なんだか誰かを突き飛ばす寸前のような変なポーズだ。
カリストは少し顔を赤くしながら言う。
「イロイロ考えたんだけど、コレにしよっかなぁって♪」
「なにそれ？」
「イオも～♪」
カリストに言われるままイオは同じ姿勢を取る……と、カリストはイオの左右の手を、それぞれ自分の左右の手で握りしめた。ふたりの距離は完全に詰まりきり、もう顔と顔、唇と唇が接触してもおかしくない（というか、元から接触すべき）体勢となっていた。思わず息が詰まるイオ。
「ふっ！？」
「イ～オ～♪　ホントはギウギウってしたいけど、ちょと恥ずかしいもんねっ？　だからコレでサヨナラのアイサツ～♪」
目の前にはカリストの夢見るような星の多い瞳、そして、微笑みを湛えた小さく柔らかそうな唇。どう考えても普通にハグするよりも気恥ずかしい体勢であるのは間違いないだろう……むしろいっそこのまま抱きしめてしまいたいとさえイオは思ったが、よりにもよってカリスト自身に両手を塞がれてしまっているのだ。……両手が塞がっていても、顔は自由に動くわよね？　じゃあ……と、一瞬は

思いはしたが、それも今のイオの根性と、無垢なカリストの様子から無理な話であった。
それでもふたりは少し躊躇いながらも、どちらからともなくオデコとオデコをくっつける。イオもカリストも、思わず目を閉じた。
同じ、空気を、吸って、吐く。
「イオ……だあい好き……♪」
カリストが、カリストにしては抑えめな声で、小さく囁く。少なくとも今は世界中でイオだけが聞くことを許されている、世界で一番、甘く優しい声。
「……わ、わわわわたわわたたわし」
「えへへ♪　イオ、そいじゃまたあした♪　オヤスミなさ～い♪」
「じゃじゃじゃじゃあオヤスミ！」
そしてふたりは目を開き、ゆっくりと手を離し、それぞれ一歩後退する。カリストは無言でバイクに跨るとニコッと笑う。
「そいじゃ行くね？　ばいばい♪」
「うん。気を付けてね。ば、ばいばい♪」
夕暮れの中、人混みを縫って走り去っていくカリストの小さなバイクと後ろ姿を見送りながら、イオは内心で嬉しいような寂しいような、そして自分が少しずつ恥知らずになっているような気がして、思わず苦笑いする。
「でも……ちょっと恋人同士っぽい感じだったかも……うふふ……ふふ……」

まだ手に残るカリストの温もりを握りしめ、幸せな気持ちでブランデンブルク門を後にしようとしたイオだったが、雑踏の中に見覚えのある姿を確認し思わず足を止めた。なんという偶然か必然か、それは件のバイク男（ヴァレンタイン）だ。と言っても、今はバイクには乗っておらず徒歩であるが。
ヴァレンタインもイオの姿を認めたらしく、何を思ってか軽く手を挙げて真っ直ぐに歩み寄ってくる。

「やあ。カリストは帰った？」
「何の用なのよ！　この変態！」
気安く声を掛けてくるヴァレンタインに容赦なく罵声を浴びせるイオ。ヴァレンタインは諦めたような笑顔で肩を竦める。
「酷いなあ……客観的に見たら割とカッコイイと思うんだけど、オレ」
「馴れ馴れしく話しかけてこないでよっ！　私は今、制服着てるし、女子校生に雑踏で気安く声を掛けてくる大人なんて、どこから誰が見たってロリコンの変態じゃない！？　それ以上近づいたら大声出すわよっ！？」
どうにもイオはヴァレンタインに対して必要以上に警戒心を抱いているようだ。
「中学生？」
「高校生っ！！」
「ちょっと無理がある」
「建前上は１６歳ってことになってるのっ！」
イオは小さな握り拳を振り回して懸命に強弁するのだった。

その２－２８（後書き）

「むふ～♪」
『……あんたって、基本、恥知らずよね』
「ふぇ？　だあい好きな女のコと仲良くするの、ぜんぜん恥ずかしいことじゃないよっ？」
『……はぁ……（この想い、カリストに届け！』

その2－29

やや間の抜けた遣り取りのせいか、さすがのイオも気が抜けてしまった。どこかカリストにも通じる、トボケたようなところのあるヴァレンタインへの警戒を少しだけ緩める。
「……なんだかマトモに相手するのがバカみたい……」
「そうそう、女のコはニコニコしてるのが一番だよ」
そう言って妙に爽やかな笑顔を見せるヴァレンタインに、溜息をつくイオ。
「で、何？　またカリストに用があったの？」
「まあね……と言っても、ちょっと様子を見たかっただけなんだ」
「あんた、会社の関係者？　何者なの？」
「さあね……敵ってワケじゃないよ？」
「名前ぐらい教えなさいよっ？」
「訊かれなかったから答えなかっただけだよ……ヴァレンタインだ」
「ヴァレンタインねぇ……やっぱり変態くさい名前っ！」
どうにもヴァレンタインの真意が汲めず、歯痒さを感じるイオ。確かにヴァレンタインは明確な敵意を見せているわけでもないし、カリストを襲う気になれば、イオの知らないところで襲撃すれば良い話だ。わざわざイオに存在や姿を晒す必要もない。
「あんた、変態っぽいけど、そんなに悪い人じゃないのかもね？」
「悪い人じゃないし、変態でもないよ」
「変態よ」
「……好きにすればいいさ」
ヴァレンタインは不貞腐れたように長い両腕を前方に開いて肩を竦め、少し笑う。
「これでも割とモテてるんだよ？」
「……あんたが何者かは判らないし、どうせ訊いても答えてくれないだろうから、それは考えないことにするわ。もしあんたがカリス

トをどうこうするつもりなら私はあんたと戦うし、もし……もし、あんたがカリストの味方なら……」
イオは少しだけ視線を落とし、続ける。
「カリストの味方なら、あのコのチカラに……なってあげてほしい……」
こんなことを他人に頼むとは、イオ自身も驚きだった。しかし現状、カリストを護ることのできる任に就いている会社所属のバイオロイドはイオだけなのだ。味方は多いに越したことがない。
イオのお願いを真面目な顔で聞いていたヴァレンタインは、小さく頷く。
「ああ、たぶん……そうなると思う。少なくともオレはそのつもりだよ」
「あ、ありがとう！　ヴァレンタイン！」
ヴァレンタインの応えに強い安心感を覚えるイオ。得体の知れない男ではあるが、それが逆に妙な心強さを感じさせるものらしい。その軽く脱力したようなキャラクタも、こういう時には泰然とした揺るぎなさに思えてくるから不思議なものである。
そんな風に思っていたイオに、ヴァレンタインは表情を崩して告げる。
「君ってさ、普段はツンツンしてる風だけど、時々、凄く素直だよね？」
「なっ！　なによっ！　こ、この変態っ！」

その頃、カリストはベルリン郊外へ向けて軽快にバイクを走らせていた。登録上は小型バイクなので高速道路（アウトバーン）を使えず一般道を走っているのだが、それでも小一時間の道のりだ。イオとの別れ際には物悲しくなったカリストではあったが、こうやって風を切って走っていると、もう気分も晴れ晴れ愉快だった。
「あはは～♪　あはは～♪」

顔に吹き付ける夕刻の風に向かって大声で笑いながら疾走するカリスト。本人は至って楽しいのだが、傍目には間違いなくアタマのネジが数本は吹き飛んでいる娘に映ることだろう。
「……あはは～……はぁ♪」
調子よく飛ばしていたカリストだったが、久しぶりに信号に引っかかり一息付くことになった。ちょうどツェーレンドルフ地区に差し掛かったあたりの交差点である。
「……油温がちょと高いかなぁ？　もすこしおっきなラジエータに……」
リニアエンジンの油温メータを眺めながら独り呟いていたカリストだったが、何だか妙な胸騒ぎがして、何の気なしに顔を上げ……息を呑む。中年男性が横断歩道を渡っていたのには元から勘付いていたが、その男性目がけて信じられないような速度で高級乗用車が左折進入してくるのだ。
「ふわあ！？」
瞬間的に“当たる”と感じるカリスト。激しいスキール音、ワアッという悲鳴、そして1．8トンの金属塊が人間に命中する嫌な音……。

直撃は免れたらしい。轢かれたと言うよりも引っ掛けられたという表現が適切だろう。とは言え、速度を出していたクルマに撥ねられて平気な人間はいない。撥ねられた中年男性は路肩に倒れていた。一方、撥ねたクルマは一瞬だけ停まりかけたが、タイヤを鳴らして一目散に逃走を始める……カリストは瞬間、このバイクなら絶対に追跡できるという気になったが、迷うことなくバイクを放り出すと倒れている男性に向けて駆け出した。
「ねぇ！　救急車呼んで～！？」
歩道で事故の顛末をポカンとしながら見ていたＯＬ風の女性に指示しながら、カリストは倒れている男性に駆け寄る。どこかに開放性骨折があるのか、すでに夥しい血溜まりができていた。

「に、逃げたぞ！？　警察を先に呼べ！」
誰かがヒステリックに怒鳴っている声が聞こえたが、カリストは男性の出血箇所を確認しながら顔も向けずに、冷静に叫ぶ。
「救急車のが先～！　逃げたクルマはメルセデス（メアツェーデス）ＡＭＧ（アーエムゲー）の６８年型Ｓ７５のブルーマイカのロングセダンだよっ！？　ナンバー見てないけど、すっごい高級車だも、ベルリン近郊だったら数台しか走ってないよっ！？」
つまり、追跡せずとも逃走車と所有車の割り出しは容易ということだ。カリストの冷静な分析眼に感心する野次馬たちだったが、当のカリストは男性を介抱しながら再び叫ぶ。
「そなことより、早く救急車呼んでよぉ！」

その２－２９（後書き）

「どうしてカリストじゃなくって変態が後書きにも来るのよ？」
「しばらくカリストは忙しいんだ。それにオレは変態じゃないよ」
「その喋り方が変態っぽいのよっ！」
「気付いたんだけど、最近、オレと君の間で、そこはかとなくフラグが……」
「なっ！　バカなこと言わないでよっ！　変態！　氏ね！　変態！　だいっ嫌い！」
「……そういうこと言うから」
「もうカリストと私でフラグ立ちまくってるのっ！　あとはエンディングまで一直線なんだからっ！！」

その２－３０（前書き）

今回の物語には流血シーン・やや凄惨な描写が含まれます。
苦手な方はご注意下さい。

その2－30

カリストは倒れている男性の肩を軽く叩きながら声を掛ける。
「だいじょぶ～！？　ねぇ、だいじょぶ～！？」
「うぐぐ……！！　あ、脚がぁ……！！」
男性は酷い激痛でマトモに返事もできずに唸り声をあげるばかりだが、取り敢えず意識はあるようだ。顔や手にも多少の擦過傷は見られたが、差し当たり外観上は致命的と思われる怪我は見あたらない。
しかし、ズボン越しに信じられない量の血が溢れ出ている。間違いなく脚に裂傷か解放骨折を負っているのだろう。出血量は甚大で、このままだとすぐにショック状態に陥るのは間違いなさそうだった。
ほとんど猶予がないことを悟り、意を決したカリストは腰に付けているパウチからアルミ製の小さなケースを取り出し、それを開ける。中にはガーゼや消毒液、幾つかの薬剤と医療器具が入っていた……軍隊の特殊部隊などが使うタイプの緊急医療キットで、カリストは“趣味で”持ち歩いていたのだ。
「ズボン、ゴメンねっ！？」
カリストは万能ナイフを取り出すと、裾側から男性の履いているズボンを切り裂いた……スネ、ヒザ、そして大腿部まで露出したところで、野次馬たちから一斉に祈りと悪態の声が上がる。男性の大腿部の内側の肉は大きく裂け、そこから折れた大腿骨が突き出ているのが見えた。
「んう……下腿動脈が裂けちゃってるのかなっ？」
人間のカラダの一部とは思えない血の気を失った肉の裂け目から、鼓動に合わせた一定のリズムで、真っ赤な血が蕩々と溢れ出てくる。
しかも大腿部の損傷と大腿骨骨折……まだ事故直後の狂騒状態のため何とか耐えられる痛みで済んでいるが、もう少し経てば凄まじい激痛を感じるようになるはずだ。まだ救急車のサイレンの気配す

らない。
　カリストは損傷している側の脚の下に男性が持っていたアタッシュケースを置き、損傷箇所が心臓と脳より高い位置にくるようにしてから、医療キットの中身をトレーの上蓋の中にバラ撒いて、そこから注射器と小瓶（バイアル）を取り出す。
「ちょとイタイかもしんないけど、だいじょぶだよっ！」
　カリストは注射針の無菌包装を破り、一番太く長い針を注射器に取り付け、バイアルに突き刺して薬液を抜く。それから男性を横臥させるとワイシャツの背中を捲って背骨を指でなぞっていく。
「お、おい！　お前、何のつもりだ！？」
　ヘタをすると“お医者さんごっこ”をようやく卒業したかと思わせるほど幼く頼りないカリストが注射器などを取り出したため、当然のごとく野次馬たちの何人かが制止しようと声を掛ける。しかし妙に手慣れたような迷いのないカリストの動作と、余りに凄惨な男性の状態に気圧（けお）されて、それ以上は何も言えず結局は静観するしかなかった。
「いち（エァスト）、にい（ツヴォート）、さん（ドリット）、しい（フィーァト）……ここ（ヒーア）！」
　男性の腰骨の数を数え、カリストは仙骨神経叢に当たりを付ける。下腿の神経を司る大きな中継地点……大腿の痛みを大幅に軽減させるには、ここより他に無い。
　目標部位を消毒液で滅菌して注射針の先端を宛う。もちろん初めての試みだし、医療従事者でもない者が知識のみに頼って行って良い行為でもない……たとえバイオロイドが為すことだったとしても、これは明らかな犯罪行為だ。それはカリストも充分に承知している。
　だが、自分が誰かを助けることができる機会と能力を持っているなら、それを可能な限り出し惜しみせずに発揮することこそ生きる義務だとカリストは考える。
『だいじょぶ、わたしなら、できる！』
　そして今、それを適切に行えるのはカリストしかいない。

カリストは躊躇わずに一気に腰骨深くに注射針を突き刺した。判っている限り手応えは間違っていない。薬液を注入すると、男性は一瞬だけ唸り声を大きくしたが、すぐに鎮まった。
「だいじょぶ！？」
「あぁ……なんとかなぁ……」
息は荒いがまだ意識もしっかりしている。カリストは注射器を引き抜くと男性を再び楽な姿勢に寝かせ、次に小さな鉗子（ケリー）を2本ばかり手にして大腿部に取りかかることにした。
もちろん骨折や裂傷をこの場で適切に治療することはできないが、せめて下腿動脈の大きな出血なら止めることはできるはずだ。大きく開口した傷口を観察し、圧迫止血などでは勝負にならないことを確認すると、カリストは自分の両手を消毒薬で滅菌する。
「ちょとイヤかもしんないけど、ガマンだよっ？」
麻酔が充分に効いていることを確認し、カリストは裂けた太股の肉の間に指を潜り込ませた。もう口出しする野次馬はなく、みんな周りを囲んでカリストの“手技”を息を呑んで見守る。

とても愉快な手触りとは言い難い筋肉と脂肪の束を掻き分け、破砕した骨片を取り除きながら、カリストは手探りで破断した下腿動脈を探る。並の人間なら胃をひっくり返してしまうような人間の血と肉の臭気を浴びながら、カリストは普段はニヤニヤ緩んでいるクチを真一文字に結んで真剣そのものだ。
「んううう……んう……」
ヒジまで真っ赤に染めながらカリストは懸命に血管の破断箇所を探す。まだ救急車の気配はないが、もうヘタをすると1リットルは失血している……いま不完全にでも止血しなければ、あと数分もせずに致死失血量に達してしまうだろう。空気塞栓の恐れもあり、カリストの気は逸る。
「んう……んう……血管みつかんないよぉ……！」
夥しい流血が傷口を満たし思うように目視で血管を探すことがで

きない。カリストは焦りのために思わず手の甲で顔を擦る……ヌルッとした感触と共にカリストの頬も血で染まった。血、人間の血、生きている人間の血だ。しかし、このままでは、それも数分後には“死んだ人間の血”になってしまうかもしれない。

「どしよ～……どしよ～……」

カリストは安易に手を出してしまったことを少しだけ悔いた。理屈だけで人助けなんて簡単にできることではない。この人を助けようとしなければ、少なくとも“助けられなかった”という後悔はしなくても済んだだろうか？　ただ救急車が来るのを他の人と一緒に黙って待っていれば良かったのだろうか？

だが、果たしてそれでカリストは自分に納得できたろうか……？

「う……し、死にたくない……」

その時、男性が弱々しく呟いた。その顔色は先ほどよりも明らかに生気を欠いている。拙いと思う間もなく男性は全身を小刻みに震わせ始めた。それは失血量が致命的な量に達しようとしている合図、失血性ショックの兆候だ。

「さ……さむい……」

「だいじょぶ！　だいじょぶだよっ！？」

カリストは涙目で叫ぶと、自らの意志と勇気を奮い立たせる。

『だいじょぶ、わたしなら、できる！　いまは、わたしだけにしかできない！　この人は、わたしが助ける！』

単なる願いや祈りではない。それはカリストが望み、自ら進んで為そうとすることに他ならない。誰に何と言われても、怒られても、笑われても、わたしは、わたしがそうしたいように、わたしを生かす！

そう思った瞬間、カリストは何か暖かい衝動が全身を満たしていくのを感じた。言葉にはできない、圧倒的に大きく暖かく優しいチカラがカリストのカラダとココロに拡がっていく。フワリと柔らかな心安らぐ感触と微かな芳香がカリストの意識をかすめた。

指先がソッと動き何かに触れる。
「あっ！？　これっ！？」
カリストは動脈の破断部を探り当てていた。裂けた血管を抓むと手際よく鉗子で挟む。あれほど激しかった出血が、まるで魔法でも使ったかのように止まったのだった。

その２－３０（後書き）

「いつになく真面目なカリストだなあ」
「（ちょ、ちょっと惚れ直したわ……カリスト、カッコカワイイ……！）」
「なんでカリストは医療知識があるんだろうね？」
「さ、さあ？　あのコ、イロイロ下らない知識を溜め込むのが好きみたいだから」
「そうなのか……」
「何にしても、変態よりは少しは役に立つってことが実証されたわねっ！　この変態よりはっ！」

その２―３１

カリストが男性の止血に成功してから２０分ばかりも経って、ようやく救急車が現場に到着した。男性は失血に伴う低血圧症で朦朧とはしていたが、それでも最後まで意識を失うことなく、そのままストレッチャーに載せられる。

「仙骨神経叢で下腿麻酔実施してるよっ！　下腿動脈破断部はケリー鉗子で止血したよっ！　失血量は、たぶん１５００ｍｌくらいかなっ？　事故が発生してから、えと……２５分経ってるよっ！」

忙しなく搬送の段取りをする救急隊員の邪魔にならないようにしながら、カリストは状況を報告するだけしてみる。もちろん相手にもされない。

そうこうするうちに救急車は男性を載せてあっと言う間に走り去ったが、それと入れ違うように警察が事故現場に到来する。野次馬たちの多くは事情聴取だの調書取りだの、そういう面倒臭いことに巻き込まれることを恐れて即座に立ち去っていった。

結局、現場に残ったのは血塗れのままのカリストと数名の物好きだけだ。

「あー、あなた方は事故を目撃してました？　……何だ君は？　血塗れじゃないか？」

「えへへ～♪　あ、えとねぇ、事故を起こしたクルマはＡＭＧ（アーエムゲー）の６８年型Ｓ７５のロングセダン、色はブルーマイカだよっ。ナンバー見てないけど、若い男の人が運転してたっぽいかも……」

カリストは最も重要な部分だけを取り敢えず警官に伝えて、“お祭りごと（トラブル）”が大好きそうな物好きが喜々として事故状況を語っている間に、現場の近くにあった商店の軒先にある散水用のホースを借りて血で汚れた手や腕や顔を洗わせてもらった。バイオロイドの外

部装甲（すなわち皮膚）は汚染や着色に極めて強い素材でできているため、血液程度なら水を掛けるだけで簡単に洗い落とすことができるのだ。
「うん♪　キレイになったよっ♪」
サッパリした気分になったカリストは水を使わせてくれた店主にお礼をし、まだ事情聴取を受けている数人の野次馬と警官を横目に見ながら倒しておいたバイクに跨ると、なんとそのまま帰宅したのだった。

なかなか世の中に貢献できたのではないかと、カリストは上機嫌だ。１００年前ならともかく、適切な緊急医療を施せば、あとは２２世紀の医療技術が何とでもしてくれる。数週間もせずに件の男性は自力で立って歩けるようになるだろう。
「あの男の人、だいじょぶだったかなぁ。きっとだいじょぶだよねっ♪」
そんなことを考えながら眠りに就いたカリストは、その夜、ベルリン中をイオと遊んで回る夢を見た。

『えへへ～♪　イ～オ～♪　イ～オ～♪　だあい好き～♪　ずっとずっとイオといっしょ～♪』
ふたりはブランデンブルク門の下で両手を繋いでグルグル回る。見つめ合う瞳と瞳、溢れる笑顔。こんなにもシアワセな気持ちは初めてだった。世界はふたりを中心に回っている。
『カリスト♪　もうずっと離さない♪　私たち、これからもずっと一緒よっ♪』
やがてふたりの足は止まり、互いに向き合ったまま歩み寄る。カリストはイオに抱き付き、イオもそれを受け止めた。もうカリストのムネは喜びではち切れそうだった。
『カリスト♪　私たち、もうずっと離れない♪　なにが起きたって

ずっと繋がってるわ♪』
『えへへ～♪　えへへ～♪　イ～オ～♪　ギウギウってして～？
チュッチュってしよ～？』
　互いに微笑みを交わす。もう現実なのか夢なのかカリストには判らなくなっていたが、この気持ちをイオに伝えるためには、もう他に適切な手段が思い付かない。顔を少しだけ上げて瞳を閉じ、イオを待った。待った。待った。

『……なに言ってるのよっ！？　いい加減に起きなさいよっ！　早くＭＴに出なさいよっ！』

「ふぇ～！？」
　カリストはベッドから飛び起きる。何が起きたのか、状況が理解できずに一瞬だけパニック状態になったが、なんの事はない。例によってＭＴからイオの怒ったような声が。
『カリスト！？　カリスト！？　いるんでしょ！？　早く出てよ、もう……！』
「んう……」
　窮極の幸福感を夢の中で与えてくれたイオが、現実では怒り口調でブツブツ言っている。さすがのカリストも鼻白んだが、応答しないわけにもいかない。恐る恐るＭＴを手に取ると、通信を受け入れる。
「イオ～？　こんな朝はや」
『パパッと出てよっ……もう……！』
　モニタに映し出されたイオは単に怒っていると言うよりも、やや憔悴したような顔だった。
『あんた、昨日の帰りに何かしたでしょ！？』
「ふぇ？　えとねぇ、事故現場を見たよっ」
『見た～！？　正直に言いなさいよっ！　もう判ってるんだからっ

！』
どうもイオの機嫌は酷く悪い。カリストはこれ以上イオの機嫌を損なうのもイヤだったので、素直に応える。
「えへへ……事故でケガした人を、ちょとだけ助けたかも……」
『それは偉いわ。それは認める。あんたの善意でその男性は一命を取り留めたわ……今も意識はしっかりしてるし、予後も問題ないって！』
「そなんだ～♪　良かった～♪　イオ、知ってたんだ～？」
『知ってた！？　知ってたって言った！？』
カリストの一言にイオはついに激昂した。モニタに喰い付かんばかりにイオの怒り顔が大写しになる。
『できれば永久に知りたくなかったわよ、そんなこと！　何がどうなってるのよっ！？　あんたのせいで夜中に叩き起こされて、今の今まで事後処理よっ！　その事故現場の件もそうだし、ブランデンブルク門での一件だって……！』
堰を切ったように捲し立てるイオだったが、一方のカリストは珍しく一発で悄気てしまう。
「んう……わたしってば、またイオにメーワクかけちゃったんだ……？」
『……う……』
モニタを通してカリストの萎びれた姿を目にしたのだろう、イオは何とか冷静さを取り戻した。
『ま、まあ……私があんたのために苦労するぶんには構わないけど……ただ、事故現場であんたがした行為は法に抵触してるわ。それは知ってるわよね？』
「う、うん……でも……」
そうしなければ、あの男性は死ぬか、あるいは重度の障害を残すことになったことは疑う余地もない。それはイオも判っているようであった。
『そう、確かに、あんたはひとりの男性の命を救ったわ……それは

誰にでもできることじゃなかった。知識と技術と、何より勇気が必要なこと……あんたは人間ひとりの命を頼まれもしないのに勝手に……ううん、進んで預かって、きっちり責任を果たした……きっと私にはできなかった』

そしてイオは視線を落とす。

『……もしこれが“普通の人間の１６歳の女のコ”がしたことなら、きっと奇跡的な美談として世界のトップニュースになってたでしょうね。でも、私たちはバイオロイドというロボットで、しかもあんたは建前上は“普通の人間の１６歳の女のコ”ってことになってるのよ？　この意味、判る？』

「んう……？」

なにか拙いことになったのはカリストにも判ったが、それから先が予測できない。イオは肩を落として続ける。

『警察もマスコミも、あんたを探して動き出したのよ……。しかも運悪く昨日ブラ門であんたがアテナ像の台座に抱き付いてオイオイ泣いてる写真や映像がマスコミに投稿されたり、個人サイトや動画サイトにアップロードされるオマケも付いてた』

「ふぇ……？」

ここまで説明されて、さすがのカリストもようやく状況が見え始めるのだった。

その２－３１（後書き）

「何か雲行きが怪しくなってきたなぁ」
「あのコってば、考えナシの大統領よっ！」
「前回では“惚れ直した”とか言ってたのに」
「そ、そそそれとコレは別問題っ！　私だって会社に所属する者としての立場があるんだからっ！」
「あんまりカリストを責めない方がイイんじゃ……？」
「私よりも幼いカリストの肩を持ったわね！？　さすがはロリコンの変態ねっ！」

その2―32

イオは落ち着いた口調、もとい落ち込んだ口調で続ける。
『大丈夫。警察やマスコミには圧力を掛けて完全に封殺したわ。アップロードされた画像や映像も全て削除させたし、それらの出所も押さえてデータも回収した。ダウンロードされたデータも……こういうことは大っぴらにできないことだけど、逆トレスして可能な限り破壊したわ。会社にはそれだけの権力と技術力があるからね。その点は大丈夫』
「イオ……その作業を夜中からずっと……？」
『……さっきも言ったでしょ？　あ、あんたのために苦労するぶんには私は構わないわ。あんたのためなら、ちょ、ちょっとくらい苦労したり上から怒られても私は平気。ただ……会社組織としては、あんたの軽率な行為は大きな問題になってる』
「そいじゃ、わたしが会社に行って怒られればイイんだよねっ？」
カリストは心底からそう思って言ったのだが、それを聞いたイオは再び激昂してしまった。
『なっ！　なに言ってるのよっ！　怒られれば済むとか、そんな単純な問題じゃないのよっ！？　データを回収したり口封じしたりしても、“人間の記憶”だけは操作しようがないのよ？　ブラ門や事故現場で何人の人間に姿と行動を見られたと思ってるのっ！？』
憤りでイオの瞳は潤んでさえいた。
『前にも言ったでしょ？　私たちバイオロイドは技術利権のカタマリだって！？　今回みたいに身バレするようなことを後先考えないでホイホイやってたら、また狙われることになるのよっ！？　前にあんたを狙った連中だって未だに実体不明だし、いまあんたがホエホエのんきに笑っている間にも連中の魔の手が迫ってるかもしれないのに！』
そしてイオはモニタ越しのカリストに指を突き付け、今までにな

い高圧的な口調で告げる。
『いい？　今回の件であんたは会社からの評価を大幅に下げたわ。試験やサポートの打ち切りも視野に入ってるのよ！？　判ってるの？　バイオロイドは会社の所有物で好き勝手に生きられない。あんたは自分が自由気ままに生きてると思ってるかもしれないけど、そういうワケにはいかない！　それは“必要だから与えられている自由に見える束縛”なの！』
「イオ……そいじゃ、わたしたちってば、なんのために生きてるのっ？　会社に言われたまんまに生きるだけなんて、何かヘンだよっ……！？」
『……良く考えたら、その“生きる”って言い回しがすでにヘンよね？　だって私ら、生き物じゃないんだからっ……！』
カリストはイオの言葉に激しく動揺する。イオの言葉の内容にではない……意識しなくても、そのようなことはカリストも判っていた。カリストを動揺させたのは“イオに言われた”という状況だった。
「イオは……イオは自由に生きたいって、自分の望むように生きたいって思わないのっ？」
『自由に生きる？　そんな権利は初めからバイオロイドには与えられていないわ。自分が“自由に生きたい”って思うことだって、そういう風にプログラミングされているだけかもねっ！　いい？　もう今までみたいな好き勝手は自重してっ！？　私たちは何があっても会社の所有物で、自由なんか与えられてない！　会社の備品、組織の一部なのよ！　あんたのバカげた行動の尻拭いする私の身にも……』
そこまで言って、イオは自分の言葉に絶句する。どうしてこんな言い方をしてしまったのか自分が理解できない。いつもなら……自分が怒ってカリストが笑って、それで済むはずなのに。
まるで自分でも知らなかった自分の心の内が透けて見えたような気さえした。カリストに対して抱いていた気持ちや想いは何だった

のだろう？　友情や愛情だと思っていた感情もまた、そう感じるように組まれたプログラムだったのだろうか？

イオは沈黙し、カリストもまた沈黙する。こんな気まずい沈黙は初めてだった。ふたりが出会って４ヶ月余、互いに言葉を失い、継ぐための言葉を探し、適当な言葉を思い付けずにいる初めての気まずい沈黙。

最初に口を開いたのはイオだった。

『……とにかく……身を慎んで地味に生活して。ベルリンなんかにはしばらく来ない方がいいわ。後のことは私が処理する。だから今日はポツダムへは行けない。伝えたかったことはこれだけ……』

「イオ……」

カリストは両手で顔を押さえながら呟くように言う。もうモニタを直視できない。振り絞るように、いま言えそうな言葉だけを何とか言い切るので精一杯だった。

「イオ……イオ……ゴメンね……ゴメンね……！」

イオからの返事はなく、カリストが気付いた時には通信は途絶していたのだった。

その日、カリストは生まれて初めてバイトを欠勤した。

「……私……なにやってるんだろ……」

憮然とした表情で呟き、僅か２４時間前にカリストと楽しく語らったオープンテラスカフェの同じ席で項垂れるイオ。昨日はあんなに鮮やかに暖かく見えたはずの夕日が、今日はモノトーンで薄ら寒く見える……同じ太陽、同じ夕日のはずなのに。

昨日の今頃、こんなことになるなんて想像もできなかった。想像する余地さえなかった。絶対に起こりえないことだと確信していた。こんなことにだけは何があってもならないと……。

自分の気持ちに素直になってカリストを引き留めれば良かった。予約してあったホテルにムリにでも連れ込めば良かった。あと1分だけでも早く送り出せば良かった。もう仕方のないことだと判っていても、その羨望にも似た後悔は並行世界の自分に向けられる。

遠回しにデートの約束を交わし、「明日になれば、またすぐ会えるんだから」、そう告げた。それは僅か1日も経たずに反故になってしまった。

「私が……したんだ……」

世の中にはカリストよりも、もっとずっと素晴らしかったり魅力的だったりする人物だって多くいるに違いない。だが、イオが最も好意を向ける相手はカリストなのだ。絶対にカリストだけは護りたい、そう思っていたし、今もそう思っている。だから、護りたかった。護りたかったのに……。

「私が……あのコを傷付けた……」

イオはテーブルに突っ伏したいという気持ちを懸命に押し込めながら顔を上げ続ける。ここで人目から顔を覆い隠すと、絶対に泣いてしまう自信があった。だから、よりにもよって人通りの多いパリ広場に居座っているのだ。

「暗い顔をして、どうしたんだい？」

不意に男の声。視線を上げると、いつの間にかヴァレンタインがいて、勝手に相席している。

「……変態さん」

「呼び捨てから“さん付け”に昇格か……嬉しいよ」

そう言って、ヴァレンタインは寂しそうに笑った。

その２－３２（後書き）

「とうとうイオもいなくなってしまった。仕方ないから今回はアスタルテを喚んだよ」
「……（微笑む）……」
「カリストとイオ、初めての危機だなあ」
「……（微笑む）……」
「まったくツンデレさんは世話が焼けるよ……」
「……（微笑む）……」
「……やっぱり少しムリがあったね」
「……（微笑む）……」

その2―33

ヴァレンタインは注文したコーヒーに砂糖をドバドバ入れながらかき混ぜている。甘いコーヒーからカリストを連想してしまい、イオはムネが潰れそうになってしまった。

「なんか元気ないね？　昨日はあんなに……」

と、そこまで言ってヴァレンタインは言葉を濁す。イオが泣きそうな顔で肩を小さく震わせていることに気付いたからだ。潤んだ瞳からは、今にも涙の雫が零れ落ちそうになっていた。

「……まぁ、何かと多感な時期だからね」

「なっ、何でも……ない……」

顔を擦って、俯くイオ。傍目から見れば世界の終わりでも見たかのように顔色だ。ヴァレンタインは何度かクチを開きかけては閉じを繰り返してから少し困ったように言う。

「……何があったのかは想像つくけど、訊かないよ」

「何でもない、何でもないのっ！」

年頃の少女が「何でもない」と言い張って泣きそうな顔をしている場合、おおよそは将来のことか恋愛のことで悩んでいるものである。ヴァレンタインは正直なところ他人の人生に口出しするのを好まない人間なのだが、自分から接触を図った手前、捨て置くこともできず、何よりイオに同情さえ感じている自分に驚く。

もちろん少なからず打算はある。イオを護ることはカリストを護ることであるし、ひいては自分の面目も立つというものだ。ただ、そういう考え自体が言い訳じみた自分への照れ隠しとも言えなくもない。カリストとイオの幼気で純粋な“恋愛のようなもの”の行く末を案じていないかといえば、それを否定しきる自信はヴァレンタインには無かった。

「ねえ……サン・テグジュペリ、知ってるかい？」

明るい口調でヴァレンタインは唐突に切り出す。イオは少し顔を上げて記憶を辿り、応える。
「……“星の王子さま”……を書いた人だっけ？」
イオの回答に大きく頷くヴァレンタイン。
「そう。読んだこと、ある？」
「ないわ……あまり文学は好きじゃないから。ＳＦは良く読むけど」
「なんと！」
大仰に驚きの声を上げてヴァレンタインは革ジャン（ライダース）の下から１冊の文庫本を取り出した。
「偶然ここに“星の王子さま”がある！　貸してあげるよ」
「バカみたい」
思わず少しだけ笑顔を見せてしまうイオ。ヴァレンタインの差し出した本の表紙には、サン・テグジュペリが自ら描いたシンプルで暖かい線の“王子さま”の装画が金箔打ちされている。読んだことはなかったが、この可愛らしいイラストはどこかしらで目にした憶えがあった。
「哀しいオハナシなの？」
「読めば判るよ。そんなに難しい内容じゃない。子供が読んでも理解できるように書いてあるからね」
「うん……あ、ありがとう。ちょっと借りるわね」
表紙の“王子さま”は、少し哀しそうな不思議そうな顔で、黙ってイオを見つめている。
「……バイオロイドとは言え、君らはまだ子供なんだ。これからもずっと」
ヴァレンタインの口調には微塵も馬鹿にしたような響きや偉ぶるような態度はなかった。イオも反論するような気にはならない。それは事実だからだ。イオもカリストも永遠の未熟、永遠の思春期なのだ。
ヴァレンタインのトボケたような心遣いにイオは僅かに気分が晴れた気がした。やはりヴァレンタインは“こちら寄り”の人間なん

だと確信する。それに、人間にここまで優しくしてもらったのも初めてのことだ。そう思うと、また例によってイオは気恥ずかしくなってくるのだった。
「……ななな何が“これからもずっと子供”よ！　こっ、このロリコン！　変態っ！」

ヴァレンタインが家まで送ろうかと申し出てくれたのを「変態に住んでるところを知られたくない」という理由で断り、イオは独りで帰宅した。
イオもカリストが住んでいるのと同じような独居用ワンルームマンションで暮らしている。ただ、潤沢な生活資金（と言うか給料）を与えられているため、人間社会で考えれば恐ろしく裕福な生活をしていると言える。
立派なホームシアターセットや音響機器、使っているＭＴなんかも自社製の最上級モデルであるが、何より目に付くのがスタンドに掛けられて並べられた１０本以上のエレキギターだ。イオの最も傾倒している趣味はギターを弾くことなのである。
これはカリストが珍奇な特技に通じているのと同じように、イオに与えられた一種の“才能”だ。イオはギターを良く弾き、そのコレクションにも余念がない。
「ただいま、ブラッキー」
イオは最も目立つ場所に置いてある１本のギターに声を掛ける。かつて“ギターの神さま”と呼ばれた英国人ミュージシャンが愛用していたギターの限定復刻モデルだ。復刻モデルとは言え、生産されたのは１５０年以上も昔であり、イオは会社から“５年分の賞与”を前借りしてオークションで競り落としたのだ（ちなみにオリジナルのブラッキーは大英博物館に所蔵されているらしい）。
そんな貴重なギター・ブラッキーでさえ、イオにとっては２番目くらいに大切なモノに過ぎないし、１番目に大切なモノに比べれば

些末な存在だった。

イオはヴァレンタインから借りた“星の王子さま”をサイドテーブルの上に置くと、制服を脱いで、部屋着にも着替えず下着姿のまま、ぐったりとベッドの上に転がった。

「……カリスト……いま何してるのかな……」

枕に顔を押し付けながら、イオの胸の中はカリストへの想いで満たされていく。何があってもカリストのことばかり考えている自分が可笑しくもあり、なのに巧くできなかったことが哀しい。

バイオロイドが内蔵している電源機関である対消滅炉は無尽蔵にエネルギーを出力することができるが、反面、放熱量が甚大であるため長時間の高負荷稼働には不向きであった。そのため、バイオロイドは対消滅炉の自壊を防ぐために、“眠気”や“疲労感”という形で連続稼働を抑制するようにされているのだ。夜を徹してカリストの一件を処理し、その後、当のカリストとの気持ちの行き違いもあり、心身共に疲れ切ってしまったイオは、自分でも気が付かないうちに眠ってしまっていた。

その２－３３（後書き）

「はぁ……カリスト……」
「……ある意味、すごいバカップルだよね？」
「もうバカでも何でもイイから、変態が消えてカリスト、ここに戻ってきてよっ！」
“星の王子さま”読んでごらんよ？」
「う～ん……ロリコンだと思ってたけど……もしかしてショタコン？　うわ……ホンモノの変態だわ……」
「ちなみに本文中のレプリカギター（シグネイチュア）“ブラッキー”は、クラプトンのギターだね（競売に出しちゃったけど）」

その２－３４

陽の眩しさを感じ、イオは瞬間的に目を覚ました。寝過ごした、と思って飛び起きたが、昨日は徹夜明けのまま日中の勤務もしたため、今日は代休が出ていたことを思い出す。時計を見ると昼近くになっていた。

「これじゃカリストのこと言えないわね」

なぜか少し嬉しそうに苦笑し、それからカリストのことを思い出して起きがけ早々に気持ちが沈んだ。思い切ってカリストに連絡を入れようかとも一瞬だけ考えたが、そこまでの勇気は出ない。そんな自分に再び気分が沈んだ。

こんなにカリストのことを想っているのに、なんで巧くいかなかったんだろう。良く考えたら、あんな苦言を言ったって、もう済んでしまったことなのだから仕方がないのに。

イオは会社からカリストを護りたかったのだ。試験やサポートを打ち切られるということはバイオロイドとしての存在意義を揺るがすことだと思った。それはカリストのサポート業務を担当しているイオにとってはカリストとの別離を意味する。

でも、だからといってカリストの気持ちや想い、その人生を抑制することはイオの本分ではない。カリストの人生はカリストのモノだ。そしてカリストはそれを望んでいるのだ。

もっと素直に言うべきだった。

『私はあんたのことがとても心配なの』

届かなくても、気持ちを素直に伝えることができたはずだ。もうしばらくはイオには言えそうにない言葉だが、それはカリストになら言うことができた、伝えるべき言葉だったはずだ。

だが実際はその勇気を出し惜しみ自分に素直になれず、結局はカリストに追従できない自分への苛立ちから八つ当たりのようにカリ

ストを論破しようとしてしまった。何でも話せる友だちはカリストしかいないはずなのに、そのカリストにさえ気持ちを伝えることができなかった。

しばらくベッドに伏していたイオだったが、ふとテーブルの上に置いておいた“星の王子さま”を手に取る。変態（ヴァレンタイン）さんが貸してくれたものだが、有名なオハナシだし、きっと素晴らしい内容なのだろう。

ページをパラパラと捲ってみると、挿絵が多く字も大きめだ。ヴァレンタインも言っていたが、確かに子供向けなのだろう……絵本とまではいかなくても、見た目は児童文学くらいでしかない。小一時間もあれば読了できそうだった。

イオは下着姿のまま、ベッドの上に寝転がって“星の王子さま”を読み始めた。

３０分ばかりが経ち、本の半ばまで差し掛かった頃、イオはいつのまにか起き上がってテーブルに就いている自分に気付いた。この物語は尋常ではない。これほどまでに「気持ちで感じる」ような物語が存在するとは信じられなかった。なぜ長きに渡って“聖書の次くらいに支持者の多い物語”なのか、少し理解できた気がした。

１時間が過ぎ、やがて物語は淡々と幕を下ろした。少し、いや、とても切ない。でも単に哀しいだけじゃない。イオは自分の中の世界が明らかに色彩を取り戻しつつあるのを感じた。

ああ、そういうことだったんだ！　私がカリストに感じていたことは、こういうことだったんだ！

イオは胸の奥を衝く暖かい衝動に気付く。イオにとって、カリストは星に咲く一輪のバラであり、キツネであり、星の王子さまそのものだった。

ほんの少しだけ距離が離れているだけで、まだ何も終わったワケじゃない。まだ始まってさえいない。僅かな勇気さえ要らない。自分の望むようにすることができる。カリストが言っていたように、自分の望むように生きることができる！　会社とか常識とか世間体とか、そんなものは些末なことだ。何の本質でもない。誰かを愛おしく想う気持ちは何者も遮らない！　一番大切なモノは目には見えない。形が無く目に見えないモノだからこそ、願うままの姿で存在しうる！

イオは涙……それは歓喜の涙……を拭くと敢然と立ち上がり、ひとつ大きく息を吐く。今したいこと、それはカリストに会うことだ。きっとまだ素直に想いを伝えることはできないだろうけど、仲直りしたい。元から誰かに引き裂かれたわけじゃない。私が望めば仲直りなんて簡単にできるし……それをカリストも望んでいる確信がある。カリストは誰よりも私のことが大好きだろうし、私も誰よりもあコのことを……。

「カリスト、今から会いに行くわ……私はカリストに会いたい」

イオはすぐさまシャワーに入り、制服を着る。長い亜麻色の髪をカリストが大好きだというツインテールにキッチリ結わえる。少しお腹が空いている気もしたが、そんなのは後でもイイ。いますぐにポツダムに行きたい。

ポツダムに行ってカリストに会いたい。

ひどく落ち着いた気分でマンションから出ると、そこに待っていたのはバイクに跨ったヴァレンタインだった。イオを見るなり少し笑顔を見せる。イオも気恥ずかしそうにはにかむ。

「こんな昼間に制服を着て、どこへ？」

「ちょっとポッダムに行こうと思って」
「それは奇遇。オレも今からポッダムに用事があってね」
そしてヴァレンタインは少し真面目な顔になって言う。
「良い勘だ。少し面倒なことになりそうだから、載るなら後ろに載るんだ」
ポッダムで面倒事といえば、これはもうカリストのことに決まっている。どうしてカリストには面倒事ばかりが降りかかるのだろう。
「カリストに何かあったのっ！？」
「正しくは、これから何か起こる……今の時点ではカリストは何ともなってない」
「じゃ、じゃあ連絡を……！」
慌てて部屋に戻ろうとするイオだったが、ヴァレンタインは制止する。
「事前に連絡を入れてもカリストじゃ防ぎようがない。それに今から急げば余裕で間に合う」
「そ、それってどういうことよっ！？」
「そのためにオレがいるんだ」
相変わらず要領を得ないヴァレンタインの言い草に少し腹を立てながらもトライアンフＴ１２０（ボンネビル）の後席に飛び乗るイオ。
「……その短いスカートで大丈夫？」
「なっ！　ば、バカっ！　そんなのイイから、早く！」
「大丈夫、まだ猶予は充分にあるよ。ちゃんとスカートをお尻の下に巻き込んだ？　そんな乗り方だと、その可愛らしいライムグリーンと白のストライプ柄のパン……」
「なっ！　なに言ってるのよっ！？　こ、この変態！　いいからさっさと出しなさいよっ！　だいたい何で私のマンション知ってるのよっ！？　さては昨日、別れてから尾（つ）行けたのねっ！？　変態！　女のコの敵っ！」
イオから容赦なく罵られ詰られ背中をポカポカと叩かれながら、ヴァレンタインはバイクを回しポッダムへ向かう。

その２－３４（後書き）

「本当は“星の王子さま”の訳文を本文中に引用したかったらしいんだけど、残念ながら自重よね」
「でも本当に素晴らしい物語だから未読の人は読んでみるとイイよ。子供でも大人でも」
「変態に本を薦められるなんて……しかもあんな素敵な本を……」
「見直した？」
「見直し……っていうか！　あんた私のパパパパンツ見たでしょっ！？　最低っ！　変態っ！　大っ嫌いっ！」
「……どんどんフラグが……」
「なっ！　ば、バカぁ！　立ってないっ！　ぜんっぜん立ってないわよっ！」

その2―35

バイクで疾走する道々、イオはヴァレンタインに指摘されたがゆえにスカートの裾が気になって仕方がない。やむなくヴァレンタインに言われたようにスカートを前後から巻き込んでお尻の下に敷いてみたが、これはこれでフトモモが必要以上に露わになっているように思えて、そうでなくても恥ずかしがり屋のイオは気が変になりそうだった。

「こんな格好して……もう、お、おヨメさんに行けないわよっ！！」

「え？　カリストをおヨメさんに貰うツモリじゃないの？」

「ちがうわ！　私がカリストのところにおヨメさんに行く……なっ　なななに言ってるのよっ！？」

「君は本当に面白いなあ」

風に負けないように大声でマヌケな会話を続けるイオとヴァレンタイン。いつの間にか、何となく打ち解けてしまっていることがイオは可笑しかった。初対面の頃は気に食わない人物だと思い込んでいたが、あのカリストと仲良くしていたのだから信用できる人物なのだと、元から無意識に感じている部分もあったのだろう。

そう思うと、やっぱりカリストが誇らしい。カリストが行くところ、触れるもの、関わる人、すべてが強く結び付けられていくような気がした。そんなカリストに好意を持ってもらっている自分も誇らしかった。

「ほら、遠慮しないでもっとしがみ付きなよ？　アウトバーンに入るからしっかり掴まってないと危険だよ」

「なっ！　そんなこと言って、そ、その、わわわ私の、ムムムムネが押し付けられるのを期待してるんでしょっ！？」

「……そんなに意識するほど無いんじゃ？」

「変態っ！　バカっ！　女のコの敵っ！　最低っ！　言ってイイことと悪いことが……！」

「ははは、ゴメン」

そんな下らない会話で、イオは自分の気が充分すぎるほど紛れていることに気付く。カリストに何か良くないことが起こりつつあるらしいのに、それを刹那忘れていた。だが、結局はヴァレンタインに帯同して向かうより早く移動する手段はないし、道中、いくらヤキモキしても状況が好転するわけでもないのだ。どうせ同じなら、沈痛に過ごすよりも楽しく過ごした方が良いに決まってる。

「……そっか……いつもカリストは、こんな風に考えてるんだ……」

「なに？」

「ううん……何でもないわ」

ほんの1日半ばかりだが、カリストと少し距離を置いて、だからこそ判ったこともある。アタマに水が入っているだの考えナシだの、さんざん詰りはしたが、やっぱりカリストにはどこか特別なところがあるのだ。それが何なのかまではイオには判らなかったが、今はそれで充分だ。

「そっか……そうなんだ」

それからイオはヴァレンタインの胴体に回したウデに少しだけチカラを込める。

「ヴァレンタイン、どうして私にも良くしてくれるの？」

「それには幾つか理由がある。ひとつはカリストのため、ひとつは“ある人”から頼まれてるからだし、それがオレの仕事でもあるし……」

そこまで言ってから、ヴァレンタインは背中で笑いながら続ける。

「オレを罵る用意はイイかい？　最後の理由、それは君がちょっとカワイイから」

「なっ！？　……へ、変態……も、もう、バカぁ！」

ふたりを乗せたＴ１２０（ボンネビル）は、ポツダムへと延びるアウトバーンに入った。

Ｔ１２０は僅か１５分でポツダム市街にヴァレンタインとイオを運び入れる。運転者のヴァレンタインは慣れたものだが、よくよく考えたらイオは後席とはいえバイクに乗るのは生まれて初めての経験だった。

アウトバーンを走行している間は目をきつく閉じて無我夢中でヴァレンタインにしがみついていたが、果たして何ｋｍ／ｈ出していたのか、考えるのも恐ろしい。

「ちょ、ちょっとだけ、こ、怖かったかも、し、しれなくもない」

「ん？　やっぱり怖かった？　どうりで途中から背中に……」

「それ以上言ったら後ろから首を絞めるからねっ！？」

夕方前のポツダムは静かで長閑（のどか）だ。元からベッドタウンだということもあり、昼日中でも人通りは少ない。ベルリンに隣接した街だというのに、その活気たるや天と地である。

そんな街中をヴァレンタインとイオはバイクで通り抜けて、カリストの住まうマンションへと急ぐ。ヴァレンタインが言うにはまだ余裕で間に合うとのことだが、いずれにしても急ぐまでもなく到着だ。

「で、カリストの身に何が起きるっていうのよっ？」

「……うーん……」

エレベータに乗り込み、階上を目指すふたり。イオの問いかけにヴァレンタインの表情は冴えない。

「何というか……まぁ命が危険に晒されるとか、そういうわけじゃないんだけどね……」

「それ、どういうこと？」

「……うん、まあ……」

どうにもヴァレンタインの口ぶりは不明瞭なものだ。それはいつものようなノラリクラリとした口調ではなく、本当に何と言って良いのか判らないという風であった。

エレベータが停止しドアが開く。イオは駆け出し、ヴァレンタインが後続する。イオはカリストの部屋へ延びる通路を一陣の風のように走りながら無駄を承知でカリストの名を呼んだ。
「カリスト！　カリスト！」
ドアに取り付きノブを引く。カギが掛かっていた。考える間もなくドアノブに付属している電子キーのパネルを開き、暗証番号を入力する……ロックは外れた。
「カリスト！　起きてる！？」
チャイムも鳴らさずにカリストの部屋へ飛び込むイオ。ヴァレンタインは入り口で待機しているが、辺りを見回しながら少し落ち着きがない。
「カリスト！？」
もう玄関の位置から部屋の中の様子は一目瞭然で把握できる。カリストはベッドにはいなかった。洗面所にもシャワー室にも姿はない。クロゼットを開けてみたが、もちろんカリストは隠れていなかった。
「カリストがいない！」
「……拙いな」
なかば悲鳴のようなイオの声に、ヴァレンタインは苦い顔をして視線を泳がせる。
「この展開は予想外だった」
イオは際限なく沸き上がる不安に、思わずヴァレンタインに詰め寄り、叫ぶ。
「ま、まさか……カリスト、浚われちゃったの！？」
「いや、まだ浚われてない。どこかに出掛けてしまったらしい」
「どこかってどこよっ！？」
「少し時間をくれ。すぐに調べが……」
「もうイイっ！　私が探す！」
イオは涙目で叫ぶと、ヴァレンタインを突き飛ばすような勢いで部屋の外へ飛び出していった。

その２－３５（後書き）

～ついに後書き要員が全員出払ってしまった～

なので、ほぼ初めて真面目に作者が後書きを書きますｗ

愚作「ＫａｌｌｉｓｔｏＤｒｅａｍＰｏｊｅｃｔ」をお読み頂き本当に有り難うございます。

連載開始当初は何が何だか判らず、文章作法なども適当ですし、こんなので本当に読んで頂けるのかと、不安というか情けない気分だったものです。

ですが、連載開始から２ヶ月余、更新のたびに必ず一定数以上の方々にお読み頂けていると実感するに至り、もう有り難くて有り難くて感謝の言葉以外見あたりません。

これからも、是非とも御贔屓に宜しくお願いいたします……あ、あと、図々しいとは承知ですが、コメントやメッセージなどを頂けましたら、更にとても嬉しいです。ぜひぜひ宜しくお願いいたしますｗ

その２－３６

手の甲で顔を擦りながらイオはマンションの外に出る。ヴァレンタインも黙って追従しているが、懐から取り出した小型のＭＴを何やら操作していた。
「そんなのでカリストの居場所が調べられるっていうの！？」
「あ、いや。直接には判らないけど、オレは他に通信手段が無いんでね」
「あのコの行きそうな場所といったら……」
喫茶店か、ショッピングモールか、郊外か……行動に一貫性のないカリストの追跡は容易ではないようにイオには思えたが、懸命に思案を巡らせる。
と、ＭＴを操作していたヴァレンタインがボソッと声を上げた。
「……あ」
「なにっ！？　カリストの居場所が判ったのっ！？」
「……通信が遮断された。と言うか、リモートでＭＴを壊された。復旧には１０分ばかりかかる」
「つ、使えないわねっ！？　変態のくせにっ！」
事態は急を要するというのに、やはりどこかトボケた口調のヴァレンタインに、思わず苦笑いして怒鳴るイオ。だが、和んでいる場合ではない。いよいよ自力と直感でカリストを探すより他なくなってしまったのだ。
「まだ猶予はあるのっ！？」
「そろそろ拙い。ＭＴが壊されたってことは、“あのコ”にオレらの動きを気取られたってことだし、たぶん、もうすぐそこまで来ている」
ヴァレンタインの婉曲な言い回しが少し気にはなったが、委細はともかく、カリストの身に何らかの危険が迫っていることは間違いない。小さい街だとはいえ、改造バイクを手に入れたカリストの行

動半径は非常に広くなった上に、元から行動原理もチンプンカンプンなのだ。イオはムネの前で手を組んで小さく呻いた。
「あのコの行き先なんて、その日の風向きで決まるようなモノなのよっ……！？」
つくづく気持ちを行き違わせてしまったことを悔いるイオ。いつものように連絡を取り合っていれば、素直なカリストは明日は何をするとかどこに行くとか、必ず知らせてくれるのだ。その途を断ったのは他ならぬイオ自身なのだ。
この2日間、何かとカリストのことを考えながら内省し、何か判ったような気がしていた自分がバカのように思えてきた。結局はカリストの行き先ひとつ満足に判らないのだ。
目に見えるモノが全てではない……が、目に見えないモノをどうやって理解しろというのか。
「カリスト……！　ゴメンね……カリスト！　私、あんたのこと、何にも判らない！」
失意を感じ、思わず声を詰まらせるイオ。だが、それを見たヴァレンタインは唐突に声を荒げた。
「何を言ってるんだ！　カリストのことが大切なんだろう？」
「そ、そうだけど……そんな気持ちだけで、あのコの居場所なんか判らないし、護ることも……」
まさかヴァレンタインに怒鳴られるとは思ってもいなかったイオは、クビを竦めて項垂れる。イオが泣くのではないかと思ったヴァレンタインは途端に声を和らげて続けた。
「……少しぐらいのムリでも、強く願えば通じることもあるよ。現に君はカリストを連れ去ろうとしたオレを翻意させたじゃないか。あの時、オレは君の誠意とカリストを想う気持ちに打たれたんだよ」
「ヴァレンタイン……」
「いいかい？　君とカリストは同じコンセプト、同じラインで創られた双子も同然だろう？　それに何より誰よりもカリストと気持ちを通わせている関係じゃないか。誰でもない、君だけがカリストに

一番近い存在なんだ。たとえ姿が見えなくても、いつでも互いを感じているはずなんだ」
そしてヴァレンタインは自分のバイクに跨り、続ける。
「バイオロイドだから、ロボットだからといって、人間が持ってるような直感や霊感みたいなモノを持ち得ないとは言えない。それくらい世の中は不思議にできてると思うよ。さあ行こう、君にならカリストの居場所が判る……君にしか判らない」

その頃、当のカリストはポツダム近郊の森の中にある小さな湖沼の、その畔（ほとり）に自生している芝草の上で俯せになって倒れていた。傍目から見ればそう見えた。実際には寝転がっているだけだった。
とは言え、虫やカエルを観察しているわけではない。カリストはカリストなりに落ち込んで、こうやって独りでイロイロと反省しているのだ。
「……やっぱしイオに嫌われちゃったのかなっ……仲直りしたいなぁ……」
正直なところ、カリストは謝る必要があるなら（あるいは必要が無くても）、謝って済む問題なら幾らでも素直に謝ることができる。照れくさいとか恥ずかしいとか負けるのがイヤだとか、そういう気持ちはない。ただカリストを躊躇わせているのはイオの気持ちだ。イオに嫌われてしまったかもしれないという懸念だけがカリストを責め苛むのだ。
『何があっても、私はあんたの味方だし、見限ったり裏切ったりしない』。かつてイオはそう言った。その言葉を今でもカリストは信じている。今もカリストはイオを強く信じていた。だからこそ恐ろしい……もし、拒絶され、許されることがなかったら、どうすれば良いのだろう？　世界で一番好きな人に想いが届かなかったら、どうすれば良いのだろう？
「……で、でも、イオと仲直りしたいよっ……！」

迷ってみたところでカリストの思考の行き着く先はひとつしかない。こんなところで呻いているのをヤメにして、今すぐに帰宅してイオに連絡してみよう、そう思ってムクリと起き上がって振り返って見れば、そこには見慣れないひとりのメイド服を着た少女が立っているのだった。

その２－３６（後書き）

「えっと……そ、その……次話から数話の間、ちょ、ちょっとだけＧＬ色が……」
「ハッキリ言いなよ？」
「なっ！　へ、変態は黙ってなさいよっ！　ええと、その、じゅ、１５禁まではいかないと思うんだけど……そそそその……ちょっとだけモゴモゴ……」
「へえ。それは楽しみだね」
「変態！　あっち行きなさいよ！　近寄らないでよっ！　この役立たずっ！」
「……酷いなあ」
「（あっ……）そ、その……言い過ぎた……かも。ご、ごめんなさい……」
「……やっぱり君は時々スゴイ素直でカワイイね」
「なっ！？……」

その２－３７（前書き）

若干ですが卑猥・性的な表現が含まれます。
ご注意下さい。

その２－３７

こんな森の中にメイドさんがいるのは不自然だ。というか、今のご時世にメイドさんそのものが珍しい。それこそカリストのようにアルバイトとしてメイドの形（なり）をする程度であろう。

ところがカリストの前に現れたメイド少女は、それこそ明らかに本物のメイドさんの風格があった。メイド服もチープな作り物っぽさの感じられない本格的で高級なゴチック様式である。カリストは知るよしもなかったが、それはヴァレンタインの“寝床”で侍立していたアスタルテが着ていた物と同じデザインであった。

ただひとつ問題があるとすれば、そのメイドさんは明らかに子供だったことだ。ヘタをすればカリストよりも幼い……１０歳になるかならないかくらいの年頃に見える。

ある種の高慢ささえ感じられる気品のある顔立ち、長く美しいブロンドの髪、透き通るような色白の肌、容易に折れそうなほど華奢な体躯……そんなまるで“お人形さん”のような美幼女メイドさんがカリストの目の前に立っているのだ。

「ふわあ～♪　メイドちゃんだ～♪　ちっちゃくてカワイイねぇ♪」

様々な疑問や不審な点をスッ飛ばして、カリストは実にカリストらしい第一声で応じる。だが、それを聞いた美幼女は、その佇まいからは想像もできないほど酷薄な笑みを浮かべ、鈴のような美しく可愛らしい声でもって真っ向からカリストを罵倒した。

「話には聞いてたけど、あなたって本当に愚かなのね……哀れなほどに」

「んう……」

さすがのカリストも、これには違和感というか尋常でないモノを感じずにはいられない。イオも言っていたように、また何者かが自分を浚いに来たのだろうと直感する。だが、前と違ってカラダの自

由は利くし1対1だ、その気になれば逃げることも……。
「前もって言っておくけど逃げようなんて考えるだけ無駄よ。私とあなたの性能差は比較するのも愚かしいほどに差があるから」
美幼女はカリストの心中を見透かしたかのように自信満々に言い放ち、ゆっくりとした足取りで歩み寄ってくる。そんなことを言われるまでもなく、カリストはまるでヘビに睨まれたカエルのように体が竦んでしまい、すでに逃げる気を失っていた。
「そんなに怖がらなくても良いのに。私とあなたは家族みたいなものなのだから……」
そして美幼女はついにカリストの目の前に至る。小柄なカリストよりもさらにアタマ半分だけ身長が低いが、その威は完全にカリストを呑んでいる。カリストは顔を背けることも俯くこともできずに、ただただカラダの震えを押さえるので精一杯だった。
「ふうん……」
興味深げに小さく呟き、すいっとカリストに顔を近づける。その血の色と同じ深紅の瞳にカリストは息を飲んだ……そこには、まさにある種のヘビを思わせる冷たい光が灯っている。美幼女は悪戯っぽく自分の口元に細く長い人差し指を沿わして思案顔だ。
「あなたは愚かだけど、思っていたよりも遙かに綺麗な顔をしてるわ……このまま黙って連れて還るのは少し勿体ないかも……」
それから自分の口元に当てていた指先を離し、今度はカリストのくちびるに当てる。そのまま指を滑らせるようにしてあごからノドへとなぞっていく。幼女のそれとは思えないほど冷たい嗤(わら)い声を洩らしながら、その深紅の瞳をカリストの華奢なお腹へ向けた。
「……きっとカラダも綺麗なんでしょうね……」
「ああぅ……」
その突き刺すように冷たい視線に寒気を覚え、思わず小さく悲鳴を上げるカリスト。まるで氷でできたナイフをお腹の奥深くに突き立てられたような感覚。ココロもカラダも危険に晒されているのが判ったが、それでも抵抗することさえできそうにない。

やがて指先はカリストの正中線に沿ってムネから鳩尾(みぞおち)、お腹へと至る。清らかで気品のある美幼女の態をしてはいるが、その仕草は妖艶な魔女さながらだ。

「もし私の好きにさせてくれるというなら……」

不意に片手が伸びてカリストの腰に回された。カリストが驚くよりも早く、まるでヘビが得物に襲いかかるかのように素早く美幼女のくちびるがカリストの首筋に迫る。その僅かに嘲笑を含んだ美しいくちびるの隙間から紅い舌がチロチロと覗いたていた……その舌先が二股になっているように見えたのは決してカリストの目の錯覚ではない。

腐敗する寸前の果実が放つような甘諄(あまくど)い芳香がカリストの意識に滲入してくる。突然にカラダの奥から沸き上がる得体の知れない激しい衝動……まだ幼いカリストには理解できない衝動だったが、先ほどまでとは一転して、お腹の奥が燃えるように熱く感じられ、思わずカリストは小さく吐息を漏らしてしまった。

「あぅ……♪」

「そう、ココロもカラダも私に明け渡すの……」

カリストの意識は紗を掛けられたように甘い障気に侵されていく。このままでは拙いと感じたが、むしろこのまま全てを甘受したいという誘惑に引きずり込まれつつあった。

その時、カリストを支えるのはイオへの想いだけだ。ブランデンブルク門の下、別れを交わした時に握った手の感触、触れ合ったオデコとオデコ、イオの恥ずかしそうな笑顔……それだけが今のカリストを支え、現実に連れ戻す。

『こんなの、何かヘンだよっ……！』

カリストはイオへの想いを全うしたいという望みを思い起こす。

『イオ！　わたし、いまとってもイオに会いたいよっ！』

美幼女はカリストのお腹に這わした指先を更に下へ下へと滑らせ

ながら、そのヘビさながらの舌で耳元を擽るようにトドメの一言を囁いた。
「そうすれば……あなたが正気を失うまで何千回、何万回だって悦ばせてあげる」
「ふわあ！」
イオへの想いを振りかざし自らを励起したカリストは大きく叫んで、全身全霊のチカラで飛び退いた。何も考えなしに全力で跳ねたため着地に失敗して受け身も取れずに芝草の上に転がる。そこには不運にも手頃な大きさの岩石が待ち構えており、それで嫌というほどアタマを強打した。
「むわあ～！？」
カリストは後頭部を押さえて悶絶を開始する。
「……なんて嗜みのない娘……やはり救いようもない愚か者ね」
美幼女は落胆の貌を見せ、七転八倒しているカリストを蔑みを含んだ眼差しで見下すのだった。

その２－３７（後書き）

＊注意＊

本作の登場人物の大半はロボットです。
なので、見た目が幼く見えるだけで、１８歳未満だとか、そんなの
の埒外です。
ロボットですから。
それどころか“女性”ですらありません。
ロボットですもの。
そういう風に見えるだけだということを、予めお断りさせて頂きま
す、はいｗ

その２－３８（前書き）

若干ですが卑猥・性的な表現が含まれます。
ご注意下さい。

その２－３８

カリストの籠絡に失敗した美幼女は、転げ回っているカリストを蔑み見ながら、忌々しげにその端麗な顔を歪ませて吐き捨てる。
「いずれにしても連れて行くわ。それからもう何も考えられなくなるくらい滅茶苦茶にしてあげる」
「むわあ～！」
「あなたは私専用の人形（オモチャ）になるの。昼も夜もなく、何日も何日も気が触れるまで弄んであげるわ」
「むわあ～！」
「……本当に趣も嗜みも無いのね」
まだ頭を抱えて悶え転がっているカリストに、いい加減ウンザリした様子の美幼女。溜息をついて思わず顔を背ける。
その瞬間を見逃さず、カリストは素早く飛び起きて全速力で逃走を図り……美幼女に遮られた。信じられない反射速度と動作で美幼女はカリストの前に立ち塞がっていた。
「ふぇ！？」
「本当に愚かね。だから言ったでしょう？　あなたは私から逃れられない」
それから再び厭らしい笑みを浮かべて続ける。
「あまり“おイタ”が過ぎるなら、手足をもぎ取ろうかしら……イモムシみたいな姿にして飼い慣らすのも面白いかも」
「んう」
イオから伝えられている限り、バイオロイドは身に危険が迫った場合に自動的にリミッタが外れ、非常に高い戦闘機動を行うことができるとのことだった。今こそが“身に危険が迫った場合”なのだろうが、しかしなぜかリミッタが解除されないのだ。これでは抵抗しようにもムリがある。今のカリストは見た目と同様に“せいぜい１２歳くらいの普通の女のコ”程度のチカラしか出せないのだ。

そんなカリストの心中を再び見透かすように美幼女は言う。
「何度も同じ様なことを言わせないで。あなたが仮に全力で機動できたとしても、私には絶対に敵わない。無駄なことは考えないで。そんなことよりも……」
そして不意にカリストのムネに手を伸ばし軽く突いた……カリストは抗うこともできずに腰が砕けてヘナヘナと芝草の上にシリモチを着く。
「ああぅ」
「どうせ何をしても無駄なんだからヘタな悪足掻きはやめて、あなたは黙って私の言う通りにすれば良いの。そうすれば今後は何かと手心を加えてあげるわ」
美幼女は冷たい笑みをカリストに投げかけ、しゃがみ込んでいるカリストの傍らに膝を突いて、その肩に手を掛けた。
「ただ痛い思いをするのと、気持ちイイ思いをするのと、どちらが良いかしら？　もっとも……気持ちイイとは言っても、あなたの場合は初めはそれなりの苦痛も伴うでしょうけど……その純潔の証を私に捧げなさい？」
正直、カリストは先ほどから美幼女が何を言っているのか、その真意のほとんどを理解できないでいた。一緒に楽しく遊ぶというならそれも悪くはなかったが、何かを強要されたり自由を奪われたりするのはカリストの本意ではない。
「砂糖菓子みたいに華奢な肩……このまま握り潰してしまおうかしら？」
美幼女はゾクゾクとする笑顔で嬉しそうに呟く。
「あなたは愚かだから何も判っていないようだけれども、その綺麗で無垢な顔が快楽の貌（いろ）に焼け爛れるまで、ココロもカラダも私が舐（ねぶ）り尽くしてあげる」
「んぅ……い、イタイよっ……！」
肩に掛けられた手が、何の気なしに万力のように締め付けてくる。数字にするなら数トン近い圧力だ。

「ほら……壊されるのが厭なら、私の厚意を素直に受け容れなさい？　その可愛らしい瞳に精一杯の涙を浮かべて、“もう赦してください、好きにしてください”って哀願するのよ」
自らの言葉に陶酔したようにウットリとした表情で身震いすらする美幼女。
「だらしなくヨダレを垂らしながら濁った瞳で私を求め続けるあなたを愛でたいの。すぐよ、すぐにそうなるわ」
そして心底から可笑しそうに嗤い声を上げた。この世のモノとは思えない清楚で淫猥な嗤い声……この期に及んで、ようやくカリストは“このコはマトモじゃない”と感じた。アタマがヘンだとか、そういう次元ではない。もう根底から尋常ではないのだ。

ウンともスンとも言えずに怯えているカリストに対して美幼女は一方的に焦れ、その両肩に手を掛けると、ついにそのまま押し倒してきた。実際には“押し倒す”などと言えるほど優しいモノではなく、カリストは芝草の上に上半身を叩き付けられる。
「んうっ！」
「もう良いわ。返事なんて意味がないもの……何と応えようともあなたは私に囚われ痛ぶられ奪われるしか途がないのだから」
そう言うや否やカリストに覆い被さる。まるで大蛇が獲物を締め殺すかのように手足をカリストのカラダに巻き付けながら、その細い首に手を掛けたのだった。

もう何が何だか判らない。何の確証もなしに“ここ”だとヤマを賭けた。ヴァレンタインは賛成も反対もしない。藪と灌木の枝を掻き分けて林の奥に進むと不意に視界が開け、小さな湖沼に出る。
「カリスト、よくここでカエルの観察してるし……」
キョロキョロと辺りを見回してみると、灌木の影にカリストの小型バイクが停められているのを見つけた。イオは手を叩いて飛び跳

ねる。
「やったわ！　やった！　喚び合ったわっ！　引き合ったっ！！」
「急いでカリストを探そう！　もう接触されているみたいだ！」
「たぶん岸辺にいるわ！　前にそう言ってたし！」
ふたりが転がるようにして湖岸まで走り、見れば、そこに今まさに何者かに乱暴されようとしているカリストの姿があった。

その２－３８（後書き）

＊注意＊

本作の登場人物の大半はロボットです。
なので、見た目が幼く見えるだけで、１８歳未満だとか、そんなの
の埒外です。
ロボットですから。
あと、たとえロボットでも女のコに乱暴をするのは絶対にダメです
よ！
女のコを泣かせるような男は５６億７千万年ばかり地獄で罪を贖う
べし！ｗ

その２－３９（前書き）

若干ですが卑猥・性的な表現が含まれます。
ご注意下さい。

その２－３９

乱暴されかかっているカリストを認めるや否や、イオはアタマが真っ白になる。なぜカリストがとか、誰が何のためにとか、相手が何者なのかとか、そんなことさえ気にしなかった。思うよりも早くリミッタが解除され、１００ｍ５秒台の加速力でもってダッシュする。

ヴァレンタインが何か叫んだような気がしたが、何を言っているのかイオには判らない。あらゆる音声や映像に意味はなく、ただカリストだけが今のイオにとって有意の存在だった。カリストを手に掛けようとしている人物が非常に幼い容姿をした美しい娘だということも判ってはいたが、手加減とか説得とかを考慮する余地も余裕も無い。

「そのコから離れなさいよっ！！」

一瞬で詰まった間合いから全身のバネを生かして流れるように横蹴りを放つ。掠っただけでも生身の人間ならアタマが飛ぶだろう。が、もう相手のことを気遣うような猶予もない……カリストを解き放つことこそが唯一至上だった。

人間の常識では理解できない速度で放たれたローファーを履いた足刀が、美幼女の側頭部を捉え……ようとした刹那、美幼女は僅かにイオに向き直った。その冷たい輝きを放つ深紅の瞳が微かに嗤ったように見えた。

「……！？」

次の瞬間、イオは全身が泥にぬかったように重くなっていくのを感じた。重力が何十倍にもなったように感じられ、１秒を理論値１億５０００万単位にスレッディングしていた時間が一気に速度を取り戻す……外れたはずのリミッタが再び掛かったのだ！

そう理解した時には美幼女の姿はイオの視界から消えていた。いや、正しくは視界の中に収まってはいたが、美幼女の動作はイオの意識が追従できる速度を遙かに超えていたのだ。まるで悪い夢の中にいるような気分だった。気が付くと蹴り出した足首を美幼女に掴まれている。

「……あなたがカリストの懸想(けそう)の人なのね？　ふうん……」

スラリと伸ばされたイオの脚を、爪先から“その根元”まで、舐めるように品定めするように視線を動かしていく。

「会社支給の制服なのにスカートの丈を自分で詰めたのね？　こんなにも脚を露わにして愚かしいほど嗜みのない娘。バイオロイドは清楚清廉を佳(よ)しとするというのに……可愛らしい下着が丸見えよ？」

そしてイオが何事かを言おうとするよりも早く美幼女は足首を掴んだ腕を大きく振り上げる。イオは激しい突風にでも衝かれたようにカラダを回転させ、地面に叩き付けられた。

「あ、うっ……！？」

凄まじい衝撃に絶句するイオを美幼女が神速で組み敷く。片手を首に掛け、もう一方の手をイオの内モモに沿わし、カリストにしたようにその耳元にくちびるを寄せる。

「……あのコには少し劣るけど、あなたも綺麗な顔とカラダをしているわね。同性同士で愛し合っているなんて、主の御心に反した愚かな情愛だと思わない？　それに……“おイタ”をした“ご褒美”をあげないと」

「あっ……！？」

イオの内モモに這わした美幼女の手が、その肌を舐めるように制服の短いスカートの下へ潜っていく。イオは全身が痺れたように感じられ自由が利かない。抵抗しようにもチカラは萎え、その意志さえ沸き上がらない。

「愛し合っているとはいえ、もちろんまだカラダを交わしてはいないようね。折角だから私が手ほどきしてあげるわ」

幼稚なカリストとは違い耳年増なイオは、美幼女が何を言ってい

るのか理解できたし、何をしようとしているのか想像が付いた。イオにとってそれは……実行するには考えも及ばない次元の話だったが、ただ、もし許されるならカリストを置いて自分に相応しいと思える存在は他にない。

なのに、こんな所で、こんな得体の知れない相手になんて……！

「あ……やめ……あぁ！」

「そんなに厭がらなくても良いのに……あのコのことを想いながら独りで“イケナイこと”していたのはどこの誰かしら？　それを私が手伝ってあげると言っているの。ほら、あなたが独りで何をしてるのか、あのコにも詳しく見せてあげましょう？」

「！！……そっ、そんなコトっ……してないっ……！」

恥ずかしさと悔しさでイオの瞳に涙が滲む。カリストの前で、よりにもよってカリストの前で、そんな姿を晒されるとは悪夢以外の何者でもない。そんなことをカリストに知られるわけにはいかない。だが、イオの手足はただ虚しく地面を掻くだけだった。

「あなたのことなら何でも知っているわ。どんな情景を思い描いてるのかとか、どこをどういう風にするのが一番“イイ”のかとか、ね？」

「！……い、イヤっ……イヤぁ！」

イオは目を固く閉じアタマを振る。まるでココロを鷲掴みにされているようだった。

「うふふ……“初夜権”って知ってる？　愛し合うあなたたちのために、私がふたりを祝福してあげる」

その時、ヴァレンタインの声が聞こえてきた。

「リリケラ！　いい加減に止めるんだ！　それに初夜権は都市伝説だよ」

どこかしら間の抜けたヴァレンタインの呼びかけに、美幼女（リリケラ）は興を殺がれたとでも言いたげに大きく溜息をつき、顧みる。

「……ヴァレンタイン、邪魔をしたらこのコを縊り殺すわよ？　そ

れとも……このコ、少しあなたに好意を持っているみたいね。何だったら……あなたが悦ばせてあげたら？」
「バカなことを言うんじゃない。いいかい、あの女（ティア）の言うことなんか素直に聞く必要はないんだよ。適当に調子を合わせていればそれで……」
何とかしてリリケラを説得しようとするヴァレンタインだったが、一方、組み敷かれているイオはリリケラの言葉に激しい憤りを感じる。
（なっ！　バカなこと言わないでよっ！　なんであんな変態のことを私が好きだっていうのよっ！？　絶っ対に有り得ないっ！　私はカリストが……！）

その時、イオを支えるのはカリストへの想いだけだ。ブランデンブルク門の下、別れを交わした時に握った手の感触、触れ合ったオデコとオデコ、カリストの嬉しそうな笑顔……それだけが今のイオを支え、自分を連れ戻す。
『他のヒトのことなんて知ったことじゃないっ！』
イオはカリストへの想いを全うしたいという望みを思い起こす。
『カリスト！　私は、カリストに会いに来たのよっ！』

イオの両腕にチカラが蘇る。リリケラの意識も少しばかりヴァレンタインに向かっていたということもあり、その隙を衝いてイオは自らの首に掛けられていたリリケラの手を捕り、これを外そうと試みる。
「愚かな悪足掻きを……」
イオが気力を取り戻したことを悟ったリリケラが端正な顔を歪めて笑い、いよいよ手にチカラを加えようとした瞬間。
「ふわあああ～！！」
気の抜けた叫び声と共に、息を吹き返したカリストが腰の引けたタックルをリリケラに放ち、これをイオから引き剥がすことに成功

した。さすがのリリケラも、まさかカリストに奇襲されるとは考えてもいなかったらしく、無様に地面に伏す。
「イオ！　イオ！」
「カリストっ！」
カリストは泣き声で叫びながらイオの上体を抱き起こし、イオもそれに応えるように腰を上げようと膝を立てる。だが、何をどうすればこの危機から逃れられるのか、まったく方途が見出せなかった。

その２－３９（後書き）

次話から割と正常（？）進行に戻ります。
元から百合作品なので嫌悪感を覚える方はいらっしゃらなかったとは思いますが、
表現等、不快に感じられた場合は申し訳ありませんでした。

その２－４０

イオとカリストは互いを庇うように抱き合いながら、美幼女メイド（ラ）の様子を窺う。そこへヴァレンタインも駆け寄ってきて、リリケ（リリケ）ラとカリストらの間に立った。リリケラは芝草の上に伏したまま憎々しげに呟き、地面に爪を立てて震えている。

「……赦せない……私を辱めるなんて……！」

「なっ！　何が辱めるよっ！　私の方がよっぽど恥ずかしかったわよっ！」

思わず反射的に切り返したイオだが、このまま終わるとは思えない。今のウチに逃げようかとも思ったが、根本的な解決を図らずに、このリリケラとかいう得体の知れない娘の追跡から逃れられるとは到底思えなかった。

ところがヴァレンタインは横顔でイオを顧みて言う。

「今だ、カリストを連れて逃げて」

「で、でも、ヴァレンタインは？」

「大丈夫、リリケラはオレを殺すことはできない……と思う、たぶん」

「たぶんって何よっ！」

思わず突っ込むイオ。それに、どうにもヴァレンタインを独り残して逃げ出すのが気に食わない。それを聞いたヴァレンタインは苦笑したが、リリケラもくすくすと笑い始める。

「……ヴァレンタイン？　確かに私はあなたを殺すようなことはしないわ。でも、手足の腱を引きちぎって動けなくすることぐらいならできる」

そしてリリケラは腕のチカラだけで自らのカラダを跳ね上げて、その場に立ち上がった。先刻までの悔しそうにしていた様子は今は微塵も無く、再び悪戯っぽい酷薄な笑みを浮かべている。

「ねえ、ヴァレンタイン。それとも今ここで私をいつものように愛

してくれない？　私を満足させることは絶対にできないとは思うけど……そうね、あなたが果てるまでカリストたちに逃げる時間を与えるわ。これでどう？　悪い条件ではないと思うけど？」
「つまらない冗談を言うんじゃない……そうでなくてもイオに誤解され……」
「最っ低っ！　ヴァレンタイン、あんた本物の変態ロリコンよっ！」
「？？？」
イオは吐き捨てるように叫び、カリストは首を傾げるばかり。
「……もう頑張ってカッコ付けても名誉挽回できなさそうだな……それでもオレはオレの務めは果たさないと」
イオの蔑みの眼差しを後頭部に感じながら苦笑するヴァレンタイン。いずれにしても何とかしてリリケラを押し止めて、カリストらを逃がす腹積もりであることに変わりはないらしい。
「ほら、早く逃げるんだ、イオ！　カリスト！」
ヴァレンタインに庇われるようにして抱き合っていたイオとカリストだったが、ふたりとも聞き分けは悪くない。ここで出しゃばったところで先ほどの二の舞は明らかである。ヴァレンタインが大丈夫だと言っているなら大丈夫なのだろう。
「ほ、ほら、カリスト、逃げるわよっ！？」
「う、うん……」
イオらが逃げ出そうとするのを察し、いよいよリリケラの機嫌が悪い。
「ヴァレンタイン！　そんな娘たちに手を貸して何が楽しいのかしら？　私よりもアスタルテやサイベルの方が良いというのね？」
「そうに決まってるだろう。君と違って彼女らは品があるし、何よりムネが大きい」
薄笑いでリリケラを挑発するヴァレンタイン。それを聞いたリリケラは表情ひとつ崩さない。
「愚かしいわヴァレンタイン。私が欲しいのはあなたじゃなくてカリストなの。私は怒りで思考を曇らせるようなことはしない。精一

杯の挑発も空振りね」
「……そうかな？　時間は稼げたよ」

その時、対峙する４人の頭上にフワフワと小気味良い音をたてながら１機のティルトローター式の小型ヘリが飛来し、ホバリングを始めた。排気音の無いリニアエンジンと静音プロペラゆえに接近に誰も気付かなかったのだ。黒塗りの機体には機体番号も認識記号も描かれておらず、見たこともない型式の小型ヘリである。
「あ～♪　ヘリコプタ～♪」
「んぶっ！　風がっ！」
カリストとイオは巻き起こる風に目を細めて上空を見上げているが、リリケラはここに至ってついに明らかな狼狽の色を垣間見せる。
「ヴァレンタイン、あなた、さんざん大きな事を言っておきながら何よ？　結局は……」
「手段は関係ないよ、目的さえ果たせれば。悪かったね、リリケラ」
ヘリのサイドハッチが開き、一瞬だけ誰かが顔を覗かせる。女性なのだろうか、風に煽られて銀色の長い髪が靡（なび）くのが見えたような気がしたが、すぐにそれに代わって昇降用のワイアタラップが降ろされた。
「時間切れだ、リリケラ。このまま今日は黙って帰るんだ……良い子だから」
ヴァレンタインの言葉にリリケラは一瞬だけ怒りの色を見せ、それから観念したように表情を崩した。何か憑き物が落ちたかのように妙に穏やかな声で応える。
「……そうした方が良さそうね。少し疲れたわ。もう飽きてきたし今日は帰る」
そして目の前に垂らされた縄ばしごを掴み、足を掛け、それからイオとカリストに向き直る。硬い表情で成り行きを見守っていたふたりに、蠱惑的な笑みを投げかけ告げた。
「今日は有り難う、それなりに愉しめたわ。続きはあなたたちでお

好きなようにするといい……イオ、今ならカリストも“その気”になってくれるんじゃないかしら？　……それではごきげんよう」
「なっ！？」
「？？？」
赤面するイオと相変わらず意味が良く判らずに小首を傾げるカリストへ意味深な微笑みを投げかけて、リリケラは作法正しくスカートのスソを手で抑えながらヘリコプターに連れられて天へと昇っていった。

かくして嵐のように訪れた脅威は、やはり嵐のように唐突に去っていった。ヴァレンタインはヘリが遠くまで去っていくのを見送り、振り返ってイオとカリストを見ると、ふたりは言葉もなく黙って、ただただ互いを強く抱きしめているのだった。

その２－４０（後書き）

「な、なんとか巧く切り抜けたわっ！？」
「いやまったくオレのお陰だよね」
「出たわね真性ロリコンっ！　だいたい、もっと早く止めに入りなさいよっ！」
「いや、なんかタイミングを逸して」
「さては、わ、私が、へへへ変なことされるの見てたんでしょっ！？　変態っ！」
「……独りでしてるの？」
「なっ！　ばっ！　そんなことあｑｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；……！！」

その２－４１

ふたりは抱き合い、見つめ合い、抱き合い、見つめ合う。

何か言いたいこと、言わなくてはならないことが互いに山ほどあったはずだが、もう全部が飛んでしまった。お互いの顔を見ただけで何を想っているのか通じ合う……それは勘違いや勝手な思い込みなのかもしれなかったが、少なくとも今、イオとカリストの間ではそれが成立しているらしかった。

「カリスト……私ね……」

「えへへ……なあんにも言わなくてイイよっ……でもねぇ、わたしねぇ、イオ……」

「イイわ、カリスト、言わなくても判ってる……」

傍目にはまったく意味の通らない言葉を疎らに交わしながらも、ふたりは微笑み見つめ合っては、ギウギウと抱き合う。そこから先には進まないのだけれども、こうするより他に適切な気持ちの表現方法が（少なくともカリストには）判らなかった。

やがてどちらからともなく嗚咽を漏らし始めて、最終的にふたりは抱き合ったまま子供らしくワアワア泣き出す。笑顔で泣く。そして、どうやらこれを以てして仲直りの儀式とすることになったのだった。

「イ～オ～♪　泣いてるお顔もカワイイねぇ♪」

「あ、あんたの方が泣き顔はカワイイわよっ！」

「イオのがカワイイよ～♪」

「あんたの方が、ずっとずっとカワイイのっ！」

「イオのがカワイイってば～♪」

「あんたの方が絶対にカワイイのっ！　そ、そうじゃないと……私が困るのよっ！」

何を言ってるんだ私は……イオは自分が可笑しい。これ以上の好

機は無いと思えるくらいの好機なのに、それでも“もう一声”が言い出せない自分さえも愛おしかった。

私と、カリストと、ふたりで一緒にいられる。お互いが望む限り、いつまでもずっと。

「ほ、ほらぁ！　いつもみたいに笑いなさいよっ！　カリストっ！」

「笑ってるよ～♪　嬉しいのに涙が出ちゃうんだよ～♪」

ありがとう、カリスト。

そんなふたりの様子を少し遠巻きに眺めながら、ヴァレンタインはタバコに火を点けてヘリが去っていった東の空を見る。少し溜息をついて、アタマを掻いた。

「……またティアに文句言われるんだろうなあ……オレが悪いワケじゃないんだけどな」

好きでやっていることとはいえ、どうにも貧乏クジを引いている気がしないわけでもないヴァレンタイン。自嘲に自嘲を重ねる自分に、やはり自嘲する。それでもカリストとイオを護ることができたことには満足していた。

「……リリケラ、もしかして憎まれ役を買って出たのかな？　いや、まさかね……もしそうだったとしても……半分以上は趣味と実益を兼ねて、だろうな」

その頃、当のリリケラは眼下を過ぎていくポツダム－ベルリン間の風景を退屈そうに眺めていた。あの淫猥で悪趣な立ち振る舞いが嘘のように、どこぞの少し不機嫌な貴族令嬢を思わせるような気品に満ちた物憂げな表情だ。まるで先程までの記憶を失っているかのようにさえ見える。

操縦席に座っているのはリリケラやアスタルテと同じメイド服を

纏った、見た目は１０代半ばを少し過ぎたかという年頃の少女だ。
銀糸のような美しいストレートロングの髪、冷たく射抜くような金色の瞳、怜悧さを秘めた秀麗な顔立ち……やはりアスタルテやリリケラと同様、この世のものとは思えない、超俗したような容姿と雰囲気を漂わせていた。

リリケラは一瞥もせずに、上の空のように言う。
「ねえ、サイベル。ヴァレンタインが、あなたはムネが大きいから好きだと言っていたわ」
サイベルは一瞬だけ自分の大きな胸に目をやってから、顔色ひとつ変えずに淡々とした口調で応じる。
「それがヴァレンタインさまの真意だとは思えません」
「……ああ、そう。私は羨ましいわ、“それ”が」
ムッツリと返すリリケラだったが、しばらく黙った後、ようやくサイベルに向き直る。
「サイベル、あなた、怒っている？」
「なぜですか？」
サイベルは前方を凝視しながら、あくまでヘリの操作に集中しているように見えた。それほど興味なさそうにサラリと応じるばかりだったが、リリケラは構わず続ける。
「私がカリストに乱暴しようとしたこと」
「済んだことですから、今さら咎めても仕方ありません」
「あなたが本来の務めを果たそうとしないから、こうなったのかも？」
「……わたくしは、ただカリストさまの幸福を願うだけです。紆余曲折こそあれ、結果的にカリストさま心身共にご無事で、イオさまと再び心通わすことができたのですから、わたくしはそれで充分です」
「嘘おっしゃい……本当はカリストに逢いたかったと思うのだけれど？」

リリケラの声色には明らかに若干の憐憫が込められていた。
それでもサイベルは前方を向いたまま、ひとつ間違えれば無表情・無感情だと思われかねないほど怜悧な表情を僅かに崩すことさえなく、毅然とした口調で応える。
「わたくしの願いや望みは問題ではありません。カリストさまが望むよう幸福に健やかに日々をお過ごしになられれば、それがわたくしの本望です」
「そう……それならば良いのだけれど」
リリケラは何を言っても動じないサイベルを特に不愉快に感じるわけでもなく、コクンと大きく頷き、再びしばらく沈黙の後に思い出したかのように呟く。
「それにしても、あのコ、これからどうするのかしらね。あなたやヴァレンタインが言うように、ずっと好き勝手に野放しにしておくの？　私にはそれが良いとは思えないんだけど……」
「……」
それにはサイベルは応えず、黙ってヘリを飛ばし続けるのだった。

その２－４１（後書き）

「イ～オ～♪　わたしのこと助けにきてくれたんだね～♪」
「あ、あくまでも職務上の義務でなんだからねっ！？　かっ勘違いしないでよねっ！？」
「イ～オ～♪　絵に描いたよなツンデレちゃんでカワイイねぇ♪」
「なっ！？」
「そいでねっ？　ちょと教えてほしいんだけど、メイドちゃんが言ってた“イケナイこと”ってば何なのかなっ？」
「ブフォ！？」
「次話からエピローグになるよ～♪」

その２－４２

数日が経った。

カリストは朝早くに起きてシャワーに入り、イオから送ってもらった会社の内勤制服（実質的には女子学生用ブレザーだが）を少し手直ししてから身に付け、髪を丁寧に梳いた。それからコロンの類を買っていないことを思い出し、例によってバニラエッセンスを数滴ばかり首筋に擦り込んで良しとした。

『ね、ねえ、カリスト……あ、あの、あ、明日……ベルリンに遊びに来ない？　あのその、明日、休みを取るから、その……こっこの前の約束……ふっふたりでベルリンで、でででデー……』

カリストは身支度を万端整えるとニコニコしながら部屋を出る。

「えへへ～♪　デ～ト～♪　イオとデ～ト～♪」

カリストは震えがくるほどシアワセだった。イオと１日中いっしょにいられるのだ。いっそのことベルリン観光なんかせずに、朝から晩までお部屋デートでもイイとさえ思えるほどに、カリストはハッピーだった。

その頃、イオもカリストと同じように身支度を整え終えていた。カリストの黒のヘアバンドに揃えて前もって用意しておいた黒いリボンでツインテールを結わえる。観光ルートも事前にチェックしたし、会社系列のレストランディナーも予約した。

鏡に向かって何度も笑顔を作る。自分の目から見ても硬い笑顔だ。

「カ、カリスト……す、すすすす……！　もっかい！　カリスト……すすすすｋ……！！」

練習は明らかに成果を上げていない。そうこうするうちに次第に羞恥心が沸き上がってくる。
「む、無理っ！　絶対に無理っ！　独りでやってても死ぬほど恥ずかしいっ！」
どうにもカリストを目の前にして「好き」と言える気がしない。あんなに容易に素直に「大好き～♪」と連呼できるカリストの神経を疑ってしまう。だが、ココロのどこかではカリストに改めて言葉で伝えなくても大丈夫な気がしていた。きっとカリストに私の想いは伝わっている。
「……とは言っても……やっぱり……」
自分から告白して、笑顔で「うん♪」と頷くカリストが見たい。判りきっていることであっても可能な限り感じたかった。せっかく相思相愛のヒトがいるんだから、それを願うのは決して悪い事じゃないはず……。
それは格下相手の消化試合を全力で勝ちに行くような、大人げない自己満足を満たすための欲求なんだろうな……と、イオは少しだけ浅ましく、少しだけワガママな自分に苦笑いする。
「一番大切なモノは目には見えない、か……。子供よね、私も」
でも、その“一番大切な”存在が、目の前に見えて、触れることができる。これからだって多少の齟齬や擦れ違いはあるかもしれないけど、私は願う限りカリストと一緒にいられる。カリストが私のことをどう思うようになるか今は判らないけれど、私はずっとカリストを想うことができる。人生において、これ以上の幸福があるだろうか。
そんなことを考えている鏡に映ったイオの表情は、輝くばかりの笑顔なのだった。

昼の１１時、ふたりは約束の場所だったブランデンブルク門の下で落ち合う。

「せ、制服、着てきたんだ？」
「えへへ～♪　似合ってるかなっ？」
「うん、似合ってる。か、かかかカワイイわ……とっても」
願ったように制服姿を披露してくれたカリストに、イオは切ないくらい嬉しさを感じた。
それにしてもカリストは思い切ったもので、恐ろしくスカートの丈を詰めていた。元から幼児体型にしては素晴らしく脚が長いこともあり、少し大きめのブレザーと相俟って、ほとんどスカートがブレザーのスソに隠れてしまっているほどだ。
「……随分と短くしたのね、スカート」
「えへへ～♪　短いのがカワイイもんねぇ。それにいっつもスパッツ穿いてるから、あんましフトモモのトコでヒラヒラするの好きくないんだよねぇ……えへへ。あとねぇ、おパンツ穿くの初めてだから、ちょとヘンな感じがするよっ♪」
「ふうん……って、ええ！？　パパパパンツ穿くの初めてっ！？　そ、それって何よっ！？　ええ！？　もしかして……そ、その、今までスパッツの下に、ななな何も……？」
「そだよっ？　ヘンかなっ？」
天真爛漫というか非常識というか、相変わらず独自路線を行くカリストに肝を冷やすイオ。会社支給の特殊素材製のスパッツとはいえ、見た目も手触りもペラッペラの薄布だ。前々からスパッツを穿いたカリストのお尻に何のラインも浮いていないとは思っていたが、そういうことだったとは……。
「も、もうっ！　今度からスパッツの下にパパパパンツ穿きなさいよっ！？」
「んえ～？　おパンツ穿くと、おマタとかおシリがヘンな感じするからイヤだよぉ」
そんな少しのやりとりの後、ふたりはベルリン観光という名のデートに繰り出した。お互いに生まれて初めてのデートだ。カリスト

は例によってそれほど意識はしていないようだったが、イオは歓喜のあまりに飛び跳ねたい気持ちを必至で押し込んでいた。
「そっ！　それじゃあ出発するわよ！？　勝手にウロウロして迷子とかになっても知らないからねっ！？」
「えへへ～♪　イ～オ～♪　おテテつなご～？」
何の気なしにカリストはニコニコ笑いながらイオに手を差し出す。
「なっ！？　こ、こんな人通りの多いところで、なに言って……！」
どうしても素直になれず反射的に否定しかかったイオの手をカリストはサッと握り、さらにそのウデにしがみ付く。プラチナブロンドの跳ねた毛先がイオの頬を撫で、甘い匂いを振りまいた。
「あ……♪」
「えへへ～♪　いこっ？」
心底から嬉しそうに微笑むカリスト。その愛おしい明るい笑顔に送られるのなら、イオは今ここで死んでもイイとさえ思えてしまう。踏み出した足は雲の上を行くかの如くなのだった。

その２－４２（後書き）

「もうしばらくエピローグは続くわ」
「もうオハナシ進まなくっていいよ～♪　ずっとイオとデートしてる～♪」
「そ、そういうワケには行かないわよっ！？」
「そっかなぁ？」
「……あ、あんたが、そうしたいって言うなら、そ、その、私も、それでイイけど……」

その２―４３

イオとカリストは観光バスなどでベルリン中をグルグル回ることにしたが、まずは落ち合ったブランデンブルク門のあるパリ広場からほぼ真西、新緑の木々に覆われた大ティーアガルテンを抜ける“６月１７日通り（シュトラーセダスズィブツェンスステユーニ）”に向かう。清々しい木立を眺めながら徒歩で移動し、戦勝記念塔（ジーゲスソイレ）を目指した。

戦勝記念塔もまた、ブランデンブルク門に匹敵するほど歴史のあるベルリンのシンボルである。全高６７ｍの塔の頂点には陽の光を眩しく反射する勝利（ニケ）の女神が荘厳に立ち、ベルリンとドイツを見守っている。

イオとカリストは展望台に続く２８５段の螺旋階段を昇ることにした。

「あ、あんたが先に、あ、上がりなさいよ？」
「どして～？　いっしょにおテテつないであがろ～？」
「わ、わわわ私は、うううう後ろから上がるからイイのっ！」
イオは強硬にカリストを先に行かせようとする。
（見えそうで見えなくて気が変になりそうなんだからっ！　ここなら絶対に……）
明らかに良からぬも微笑ましいイオの奸計にカリストは疑うべくもなく引っかかった。
「うん♪　そいじゃ、わたしが先に上がるねっ♪」
そう言ってカリストは階段を昇りはじめ、なぜか少し首を竦めたイオがそれに続く。
「はあ、はあ……昇るの、ちょとタイヘンだねぇ♪」
「はぁ、はぁ♪　え？　えええええ、まままあねっ！？」
ふたりの少し上気したような呼吸の原因は明らかに異なっていたが、カリストは訝しがりもせずに、展望台から東に伺えるブランデ

ンブルク門を指差し、イオに微笑みかけるのだった。
「ふわあ～♪　とってもとってもよく見えるよっ！」
「う、うん、とっても良く見えたわ」

その後、ふたりはカリストが以前ベルリンに来た時に眺めるだけにして我慢した幾つかの名所を見学して回ったり、ちょっとした軽食を摂ったり飲み物を飲んだりアイスクリームを食べたり。
もちろんカリストは何を見ても大喜びだったが、気が付くとイオを見つめている。いつしかイオも自然に素直にカリストの手を握っている。さりげなく瞳を交わし、頷き、微笑み合う。互いに何も意識することなく一緒にいられることが、とても幸せだった。
美しいふたりの少女は、まるでつがいの小鳥のように、与えられた時間の中を寄り添いながら自由に翔び回った。

だが、愛おしい一瞬が永遠に続くことはない。西日がベルリンの街を赤く染め、予約していたレストランに連れ立って入る頃にはイオは少しだけブルーになっていた。
（……こうやって一緒にいられるのに、どうしてこんなに切ないんだろう？）
会社関係者だということもあり、滞りなく次々と運ばれてくる豪勢なディナー。記憶にある限り本格的なディナーコースなど見たことの無かったカリストは感激しきりの様子だ。
「ふぇ～！　とってもとってもおいしそだねぇ♪」
「う、うん……そうね。遠慮しないで……っても、あんたが遠慮するとは思えないけど、好きなだけ食べてね」
ふたりは子供用シャンパンで乾杯して、料理を食べ始めた。容赦なくガツガツと行くのかと思いきや、意外にもカリストはテーブルマナーに則った美しい食べ方をするので、イオは内心で舌を巻く。
（……なんだかカリストのことが良く判らない時があるな……）

確かに平素は天真爛漫で無為無策に生きているように見えるカリストだが、時に淑(しと)やかで極めて育ちの良い高家令嬢を思わせるような所があった。俗世界から隔別されて養育された、穢れのない純真無垢な箱入り娘……そう思わせるような部分が。

「このコリアンダーとルコラの冷製サラダ、オイシイねぇ♪」

「う、うん……（ルコラって何？）」

イオはアルコールに弱いというカリストに密かに酒を盛り、前後不覚にして自室に連れ込もうかという随分と思い切った奸計を一瞬だけ思い付いたが、ニコニコと嬉しそうに行儀良く食事をしているカリストの姿を見るにつけ、おのれの浅ましさを恥じる。

（やっぱりカリストを騙したり付け込んだりするのは良くない……あんな卑劣な方法で、パパパンツとか見たって……）

じゃあ堂々と見るなりやるなりすれば良いのだ、とは恐ろしくて考えも及ばない。全てを奪ってしまいたいほど愛おしいのに、やっぱり何も言えない、何もできない。ロボットなのに、要らぬ部分で随分と細やかに創られたココロとカラダが恨めしくもある。

この想いの行き着く先は何なんだろう？　私はカリストをどうしたいんだろう？

それは良く判っていた。自覚している。リリケラに指摘されるまでもなく、それを望んでいる。今までは気持ちを覆い隠して気付かないフリをしていただけで……もうここ数日、考えることはそればかりだった。だが、何よりも先に互いに想いを交わさなくてはならない。いくら願うままに生きることの素晴らしさを理解したとしても、その……物理的な行動は、その後だ。そこはかとなく自分の中に沸き上がっていたカリストへ向けられた暴力的な衝動を、イオは独りで押し込める。

（そんなの、あのリリケラとかいう得体の知れないのと同じじゃない？！　私は絶対にカリストを傷付けたりしない！）

「イ〜オ〜♪　こっちのクラムチャウダーもオイシイよっ♪」

どう考えても今の私とカリストは幸福だ。互いを“想いの鎖”で緩く結び付け、決して背を向けることはない。それだけは間違いなく確信できる。

「う、うん……うん！　とっても美味しいわよね！」

少しだけ割り切れたイオは、ようやく笑顔でカリストに応じるのだった。

その２－４３（後書き）

「イオのおパンツは白と青緑色のシマシマおパンツ～♪」
「なっ！？」
「ツインテのツンデレちゃんに最適おパンツ～♪」
「っていうか！　どうしてあんたが知ってるのよっ！？　ま、まさかあの変態から聞いたんじゃないでしょうねっ！？」
「ふぇ？　違うよ～♪　さっきイオのスカート、ちょとだけ捲って見ちゃったんだよねぇ♪」
「い、いつの間に……（この図太さが欲しいっ！！）」
「第２部は次でオシマイだよ～♪」

その２－４４

食事を終えレストランを出たふたりは、パリ広場の一角のベンチに並んで座る。もうすっかり西日も落ちきりブランデンブルク門は美しくライトアップされていたが、未だパリ広場は観光客やベルリン市民が多く往来していた。

ゴチソウを食べたカリストは上機嫌でテレテレ笑っている。

「とってもとってもオイシかったよっ♪　イ～オ♪　ゴチソーサマでしたっ♪」

「う、うん！　また連れて行ってあげる」

と、そこまで言ってから、イオは少し勇気を出して続ける。

「ねえ、カリスト……また、い、一緒に……あ、遊びに行こうね？」

「うんっ♪」

コクコクと頷き、満面の笑顔で応えるカリスト。更にイオは現状で出し切れる上限一杯の勇気を振り絞る。カリストへの想いは揺るぎはしないが、すべてを賭けて打って出ることができるほどには、イオの人生経験は足りていないので、これは仕方がない。

「カ、カリスト、あのその、てててて手……っ！？」

何とかそう言いきって、上向きにした左手をぶっきらぼうにカリストに差し出す。カリストは一瞬だけ驚いたような顔をしていたが、素晴らしい反射速度で躊躇うことなく右手を重ね、握った。自分から手を差し出しておきながら思わずカラダを強張らせるイオであったが、どうにか気を落ち着かせて握り返した。

「カ、カリストっ！？　あの、そ、そのっ！？」

「う、うん。イオ……♪」

「ねえ、えっと、ねえ、カリストっ！？」

「うん、えへへ、イオ……♪」

とても間の抜けた遣り取りだった。イオは言うに及ばず、カリストも言葉を継げずにいる。そのままふたりは黙り込み、ただ遠慮が

ちに互いの瞳をチラチラと覗き込んでは外すを繰り返す。
（あんたが先に言いなさいよっ！）
（イオから先に言ってイイよっ？）
無言で相手側から切り出すのを互いに待っていた。何と言えばいいのか、何と言われたいのか……まったく同じ意味の言葉を用意し、同じ意味の言葉を期待しているのに、ただ3歩進んで3歩下がるような時間だけが過ぎていく。それは数日前の気まずい行き違いとは正反対の、もどかしくも心地良い空白時間だった。

そんな躊躇いの気持ちに先に打ち勝ったのは……カリスト。

カリストはイオの手を握ったまま、ゆっくりと立ち上がる。イオが少し驚いてカリストを仰ぎ見れば、カリストは可哀想なくらい顔を真っ赤にして微笑んでいた。少し瞳が潤んでいる。
「ねぇ、イ～オ♪　えとねぇ……」
「う、うん」
思わずイオも立ち上がった。傍目には年頃の制服美少女が恥じらいながら見つめ合ったり微笑み合ったりしていたため、元よりある種の奇妙な光景として捉えられていたのだが、それによって明確に周囲からの視線が集まった。だが、そんなことはイオもカリストもまったく気にならなかった。すでに世界はふたりの意識の外にある。

カリストがイオの瞳を覗き込み、イオが小さく頷いた。そんなやりとりが何となく合図になって、どちらからともなく手を離し、互いの腰に緩く両腕を回す……それは今までに何度かした抱擁とは明らかに趣が異なるものだった。
フトモモからお腹の辺りまでがピッタリと密着する。互いの体温と鼓動が伝わってくる。ふたりは互いの瞳を見つめたまま、ベルリンの街の中心、ブランデンブルク門の真下で、無言のまま気持ちを交わし始める。

（……なんて言ってイイのか判んないよ……不思議な気持ちだよっ……？）

カリストは夢見るような想いでイオの瞳を見つめた。

大好きだという気持ちには変わりはない。今までだって何回も大好きだと言っては抱き付いたりしていた。だが、いま感じている気持ちは、そんな表面的な行動や態度で示せるようなものではなく、だからといって言葉で説明できるような気もしない。

それは方向性は真逆ではあったけれども、リリケラに迫られた時に感じた衝動に近いものだったが、やはり幼稚なカリストには何なのかは判らない。

（ドキドキが止まんないよっ……この気持ち、イオに伝えたいけど……どやったらイイんだろ……！？）

（……カリスト……すごいドキドキして……震えてる……）

夢見るようなカリストの瞳を見つめながら、互いの気持ちが一点に収束しつつあるのをイオは感じていた。今なら大丈夫だという確信がある。きっとカリストも望んでいるはずだ。それでもイオは余りにカリストが愛おしすぎて、前に踏み出すことを躊躇ってしまう。

重ねたココロとココロ……これ以上ないほどに気持ちが通い合っているのは感じる。でも、ふたりは精神体でも天使でもない物質界の住人だ。カラダとカラダを重ね合わせることを望むことは罪悪だとは言えない……そう考え自分の背中を後押ししても、それでもイオは踏み出せない。何かが変わりそうで怖い？

（良く判らない……私、どうしよう……？）

やがて唐突にカリストは瞳を閉じる。それからふうっと小さく息を吐いて、少しだけ、本当に少しだけ顔を上げ、緩く閉じた桃色のくちびるを微かに突き出し、そのまま静止した。

それが、何なのか、何の意味を持つのか、何を待っているのか、

もちろんイオは即座に理解する。幼いカリストが精一杯の覚悟を決めて臨んでいることが痛いほど判った。こうする以外に、気持ちを、想いを伝えることができないという結論に達したであろうことも。
頬を染めながら健気にキスを待つカリストは、イオが今までに見聞きしたあらゆるものの中で最も美しく穢れ知らずで……その幼気（いたいけ）な決心にムネが熱くなる。

そこにあったのは、ただ純粋な愛情、互いを愛おしむ想いだけだった。
イオの手が少し上に動きカリストの背中を抱く。腰に回されたカリストの小さな手が、ぎゅっと制服を握りしめるのを感じた。

「カリスト。私ね、カリスト（あなた）が、好き」

明るいイオの声と共に、カリストは自分のおでこに柔らかく暖かな何かが触れるのを感じ、そっと目を開ける。カリストのおでこからくちびるを離したイオは、恥ずかしそうに、少しだけ申し訳なさそうに微笑む。その瞳は涙で濡れている。
そしてカリストは全身がぽおっと熱くなるのを感じた。とても大事なことを聞いたから……キスの申し入れをスカされたとか、そんなことは既に記憶の彼方に吹き飛んだ。
イオが、わたしに、好きって言ってくれた……！
「うん……うん♪」
穏やかな虚脱感と達成感。それ以上、カリストは言葉を継げない。緊張していたヒザがカクンと抜けて、そのままイオに抱き縋り、ただただムネに顔を押し当てて頷くばかり。暖かな涙がポロポロ零れた。
イオは優しくカリストのカラダを揺すり、ブランデンブルク門の

見える位置に向け、言う。
「ねえ、カリスト。あと１００年経っても２００年経っても、ここで一緒にブランデンブルク門を見上げようね」
「うん……うん♪」
カリストはイオのウデの中、何度も何度も頷くのだった。

Ｋａｌｌｉｓｔｏ Ｄｒｅａｍ Ｐｒｏｊｅｃｔ　その２　了

その２－４４（後書き）

「えへへ♪　イオ♪　だあい好き♪」
「なっ！？　ちょっ！？　は、離れなさいよっ！？　さ、さっきのアレは、ネタよっ！　冗談よっ！？」
「えへへ～♪　イオってば、恥ずかしがり屋さんだもねぇ♪」
「あ、あんただって、なんかモニョモニョしてたじゃないっ！？」
「わたしってば、なあんも恥ずかしくないも～♪」
「……で、でも、これからもずっと……」
「いっしょだよ～♪」

――――――――――――――――――――――――

さて、取り敢えず第２部は今回で終了となります。
ここまでお読み頂き、有り難うございました。
「ＫａｌｌｉｓｔｏＤｒｅａｍＰｒｏｊｅｃｔ」は、まだまだ続きます。

ですが、スランプと、プライベートが少し忙しくなってきたこと（在り来たりな言い訳で申し訳ないです）もあり、実は第３部はまだ書き出せないでいます。
気分転換を兼ねてスピンオフ作品を書いてみようかとも考えております。
いずれにせよ、誠に申し訳ないのですが、しばらく次作までお時間を頂きそうです。お許し下さい。

L
O
V

過去１－４５（前書き）

これは「ＫａｌｌｉｓｔｏＤｒｅａｍＰｒｏｊｅｃｔ」過去編になります。
第３部ではありませんので悪しからずです。

過去1－45

イオは明け方に書いた詩を破り捨ててベッドの上で悶絶していた。

面と向かって告白できない自分に憤慨した結果、最も得意な分野である音楽的才能を前面に押し出そうと画策……つまり想いに曲を付けてカリストに披露しようと思ったまでは良かったが、結局は恥ずかしいことに何ら変わりはないのだ。

同じ恥ずかしい思いをするなら「好き」の一言で終わる直接告白の方が遙かに判りやすいし手間も掛からない。いや、手間を掛けるのはまったく構わないのだが、むしろ婉曲すぎてカリストに真意が伝わらないような気がした。

『へえ～♪　イオってば、お歌もギターもじょうずいんだねぇ♪』

……などと返されるに決まっている。

なにより詩の内容が酷い。自分で書いておきながら、あまりの甘ったるさに虫酸が趨(はし)り寒気を覚えたほどだ。

「こっ、こんな寒気のする詩を目の前で誰かに披露されたら、私ならクラッカー花火(エクスプロディーレンフォイアヴェルク)を投げ付けてやるわよ……」

しかし、この気持ちはウソ偽りのない真実の気持ち。エンケラティスという偽名を捨てた今、イオは何かを依り代にして気持ちを伝える術を持っていない。こんなことなら、エンケラティスでいるうちにエンケラティスとして告白すべきだったかも……などと考えていた。

アンプに接続していないエレキギター(ブラッキー)を漫然とチャカチャカ掻き鳴らしながら、イオはひたすらにカリストのことを考える。こんなことをしているからますますカリストのことがアタマから離れなくなってしまうのだ、と自制してもムリなハナシだ。

時々イオは、いわゆる自己暗示のような物に罹っているのではな

いかと自分を訝しむこともあった。余りに際限なくカリストのことばかり考えているから、自分がカリストのことを愛しているのだと思い込んでいるのではないかと。

あるいは、ヒヨコが孵化直後に初めて見た動く生き物を親だと思い込むという、“刷り込み（インプリンティング）”のような現象なのではないかとも……なにせイオにとってカリストが“記憶にある限りの初めて接した同胞（バイオロイド）”なのだ。そして、それはカリストも同様なのである。

しかし、この際、経緯など些末なことだった。何であろうと現にイオがカリストのことを誰よりも何よりも愛している事実に変わりはないのだから。

古人が言うに、人は人生で1回だけ純粋な恋をすることが許されているという……それが“初恋”。

イオは生まれて初めて誰かを好きになった。生まれて初めて恋をした。100年の恋も必ずや冷める時がくると聞いてはいたが、純情なイオはカリストのことを世界が終わるまで愛し続けると、もう自分に決めていた。

切なくて、苦しい。イオはベッドの上で枕に顔を埋めて強く抱きしめる。

どうしてカリストのことが好きなんだろう？

1年ばかり前のことである。

長い時間をかけて設計され、まったく採算を度外視した途轍もない金額と技術とリソースを投入して開発されたバイオロイドの第1期生産分が、一斉にロールアウトした。その正確な総数は明かされていないが、10体ほどとされている。その中にカリストとイオが含まれていた。

起動して間もないバイオロイドは白痴のように茫漠としているば

かりで、システムと各入出力の整合が完了するまで何ら自主的な動作を行うことができない。そのため、それから数ヶ月の間は“生まれたばかりの赤ちゃん”よろしく、専属のアンドロイドなどに世話を焼いてもらいながら個々に養育されたのであった。
養育期間が完了し、そこで１度、全ての記憶を抹消された。なので、誰かに養育してもらったなどということはカリストはもちろんイオも憶えていない。

そのような経緯を経て記憶を消去され意識を失ったイオだったが、ふと気が付くと小部屋に立ち尽くしている自分に気付いた。まるで精神に失調を来した犯罪者を閉じ込めておくような、全面が白いクッション材で覆われた独居房のような小部屋である。壁面に埋め込まれた間接照明がボンヤリと部屋を照らしているが、見た限り何もない部屋だった。
今までの記憶がないため自分が唐突に世界に顕在したように感じられたが、自身がバイオロイドというロボットであるということは理解しているため、それほど混乱はしなかった。ただ自分が全裸だというのには思いっきり面食らう。
「なっ！？　ちょっ！？」
イオは叫びながら慌ててムネの前でウデを交差してしゃがみ込み、誰にともなく喚き散らす。
「ふ、服っ！　布きれでもタオルでもイイから寄越しなさ……！？」
『ＸＸ４８ｃｚ－ＥｇＶＩ－Ｓ』
イオの叫びを遮るように、どこからともなく（たぶんスピーカからだろうが）無機質的な人工音声がイオの型式を呼び上げた。
「は、はい」
しゃがみ込んだまま、それでも反射的に返事をするイオ。
『立ちなさい』
「は、恥ずかしからイヤっ！」
『では、そのまま聞きなさい……これからあなたの適正を判断する

ための試験を行います。試験結果の如何に応じ、今後の職務を割り振ります。なお試験中は常時リミッターが有効になるので、能力は大きく制限され、食欲や睡眠欲など、当初より搭載されていない排泄欲求以外は人間と同様に有効となります』

「試験？」

完全無欠のバイオロイドとして創られているのに、何を試験するというのだろう。

『試験内容は追って通達します。また、試験はランダムで選定されたパートナーとペアで行います。以上』

「ちょ！？　服……！」

イオが叫ぼうとすると唐突に壁の一部がスライドし、そこから布の束が転がり出る。広げてみれば、やはり精神に失調を来した病人が着るようなアタマから被るタイプの白無地のワンピースだった。イオはゲンナリしながらも素早く身に纏う。

ようやく最低限の落ち着きを取り戻したイオは、壁に背を付いて座った。

「……そういえば“試験はペアで行う”って……」

『ただ今よりパートナーを移送します』

まるでイオの独り言を聞いていたかのようなタイミングで人工音声のガイダンスが流れ、壁の一部が大きく開口した。慌てて駆け寄り覗き見ると、斜め上方へ続くダクトのようになっている。

「……なにこれ？」

ダクトの中には照明など無いため先は見えない。イオが首を傾げていると、どこからともなく女のコの嬌声が聞こえてくるような気がした。

「この奥から……？」

ダクトの中にアタマを突っ込み、上方を仰ぎ見る。確かに声がする。女のコの笑い声……そして何かが高速で滑るような音……。

「……こ、これは……！？」

瞬間的に危険を察して後退ろうとしたイオだったが、それよりも

早く何者かがダクトを猛烈な勢いで滑り落ちてきて、そのままイオ
目がけて飛び出してきたのだった。

過去１－４５（後書き）

冒頭のイオのシーンは、時系列的に第１部と第２部の間ぐらいになります。
カリストらの生い立ち（？）が少し判明する物語になると思います。
過去編は数話を予定しておりますが、次話の更新も遅れがちになってしまいそうです。
お許し下さい。

過去１－４６

滑り落ちてきた“相手”はイオのアタマに思いっきり頭突きを喰らわせた。
「おぶっ！？」「むわあ！？」
アタマ同士がぶつかる鈍い音と共にふたりは同時に悲鳴を上げて、即座にその場に卒倒して無言で悶絶を開始する。
一頻り悶えてからイオは立ち直り涙目で叫んだ。
「なっ、何なのよっ！？　どんだけ石アタマなのよっ！？」
そして見れば、そこに転がっていたのは自分と同じ白無地のワンピースを着た小柄な（と言ってもイオも充分に小柄だが）、イオよりも幾分か幼げな少女だった。
「むわあ～！」
「……こ、子供？　これでバイオロイド？」
いまだ悶えながら転げている同胞の姿にイオは訝しげな視線を投げかけ思わず呟いたが、それを聞いた途端に少女はムクリと起きあがり、イオを見てニコリと微笑む。
「アタマとアタマがブツかってもカラダが入れ替わらないんだねぇ？」
「……あんた、よっぽど打ち所が……」
「こっちこっち♪」
「……なによ？」
ちょっと訳の判らないことを呟いてから少女はイオを手招きする。特に深く考えずに、イオは言われるままに少女の傍へ躙り寄った。
「……あっ！？」
思わず叫び声を上げるイオ。なんと瞬間的に抱き付かれていたのだ。
「やあっとオトモダチに逢えたよっ！」
少女はイオにギウギウ抱き付きながら、涙声で告げる。薄い布切

れ越しに、柔らかな肌と肌とが触れ合っているのが判った。
「だあい好き～♪　ねぇねぇ、ギウギウってして～？　チュッチュってしよ～？」
「な、なに言ってるのよっ！？　離れなさいよっ！」
イオは少女の突拍子もない（というか半ば錯乱しているとしか思えない）提案を足下に退け、これを引き剥がす。
「じ、自己紹介もしてないのに、と、突然に抱き付くなんて、し、失礼だと思わないの！？」
「んう～？」
少女は少し困ったような笑顔で誤魔化そうとしているが、改めて見直すと、外側に跳ねた真っさらなブロンドと蒼い明るい瞳が印象的な、その突飛な行動にそぐわない妙に品のある美しい少女だった。イオは自分のムネがドキドキと高鳴っているのに気付く。
「な、何にしても、どうやら私とあんたで“試験”を受けることになったみたいね」
「試験とかイヤだなぁ」
少女は微妙にズレたようなセリフを呟いて、再びイオに笑顔を返す。
「えへへ～♪　こにちは～♪　えと、わたし、カリスト、１６歳だよっ♪」
「１６歳？　同い年？　ふ～ん、“それ”でねえ？　私はイオ……よ、よよよよろしくね！？」
自己紹介を交わすと、その幼い“同胞（カリスト）”は再び抱き縋ろうとしてきたので、それを察したイオは素早く距離を取ったのだった。

それからややして再び人工音声のガイダンスが流れてきた。
『試験の準備にトラブルが生じたため遅滞します。次の指示があるまで待機しているように』
「んえ～トラブル～？」
「何よ……会社もたいしたことないわね！？」

何もない部屋に押し込められ、いい加減に飽きてきていたふたりは揃って不満げな声を上げたが、それでも待てと言われれば待つより他にない。ふたりはそれぞれ少し離れた位置に座って、指示に従う。

が、それほど時間も経たないうちにカリストの忍耐は早速と限界に達したようだった。床に寝転がって鼻歌を歌いながらコロコロと転がり始めた。

「ふんふんふ～ん♪」

「……あんた、ちゃんと待機してないさいよ……」

だらしないカリストを窘めるイオだったが、カリストはモソッと上体を起こして言う。

「ねぇねぇ♪　イ～オ♪」

「……気安く呼ばないでよ……何よ？」

それほど意味があるわけでもないのに敢えてムッとしながら応えるイオだったが、カリストは気にもせずに満面の笑顔で告げる。

「イオってば、とってもとってもカワイイねぇ♪」

「なっ！？」

それからカリストは動揺しているイオに向かって、再びコロコロと転がりながら言う。

「昔のことは忘れちゃったけど、いま、イオのことが一番だあい好き～♪」

「そんな珍奇な移動方法で近寄ってこないでよっ！　薄気味悪い！」

「ねぇねぇ♪　ギウギウってして～？　チュッチュってしよ～？」

「お、女のコ同士で、そ、そんなこと……！　試験だって始まるのにっ！？」

イオにしてみれば、カリストは完全にイカレているとしか思えなかった。

「……あんた、本当にバイオロイドなの？」

「そだよ～♪　イオとおんなしバイオロイドだよっ？　ＸＸ４７ｃｚ－ＥｇＩ－Ｓ、イョフィエルだよっ？」

部屋の中を縦横無尽に転がりながら応えるカリスト。型式から言えばイオとカリストは双子と呼んでも差し支えないほど近似の姉妹機ということになる……とてもそうとは思えなかったが。
ややしてカリストは転がることにも飽きたのか（元より楽しい行為とも思えなかったが）、部屋の隅に座り込んで黙る。イオがチラチラと見るたびにニコリと笑顔を返した。

そうして、かれこれ1時間あまり経っただろうか。なかなか試験の開始を告げるガイダンスは流れない。気の短いイオは部屋の中を右往左往し始めていたが、カリストはと見れば、この1時間、ほとんど同じ場所で座ったり寝転がったりしながら相変わらずニコニコしていた。
「あ、あんた、どう思う、これ？　試験っていつ始まると思う？」
「そんなのわかんないよ～？　待っててって言われたから待ってるしかないねぇ♪」
よほどのんき者なのだろうか、カリストは無為に待たされていることを意に介してないようだった。
「むつかしい試験とか受けるより、こやってゴロゴロしてるのが楽しいけどなあ」
「はあ！？　これが楽しい！？　なに考えてるのよ！？」
カリストの脱力しきった態度に苛立ち、思わず厳しいことを口走るイオ。
「あんたさ、ちょっとアタマおかしいんじゃない！？」
「カワイイ女のコと、ふたりっきりで閉じ込められてるんだよっ？　楽しいねぇ♪」
「……もうイイわ……なんだか相手をするのがバカみたい」
余りのカリストのアタマの緩さに気の抜けたイオは、そのままそっぽを向いて座り込むのだった。

過去１－４６（後書き）

「ねぇねぇ♪　えへへ～♪　イ～オ～♪」
「なによ？」
「イオってば、お名前もカワイイねぇ♪　ＩＯ（イオ）だよっ？　たった２文字２音なのに、とっても気持ちイイ響き～♪」
「なっ！？　ほ、褒めてもらったって何も出ないわよっ！？」
「えへへ♪　なあんもいらないよっ？　こやって見てるだけでシアワセ～♪」
「……な、なに言ってるのよっ！　ば、バカぁ！」

過去1－47

リミッターが掛かっているためイオには正確な時間を計ることはできなかったが、おおよそ体感で数時間が経過したと思われた。
「何時間待たせるのよっ！？　だいたい、いま何時なのよ！？」
「まだ2時間ちょとしか経ってないよ～？　今はお昼ちょと過ぎかなっ？」
相変わらず気の抜けたような様子のカリストに、イオはボソボソ応じる。
「……な、なによ？　私も正午ぐらいだって思ってたわよ……だ、だいたい、なんで判るのよ……？」
「えへへ～♪　おなかのペコペコ具合でわかるよっ♪　１０時のおやつ食べてないまんまお昼ゴハンの時間になったときのペコペコ具合なんだよねぇ♪」
「あーはいはい、そりゃロボットらしい素晴らしく便利な機能ね」
９割９分はアテにしていなさそうな気の入ってない相づちを打つイオ。ただ、実際のところはカリストの“腹時計”は非常に正確な時間を指していた。

更に何事もなく数時間が経ったものらしい。カリストが言うには“３時のおやつ”の時間であるらしかった。
「……おなかペコペコ～　お水も飲みたいなぁ」
「が、我慢しなさいよっ！　女のコでしょ！？」
正直、イオも空腹は感じていたが、それを押し殺してカリストを窘める。「女のコだから我慢しろ」というのは自分でも意味が判らない理屈だとは思ったが、真面目なイオは女のコがそういうことをクチにするのを“はしたないこと”だと考えていた。
しかし、そんなイオの思惑など知ったことでないカリストは、唐突に顔をテラテラと輝かせながら言う。

「ねえねえ♪　チュッチュってして、ヨダレ舐めっこしよ～？」
「はあ！？　な、なに言ってるのよっ！？」
「お水の代わりにヨダレ……」
「ば、バカっ！」
冗談なのか本気なのか、依然としてイオはカリストの思考を図りかねていたが、その頃にもなると随分と親しみつつあった。さすがのイオもイライラしながら無為に待つだけの時間に耐えられなくなったらしく、しきりにカリストに話し掛けるようになっていた。
「だ、だいたい、私らバイオロイドなのよ？　確かにお腹が空いたり喉が渇いたりはするけど、絶対に死んだりしないわ！　我慢するのっ！」
「そいじゃヨダレいらないから、チュッチュってだけしよ～？」
「あんたねえ！　チュッチュってする以外に何か思い付かないの！？」
顔を真っ赤にして喚くイオにカリストは更に油を注ぐ。
「そいじゃ、おムネ触ら」「ば、バカっ！」
どこかピントのずれた、それでいて即答妙味なカリストの喋りは、正直なところ面白かった。丁々発止とでも言うか、どこかしら話していて心地良い空気がある。
「……あんたって、何だか変わってるわ……」
「そっかなあ……そっかもねぇ♪」
舌っ足らずな口調で気分良さそうにホエホエと笑うカリスト。少しだけささくれ立っていたイオの気分も、いつしか穏やかに落ち着いていたのだった。

だが、待てど暮らせど試験の開始を告げる知らせはない。カリストとの会話で幾らでも気は紛れたし、イオは意識的に試験の事を考えないようにはしていたが、それでも限度はある。焦りや苛立ちを通り越して今度は心配になってくるのだった。
「まさか……私ら、忘れられてるんじゃないでしょうね？」

「だいじょぶだよ～♪」
「どうして断言できる？」
「だって、イオもわたしも、とってもとってもカワイイんだも～♪
1回でも見たらずっと忘れらんないよっ？」
「……どこから湧いてくるのよ、その妙な自信……」
呆れながらも“イオもわたしもカワイイ”と、自分を含めてくれたことが少し嬉しい。
私ってカワイイのかな？　それならカリストの方がずっとカワイイと……何を考えてるんだ私は。
「カワイイったって、他の人やバイオロイドに逢った記憶がないから、相対的に判断できないじゃない？」
イオがもっともな主張をしてみると、カリストは意に介さず言う。
「うん♪　わたしの絶対的主観でハンダン～♪」
それから少しだけ残念そうな顔でイオを見た。
「……でもねぇ、ちょとだけイオに残念なトコがあるんだよねぇ……」
「なっ！？　ふ、ふん！　ど、どうせ私はカワイくないわよっ！」
改めて言われてみると、腹が立ってくるから不思議なモノだ。こんなことなら“あんたの方がカワイイ”なんて考えるんじゃなかったと要らぬ後悔までする。
するとカリストは、どこからともなく輪ゴムを2本取り出し、ずいっとイオの傍に寄った。輪ゴムを差し出しニコニコしながら言う。
「えへへ～♪　イ～オ～♪　そのキレイな髪、ツインテールに結ってくんないかなっ？」
「えっ？　……ま、まぁ、別にイイけど……髪型なんてどうだって……」
実際、特に自分の髪型を気に留める事さえしていなかったイオは、カリストに勧められるまま輪ゴムでツインテールを結わえる。
「こう？」
「んう～？　ちょと違うんだよねぇ……えと、髪全部を結うんじゃ

なくって、前髪とかちょと残して……」
　そんなことを言いながら、いつの間にかカリストは手が出てイオの髪を触り始めた。
「ふわあ～♪　イオの髪、サラサラしてて、とってもとってもイイニオイがするよっ♪」
「なっ！？　ちょ！？　わざわざニオイなんて嗅がないでよっ！　くすぐったい！」
　そんなことをやっているうちに、カリストはカリストが望むようにイオの髪をツインテールに結い始める。案外と手際よく、亜麻色のストレートロングの髪の一房ずつを左右から垂らすように結わえたのだった。
「うん♪　とってもとってもカワイイよっ♪　わたしってば、あんまし髪長くないからイオが羨ましいなっ♪」
「う、うん……鏡がないから判らないけど、あ、ありがとう……」
　結わえてもらったツインテールに触れながら、気恥ずかしそうにはにかむイオ。

過去１－４７（後書き）

「イオのツインテは“かがみん式ツインテ”だねぇ」
「あんたのエキセントリック具合は“こなた”級だわ……」

――――――――――――――――――――

すっかり連載ペースもへったくれもない状態が続いています。誠に申し訳ありません。
更に情けない喜ばしいというか……ご報告があります。
私ことＬＯＶは、ここ数年来、いわば自営業を生業にしておりました。
今年に入ってからは景気の具合もあって、かなり仕事にあぶれている状態でして、それゆえに好きな時にモノを書いたりできていたのです。

ですがこのたび、晴れて一般企業に就職することになりました。
ここ最近の更新の滞りは就職活動していたからなんですｗ

新しい環境に馴染むまで、相応の時間が掛かると考えられ、そのため、執筆や更新は今まで以上に低調になってしまいそうです。
もちろん「ＫａｌｌｉｓｔｏＤｒｅａｍＰｒｏｊｅｃｔ」を完結させるべく最大限の努力は払わせていただきますが、本格的な再始動まで、もうしばらくお時間を頂けますでしょうか。
宜しくお願いいたします。

過去1－48

さて、いつまで待っても何の音沙汰もなく密室に監禁放置されているイオとカリストであったが、カリストの“腹時計”に依れば21時を回っているようであった。
忘れられている、あるいは放置されているのではないかという懸念以上に、イオとカリストは酷い空腹感と喉の渇きに苛まれている。

「とほほ……おなかペコペコ～」
「……理不尽よ……ロボットなのに……お腹が空くなんて」
先にはカリストを窘めたイオであったが、何もすることのない状況では空腹を忘れようにも忘れられなく、さすがに弱音を吐き始めていた。
死なないと判っていても、空腹感は容赦なく意識の中を跳梁する。ふたりは部屋の隅に寝転がって、ついには譫言のようにブツブツと呟き始める始末。
「……ソーセージマフィンが食べたい……バターとチーズたっぷりの蒸かしイモが食べたい……ミルクが飲みたい……」
「……アイスクリーム食べたいよぉ……プリン食べたいよぉ……クリームソーダ飲みたいよぉ……」
「……あんた、お菓子ばかりじゃない？」
「そだよ～♪」
そしてカリストはムクリと起き上がって言う。
「ねぇねぇ♪　イ～オ～？　コレってば、コレが試験なのかなっ？」
「はあ？」
カリストの言っていることの真意が汲めずに小首を傾げるイオ。しかし、カリストは朗々とした声で説明する。
「こやって、ずうっとほっとかれても頑張れるか……ってのが試験かなっ？　って」

「……」
少し考えてから唐突に跳ね起きるイオ。手を叩いて快哉の声を上げる。
「そうよ！　きっとそう！　こうやってパートナーと協調して励まし合って忍耐する試験なのよね！？　ほら、昔の宇宙飛行士の訓練とかにもあったアレよ！　あんた、意外と冴えてるわっ！？」
「うん♪　うん♪　きっとそだよっ！」
そしてイオのお腹がグウと鳴った。
「……試験の内容はさておき、お腹が空いてることに変わりはないけど……」
「いっしょにがんばろ～？」
「……う、うん」
ふたりの距離が少しずつ縮まっていく。イオもカリストもそうとは気付かないまま、少なくともイオは「カリストがパートナーで良かった」と、ココロの深い部分で感じ始めている。誰かが傍にいるということが、どれほど心強いことか。ましてやそれがカリストのように朗らかで和やかな人物なら尚更だ。

唐突に壁の一部が音もなく小さく開口した。約12時間ぶりの変化である。それが何なのか考えるまでもなく、ふたりは声も出さずに開口部に飛び付く。
「あっ！」「ふわあ！」
ふたりは同時に叫んだ。そこにはビスケットが2枚と水の入ったボトルが2本あったのだ。
「ひとつずつ、ってことよね？」
「う、うん♪」
目をキラキラ輝かせながら手に取ると、イオは少しだけ躊躇う。
「……ビスケットはともかく、水は全部飲まない方がイイわよね？　飢えや乾きで死ぬことはないけど、水くらい残しておかないと何かあった時に気力が維持できなくなるかも」

「うん、お水は半分くらい残しとこっ？」
そしてふたりは記憶にある中で人生最初にして最低の食事を摂った。
「それにしても……なによビスケット１枚って……せめてパンくらい出しなさいよね……」
「うん♪　でもオイシイねっ♪」
モサモサと嬉しそうにビスケットを頬張るカリスト。
「おクチの中パッサパサ～♪」
「笑い事じゃないわよ……余計に水を消費するわ。気を付けなさいよ……もう……」
何をさせても考えの浅いカリストに（とても有効とは思えなかったが）苦言を呈しながら、きっとこのコと一緒にゴハンを食べたら楽しいんだろうなあ……などと内心で思うイオ。
ほんの１２時間ばかりを一緒に過ごしただけなのに、こんなことを考えている自分が不思議だった。
この試験が終わったら、どこに配属されて何をするんだろうか？
その時もカリストと一緒に仕事ができるのだろうか？　良く判らないけどカリストの傍にいると嬉しい気持ちになるし、せっかく友だちになれたんだから、できればずっと一緒に……。
「……うわわわわ！　なに考えてるのよっ！　そんなバカなっ！？」
唐突に恥ずかしさが湧き上がり、思わず両手をバタバタさせながら叫ぶイオ。
「こ、これは違うの！　そ、そういう意味じゃなくって！」
「？？？」
カリストは不審なイオの挙動に首を傾げてから、微笑む。
「イ～オ～？　お顔まっか～♪　カワイ～イ♪」
「ば、バカぁ！　なに言ってるのよっ！　そんなこと言われたら、私……じゃなくって！　だから違うんだって！？」

この瞬間、ふたりの関係は決定的となった。イオがカリストの一挙手一投足を気に掛け、自己撞着して恥し入り、イノセンスに茶化してくるカリストに腹を立てる……そんな今となっては当たり前の関係が、僅か１２時間で築かれたのである。

それは今となっては記憶にも残っていないイオとカリストが初めてココロを通い合わせ始めた瞬間だった。もしバイオロイドに運命や宿命のようなモノがあるとすれば、これこそがそうだったのかもしれない。

過去１－４８（後書き）

「ずっとこのお部屋でイオと一緒だったら楽しいだろねぇ♪」
「冗談じゃないわよ！？　何て拷問よっ！？」
「ご本とお菓子がたくさんあればガマンできるんだけどなぁ」
「……あ、あとギターと音楽端末があれば……耐えられなくもない……かな？」
「えへへ～♪　やっぱしイオも、わたしといっしょに閉じ込められるのイヤじゃないんだ～♪」
「なっ！？　ち、ちがっ……！？」

――――――――――――――――――――――――

なかなか執筆のリズムが整わないです。申し訳ありません。
堕落しきった生活が長かったためか、新しい仕事に際して心身共に耗弱しているような状態です。
情けないハナシです。

早く元のように思うさま書きたいのですが……もうしばらくご猶予を……

過去１－４９

カリストが言うには、どうやら２２時を回ったとのことであった。なんだかんだ言いながらも、今ではイオはカリストの体内時計をアテにしている。

もっとも今回に限っては「腹時計」ではなく、それとは別な、しかしカリストらしい肉体作用による推論であった。つまりカリストは眠い。夜の１０時ともなれば、子供の寝る時間である。

イオは少しばかり気分が高揚していたため眠気は感じなかったが、カリストはしきりにアクビしたり顔を擦ったりし始めていた。

「ふわあ……ちょと眠いかも……」

「ロボットなのに何で眠くなるのよ……不条理だわ……」

「寝ないとバニシングモータが焼けちゃうよ～？」

「し、知ってるわよっ！　それくらい！　……ね、眠たいなら勝手に寝なさいよっ！」

イオに言われるまでもなくカリストはフロアに寝そべっていたが、やたらと眠い眠いと言う割には落ち着きなくゴロゴロと転がっていた。

「あんたさ……ずいぶん落ち着きないわね……」

「んう～？　眠たいんだけど、なんかじょうずく寝られないんだよねぇ……」

「……まぁ、毛布も枕もないし、室内灯は全開だしね……寒くはないけど……」

クッション材が敷き詰められたフロアは、そのまま寝転がってもマットレス程度の役割は果たしてくれはするが、他に寝具に替わるモノが無いのだ。カリストは自分のムネを抱くようにして転がっていたが、恥ずかしそうな笑顔を浮かべてイオに告げる。

「ギウギウってイオと抱き合ったら、じょうずく寝れると思うんだ

よねぇ♪」
「いい？　あんたはそっちの隅っこで寝なさいよ？　真ん中からこっちに来たら怒るからね？」
「独りだと寂しくて寝らんないよぉ」
「ウソ言わないのっ！？　なんで薄笑いなのよっ！？」
と、イオがそこまで言ったところで唐突に消灯した。
「ふぇ！？」「ふっ！？」
余りに突然に降って落ちたような暗黒にふたりは揃って詰まったような短い悲鳴を上げる。自分の鼻も抓めないほどの漆黒とはこのことだろうか。
「なっ！　もう、ビックリさせないでよ……何やってるのよ会社は！？」
「でも、やっぱしもう寝てもイイってことだよねっ♪」
暗闇の中、カリストの声が非常に近い位置から聞こえた気がした……イオは悟られないように壁に沿って室内を移動し、カリストが最後にいた場所から離れるように位置取りする。
「イ～オ～？　どこ～？」
「どこにいたってイイでしょ！？　どうせ近付いたら抱き付いてくるつもりでしょ！？」
「えへへ～♪　イ～オ～？　ギウギウって抱き合って寝よ～？」
「さっさと黙って寝なさいよっ！？」
相変わらずカリストの言動に何とも言えない不安を感じるイオ……もしかして、このコって、女のコじゃないとダメなのかな？　それとも本当に単にコドモっぽいだけ？
「ねえ？」
「なあに～？」
やはり随分と近い位置でカリストの返事が聞こえた。
「あんた！　移動してるわね！？」
「そだよ～♪　イオにギウギウってしたいんだも～♪」
「いいからソコで黙って寝てなさいよっ！？」

「どして～？」
「どうしてもこうしても……もうイチイチ説明させないでよっ！？」
暗闇の中で（なぜか）声を潜めながらモショモショと言葉を交わすイオとカリスト。
「イオってば、ギウギウってするのイヤ～？」
「イヤって言うか何て言うか……は、恥ずかしいでしょ！？　女のコ同士で、そそそんなの！」
「わたしは恥ずかしくないけどなぁ……」
やはりカリストの声が次第に近付いてくるような気がして、壁づたいに動き回って回避運動するイオ……内心では嫌いじゃないのに、こればかりはどうにも恥ずかしい。それに監視カメラとか付いているかもしれないと思うと気が気ではなかった。
「お、女のコは人前で恥ずかしいこととかしないのっ！」
「だから～わたしってば恥ずかしくないんだってば～♪」
「お、女のコは他人の心情とかもキッチリ読まないとダメなのっ！
自分が良くったって相手にとってはイヤなことかもしれないでしょ！？」
「……やっぱしイオはわたしとギウギウするのイヤ～？」
「……水掛け論だわ……あんたって意外と喰えないとこがあるのね……」
「……えへへへ……うん……そかも……ねぇ♪」
「なんか良く判らない1日だったわね」
「……うん……なんか疲れちゃったねぇ……」
「こんなんで試験って呼べる？　もっとキチンとした会社だと思ってたのに！」
「……うん……そだねぇ……でもイオと……逢えたよ……」
カリストの口調がグニャグニャしてくる。
「……イオに……逢えたから……わたし……それだけでシアワセ……♪」
ようやくカリストの声が遠くに感じられるようになった……距離

的なモノもあったが、カリストがついに眠気に抗えなくなってきたためでもあるらしい。
「……もう限界？　寝ちゃいそう？」
「……んう……まだ起きて……んう……」
「ねえ？　カリスト？　ねえ？　寝ちゃった？」
「……ぐう……」
カリストの寝息が聞こえる。
なぜかイオは少しだけ残念に感じるのだった。

過去１－４９（後書き）

有り難うございます、ＬＯＶです。
まったく回が進まず申し訳ないです……もう完全に「ベルセルク」状態ですねｗ
何とか「ハンターハンター」状態にならないよう、頑張ります。

過去１－５０

『えへへ～♪　イ～オ～♪　イ～オ～♪　だあい好き～♪　ずっとずっとイオといっしょ～♪』

ふたりはブランデンブルク門の下で両手を繋いでグルグル回る。見つめ合う瞳と瞳、溢れる笑顔。こんなにもシアワセな気持ちは初めてだった。世界はふたりを中心に回っている。

（あれ？　会社で閉鎖環境試験を受けてたんじゃなかったっけ？）

イオは一瞬だけ訝しく感じたが、カリストの嬉しそうな笑顔を前にすると、もはや一切の疑念は消し飛んでしまった。半ば自分の意志とは関係なくカラダが動き、言葉を発する。

『カリスト♪　もうずっと離さない♪　私たち、これからもずっと一緒よっ♪』

やがてふたりの足は止まり、互いに向き合ったまま歩み寄る。カリストはイオに抱き付き、イオもそれを受け止めた。ふたりはギウギウ抱きあう。ギウギウ、ギウギウ抱きしめあう。

カリストの夢のような甘いニオイがイオの意識を占有した。

（あぁ♪　やっぱり私、このコのことが好きなんだー！）

ポカポカと暖かく眩しい日差しに、イオは目を醒ました。ベッドの上で夢から醒めた。

「う……」

上体を起こし、目を擦りながら周囲を見回し、ここが自室であることを確認する。恥ずかしい詞を書いていて夜更かししたため、いつの間にか眠り込んでしまっていたものらしい。

「……なんか夢を見てた気がするんだけど……？」

それはすでに意識の紗の向こう側に遠ざかってしまっていた。何

かココロ躍るような内容だった気はするが、ハッキリと自覚できるのはカリストに関する事柄だったということだけだ。
それでもイオは、どこかしら幸せな気分だった。
「ふふふ……ふふ……カリストの夢見ちゃった……」
抱きしめていた枕を脇にどけて起き上がるイオ。時計を見ると午前１０時少し過ぎたところだった……そろそろカリストが起きる時間だ。
「……あのコも私と同じ夢、見てるのかなあ……」
そしてふと我に返り、両手を顔の前でパタパタと振る。顔が燃え上がるように熱い。
「なっ！？　なに言ってるのよっ！？　今のナシっ！　今のは違うわよっ！？」
『なあに～？　なにが違うのかなっ？』
独りで恥ずかしがっているイオの意識にカリストの声が響き渡る。もうこれはいよいよ恋の病も膏肓（こうこう）に入り、アタマが変になってきたのかと慌てるイオだったが、何のことはない、ＭＴにカリストから通信が入っているだけだった。
『イ～オ～♪　オハヨ～♪』
「なっ！？　お、驚かさないでよっ！　バカっ！」
そして冷静になって怖ず怖ずと問い質す。
「あ、あんた……いつから通信を繋いでたのっ……？」
『さっきからだよ～♪』
「さっきって！　だから具体的にどこから聞いてたのよっ！？」
顔を真っ赤にして捲し立てるイオであったが、するとカリストは、カリストにしては珍しく意味深な笑顔で応えるのだった。
『むふ～♪　ヒミツ～♪　えへへ～♪』

「おい、お前さん。今日は普段にも増して浮かれているんじゃあないか？」

カウンタの中で調子外れな鼻歌を歌いながらグラスを磨いているカリストを窘めるオーナー。家事全般を如才なくやってのけるカリストではあるが、さすがに手元がアヤシイ。現に先程から何度もグラスを落としては空中でキャッチするという軽業（？）を披露し続けているのだ。
「そうでなくても客が入らないんだ、グラス1個とはいえ、余計な損失は出したくないぞ？」
「だいじょぶ～♪　んふふん♪　ふふ～ん♪」
カリストは例によって根拠不明な自信を以て作業を続ける。
と、オーナーが先ほど店に届いた封書を目にして小さく声を立てた。
「お。お前さんの会社からだ。迷惑料を返せとかじゃないだろうなあ……？」
「会社ってば、おカネ持ちだから、だいじょぶだよ～♪」
オーナーはゾンザイに封筒を破り、中身を取り出す……出てきたのは何かの招待状のような三つ折りの上質な厚紙で、表面には銀色の塗料で百合の意匠の箔押しまでされている上に、蝋で封印までされてあった。その封蝋の表面にも百合の紋章の打刻が施されている。
「なんだこりゃ？　機密の外交文書か？　結婚式の招待状か？」
「なんだろねぇ？」
カリストも注視する中、オーナーは不慣れな手つきで封蝋を破り、そのたいそう立派な手紙（？）を開いた。
「……なんだこりゃ？」
再び頓狂な声を上げるオーナー。それも仕方がない。その手紙というかメッセージカードの本文は、直筆による達筆なラテン語で書かれてあったのだ。
「コイツは何だ？　イタリア語か？」
「……ラテン語みたいだねぇ♪」
横合いから覗いていたカリストが目敏く見取った。
「お前さん、読めるのか？」

「んう……ちょとだけなら……」
オーナーは四の五の言わずにカリストに手紙を明け渡した。カリストはウンウン言いながら少しずつ本文を解読していく。
「えと……親愛なるオーナー様、先日は当社製品……これってば、わたしのコトかなっ……に端を発するトラブルに際し、貴兄の真摯な対応を感激します……えと、違うよねぇ……感謝します。違法に変化……違法に改造され譲渡されたとは言え、貴兄が店舗で使役していた……使役じゃなんか変だよねぇ……店舗で運用していたアンドロイドFG351／17、通称『メアリ』の損失に関しましては、当社により調査を行った上で他社製品ではありますが完全修復を施し、近日中に返還できることをお約束いたします……ふわあ～♪ メアリ還ってくるよっ！？」
「おいおい……大丈夫なのか？」
あんな事件を起こしたメアリをオーナーが訝しく思うのも仕方のないことだが、カリストは意に介さずに嬉しそうに告げる。
「うん♪ それの説明がずっと書いてあるけど……メモリの一部をロールバックして改造されたとこは全部消してあるんだって～♪ 会社の技術スゴイから、絶対だいじょぶだよっ！」
「そうか。なら問題ないな。ははは、労せずして最新型のアンドロイドを貰えるとはなあ」
カリストは声に出さずにメアリの修理や返還に関する本文を読み進めていたが、その最後にオーナーではなくカリスト宛に一文が書き加えられていた。書き加えられていたというのは、その一文だけ明らかに字体やインクの種類が違っていたためである。
「……カリストさまの健やかな日々を陰ながら祈念いたします……コレってば何だろ～？」
空いたスペースに後から書き足したのは明白だった。名乗りも一切の説明もなく、余りにも唐突な短信であった。ただ、得も言われない穏やかな情動がカリストのムネの中に拡がっていく。
「うん♪ えへへ♪」

そしてカリストはオーナーを顧みて言う。
「ねぇねぇ、まいすた♪　このお手紙、もらっちゃってイイかなっ？」
「ん？　ああ、そんなもが欲しいなら好きにするといい」
「えへへ～♪　まいすた、だあい好き～♪」
カリストはテレテレと嬉しそうに笑うと、メッセージカードを封筒の中に戻し、それから愛おしげに何度も自分のムネに押し付けるのだった。

過去１－５０（後書き）

「なんだか伏線を提示して引きにしたわね……姑息だわ」
「イオとわたしの出会いのオハナシも、まだ続くってかんじだねぇ♪」
「作者、スランプだから途中で折り畳めなくなるのを怖れたんじゃないの？」
「過去編１は今回で終わりだけど、次から何が始まるのかなっ？」
「過去編２？　スピンアウト？　本編を進めなさいよね……」

――――――――――――――――――――――――――――

過去編１は今回で終了です。
次回は……頑張って書きますｗ
見捨てないで下さいｗ

――――――――――――――――――――――――――――

４９話以前の「長音波線（～）」が、リニューアルを機に自動的に「～」に置換されてしまいました。
文章作法的には「～」が正しいらしいと聞いたことはあったのですが、（使っているＰＣの環境などにも依るでしょうが）個人的に「～」は見た目に醜い気がするので、新規で書き上げた分には従来通り「～」を使用します。
文体不一致になってしまいますが、ご容赦下さい。

その３－５１（前書き）

これより第３部となります。

その３－５１

想いを伝えあったとは言え、所詮カリストはカリストである。
また、イオも同様にイオである。

ブランデンブルク門の下、ついに互いの想いを通わせたふたりであったが、翌日からカリストは今までと同じようにイオに対して（深い意味もなく）大好き大好きとムードも何も考えないままに連呼し、イオは鬱陶しそうな恥ずかしそうな顔をして自分の想いを徹底的に隠蔽しながら、そんなカリストを窘めるという案配だった。
だからといって失望するとか落胆するとかいうワケでもない。どうやらふたりには今はコレで充分らしいのだ。互いが互いを想っているということが確認できただけで充分……というか、そんな事は始めから判っていたわけで、もう言葉を連ねてクドクドと確認し合うのも馬鹿らしいというか、気恥ずかしいというか、そういう心理であったらしい……気持ちの面では。

幼稚なカリストはともかく、イオは気持ち的には充分に満ち足りた気分ではあったが依然として悶々としたものを抱え込んでいた。許されることなら１日中でもカリストの傍らで過ごしていたかった。更に許されるなら、そのカラダ（ここで言うカラダというのは手やウデのことである）に触れていたかった。
「……だって勇気を振り絞って告白したんだから……それくらい望んだってイイはずよねっ！？」
とは言え、そんなことは「おくび」にも出さない、出せない。やっぱり恥ずかしい。
「……あのコの方から、もっとベタベタしてきてくれたらイイのに……」
酷い言い分である。先にも述べたようにカリストは溢れんばかり

の好意でもってデレデレとイオに接触し続けているのだ。相変わらず朝に夕に通信しあい、週1ペースで顔を合わせているふたりであるが、いざ接近するとなるとイオは恥ずかしさの余り思わずカリストを押し退けたり逃げ回ったりしてしまうのである。

「こっ、こんなんじゃ、あのコに嫌われちゃうかもしれない……」

だが、何をどうすればイイのか良く判らない。

「……わ、判らないってワケじゃないけどっ……」

行動に移す勇気が出ない。何て切り出せば良いのだろう？　あの子供っぽいカリストに……。

そう考えると、あの時、自らくちびるを捧げようとしたカリストを前にしながら、恥ずかしさからではなく、大切に想うがゆえに変に分別を発露してしまった自分を恨めしく思う。あんな千載一遇のチャンスは二度と訪れない気さえする……。

「あああ～！　なにやってるんだろ私っ……！？」

その頃、当のカリストはイオの煩悶も知らず、先だってリリケラに襲われた湖の畔（ほとり）の藪の中でモゾモゾと這い回っていた。

「どこかな～？　いるかな～？　はずかしがんないで出ておいで～♪」

元から生命への憧憬の強いカリストではあったが、ことさら普通の人なら顔を顰めるような薄気味悪い生き物が好きなのである……生まれてこの方、昆虫や多足類、爬虫類や両生類を観察しては悦に浸るという不思議な習性があった。どうしてなのかはカリスト自身にも良く判らないのだが、生まれつきの嗜好なのだから仕方がない。

特に血道を上げているのはツチノコ探しである。かつてアルバイト先でアンドロイド・メアリにも同情心を込めて呆れられたことがあったが、カリストは頑なにツチノコの実在を信じて疑わなかった。

そもそもツチノコは旧世紀の日本（ヤーパン）でのみ存在が信じられていた幻の珍蛇である。日本以外での目撃談は皆無であるし、当の日本にお

いても終ぞ生きたまま捕獲されることはなかった。ツチノコのものとされる寸胴のヘビの死骸は何度か回収されはしたが、その後の研究だの調査だのの結果が芳しかった試しはない……つまりは完全な捏造だったり、単なる奇形のヘビだったりしたものらしい。

無邪気で無知蒙昧なカリストではあるが、ツチノコの歴史や生態、目撃情報については独学で学んでいる。その際に、そういったツチノコの実在性を著しく否定する事情は知っていた。知ってはいたが、それでもツチノコの存在を確信している。

誰かが「いる」と言ったのだから、きっと「いる」……カリストとはそういう娘なのである。

「ツチノコちゃ～ん♪　どこかな～？」

やたらめったら藪の中を這いずり回るカリストは、誰がどう見ても間違いなく気が触れているようであった。イオも再三再四「くだらないし恥ずかしいからやめなさいよ」と警告しているが、それでもカリストは気にしない。結局のトコロはカリストのそういう奇抜な面も含めて好きなイオは、苦々しく思いながらも強く制止することはできずにいるのだった。

その３－５１（後書き）

「約１ヶ月ぶりの更新がコレよ……どうやってハナシを転がす気なのよ……」
「でも、始まって良かったねぇ♪」
「……なんか本文は短いし内容は無いし……心配だわ……」

――――――――――――――――――――――――

どうにか第３部を開始できそうです。
が、先行きは怪しいとしか言いようがありません……頑張ります。
次話は……年内には……ｗ

その3－52

一心不乱にツチノコを探し続けること数時間が経過した。平素は集中力散漫で落ち着きのないカリストではあったが、こと自ら進んで行う趣味に対しては凄まじい忍耐力と集中力を発揮するのだ。

しかし昼過ぎにもなると、いよいよグウグウとお腹が鳴り始める。

「んう……お腹ペコペコ～♪」

さすがにと言うか、案の定というか、空腹感にだけは抗えないカリストはツチノコを探すのを休止して、持参したバスケットを抱えて芝草の上に健やかな両脚を投げ出して座った。ここが先だってリリケラに凌辱されかかった忌むべき場所であることを思い出したが、のんきなカリストはそういうことをまったく気にしない。

カリストはバスケットの中から自分で作ったドーナツを取り出しモニョモニョと食べながら、手にしたメモ帳にツチノコ探索の成果を綴る。自堕落な怠け者のクセに自分の趣味に関しては、こういうマメさも持っているのだ。

「えと……こっちのヤブとそっちの草むらにツチノコちゃんはいない、その痕跡もナシ……と」

もっとも、こんな狭範囲の局地的なデータが何かの役に立つとは思えない……ツチノコとて（実在することを前提に考えれば）ヘビの眷属なのだから、ひとつトコロにジッとしているわけがないのである。さすがのカリストもそんなことは百も承知なのだが、こうやって探索の足跡を残すこと自体が楽しいのであるらしかった。

さて、昼食なのか間食なのかハッキリしない食事を摂ったカリストは、そのまま芝草の上に寝転がり、まだ暖かな初秋の陽の光を浴びながらお昼寝を始めた。いつも良く寝てばかりいるカリストだが、昼寝も合わせると1日の半分以上は寝て過ごしている計算になる。フォローのしようもないほどに益体のないロボット（バイオロイド）だが、もはや「

こうやって無為に日々を暮らす」というのがカリストに課せられた仕事のようなものなので、これに関してもイオは何も言えないでいるのだった。

どれくらい時間が経ったのか、カリストは少し肌寒さを感じて目を覚ました。目を擦りながら周囲を見れば、もう辺りは夕焼けで真っ赤に染まっている。

「ふわあ〜……ちょと寝過ぎちゃったかも……帰ろっと」

ひとつアクビをしてモタモタと起き上がったカリストだったが、ふと何かの気配を感じ、動きを止めた。ソッと振り返り藪の中を凝視する……瞬間的に何か小さな生き物が藪と藪の切れ目をササッと過ぎったように見えた。

「……もしかして……」

カリストは息を潜めて藪に近寄る。カサカサと藪の下草が揺れうごめいている。何なのかは判らないが、とにかく何かの生き物であることは間違いなさそうだ。あるいはもしかすると……。

固唾を呑みながら藪の中を覗き込もうとした次の瞬間、唐突に“それ”がカリストの顔を目がけて跳びかかってきたのだ！　カリストは“それ”の体当たりを見事に顔面キャッチして思わず悲鳴を上げ、シリモチを突く。

「むわあ！？」

顔を押さえた手のスキマからチラリと覗き見えたのは、まるでビール瓶のような形状の奇妙な生き物が猛烈な速度で藪の中へと逃げ込んでいく姿であった。

「ふわあ！？　い、い、いまの……もしかして……！？」

機先を制されたカリストだったが、気を取り直すまでもなく素早く跳ね起きると転がるようにして藪の中に飛び込んだが、そこにはもう何者の姿も気配もないのだった。

『はあ！？　ツチノコに襲われたあ！？』
ＭＴ越しに呆れ顔で相づちを打つイオ。
『で……姿は見たの？　小さなネコとかネズミとか、そんなんじゃないの？』
「みみみみ見たよっ！？　ビールの瓶みたいなカタチで、スルスルっていなくなっちゃった！　手とか足とか無かったよっ！？」
興奮気味に真実を伝えようと必死なカリストであったが、イオは話半分ですらない。
『あ～そう、それは良かったわね。良かった良かった、おめでとうさん』
「も～！　ホントなんだってば～！」
小さな握り拳をブンブンと上下に振りながら、もどかしそうに説明を続けるカリストであったが、イオはまったく信じていないふうであった。
『だいたい……ツチノコって日本（ヤーパン）にしか棲んでないんでしょ？　そもそも当の日本ですら不確かな目撃談があるだけで、誰も生きたまま捕獲したことがないって聞いたわ……そのツチノコが何だってドイツにいて、しかも（たぶん）ドイツで唯一ツチノコの実在を信じて探している（奇特な）あんたの目の前に都合良く現れるってのよ！？』
「そなこと言われたって……そんなの判んないよ～♪　見ちゃったんだも～♪」
もうカリストの中ではツチノコの実在性は疑うべくもない厳然たる事実として成立しているのだ。

その３－５２（後書き）

「そゆえば、作者さん、ちょとだけ調子が上がってきたみたいだよっ？」

『そんなの微々たるモノよ……そろそろ本格的に再始動してもらわないと読者さんたちに見限られるわ……軍記モノの連載は赤字点灯しちゃったし……』

「あ～あ……最初の頃は調子良かったのにねぇ……」

その３－５３（Happy KALLISTO Xmas Edition）

クリスマス用の特別篇です。
本篇には僅かに関係していますが、時系列的には本篇よりも後になります。

その３－５３（Ｈａｐｐｙ　ＫＡＬＬＩＳＴＯ　Ｘｍａｓ　Ｅｄｉｔｉｏｎ）

クリスマスという単語を聞くと、なぜだかカリストはムネが苦しくなる。哀しいという気持ちではない……切ないとでも言うべき気分になるのだ。誰もがウキウキソワソワとココロときめかせるクリスマス。だのに、そういう「お祭りごと」が誰よりも好きなはずのカリストが、である。

もちろんというか何というか、今年のクリスマスはイオと一緒にお祝いすることになっていた。夕方にイオが訪ねてくることになっているので、カリストは珍しく早起きして朝から部屋の飾り付けをしたりクリスマスに相応しい豪勢な料理を仕込んだり、それなりに忙しくしていた。

『そっ！　そのっ！　特に何も用意しなくっても……あのその、あああああんたさえ一緒にいてくれれば、わ、私はそれで充分だしっ……！？』

何を考えているのか、イオの興奮たるや尋常ではなかった。カリストもイオとふたりっきりで過ごせるクリスマスの一夜に並々ならぬ喜びを感じている。

「クリスマスだからプレゼント交換しよ～？」

『じゃ、じゃあ何か用意していくわね。あんた貧乏だし、センスが奇抜すぎるし、正直あんまり期待できないわね……（あんたのカラダひとつで充分なんだけど）』

「そいじゃ、わたしの初めてのチュウあげる～♪」

『なっ！？　なななに言ってるのよっ！？　バカぁ！』

そんな気恥ずかしいやりとりをしている最中も、なぜだかカリストの気持ちの片隅には何とも言えない切なさが引っかかっているのだった。

なんだろ……なんだかとってもサミシイ気持ちだよっ……？
イオといっしょにいられるし、１年で一番、楽しい日なのに……。
料理する傍ら、思わずフッと窓の外なんかを眺めてしまうカリスト。自分でもこんなにセンチメンタルな気分になる時があるのだなと少し驚いていた。
「……んう！？　フライパン焦がしちゃった～！？」
珍しく調理にしくじったりもしたが、半月前からイオへのプレゼントを用意しておいたカリストの準備に抜かりはない。夕方を待たずに小さなツリーや部屋の飾り付けも終わり、今すぐにでもパーティーを始められる状態であった。
「……イオが来るまで、ちょとお昼寝しよ……」
早起きした上に昼寝もしていなかったカリストは眠気を感じ、少しだけベッドに横たわることにする。自分でも気付かないほどすぐに眠りに落ちたのだった。

カリストは夢を見た。
見覚えのない部屋でカリストはテーブルに着いている。
テーブルの上にはキャンドルと卓上ツリーが飾られ、幾つかの質素な、しかし品の良い料理が並べられているのだった。それは明らかにクリスマスの晩餐のようである。
カリストはとても満ち足りた幸せな気分だった。
テーブルの差し向かいの席には誰かが座っている。
対角線上に置かれたキャンドルの灯火が眩しすぎて顔は見えないが、豪奢なメイド服を着ている女性であることは間違いなかった。ストレートロングの美しい白銀色の髪と豊かなムネが印象的で、カリストはワケもなくドキドキしているのだ。
その女性は口元に微笑みを湛えながら何か言っている……顔も見えないし声も聞こえないのだが、何かを語りかけてきているのが不

思議と判った。
（……ふぇ……いま何て言ったのかなっ……？）
女性が僅かに顔を伏せたのが判った。とても哀しそうな、しかしそれを懸命に押し隠そうとしているのが言葉を聞くまでもなく伝わってくる。それと同時に、カリストもまた急激にムネが締め付けられるような哀しみを覚えた。
（……ふぇ？　イヤだよっ……？　そんなのイヤだよっ……！？）

イヤだよっ……！
ずっといっしょにいたいよっ……！
大好きなヒトと離ればなれになるのイヤだよっ……！

「イヤだよぉっ！？」
カリストは叫んでベッドから床に転げ落ち、したたかアタマを打った。
「むわあ！？　……ゆ、夢～？」
涙と鼻水で顔がグシャグシャだ。カリストは顔を擦りながら立ち上がり時計を見る……昼寝を始めてから１０分も経っていなかった。
「……何だったんだろ……？」
嬉しくて、哀しい。不思議な夢だった。そして実際に体験したかのような現実感があった。
「……はぁ……せっかくイオといっしょのクリスマスなのに、こんな気分でいたらダメだよねぇ……」
珍しく自省しながらふとツリーを見ると、その台座の下に見覚えのない小さな箱が置かれていることに気付いた。マヌケなカリストではあるが、自分が用意した物ではないことは疑う余地もない。
「なんだろ～？」
ここで訝しがったりしないのがカリストの特性であるし、何よりカリストはサンタクロースの存在を頑なに（それこそツチノコの実在性と同じくらい）信じていた。

「もしかして……サンタさんからかなっ！？」
カリストは小箱に飛び付き、その簡素なラッピングを解く。
中には1枚のクリスマスカードと、カリストが常に身に付けているものと同じ黒いヘアバンドが入っているのだった。カリストは思わず歓声を上げる。
「ふわ……ヘアバンドだ～♪　スゴ～イ♪」
カリストのヘアバンドは、カリストが「物心付いた時から」している物である。どこで手に入れた物なのか、会社の支給品なのかさえ不明なのだが、黒いビロードと銀糸で丁寧に創られたヘアバンドなのだ。このヘアバンドに対してカリストは原因不明の愛着を持っており、既製のヘアバンドには目もくれずに常に身に付けていたのであるが、実は近頃、さすがに傷んできていたため少し困っていたのである。
そしてカリストはクリスマスカードを開いて、アッと息を飲んだ。
そこには、アヴェ・マリアの祝詞が見覚えのある達筆なラテン語の筆記体で記されており、カリストへのメッセージの一文が添えられているのだった。

『佳いクリスマスを、そして佳い新年をお過ごし下さい』

その３－５３（Ｈａｐｐｙ　ＫＡＬＬＩＳＴＯ　Ｘｍａｓ　Ｅｄｉｔｉｏｎ）

『ちょ！？　肝心の私とカリストの聖夜のハナシは無いのっ！？ねぇ！？　どういうことよっ！？』

「メリ～クリスマ～ス♪」

『メ、メリークリスマス♪　……って、あんたは納得できるのっ！？』

「ふぇ？　そいじゃ今からチュッチュってする～？」

『なっ！？　なななな何言ってるのよっ！？　バ、バカぁ！』

――――――――――――――――――

コレで今年最後の更新になります。

連載開始当初は調子よく飛ばしていたのですが、ヒマが無くなってからは連載も滞りがちで本当に不本意な状態となってしまいました。読者様に申し訳なく思うと同時に、新年からは元のようにとはいかないまでも、何とか連載ペースを上げたいと願うＬＯＶでした。

今年１年、有り難うございました、おつかれさまでした！

それでは皆さん、メリークリスマス＆ハッピーニューイヤー！

その３－５４

実はイオは会社に対し申し入れしていることがあった。それは自ら会社を出てカリストの直接警護の任に就きたいという申し入れである。周知のようにカリストは猜疑心や危機感が希薄で、他者を怪しんだり危険を予測したりということにまるで関心がないという脳天気さ（良く言うなら無邪気さ）ゆえ、また何時、誰に襲われるか判らないからだ。

なので、誰かが可能な限りカリストと寝食を共に（四六時中ベタベタ）して常にその保護保全に当たるのが最上である、というのがイオの考えである。なにせカリストはゾンザイに野に放たれた技術利権のカタマリなのだ、前の一件のように何者かに略取されても不思議ではないのだ。

「い、いや、他意はないわ、絶対にっ！？」

ところが、カリストの身の安全確保＝会社の利益を守ることに直結するであろうイオの申し入れは、あっけなく却下されたものである。もちろんイオは即座に異議を申し立てたが、会社側の回答は、是非には及ばない、従来通り通信と定期的な接触のみで任に当たれとの冷淡なものであった。

「……ワケが判らないわ……」

カリストとの同棲を密かに夢見ていたイオは二重の意味で落胆したものである。

とは言え、ふて腐れて終わりにするイオではない。基本的には職務に忠実な真面目な娘なのだ。イオはカリストを略取しようとアンドロイドを差し向けた組織（？）や、凌辱されたと言っても過言ではないほどの恥をかかせてくれたリリケラの素性なども継続して調査している。

もっとも、リリケラに関しては（ヴァレンタインも含めて）まっ

たく調査にならなかった。調べるまでもなく明らかに会社に属する「何か」であることは容易に察しが付いたが、その関係なのか、上から猛烈な圧力をかけられてしまい調査を断念せざるを得なくなったのである。あの日以来、ヴァレンタインとの接触も途絶えてしまったため完全に行き詰まったカタチで放置だ。

一方、メアリを仕込んだり、カリストにアンドロイドを差し向けた連中については、ソコソコ調査が進んでいた。が、コチラも政治的・宗教的、両面から考えて大っぴらに調査を続けるのは難しそうだった。

「いや、まぁ、何というか……アレよ、イで始まってルで終わる国……まだ根に持ってるらしいのよね……2世紀も昔のことなのに……まぁ仕方ないと言えば仕方ないんだけど……」

アストラル技研は自己資本だけで成り立っているのだが、この資本の出所に問題があった。コレが原因で今でも某国の諜報機関などから攻撃を受けているのだ。どういうことかというと、これは表沙汰にはされていないことなのだが、会社の資本は１００％「ナチスの隠し財産」で賄われているのである。

「ナチスの隠し財産」……第二次世界大戦末期、敗戦を免れなくなったナチスドイツは、来るべき再起を図るための元手となる莫大な財産を、ヴァチカンを通じて国外（主にアルゼンチンや南極だと主張されることが多い）に極秘裏に輸送・隠蔽したという「伝説」である。

その中にはロシアのエカテリーナ宮殿から持ち出した「琥珀の間」のような値段の付けられない美術品、伝説の中でしか存在し得ないと思われていたロンギヌスの槍や聖杯という貴重な聖遺物も含まれているとかいないとか。

何にせよ、国外に避難させた金塊や財宝や美術品は当時の価値で１億ドルは下らないとされ、また、個人の口座として開設された莫

大な預貯金も巧みに運用され続けた結果、凄まじい利益を生み続けて今に至り、それがアストラル技研の資本となっているのである。

つまりアストラル技研は（たぶん）唯一現存するナチス直系の研究機関であり、武力行為を行える「最後の大隊（ラストバタリオン）」なのだ。

言ってしまえば、イオやカリストらはナチスの最後の尖兵であるとも言える。現に、故意にか偶然にか、カリストらに支給されている制服はパッと見こそ可愛らしいブレザータイプの学生服ではあったが、黒を基調とした硬質なデザインは明らかにナチスのSS士官服をモチーフにしたものであったし、胸元に取り付けられた社章には鉄十字（鈎十字（ハーケンクロイツ）ではない）が意匠されているのだ。

しばしラストバタリオンは、ナチスの非人道的な研究と人体実験の末に造られた不死身のSSで編成されているなどという、半ばSF、半ば悪趣味な都市伝説めいた逸話として語られることも多かったが、そういった意味では、まさしくロボットというカタチで「不死者の軍団」は完成していたのである。

会社自体がそういうバックボーンを持っているため、何かと秘密主義な面があるのは仕方がなかったが、ナチスの成れの果てとは言えアストラル技研が世界に及ぼす影響力は甚大である。未だに敵対勢力が脅威に感じ、隙あらば報復しようと画策しているのも頷けるハナシだ。

「22世紀も半ばなのにナチの残党狩りなんてねぇ……ほんっとシツコイわよね……」

もちろんイオもカリストも、他の多くのバイオロイドやアンドロイドたちも、そもそも会社理念そのものも、ヒトラーやナチスやファシズムを礼賛するものではない。むしろ博愛的ですらある。この2世紀ばかり採算を度外視して人類の文明の発展に努めてきたのだ（もっとも会社の成り立ちからすれば、人類への贖罪の意味もあったのかもしれない）。

「……カリストなんかが野に放たれてるのも、なんかそういう事情が絡んでる気がするのよねえ……」
独り言を呟きながら、イオは敵対勢力の資料を黙々と調べ続けるのだった。

『ナチスの最後の大隊と言えば、連想されるのはヘルシングよね！』
「そだねぇ♪　でもウチの会社ってば、世界征服とか企んでるのかなっ？」
『まさかｗ　会社はナチスの遺産で運営されてるけど、世界征服云々ってよりも、ドイツ人らしいマイスター精神の発露……いわば民族的自己満足のために回っていると言っても過言ではないわね』
「ふうん、そなんだ～♪」
『ちなみにラボには完璧に修復したケーニヒスティーガー（ティーガーＩＩ）や、ＩＶ号戦車（Ｆ２型）が展示されてるわ。あんたの大好きなＩＩＩ号突撃砲（Ｂ型）もレストアされてる。まったく意味はないんだけど、そういうことに血道を上げるような会社なのよ……』
「Ｂ型カワイイねぇ♪　Ｇ型じゃないトコがミソだねぇ♪」

――――――――――――――

明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いいいたします。
ＬＯＶ

その３－５５（ｉｎｔｅｒｍｅｄｉｏ）（前書き）

今回はインテルメディオ（幕間）です。
物語には直接関係しない（と思われる）挿話というか、ちょっとした小話です。

その３－５５（ｉｎｔｅｒｍｅｄｉｏ）

何の気ナシに会社に属するロボットの歴史などを調べていたイオであったが、偶然にもカリストの奇抜な趣味趣向……ツチノコやマリモを愛するという奇癖の手掛かりになりそうな資料を発見した。

それは会社に蓄積されている膨大なアーカイヴの奥深くに打ち捨てられていた、今となっては誰も見向きもしないような些末な資料であった。記された時代は２０世紀初頭にまで遡る。

『ガクテンソク～？』

モニタの向こうでカリストが頓狂な声を上げる。

「そう、學天則（がくてんそく）……この名前に何か感じない？」

『なあんにも判んないや♪　中国の食べ物かなんかかなっ？』

「う～ん……もしかしたら、あんたの先祖かもしれないんだけど……」

イオが発見した資料に依れば、學天則とは１９２８年にマコト・ニシムラという日本の、主に植物を専攻する生物学者が製造したアジア初のロボットであるとのことであった。

なぜ生物学者がロボットを造ったのか甚だ疑問であり、しかも圧縮空気で作動する自動人形の域を出ないシロモノで、上半身しか無い上にやたらと巨大であったという。何をするロボットかと言えば、占いのようなことをしたと言うが、詳細は不明だ。取り敢えずロボットと呼んでも差し支えはないかもしれないが、単なる見せ物や新技術のデモンストレーション用に造られたと思われる。

それがどいう経緯でか、１９３０年頃にドイツの某（なにがし）かに売却された。しかし思うように動作せず、その後の行方は知られていない。

「何だか東京に現れた悪魔だか魔人だかを打倒するのに一役買った

とかいう怪しげな情報もあるんだけど、コレはどうやらアラマタナントカとかいうヒトが書いた小説の創作みたいなのよね」
『ふう～ん』
「……あんた、あんまり興味ないみたいね……」
『そなことないよ～♪　で、ドイツに渡ったガクテンソクが巡り巡ってウチの会社に運び込まれて、それからロボットの研究が始まった～とかかなっ？』
「うん……それを裏付ける資料はないんだけど、何らかの情報の往来があったのは間違いないと思う。ただ、設計図や何かはドイツに来る以前に失われているみたい……正直、今に至るロボット開発には何も寄与してなと思う……個人的な意見だけど」
『それが、どしてわたしのご先祖さまなのかなっ？』
　確かにロボットの原初を遡る興味深いハナシではあったが、どう考えても自分に結びつくような気がしない。しかしイオはハナシを続ける。
「えっと、それなんだけど……なんかオカルトめいてるって言うか、変なハナシだとは思うんだけど……この學天則そのものよりも、それを造ったニシムラって学者さんなのよ、問題は」
　イオは手元の資料を捲りながら続ける。
「このニシムラさんって日本人の生物学者なんだけど、主に植物を研究してたらしいのよね。それで、特に研究していたのがマリモなのよ！」
『ふぇ～！？　マリモ～！？　わたしも大好き～♪』
　相変わらず微妙にズレた驚き方をするカリストではあったが、少しばかりは感銘を覚えているようだ。イオも妙に興奮した様子で捲し立てる。
「マリモマニアの学者さんが造ったロボットがドイツに渡ってるのよ！？　あんた、マリモなんか好きだって言ってるから変だと思ってたけど、絶対に何か関係してるんだと思う！」
『そだったんだ～♪　わたしってば、ニッポン（ヤーパン）にルーツがあったん

だ〜♪　そゆえば、おモチもツチノコも大好きだし、自分でもフシギ〜って思ってたんだよねぇ♪』

「う〜ん……ルーツってのとも違うとは思うけどね……」

――――――――――――――――――

西村　真琴（にしむら　まこと、1883年（明治16年）3月26日　―　1956年（昭和31年）1月4日）元・北海道帝国大学教授。

學天則（がくてんそく、学天則）は、1928年（昭和3年）、昭和天皇即位を記念した大礼記念京都博覧会に大阪毎日新聞が出品した、東洋で初めてのロボットである。制作者は同社の論説顧問だった西村真琴。

ちなみに西村氏の次男は「水戸黄門」で知られた俳優の西村晃。荒俣宏の書いた小説「帝都物語」、及び映画版には學天則と西村教授が登場している。映画版では西村教授を実子の西村晃が演じるという味な配役がなされている。

その３－５５（ｉｎｔｅｒｍｅｄｉｏ）（後書き）

今回はカリストの裏設定的な挿話となりました。時系列とか関係ないですし、本篇中に影響するかどうかも判りません。本篇も進めずに駄文ばかり書いていて申し訳ないですｗ　滞っていた更新速度を上げるための一種の手習いのようなモノだと思って頂けたら僥倖です。

いちおう本編も書き進めておりますので、ご安心を。今月中には続話を更新できるかと思いますので、宜しくお願いいたします。

その３－５６

カリストは大好物のひとつである、ハリボー（ドイツに実在するグミキャンディの銘柄）のカエルグミを買うために近所のスーパーマーケットに来ていた。カエル好きも大概であるが、それを差し引いてもハリボーのグミキャンディは大人にも子供にも美味しいのだ。カリストが突然にクチをモグモグしている時は、まずカエルグミを食べていると考えて間違いない。

『あんたさ、自分が大好きなカエルをモチーフにしたグミなんか、よく食べれるわね……っていうか、そもそもカエルのカタチをしたグミ自体、気持ち悪くて食べる気がしないわよっ！？』

例によって例の如くイオは怪訝そうに窘めるが、ハリボーのカエルグミは２世紀近くに渡って製造され続けているという厳然たる事実をイオは知らないのである。販売され続けているということは相応に人気があるということなのだろう（特に幼児から）。

そんなことはともかく、カリストは有り金を使い切ってカエルグミを８袋も購入した。カリストが近隣に住まうようになってから、このスーパーマーケットではカエルグミの仕入れが従来よりも倍増しているというが、もっともなハナシである。

さて、カエルグミを大量に買い込んだカリストが、普段にも増して豊かな気持ちで自室に帰る道すがら近所の公園を通りかかると、ベンチに座っているひとりの少年と目が合った。

カリストと同年代、十代半ばくらいの細身の少年で、学校からの帰宅途中なのかブレザーとスラックスを身に付けている。少し長めのブロンドヘアが夕陽に晒されて見事な黄金色に輝いているのがカリストにとって特に印象的に思えた。元より男性に対して興味の薄いカリストではあったが、そんな彼女をして「絵に描いたような美少年」と思わずにいられないほどに容姿端麗な少年である。

カリストは少しだけドキリとしつつも、目が合った手前、また生来の気の良さから、特に深い意味もなく少しクビを傾げて人懐っこい笑顔で会釈しつつ、ベンチに座ったまま自分を見つめている少年の前を通り過ぎようとした……が。
「待ってよ……少しオハナシしない？」
なんと少年はカリストに声を掛けてきたのだ。
意表は突かれた、が、物怖じしない（そして警戒心の薄い）カリストは即座に足を止め、少年に向き直る。前述したように男性に対して興味の薄いカリストではあるが、何も男性を嫌悪しているわけでも怖れているわけでもない。積極的に交流を求めて来る者には分け隔てなく接するのだ。
「なあに～？　えへへ♪」
こんな事態をイオが知ったら憤死しそうだが、見ず知らずの少年にホイホイ応じる気の良いカリスト。もちろんナンパされたとか、そういうのは考えの埒外である。促されるまでもなく少年の隣に座りテレテレと笑う。
「えへへ～♪　こにちは～♪」
「え、あぁ、こんにちは」
余りにも気易いカリストの雰囲気に、自分から話し掛けたにもかかわらず鼻白む少年。それを尻目にカリストは定型文化している自己紹介を勝手に開始する。
「えへへ♪　わたしカリスト、ヨロシクねっ♪　１６歳だよ～？　ホントだよ～？」
「あ、え、うん……歳とか名前とかは知ってるよ……本当に警戒心の薄いコなんだね」
もうこの時点で少年が明らかに尋常のモノではないということに薄々気付いているカリストではあったが、もうこうなってしまっては引くに引けないから、気にせずホエホエと微笑むばかりだ。少年も態度や表情を変えることなく訥々とした雰囲気で自己紹介する。
「僕はガニメデ……君と同じく１６歳ってことになってる」

「ガニメデ〜？　ギリシア神話に出てくる美少年ガニュメデスかなっ？　ガリレオ衛星の３番目？」
「それが由来なのかな」
「ちょと変わったお名前だねぇ♪」
「君だって同じ様な由来の名前じゃないか」
そして少しの間だけカリストは沈黙する。彼女なりに何かを考えているらしかった。
「……もしかして、わたしと義理の兄妹とかかなっ？」
「……つまりは、そういうことになるね」
つまりはカリストの同胞、バイオロイドということだ。
そう言われてみれば、ガニメデが着ている制服はイオやカリストが着ている女子制服の「男子ヴァージョン」とでも呼べそうな近似したデザインだし、その雰囲気……ある種の気品ある佇まいや利発そうな顔立ち、均整の取れた細身で小柄な体躯……なども、イオやカリストと通じるところがある。
本来ならばバイオロイドは他のバイオロイドを面識が無くても一見しただけで看破することができることになっているはずなのだが、特に職務を与えられないまま日常生活を主にするカリストは機能抑制（リミッタ）が強く働いているため、何かと不具合が多いらしいのだ。
だがしかし、カリストは意にも介さず思ったことを躊躇いもなく喋り始める。
「そゆえば、４つあるガリレオ衛星のイオとエウロパとガニメデはラプラス共鳴で１：２：４に軌道位相が同期してるんだよっ！　でもカリストだけ関係なく回ってて仲間はずれなんだよねぇ……」
毎度のように話題が逸脱するカリストであったが、自力で我に返った。
「イオ以外のバイオロイドに逢うの、初めてかも〜！？」
「……ねえ、危険そうだとか、怪しげだとか、そういうことは考えないの？」
どこかしら申し訳なさそうに、何かしら楽しそうにカリストを窘

めるガニメデであったが、カリストは例によって例の如く脱力したような笑顔を浮かべて嬉しそうにしている。
「ねぇねぇ♪　いっしょにカエルグミ食べる～？」

その３－５６（後書き）

『ラブプラス共鳴？』
「ラ・プ・ラ・ス・共鳴だってば～♪」
『あんたってさ、変なことばっかり詳しいわよね』
「えへへ～♪」
『……（何か重要なことをツッコミ忘れてる気がするんだけど……）』

その3－57

カリストとガニメデはベンチに並んで座り、ひたすらモグモグとクチを動かしている。
「美味しいねぇ♪」
「ん、うん、まあまあかな」
ガニメデは一向に警戒心を抱く様子のないカリストに辟易としつつも、カエルグミを食べるのに黙って付き合っていたが、ついに耐えかねて訊かれるのを待たずに話し始めた。
「あの、さ、僕が何しに来たとか、そういうこと気にならない？」
クチに入っているカエルグミを飲み下しながらカリストは笑顔で応える。
「んう～？　あんまし気になんないかなぁ？」
「同じ会社で創られた同胞（バイオロイド）だから無条件で仲間で、何も危害を加えられないとか思ってるワケじゃないよね？」
「思ってるよ～♪　だって兄妹だも～♪　ガニメデもイオとおんなし、会社のヒトなんだよねぇ？」
カリストは脳天気なものだ。もっとも、コレはカリストならずとも普通に至る考えではある。素性の知れない社外の第三者ならともかく、ガニメデは明らかに会社から遣わされたバイオロイドであり、あまつさえ（そのようなシリーズ展開が為されているかどうかは不明だが）カリストやイオと同じく「ガリレオ衛星に因んだ名前」が与えられているのだ、特に近親の同胞という予測ができる。
「衛星の順番から言ったらイオが1番目で、ガニメデが3番目で、わたしが4番目だけど……ガニメデのが先に創られたのかなっ？」
「うん、そうらしいよ」
「そだ～！　ねぇねぇ♪　そいじゃきっと2番目に創られたエウロパって名前のバイオロイドもいるんだよねぇ？」
「ん、たぶんいると思うよ。そういう説明を受けたし……逢ったこ

とはないけど……」
「やっぱしそなんだ～♪　えへへ♪　早く逢ってみたいなぁ♪」
カリストは気分よさげに笑っているが、ガニメデの表情は渋い。ひとつ咳払いしてカリストの注意を促す。
「ええと……ハナシを戻すけど……だからさ、僕が君に危害を加えないなんて確証は無いのに、どうして平然としていられるわけ？」
「ふぇ？　えと、だから……おんなし会社で創られた兄妹だから……」
それを聞いたガニメデはいよいよ肩を竦めてウンザリしたような顔をする。もっとも、普段からイオから「お小言」ばかりもらっているカリストにとって、他人が自分に呆れたような態度を取ったところで今さら気にもならないのだが……。
しかし、ガニメデのソレは呆れるというよりも嘆きのソレであった。
「はあ……ハナシには聞いていたけど、まさかここまで弛（ゆる）んでるとはね……」
「んう～？」
戸惑いの表情を見せるカリストに、ガニメデは少し冷たい視線を向けながら詰るように言う。
「だいたい……僕が会社のバイオロイドだっていう裏付けはあるの？　もしかしたらクチから出任せを言ってるだけかもしれないんだよ？　君を誘拐したり破壊するために敵対勢力が差し向けた刺客かもしれないよ？」
「んう……」
「まあ、君だけを責めても仕方がないか……元を糾（ただ）せば、これは明らかにイオの職務怠慢、君を甘やかしすぎたことが原因だからね……これだから変に色気づいたバイオロイドは足手まといだって言ってたんだ」
それを聞いたカリストは動揺した。と言うか、珍しく気分が悪くなった。今まで、こういう気持ちになることが基本的に皆無だった

ため最初は何なのか判らなかったのだが、どうやらカリストは少しばかりカチンと来たのだ。
「どして～？　イオはわたしのことサポートをしてくれてるけど、わたしのママでも先生でもないよっ？　わたしが悪いのはわたしのせいだから、イオのこと、悪く言ったらイヤだよっ！」
「そんな言い分が出るなんて、ますますタチが悪いよ。イオのことが好きで悪く言われたくないって気持ちは判らなくもないけど、そんなこと言ったって、君は自分ひとりで自分の責任を取れるのかな？　君も僕もイオも会社の備品みたいなものなんだよ？　僕らの責任は会社に帰属して、僕ら全員が等しく負うべきものなんだよ……いわば“バイオロイド”という巨大な集合（システム）の中の部品（ユニット）でしかない。各個が互いを補完する集合体……」
「むつかしいこと判んないけど、そんなの少しヘンだよっ？」
　居たたまれなくなって思わずガニメデを遮るカリスト。そういえば以前、イオにも同じようなことを言われたのを思い出した。何か意見しようと思っていたが、もしかしたら自分の考えは本当は間違っているのではないかという気になり、それ以上は言葉を継げなかった。
　だが、ガニメデはイオほどは優しくはない。どのような意図があってかは判らないが、カリストを徹底的にヘコませる腹積もりらしい。
「だいたい、君は何のために“こんな生活”をしているのか考えたことはある？　最初に言っておくけど、何も僕は君が妬ましくてこんなことを言いわけじゃないよ？　君が何もせずブラブラしている……手持ち僅かな生活費全部をカエルグミに注ぎ込んだり、見ず知らずの他人に声を掛けられて気易く応じたり、そんな益体のない生活をしている間、僕らはずっと会社で働いてるんだよ？　そこに何か違和感を覚えないかな？」
「んう……」
　僅かばかりのアルバイトをしているとは言え、ほぼ若年無業者（ニート）の

カリストは、まったく返す言葉がない。もちろんカリストの「益体のない暮らし」は会社の指示によるモノではある。それはイオからハッキリと告げられている。カリストは人間社会で思うように好き勝手に生活するというのが仕事なのだ。

しかし、いかに厚顔無恥なカリストでも、それでもやはり後ろめたさというか、漠然とした罪悪感はあった。いつもイオに迷惑を掛けては世話を焼いてもらうという生活（と言うか自分自身）に、薄ら寒い不甲斐なさを感じてはいたのだ。

「んう……」

「いや、いいよ。それが君の仕事であり任務だってことは重々承知してるから。それに元から気の利いた回答なんか期待していないしね。ただ、やっぱりイオは適任じゃなかったかもしれない……」

その３－５７（後書き）

『ホントは“エウロパ”の発音はドイツ語的には“オイロパ”になるのよね』
「そだねぇ♪　通貨のユーロもドイツ語だと“オイロ”って発音するねぇ♪」
『“Ｅｕ”の部分がドイツ語だと“オイ”になるのよね。日本語や英語に馴染んでるヒトにしたら少し気持ち悪いかもしれないわね』
「でも、わたしたちの名前ってばギリシア語やラテン語に準拠するから、普通に“エウロパ”とかって発音して問題ないんだって～♪」

その3－58

ガニメデとの突然の邂逅はカリストを単に失望させただけだった。イオのことを悪く言われたり、締まりのない自分の生き様を詰られたりしたことは別として、血と肉を分けた（実際は血肉を持たないが）兄妹とも呼べるほど近親の同胞と気持ちが通わなかったことがショックだった。

人好きのする性質のカリストは、誰とでもすぐに打ち解ける親和力だけには比類無き自信を持っていたため、ガニメデとココロを通わせたという「手応え」を得られなかったということは、自分が思う最大の長所を挫かれたような気がしてガッカリすることしきりである。

「やっぱし、わたしってばダメなコなのかなあ……」

酷い自己嫌悪に陥ることは無いカリストではあったが、さすがに元気も出ない。確かに自分を顧みると今さらながら実に反省すべき点が多いということを改めて思い知らされる。何より「何のために生きているのか」がアヤフヤだ。

カリストは、自分が望むように、自由に、面白おかしく生きていたいと願う。ツチノコを探したり、マリモや虫やカエルを観察したり、お菓子を食べて、お昼寝をして、大好きなヒトとお喋りをして過ごしたい。ずっとそうやって生きていたいと願う。

だが、それは自堕落で何ら益体のない、非生産的な生活ではないだろうか？　昨今の多くの人間と同様、最低限の生活保障の上に胡座をかいてムダに時間を浪費し続けるだけのニート生活……ココロの奥底では薄々ながら気付いている。わたしは半永久的に今の生活を続ける？

もちろんツチノコを探したりするのは楽しい。そんな生活を何百年でも続けていける自信はあった。しかし、それで良いのかどうかというハナシになると、カリストは胸を張って肯定することができ

ない。何か生きる目的を、世の中の役に立つ、自分(カリスト)が生きている証を見つけたい……そんなことを考えることもあったが、あまりにも漠然としすぎていて具体的なヴィジョンを描けないでいる。

そんなような気持ちをイオに相談したこともあったが、返事はイオらしくもツレないものであった。

『あんたって生粋のボンクラなんだから、そんなこと考えなくてもイイのっ！』

『そなこと判ってるけど、わたしだって何か世の中の役に立ってみたいよっ？』

『あのねえ……あんたなんてヒトより、す、少しだけ、カ、カワイイだけが唯一の取り柄みたいなもんなんだし、だいたい、ヒトには“向き不向き”ってのがあるの！　あんたは何にもしないでホエホエ笑ってるのが向いてるのよ』

『そだけど……でも、やっぱしイロイロやってみたいなぁ』

『カワイイって部分は否定しないのね……』

もちろんイオとて意地悪や嫌がらせで言っているわけではない。なによりカリストの益体のない生活は会社からの指示であるし、カリストを益体なく生活させることがイオの職務でもある。さらにイオらしいカリストへの遠回しな愛情から、疑うことを知らず純真無垢(オヒトヨシ)なカリストを荒んだ世の中に必要以上に晒して傷付けたくないという思惑があるのだ。また、カリストとてイオが自分のことを護ってくれようとしていることは常々から充分に感じていた。

翻って、そのイオだ。ガニメデの言い分が正しいとすれば、イオはカリストのサポート役には不適格らしい。互いに相思相愛（少なくともカリストは相思相愛であると確信している）の間柄で、何かと融通を付けてくれて、いつも優しく気遣ってくれるイオが、である。この辺りがカリストには判らない。イオではなくて、もっと厳格なヒトなら適任なのだろうか。

確かにイオは甘い（甘やかしてもらっていることは、さすがのカリストでも自覚していた）。でも言うことは言ってくれるし、望む

ままに与えてくれるわけではない。何より互いを尊重し、呼吸で通じ合う仲なのだ……これ以上、適格なパートナーがいるとはカリストには思えないのだ……。

「だいじょぶ、もう絶対にイオと離れないよっ！　ずっとずっといっしょにいる！」

ガニメデの警句を振り払うように、自室で独り高らかに宣言するカリスト。元からのんきな娘なので、この件に関しては深く考えることはやめることにした。どうせ生きていればこれから何度でも考えなくてはならない命題なのだろうし、その時にまた悩めばイイ。

それよりもガニメデの存在が気がかりだ。余りに突然の出会いだったから冷静に思いを巡らす余裕など無かったが、いったい何の意図があって姿を現したのか……自主的な行動なのか、会社からの指示なのか……カリストには判らない。

となると答えは簡単だ。やっぱりイオに相談するのが一番である。

「……で、ガニメデは帰っちゃったみたいなんだけど……」

『ふうん……他には何か言ってなかった？』

「ううん。なあんにも……ただの世間話くらいかなっ？」

カリストはイオに関するガニメデの発言以外は包み隠さず話した。全部をイオに伝えてしまうとイオが激昂するのは目に見えている。イオに真実を伝えないのは気が引けたが、それよりも大好きなヒトが怒ったり悲しんだりしている姿を見たくはなかったのだ。

『何にせよ、変なハナシだと思うかもしれないけど、あんたに教えてもらうまでガニメデなんてバイオロイドが存在するなんて知らなかった……私の所属するセクションとは違うトコに籍を置いてるんだと思う。何かにつけてウチの会社はナゾが多くて困るわ』

「あと、やっぱしエウロパってバイオロイドもいるらしいよ～♪　コレで４人揃ったねぇ♪」

『あんたは気楽でイイわよね……ま、ガニメデについては私の方で

も調べてみる。一応は身内だから大丈夫だとは思うけど……もし次に接触することがあったら少し気を付けてね、何か情報を得られたら些細なことでも教えてくれると助かるわ』

「うん♪　でも、兄妹なんだよっ？　きっと仲良くできると思うんだけどなぁ……」

それでもなお、カリストはガニメデのことを疑ったり悪く思うことができないのだった。

その３－５８（後書き）

『そう言えば新キャラよね』
「そだねぇ♪　わたしとイオ以外で初めて出てきたバイオロイドだよ～♪」
『男の子のバイオロイドなんていたんだ……』
「わたしたちとおんなしで、ちょとちっちゃくって細くって、だからカッコイイってより、カワイイってかんじだったよっ♪」
『……血の繋がった兄妹も同然なんだから、れ、恋愛対象にはなりえないわよねっ！？』
「……わたしとイオも血の繋がった姉妹もおんなしなんだけどね～♪」
『！？』

その3－59

なにやら人生が動き出すような出来事や出逢いというのには連続性があるものらしい。

ガニメデとの不本意な邂逅を果たした明くる日、部屋を探しまくって小銭を発見することに成功したカリストは再び近所のスーパーマーケットに出向いて牛乳（ミルヒ）を買ったのだが、その帰路、やはり再び通りかかった公園である。驚くほど鈍感そうでいて実は人並み外れて感受性が強いという、一見すると相容れない性質の持ち主であるカリストは事前から薄々は何かを感じていた（もしくは期待していた）のだが、案の定、昨日ガニメデが待ち構えていたのと同じベンチに、例によって例の如く自分と同年代くらいの少女が座っていることに気付いた。

これはもう決定的である。カリストやイオが着ているものと同様の女子学生風の制服を身に付けた、スラリとした美しい少女だ。カリストよりは暗めの、イオよりは明るめの、長くて滑らかなブロンドの髪を細く長い指で弄りながら読書に耽っている。カリストのことを待っていたのだろうが、読書に夢中になってしまっているのか当の本人が現れたというのに顔を上げようともしない。

そしてカリストは彼女がエウロパであると直感する。これといった確証はないのだが、そのどこかしら自分と似通った容姿に強い「血の繋がり」を感じたのだ。パッと顔を輝かせて駆け寄ろうとしたが、昨日ガニメデに窘められたこともあって不用意に近付くのも躊躇われたため、ちょっと離れたところから様子を窺うことにした。

しかし、しばらく待ってみたがエウロパはカリストの到来に気が付かないまま、延々と読書を続けている。どのような本を読んでいるのかはカリストには判らなかったが、時折、何かに想いを馳せるように遠くを見つめて頬を赤らめたり切なそうに溜息を吐いたりす

ることから、どうやらラブロマンスの類なのだろう。何にせよ、依然としてカリストに気付く様子は無い。
いよいよ仕方がなくなったカリストは、これ見よがしに鼻歌などを歌いながらエウロパの座っているベンチの周辺を、妙にゆっくりした足取りでウロウロしてみる。しまいにはワザトらしく独り言まで呟いてみた。
「なんだかカワイイ女のコがいるねぇ♪」
だが、よほど読書に集中しているのかエウロパは反応を示さない。もしかすると「カワイイ女のコ」というのが自分のことを指していると思っていないのかもしれない……そう考えたカリストは、少し文言を追加してみる。
「カワイイ女のコがベンチに座って、ご本を読んでるんだねぇ♪」
そこまで言って初めてエウロパは顔を上げ、ようやくカリストに注意を向けてくれた。少しばかりハッとしたような表情でカリストを見つめ、躊躇いがちに名前を呼ぶ。
「あなたは……カリスト……？」
「うん♪　こにちは～♪　えへへ～♪」
カリストがテレテレと笑うと、エウロパも少し恥ずかしそうに笑顔を返した。
「こんにちは、初めまして……私はエウロパといいます。あなたと同じアストラル技研製のバイオロイドです」
「ふわあ～♪　やっぱしエウロパだったんだ～♪」
カリストが快哉を叫ぶとエウロパは少しクビを傾げる。
「なぜ私のことを……？」
「昨日ガニメデに逢って、エウロパってバイオロイドもいるって聞いたんだよねぇ♪」
「ガニメデ……ですか。まだ私は逢ったことがありません」
そしてエウロパは少し懐かしそうな目でカリストを改めて見つめ直してから、自分の隣を指し示す。
「少しお話ししましょうか」

「うんうん♪　……何のご本読んでたのかなっ？」
　エウロパの言う「お話し」というのは雑談のことを指しているわけではないのだろうが、そんなことは意にも介さずカリストはエウロパが手にしている文庫本を指差す。愚かしい娘ではあるがカリストは読書好きなので、他者がどのような本を読んでいるのか興味があるのだ。また、その類い希なる強い好奇心からエウロパのような清楚な女のコが何を読んでいるのか訊かずにはいれなかった。
「えへへ♪　恋愛小説とかかなっ？　もしかしたらシブ～いオジサンの出てくるハードボイルド小説とかだったりして～♪」
「この本ですか……ええっと……そういう小説も嫌いじゃないけど……」
　エウロパは少しばかり恥ずかしげと言うか気まずそうな笑顔を見せたが、それでもハッキリとした口調で応えた。
「……“拷問と処刑の歴史／絞首刑と磔刑の巻”です。なかなか興味深い内容ですね」
「……へ、へえ～♪　お、おもしろそだねぇ……」
「もしかして、こういうのに興味ありますか？」
「い、イタイの好きくないから、あんまし興味ないかも～♪　あはは～♪」
　さすがのカリストもこれ以上の言及は避けざるを得ず、お追従笑いで話題を他に逸らすより仕方ない。一見すると至極マトモそうなエウロパであったが、カリストやイオと同様、どこかしら奇抜な（ある意味ではカリストなど目ではないほどの）趣味趣向の持ち主であるらしかった。
「とは言え、勘違いされると困るので言っておきますけど、私は中世の宗教裁判に関する研究をしているので、その関連書籍としてこの本を読んでいるだけですから……」
「あ……そなんだ～♪」
　取って付けたような言い訳がましいエウロパの言い分ではあったが、素直なカリストはそれを聞いて安心する。が、どのような理由

があったにせよ、とてもではないが微笑みながら読む類の本ではないのだが……。

その３－５９（後書き）

『バイオロイドってのは、どこかしら奇抜よね……あんたは特に』
「そっかなぁ？　どんなとこ～？」
『あんたのヘンなトコなんて、いちいち挙げていたらキリがないわよっ！？』
「イオはヘンなトコないのかなっ？」
『ないわね』
「そだよねぇ♪　女のコ同士がチュッチュってしてもヘンじゃないよねっ♪」
『！？』

その３－６０

「どうして私やガニメデが立て続けに姿を見せたのか、ですか？」
「うんうん♪」
カリストは自分が不思議に思うことを素直にエウロパに問い質す。
「だって、わたしってば、ずっとイオとしかオハナシしたことなかったし、なのに２日続けてガニメデとエウロパと逢ったよっ？　なんかちょと不思議すぎるかなあ……って」
物心付いてから……と言っても、ここ数ヶ月程度ではあったが、これまでカリストにとって確実に「身内」と呼べるのはイオだけであった。正体不明ながら優しく接してくれたヴァレンタインや、まるで養父のように気をかけてくれる喫茶店のオーナーは、確かに非常に近しい存在ではあったが「身内」と呼べるかとなると微妙である。カリストは彼らを身内同然に考えてはいたが、あくまで彼らは人間であり、バイオロイドではない。
また先に襲撃してきたリリケラなども厳密には「身内」ではあるのかもしれなかったが、とてもではないがトモダチと呼べるような存在ではない（それでも例によってカリストはまったく嫌うことはできないでいたが）。ただイオだけがカリストと会社を繋ぎ、カリスト自身が会社に帰属する者だということを自覚する唯一無二の証左として、それを知らしめる存在であったのだ。またイオもそれを密かに誇りにしているのだ。
それだけに、さすがのカリストも立て続けのガニメデとエウロパの来訪には違和感を覚えずにはいられない。そんなカリストのもっともな疑問にエウロパは少しの間だけ沈黙し、やがてクチを開いた。
「……きっと単なる偶然です」
「んえ～！？」
「私があなたに逢いに来たのは、純粋にあなたに興味を覚えたからです。血を分けた同胞として、姉妹として、友人として、そんなに

重大な理由はないけど、ただあなたに逢いに来た……それがそんなに不自然？」
　こういう言い方をされてしまうと、オヒトヨシなカリストは何も言えなくなる。正直なところ釈然とはしないのだが、ムリヤリに自分を納得させてしまうより仕方なかった。
「そ、そだよねぇ♪　なあんにもヘンじゃないよっ♪　えへへ～♪」
「私にはガニメデの真意は判らないけど、もしかするとガニメデも同じような気持ちであなたに逢いに来たのかもしれない。それに、あなたは、あなたが自分で考えているよりもずっと、みんなから愛されているのだと思う」
「え、えへへ～♪」
　エウロパから唐突に褒められて恥ずかしそうにモゾモゾと身じろぎして照れ笑いするカリスト。例えばイオからは深い愛情と友情を感じている。だがイオに限らず「みんなから愛されてる」それが真実だとすれば、それはカリストにとって何よりも喜ばしいことだった。
「えへへ……えへへ～♪」
「そう、愛されている。あなたが望むと望まざるとに関わらず、誰からも、必要以上に……」

『え？　それで終わり？　それだけ言って帰っちゃったわけ！？』
「うん♪　エウロパってば、とってもとってもカワイイ女のコだったよ～♪」
　ホエホエと笑うカリストに対してイオの表情は渋い。
『う～ん……連日のガニメデとエウロパの来訪……今まで何の気配も見せてなかったのに、どう考えても何だか不自然よねえ……』
「だから～　エウロパが言ってたとおりだってば～♪」
『まったく……あんたは気楽でイイわよねえ……』
　イオは呆れ顔でカリストを窘めるばかりだったが、今度はカリス

トの表情が曇る。
「んう～？　エウロパは血の繋がった姉妹なんだよっ？　わたしともイオとも血の繋がった同胞なんだよっ？　ぜったいぜったいヘンなコトとかしないと思うし、だから疑ったりするのイヤだなぁ……イオだってわたしにウソついたり騙したりしたコトなかったよねっ？」
真剣に論じるカリストであったが、その底抜けなオヒトヨシさ加減にイオは苦笑せざるを得ない。
『……私が言うのもアレだけど、あんたのこと思いっきり騙してたじゃない、私……』
「あ……そだったっけ……えへへ～♪」
笑って取り繕うカリストではあったが、そのヒトの良さは最大の長所であると同時に最大の欠点でもある。それを知っているイオは危なっかしくて気が気ではなかった。
『こ、こんなこと言いたくもないんだけど……その、何というか、そ、その、わ、私だけは絶対にあんたを裏切ったり騙したりしないけど、いくら会社の同胞だからといって、わ、私以外のバイオロイドをあんまり信用しない方がイイと思う。わ、私も、あ、あんた以外のバイオロイドのことをココロの底から信用する気にならない……あんただけが私にとって、そ、その、とととと特別だからっ！？』
「うん♪　うんうん♪」
嬉しそうに頷くカリストに気持ちが和むイオであったが、そんなカリストの想いに反して、ガニメデやエウロパが会社からどのような任務を与えられているのか、いよいよ本腰を入れて調査する必要が出てきたため少しだけ憂鬱な気分になるのだった。

その３－６０（後書き）

『今さらも今さら、作者はネトゲにハマっているらしいわ……』
「どうせなら無職だった時にハマればよかったのにねぇ♪」
『恐ろしいこと言わないでよ！　そんなことしてたら、きっと今も無職のままだったわよっ！』
「あはは～♪　そだよねぇ♪」
『それはともかく、いつの間にか連載が始まってから1年が経ったのよね！　ダラダラ続けているけど、ホントに終わるのかしら……』

その３－６１

あくる日、さっそくイオはガニメデとエウロパに関する調査を開始した。身内であるふたりの近辺調査などをしたことをカリストが知ったら悲しむだろうが、会社が何を考えているのか判らない以上、可能な限り素性を知っておきたかったのだ。

だが「素性」などと改めて言うと、まったく奇妙なハナシではある。カリストに言われるまでもなく、ガニメデもエウロパも、カリストやイオと同様にアストラル技研で創られた血を分けた同胞なのだ。その一事でもって素性など調べるまでもないはずなのだが、表面を通り一辺倒に調査した程度では何ひとつ判り得ない。それがアストラル技研という会社なのである。

会社の公開データベースを「合法的な手段」で洗い出してみたが、イオが知り得たのは「ガニメデやエウロパというバイオロイドが存在している」程度の、どうしようもない事実だけであった。

「……どこに所属しているのか、それすら判らない！　むこうは私やカリストのことをそれなりに把握しているってのに、なんかフェアじゃないわよっ！」

ボヤきながら端末を操作するイオであったが、「合法的な手段」で調べることができないなら「非合法的な手段」に訴えるしかない。清廉な性質のイオは裏道を行くような手口は好きではないのだが、早々と手詰まりしてしまったため、致し方のないことだった。

とは言え、社内にあって特に強い権限や特権を持たされているわけではないイオには、これといったコネや情報ルートがあるわけでもなく、かと言って会社の秘匿された情報やデータベースを独力で探るような馬力までは持っていない。

「……うーん……何をどうやって調べればイイんだろう……」

ひとしきり悩みあぐねた結果、そういう事情に詳しそうで、かつ、

イオに協力してくれそうな人物がひとりだけいることを思い出した。
「そうだ……あの変態（ヴァレンタイン）さんなら……」
ここ最近は姿を見ないし、居場所はもちろん連絡をとる手段さえも判らないのだが、ヴァレンタインなら何か知っている、あるいは探り出す手段を持っていそうな気がする。それに今までがそうだったように、何よりカリストを護るためなら無条件で手を差し伸べてくれるという確信めいた予感がある。
そうと決まったら、さっそくイオは例によってブランデンブルク門のあるパリ広場へ向かったのだった。

平日の正午過ぎのパリ広場は、いつもと同様に各国から訪れた多くの観光客で占められている。行き交う人々を横目に見ながら、例によって広場の一角にあるオープンカフェでイオはヴァレンタインの到来を待つことにした。選択肢は無い、ただヴァレンタインを信じて待つしかない。
「はあ！？　なんで私があの変態を信じなきゃならないワケ！？」
そんな「ひとりツッコミ」を呟いてみたが、ヴァレンタインが現れてくれなければ、そして何か有益な働きかけをしてくれなければ、エウロパやガニメデに関する調査は打ち切りになってしまう。
いや、何もエウロパやガニメデそのものを調査したいわけではない。イオだって会社のバイオロイドなのだ……同胞に対する想いはカリストと同じだ。できることなら怪しみたくないし、「シロ」であってほしい。何よりカリストを悲しませたくない。エウロパやガニメデが潔白であり、愛すべき同胞であることを証明するために調査するのだ……と、自分を納得させるより他ないのだった。
カフェで紅茶を啜りながらヤキモキした気分でヴァレンタインの到来を待ち続けたイオであったが、その慎ましやかな願いが届いたのか、小一時間ばかりした頃、いつものように唐突にヴァレンタイ

ンが現れた。
「やあ、待った？」
「……待ったわよっ！　どうせ来るならさっさと来なさいよっ！？」
気兼ねするでもなく妙に朗々とした様子で笑っているヴァレンタインに憎まれ口を叩くイオ。ヴァレンタインは勧められるまでもなくイオの対面に座り、近くを通りかかったウエイターにコーヒーを注文する。
「ゴメンゴメン、できるだけ急いで来たんだけどさ……ちょっと久しぶりだね、寂しかった？」
「あんたねえ……前から思ってたんだけど、なんでそんなに馴れ馴れしいのよっ！？」
つれない素振りで捲くし立てるイオではあったが、内心では願ったとおりに姿を見せてくれたヴァレンタインの存在が何より頼もしく、ちょっとだけ泣きそうになった。そんなイオの心中を知ってか知らずか、ヴァレンタインは少しだけ照れたように笑顔で肩を竦めて見せる。
「まあ、それはさておき……何か困りごとでも？」
「ん、あ……ええ……それは……」
よくよく考えたらヴァレンタインが「何に属する人間」なのかイオは知らなかった。原則的に存在が秘匿されているガニメデやエウロパのことを、易々と語って良いものか今さらながら逡巡する。
しかし、すでにヴァレンタインは織り込み済みのようであった。
「……アレかい？　ガニメデとエウロパのことかい？」
「！　……え、ええ」
もはや隠し立てできるようなことはない。どういう仕組になっているのかイオには及びも付かないことではあったが、やはりヴァレンタインに頼るほかないのだった。

その３－６１（後書き）

『暑くなってきたわねー』
「そだねぇ♪　もう６月も半ばが過ぎたもんねぇ♪」
『作者は相変わらずチンタラ書いてるわね……連載当初のペースを守れていれば、もう少し人気が出たかもしれないのに、まったくアホだわ。仕事だ何だ忙しいとか言ってるけど、すっかりネトゲにハマっちゃってるし』
「明日にでも結婚するする言ってたけど、もぉ半年も経ってるんだねぇ……光陰矢のごとしだねぇ♪」

その３－６２

ヴァレンタインは運ばれてきたコーヒーには見向きもせずにタバコを取り出しクチにくわえると、イオを一瞥して喫煙の許可を求める。イオはテーブルの上に置かれた「全席禁煙」のプレートを指先で小突いて微笑を返した。２２世紀のこんにち、洋の東西を問わずタバコを公共の場で吸うことは、それこそ全裸で人前を歩き回るくらい破廉恥な行為と見なされている。

ヴァレンタインは苦笑いしてタバコを箱に戻し、それからようやくクチを開いた。

「……ガニメデもエウロパも会社に所属するバイオロイドだ」

「そんなことぐらいカリストだって知ってるわよっ！」

というか、現実的には「それしか知らない」のだが。

「もっと具体的な素性を知りたいのっ！　どこに所属していて何をしているのか、どうして急にカリストに接触してきたのか、私たちと何か深い関係があるのか……そういうコトっ！」

「うーん」

ヴァレンタインは困ったような浮かない顔だ。

「正直なところ、あんまり話したくないなあ」

「できることなら私だってあんたなんかに頼らずに自力で調べたかったわよっ！」

強い語気でヴァレンタインから話を引き出そうとするイオではあったが、内心ではヴァレンタインに何らかの迷惑をかけてしまいそうで躊躇いを感じていた。自分の目的のために他者に迷惑をかけるのはイオの望むところではないし、これはイオの性格からして決してクチに出すことはないだろうが、ある程度までなら自身を顧みることなくカリストのためにイロイロと便宜を図ってくれるヴァレンタインの立場や身辺を案じてもいた。

「……でも、その口ぶりからすると何か知ってるのね？」

「うん、まあ……多少は」
イオの強気なようでいて遠慮がちな投げかけもあってか、依然としてヴァレンタインの口調は重い。
「……私やカリストのために、あえて訊かない方がイイような内容……とか？」
「ん……それも多少はあるかもしれないけどね」
そしてヴァレンタインは声を潜めて独り言のように呟く。
「……どうしてカリストだけが会社から離れて独り暮らしさせられているのか……その辺の事情を考えてみたこと、ある？」
「え？　そんなの……」
カリストが気ままに独り暮らししているということはイオにとって当たり前すぎて、そんなことを考えたことなどなかった。カリストは自分とは違って、世の中に出て、いろんな物事を身近に感じながら、好き勝手に思うままに生きていくのが「仕事」なのだと、それが当たり前のことと感じていた。
しかし、ヴァレンタインに改めて言われてみれば、少し奇妙というか、不合理な点もあるにはあった。
この数ヶ月間、カリストは何度か危ない目に遭っているのに、会社は何も対策を図ろうともせずにいる。一時的にでも会社で匿うという姑息的手段すら講じず、カリストと一緒に生活するという最も確実そうなイオの提案も（余計なことは考えるなと言わんばかりに）反射的に却下したくらいなのだ。
また、人間社会に適応して生きていくという大層な「お題目」は掲げられていたが、それに対する具体的なデータ収集やフィードバックが行われている形跡が感じられない。イオは毎日のようにカリストと定時連絡を取り合ってはいたが、それは単なる雑談や少々恥ずかしい会話に終始すること例によって例のごとくである。
「君も感じているとは思うけど、あのコは自由闊達で、そういうのが性に合ってるのは間違いないとは思う。人間社会で平和的に生活するための資質に富んでるし、それこそ、ヘタな人間なんかよりも

よっぽど環境に順応している……ちょっとオヒトヨシ過ぎるところはあるけどね」
「え、ええ、まぁ……何というか……私もそう思う……」
余りにも益体のなさ過ぎるカリストの暮らしぶりを思い出し、イオは何だかヴァレンタインにすら申し訳なく思えてくる。そんなイオの心中を察してか、ヴァレンタインは「まぁまぁ」といった感じで手をヒラヒラさせて話を続けた。
「君とカリストは、ほとんど同時期に創られた姉妹機だよね。性格は全然違うけど、性能もほぼ同じだ」
「まあ、そういうことになってるわ……どう考えても私の方が優れているけどねっ！？　……見た目以外は」
「じゃあ、どうしてカリストが外に出て、君が会社に残ったんだと思う？　バイオロイドとはいえ、ひとりで生きていくには社外は何かと危険も多い。なのに、意志が強くて根性のある君じゃなく、よりにもよってオヒトヨシでフワフワしているカリストがひとりで暮らすことになったんだろう？　何がふたりの進路の違いを決定付けたんだろう？」
ヴァレンタインは明らかに真実を知っている……あるいは、それに近い場所にいる。相変わらずヴァレンタインの口調も態度も穏やかなものであったが、その裏にはイオが計り知ることのできない「何か」が見え隠れしているのだ。
ヴァレンタインに悪意がないのは判ってはいたが、まるで圧迫面接でも受けているかのようだった。イオは忙しなく視線を泳がせながら、しどろもどろに応じるので精一杯だった。
「そ、それは……カリストの方が人間社会に溶け込みやすいっていうか、人畜無害っていうか……」
「君だって充分に社会に適応できるよ。元々、そういう風に創られているんだからね」

その３－６２（後書き）

「……わたしの出番が少なくなってきてるねぇ♪」
『会話パートだも、仕方ないでしょっ！？　私だって変態に逆尋問みたいのされるのは気分が良くないわよっ！』
「そっかなぁ♪　ヴァレンタインとオハナシできて羨ましいけどなぁ♪」
『だいたい、あんたさ、なんで出番がないのに嬉しそうなのよっ！？』
「んう？　えへへ～♪　わたしがいないトコロだと、イオってば、わたしのことイロイロ褒めてくれるんだも～♪」

その３－６３

ノラリクラリした遠回しなヴァレンタインの口ぶりに、イオは少しだけ苛立ちを覚えてくる。もっと突っ込んだ具体的な話を聞きたい、しかし、その一方で知るべきではない、聞くべきではないとも直感している。だが、それでもカリストを護るために問い詰めずにはいられなかった。

「それってどういうこと？　カリストが外に出されたのは、会社にいても役に立たないから事実上の放逐じゃないか……って話を聞いたことがあるわ。使い途がないから、適当なデータ取りのために運用しているって。誰でも納得がいく理由よね。でも真実は違うってこと？」

「確かにカリストは性格的な理由から、組織の中で作業や任務を忠実に遂行する資質に欠けているけど、腐ってもバイオロイドなんだ、役に立たないからって野に放ってイイなんて安易な存在じゃないよ」

「そんなの当たり前じゃない！　あのコは役立たずでアタマの中は水浸しかもしれないけど、腐ってなんかいないわ……それに少しは誰かの役に立ってるかもしれないし、そ、その、いなくなっちゃったりしたら、わわわ私が、ここ困る……！」

どうにもイオはカリストへの好意を覆い隠し通すことができないものらしい。ヴァレンタインは照れくさそうに苦笑いする。

「だろうね」

「……何にしてもカリストが社外で独りで暮らしているのには正当な理由があるわけ？」

「君も判っているとは思うけど、バイオロイドは人間じゃない。人間のように“なんとなくそんな性格に育った”なんてことはない。多少の“揺らぎ”はあるにしても、バイオロイドはそうあるべくして“そんな性格”になるように設定されている。君がツンツンしてると見せかけてデレデレなのも、カリストがのんき者でホニャホニ

ャしているのも、会社が設計した正式な仕様に基づいた、予定通りの性格付けなんだ」
ヴァレンタインの言い草に思わず顔を赤くするイオ。照れ隠しに何か文句のひとつでも言いたかったが、ヴァレンタインの言っていることは一応は納得できるものであった。イオがツンツンしていると見せかけてデレデレなのかどうかは別にして、だが。
「何より、人間と明らかに異なるのはバイオロイドは明確な目的の下に製造されているってことだ。どこからともなく湧き出てきて漫然と生きて何も遺さずに死んでいく人間なんかとは違う。バイオロイドの存在にはハッキリした理由がある」
「私たちに肩入れしてくれるのは嬉しいけど……人間だって、誰でも何かしら存在する意義や理由があって生まれていると思うんだけど？」
「ん……君は本当に優しいね」
イオの思わぬ反駁に、ヴァレンタインは自嘲的な笑顔で応えた。
「ガニメデもエウロパも君と変わらないと思うよ。会社の指示で動いているだけだし、別に悪いことをしようとしているワケじゃない。君と同じようにカリストのことが心配なんだと思う」
「そ、そりゃ、そうかもしれないけど……」
カリストに対して「怪しめ」「信用するな」と警句を発しておきながら、結局はカリストと同様に同胞を心底から疑うことのできない自分自身に対して、イオは焦れた気持ちになる。偏愛的とさえ言えるほどに堅固な同胞愛という「プログラム」に支配されている限り、バイオロイドとはこういうものなのだろうか。
「君がカリストと共に生きることを半ば義務付けられているのと同じように、ガニメデやエウロパも自分らに課せられた義務を全うしようとしてるだけなんだよ、きっと」

その頃、当のカリストはポツダム郊外の採石場跡のような荒れ地

にいた。切り開かれた山野は、かつては赤土や岩肌が露出していたのだろうが、今は灌木が疎らに茂り、ヒョロヒョロした草が生(む)す棄てられた空き地のようになっている。
なぜこんな場所を訪れたのかというと、聞いたハナシによると当地はかつてナチスドイツの兵器研究施設があり、野砲や対戦車砲の試射を行っていたということであった。よく観察すれば、確かにそれと覚しき朽ちたコンクリートの基礎跡や、戦車や装甲車両が通ったのではないかと思える幅の広い轍(わだち)の跡が見て取れた。
「ふぇ〜……」
それらを前にカリストは思わず感慨深い溜め息を吐く。
戦後から今に至るまで長らく放置されていたというハナシだったので、何か面白いモノが見つかるかもしれないという軽い気持ちで来てはみたが、穢らわしくも栄光に満ちた（知っての通りカリストはナチスの末裔である）ドイツの歴史を完膚無きまでに風化させた時間の流れの無情さに、カリストにしては珍しく少しばかりメランコリックな気分になってしまったのだ。
「……なんか面白いのあるかなぁ……？」
もちろん兵器や弾薬（不発弾や埋設地雷も含む）の類は、とうの昔に撤去されてしまっているはずである。ポツダムから徒歩で来ることも可能な場所なので、その辺は神経質なまでに徹底されていた。しかし、宝探しというわけではないが、何かカリストのココロを躍らせるような「珍品」が眠っていそうな気配はあった。

その３－６３（後書き）

『どうにかこうにか月イチ更新を維持してるわねー……』
「作者さんってば、ついにフライトシミュゲーに手を出したらしいねぇ♪　楽しいねぇ♪」
『中途半端なスペックのＰＣを買ったもんだから、ねぇ』
「そゆえば、今週末は日本（ヤーパン）の終戦記念日だねえ……」
『……戦記物の連載はどうなってるんだか……』

その３－６４

自分の身長よりも高い草木をかき分けながら、カリストは藪の中を注意深く探索し始める。

「……すっごく昔に戦争やホロコーストがあったのは残念だけど、戦車や戦闘機は、なあんにも悪くないもんねぇ……」

道義心の高いカリストではあったが、そんなカリストをしても過去の悲惨な戦争は“遠い歴史の一部”でしかない。と言うか、戦争や歴史への無関心というよりも、カリストの場合は兵器に対する偏愛心が強いだけなのだ。その出自が出自なので緩く右傾化した（というか親ナチス的思想の）愛国者ではあるが、その根幹にあるのもナチス及びドイツ連邦が生み出した様々な兵器が好きだということに由来する部分が大きい。今でもカリストの中では史上最強の戦車はケーニヒスティーガー（ティーガーＩＩ）であり、レオパルトＩＩである。

「戦争資料館で調べたけど、ココってば、ＩＩＩ号突撃砲Ｂ型の主砲（えと、つまり２４口径７．５ｃｍＳｔｕＫ３７かなっ？）の試射をしてた場所だったみたいなんだよね～♪」

足下に何か円筒状の金物が落ちていることに気付き、よもや砲弾の薬莢かと喜んだりもしたが、案の定というか錆びたニシンの缶詰の空き缶だったりする。しかし、諸事に飽きっぽくても自分の趣味には異様なまでの忍耐強さを発揮するカリスト、この程度ではへこたれない。

「なんかありそうなんだけどなぁ……」

拾った棒きれで地面を突きながら（こんなことをして何が判るというのだろうか？）藪の中を右往左往するカリスト。一見すると無為に思える行動であるが、やはり無為としか思えない。しかし、ややしてカリストは棒きれの先に何かを感じ取った。

「んう……？」

不審に思って地面を何度か強く突いてみると、ゴーンゴーンと、こもったような低い金属音がする。
「なんだろ～？」
棒きれで小突くのをやめ、今度は自分の足で何度か地面を踏みつけてみたが、やはり足下に金属の板と空気の振動を感じた。どうやら地中に何らかの空間があるようだ。
「これってば……！」
カリストが想像するに、それは地下壕へ降りる出入り口を覆う鉄蓋ということになった。カリストはパッと顔を輝かせて、ウサギのように地面を掻き始める。
「もしかしてヒミツの入り口とかかなっ！？」
確かに、第二次世界大戦から２００年余ばかり経過した現在もなお、時々であるが、ナチスや国防軍、あるいは赤軍やチェコ軍の施設や装備がドイツ国内外で発見されることがあった。先だっては北海の海底からＵボートがサルベージされたほどだ（カリストは引き揚げられたＵボートを曳航先のノルデンまでバイクに乗って見に行こうとして途中で道に迷って泣く泣く帰ってきた）。
なのでカリストが期待するのもムリはない。果たせるかな、カリストが地面を掻いていると錆びて朽ちかかった、しかしそれでもなお頑強そうな鉄蓋に掘り当たった。恐らく約２００年前に閉ざされて以来、一度たりとも開かれていない“歴史の扉”だ。
「すっご～い♪　ジークハイル♪　ジークハイル♪」
カリストは歓喜して鉄蓋の上でボンボンと景気よく飛び跳ねる。
「ジークハイル～♪」
そして、そのままカリストは錆びて脆くなっていた鉄蓋を突き抜けて階下に落下したのだった。
「ふわあ！？」
地下に落ちたカリストは思いっきり尻モチを着いた。それほど深い地下壕ではなく、カリストの身長をもってしても這い上がれるほ

どで、立ち上がると天井にアタマが付くだろう。内壁はコンクリートで塗り固められていたが、今やヒビ割れや漏水による風化が進み、草木の根がブラブラと垂れ下がっている有様だ。

「んう〜？」

おシリをさすりながら中腰で立ち周囲を見てみると、自分が落ちてきた穴とは反対側の方に大きな開口部があって、そこから太陽の光が燦々と差し込んでいるのだった。どうやら地下壕ではなく、単なるトーチカの類だったらしい。

何よりカリストをガッカリさせたのは、トーチカ内に空き缶や空き瓶、Mのマークで有名なファストフードのラッピング、お菓子の紙袋、ポルノ雑誌、競馬新聞、焚き火の跡、その他諸々のゴミが散乱していたこと、そして、それらが古いモノではないということだった。

コンクリートの壁面にもスプレーか何かで下手くそな鈎十字（ハーケンクロイツ）や黒十字（ルツェスクロイツ）が落書きされている。どうやらすでに近隣の若者や浮浪者がカリストに先んじて発見し利用していたのだろう。

「なあんだ〜。ちょと残念〜」

落ちていたポルノ雑誌を手に取って見れば、発行年月は僅か数ヶ月前であった。カリストが期待したような“ヒミツの地下壕”などではなかったのだ。

「……おムネおっきいねえ……えへへ〜♪」

両手で顔を覆ってテレテレしながらも指の隙間からポルノ雑誌（と言ってもヌードグラビア主体のソフトな内容である）を鑑賞していたカリストであったが、ふと我に返って雑誌を手放し、室内をもう一度見回してみる。すでに人の手が入っているとはいえ、戦争の名残を遺す歴史的施設であることに変わりはない。まだ誰も見つけていない珍品が埋もれているかもしれないのだ。

その３－６４（後書き）

『あ、あんたさ、成人向け雑誌なんか見ちゃって、な、なに考えてるのよっ！？』
「おムネのおっきなモデルさんが、いっぱいいっぱい載ってたよっ♪」
『……それだけ？』
「うん♪　カワイイ下着とか水着とか着てたねえ♪」
『あ、そう、ならイイんだけど（良かった、ソフトポルノね……）』
「でもねぇ、わたしと違って、おマタのとこが、こんなふうに……」
『ああ～！！　イイのっ！　もうイイんだってば！　ヤメヤメ！！』

その３－６５

いよいよ探索の意を決したカリストは腰のポーチから十徳ナイフを取り出して、それに内蔵されているＬＥＤライトで周囲を照らしつつ、ゴミが散乱して踏み荒らされた中央部は避けてトーチカ内部の隅や壁を丹念に調べ始めた。

まず目に付いたのが、かつて砲弾を収納していたと思われる幾つかの古い木箱だったが、もうボコボコに朽ちている上に、中身と言えば２世紀余りかけて蓄積された塵埃が詰まっているばかり。いちおう棒きれで塵埃を突き回してみたが、何も手応えはなかった。

「……こほこほ……えふえふ……！　なあんにも入ってないや……」

次に目を付けたのは部屋の隅、壁に押し付けられるように置かれた木製のデスクだ。これはどうやら事務デスクのようであった。引き出しを開けようとしたが、取っ手がモゲていた。こんなモノがどうにかなっても誰も困りはしないのだろうが、カリストは引き出しを壊さないように気をつけながら引き抜くことに成功する……が、中身は（当然だが）空っぽで、それらしき書類や資料などは何も入っていなかった。

「んう～」

せいぜい見つかったのは当時の新聞（ナチスの党報）か何かの切れっ端である。粗末な紙に粗末なインクで刷られたソレから読み取れたのは『……が総統閣下は……マンに騎士鉄十字章を……』という一文にも満たない幾つかの単語だけだ。発行日も判らない。

「へえ～♪　記事の内容はよくわかんないけど、きっと大事な何かの資料になるよねぇ♪」

紙切れとはいえ歴史の貴重な遺物であることには変わりないので、カリストはそれを持参した手帳のページの間に挟んで保管することにした。戦争資料館に行った時に研究資料として提出すれば、何かの研究に役立つかもしれない（カリストは知らないが、件の戦争資

料館というのは今なおナチスドイツの正義と正当性を信じて疑わない者どもが運営している公然非公式な国粋主義的施設である）。
「……こっちには何かあるかなぁ？」
低い天井からぶら下がった草木の根っこを避けながらカリストは隣室に移動する。トーチカの開口部から隔たれた隣室は薄暗く、なかなか恐ろしげな雰囲気もあったが、のんき者のカリストは「怖い」という感情に疎いので気にもしない。
「ふぇ～！　……なあんにもないや」
室内をライトで照らしてみたが、そこには何ひとつ目を惹くようなモノなど見当たらなかった。残念ながら終戦から約2世紀も経った今、カリストが期待したような物品はとうの昔に公的な機関に回収されたか一般市民に持ち出され散逸したか……そう考えるのが妥当だろう。
「やっぱし、なあんにもないんだねぇ……」
さすがのカリストも一切の探索を断念して帰ろうかと思ったところだったが、何の気なしにライトで照らしたコンクリートの壁面に違和感を覚え、返しかかっていた踵を止めた。
「……んう……？」
先にも述べたように、トーチカの内壁は粒子の粗いコンクリートの打ちっ放しで、約2世紀の時を経て、水が浸み、ヒビ割れ、草木の根が僅かな隙間から這い出しているような有様である。まさしく「廃屋の壁」といった趣だ。
しかしカリストが感じた違和感……それは、一面にヒビ割れが走っている壁面の、足下の高さにある一部分だけがヒビ割れの侵食を免れて「四角く切り取ったように」無傷で残っていることだった。大きさは30センチ四方程度であったが、壁じゅうを縦横無尽に走っている無数のヒビ割れの切っ先が、その小さな領域に入り込むことなく、その縁でピタッと止まっているのだ。
「……なんだろ～？」
訝しく思いながら、カリストは壁に近寄り、しゃがみ込む。近く

で見るとより明らかだったが、その３０センチ四方の僅かな領域だけ、見た感じでは微妙にコンクリートのキメが他と異なっているようにも感じられた。
「……これってば、もしかして……あとから別にコンクリートを塗ったのかなっ？」
カリストはその無傷のままになっている壁面を軽く叩き、別の場所を叩く、というルーチンを何度も繰り返して、その感触や音の違いを確かめてみる。
コツコツ、コツコツ、コツコツ……ゴンゴン……コツコツ、コツコツ……。
「！　……ぜんぜん音が違うよっ♪　こんなか、きっと空洞になってる～！」
カリストは興奮気味に叫ぶと、ちょうど部屋の反対側に転がっていたコンクリートブロックを持ち上げ、考えるよりも早く、迷うことなく壁に叩き付けた。カリストが思ったとおり、ボコンという音と共にコンクリートブロックの一辺が易々と壁に突き刺さる。壁を貫通したのだ。
「……なにか入ってるかなっ……？」
カリストはブロックを取り除き、期待に薄いムネを膨らませながら自らが作った「穴」を覗き込んだ。

その３－６５（後書き）

『戦後からずっと弾圧されてるナチズムだけど、途切れることなく信奉者がいるのよね……まったく困りものよね』

「２１世紀の中頃だけど、慢性的な不景気や高失業率、それから移民問題なんかで国民の不満が爆発して、ドイツのアチコチで暴動やクーデターが起きたんだよねぇ……」

『今に言う“ベルリン騒乱”ね。その暴動やクーデターもナチズム信奉者たちが中核になってたってウワサよね……ウチの会社も一枚噛んでたってハナシだけど』

「そっかぁ♪　会社ってばナチスの残党だもんねえ♪」

『残党？　末裔と言ってもらいたいわねっ！』

その３－６６

小さな横穴を覗き込んだカリストは、そこに錆びて塗装も剥がれ落ちた弾薬ケースを発見した。主にＭＧ（マシンガン）３２などに運用された弾帯（ベルト）用のケースだと思われる。

「ふわあ～♪」

それは単なる鉄屑同然のケースではあったが、いちおう歴然とした「戦争兵器の痕跡」であるため、カリストは喜びの声を上げた。もしかしたら中には弾薬も遺っているかもしれない。

逸る気持ちを押し込めながらポケットの中のグローブを取り出し身に付けると、カリストは穴の中の弾薬ケースに手を伸ばし触れる。触ってみて判ったが、中身は思ったよりも遙かに軽いようだ。その天板を掴み手元へ引き寄せたが、カリストの細腕でも易々と持ち上げることができたほどだ。

「なあんにも入ってないのかなっ……？」

訝しく思いながら錆び付いた弾薬ケースの天板を何度か揺すり、ゆっくりと開ける。カリストは中を覗き見るよりも先に弾薬ケースに顔を近付けて「２世紀余り封じ込められた歴史の匂い」を吸い込む。ただ錆と湿気ったカビのような匂いがするばかりだったが……。

「ふわあ♪　やっぱし何か入ってるよっ♪」

カリストは弾薬ケースの中に鈍く輝く金属片を見出す。そっと摘み上げると、それはスーツの胸ポケットにもスッキリと収まるようにデザインされた薄身のシガレットケースだった。それなりに使い込まれた物なのか擦り傷や小さなヘコミが残されていたが、そのしっとりとした輝きは明らかに純銀製であり、２世紀以上の時を経てもなお高貴な風合いを失ってはいない。表面にはナチスドイツの国章である鈎十字をあしらった鷹の意匠が彫られていた。

「ふわ……これってばホンモノかなっ……？」

想像以上の「お宝」の発見に、カリストは喜びよりも畏怖を感じ

ていた。これが本物だとすれば、このシガレットケースはヒトラーが気に入った人物や部下に贈答品として手渡していたという類のモノなのではなかろうか。とすれば、事の善悪は別にしても、これは相当な珍品である。カリスト自身はナチズムやヒトラー信奉者ではなかったが、ある部類の連中にとっては一種の「聖遺物」ですらあるのだ。

「やっぱし中はタバコが入ってるのかなっ……？」

カリストは床に座り込み、細心の注意を払ってシガレットケースを開けてみる。意に反して中にはタバコは入っておらず、ボロボロ朽ちかかった紙片と何か小さなモノを包んだ油紙が入っていた。

紙片は小さく折りたたまれた便箋か何かのようだったが、紙全体にインクが滲み拡がるほどに劣化している上に、カビと湿気で張り付いていたため、今この場所で不用意に開くのは躊躇われた。このような場所に置かれていたことを含めて考えると、軍機に属する物品ではなく私信である可能性もあったため、とりあえずカリストは、その紙片も手帳に挟んで保管しておくことにした。後で相応の研究施設に持ち込めば安全に復元できるだろう。

一方の油紙に包まれた物品は、手にした時点で金属だと判る重さと質感だ。こちらは棄損するような手応えは感じられないため、カリストは油紙を開いてみることにした。

「こ、これってば……！」

思わず息を飲むカリスト。油紙の中から出てきたのは、ドイツの主権紋章である鉄十字をあしらった……というか、鉄十字そのもの、ドイツ騎士鉄十字章だった。ボロボロになっているとはいえ赤と黒と白のリボンが付いており、また、勲章の中央部に鈎十字、その下部に制定年を示す「１９３９」が彫られていることから、どこからどう見ても紛うことなきナチスドイツ時代の騎士鉄十字章である。

しかも、十字章とリボンを繋ぐ箇所には交差した小さな剣と柏の葉の金具が取り付けられていた。カリストは見た瞬間に理解したが、これは通常の騎士鉄十字章よりも２段階上に位置する「柏葉剣付騎

士鉄十字章」であり、ナチスドイツ時代を通じて１６０名にしか授与されていないという極めて貴重な品である。
「ふぇ～！？　柏葉剣付だよっ！？」
　これにはカリストも驚愕の声を上げるよりほかない。これが贋物ではなく本物の柏葉剣付騎士鉄十字章ならば、明らかに著名なナチスドイツ軍人が遺した物に間違いはないだろう。しかし、こんな貴重な勲章が、なぜこんなポツダムの小さな試射場のトーチカの壁の中に隠されていたのか、まったく判らない。
　が、何にせよ素人の探索による成果物としては、これ以上を望みようもないほどの「お宝」であろう。この勲章も研究機関に持ち込めば真贋がハッキリするだろうし、展示などされようものなら発見者として自分の名前が掲げられるかもしれない。
「えへへ～♪　はやく帰ってイオにも教えてあげよっと♪」
　カリストは騎士鉄十字章を再び油紙で包んでシガレットケースに入れると、いちおう保護のためにグローブで挟むようにしてから、懐に忍ばせた。自分で発見した物ではあるが、これはドイツ連邦にとっての「（負の）遺産」とも呼べる貴重品だ。
「見つけたゴホウビに、お菓子とかいっぱいいっぱいもらえるかなぁ……♪」
　浮かれ気分でそんなことを考えながらトーチカを出ようと振り返ったが、カリストは刹那に何かイヤな気配を感じて足を止める。案の定、それと同時にトーチカの開口部の方から何か小さな物体が投げ込まれ、床に落ちた。それはカリストの方へ向かってコロコロと転がってくる。
「なんだろ～？」
　それは一見すると単なる円筒状のプラスティックのカタマリか何かに見えたが、カリストはそれが何かを瞬時に把握する。
「ちょ、跳躍爆雷（ちょうやくばくらい）～っ！？」
　叫ぶや否や、カリストは咄嗟に両手で耳と目を塞ぎながら小さく丸まって床に伏せたのだった。

その３－６６（後書き）

「勲章を見つけちゃったよ～♪」
『しかも今回のオハナシは、アホ作者が久々に書いた“戦場のポートレート”の最新話とリンクしてるってウワサだわ……』
「メタ表現だねぇ♪」
『あんた、元も子もないことを……』

その３－６７

カリストはリミッタが外れた恩恵というか弊害というか、実際には１秒にも満たない無限とも思える時間の中で来るべき爆発に少しだけ怯えながら防御姿勢のまま待つよりほかない。

そんなカリストを焦らすかのように、放り込まれた最新型の跳躍爆雷は制御ユニットから瞬間的に四方八方にレーザーを照射して丹念に室内の間取りを計測し、最も殺傷効果の高いと思われる方向と高度を算出し、何かを噴出しながら小さく跳び上がる。

ところが、最初は跳躍するためのガス噴射だと思ったが、それとは別の何か高濃度の気体が跳躍爆雷から極めて短時間で爆発的に散布されているのがカリストには判った。液状から瞬時に蒸散しながら、その気体はみるみるうちに部屋中の空気を外へと押し出して空間を占有していくのだ。

（ふぇ～！　酸素とアセチレンだよっ！？）

カリストは視界内に表示される警告条項に目を走らせて状況の把握に努める。そこには平素から危機感の薄いカリストにでも理解できるほど大きく明確に「危険（ゲファール）」とあり、離脱が可能なら速やかに実行し、それが不可能なら致命的事態も覚悟するようにと表記されていた。

可燃性ガスであるアセチレン（エチン）は充分な酸素と共に燃焼（というか爆発）すれば、３０００℃近い高熱を発するのだ。密室でガス爆発に巻き込まれる程度の爆圧や衝撃ならばバイオロイドは余裕で耐えることができるが、３０００℃の熱ともなれば話は変わってくる。

かつて急速に発達したコンピュータが直面した最大の困難のひとつに「熱処理」の問題があった。高密度化したＣＰＵコアが消費する電力に比例して、同時に抱え込むことになった熱量も甚大なモノとなったのである。

それはサーキットを量子レベルでエッジングし、さらに「人間の脳を数百万個ぶん」とさえ称された多段階層化したプロセッシングスイートを持つバイオロイドにも通じることであり、２２世紀になってもなお課題とされる重大な問題なのだ。

華奢でいながら堅牢で、汎用性と機動性を高い次元で両立させているバイオロイドであるが、その性質を維持しつつ内熱を処理するために、対消滅炉から得られる有り余る出力を以てして体内の組成抽出炉を常にフル稼働させ、食べ物や空気中から得た窒素やヘリウムなどを圧縮液化して冷媒に使っている（カリストが常に何かしら食べているのも、空気中から窒素を得るよりも食べ物として取り込む方が組成効率がイイから……ということになっている）。

しかしそれでも稼働している間は内熱がジリジリと上がっていくため、半ば強制的に必要最低限の機関出力だけ維持しながら待機状態に入る、いわば「睡眠」という形で日に数時間以上のクーリングの時間を設けているのだ。

さらにカリストに至っては、バイオロイドとしては初期モデルであり、その後の機関の更新なども滞っているという事情もあって、元よりかなり内熱過多なのである。カリストの本来の性質もあるにはあるが、純粋に怠け者で眠たがりというだけではなく、クーリングのために起きていたくても起きていられないという事情が少なからずあった。まったくそうは見えないかもしれないが、カリストはバイオロイドの中でも特に熱に弱く、可哀想なくらい「虚弱体質」なのだ。

このように元より内熱過多傾向の強いバイオロイドにとって、自分が発する熱の処理で手一杯なところに短時間であっても３０００℃近い外気に晒されるというのは、致命的な事態になりかねない恐るべき脅威なのである。

（このまんまだと、わたし、死んじゃうかも……？）

さすがのカリストも自分に身に危機が迫っているということを瞬（まばた）

きひとつにも満たない時間内で理解した。そして考えるよりも早く半ば自動的に……人間で言うところの「本能」に近い感覚でもって、今できる最善の防御手段を講じる。事後に多少の機能不全を引き起こしかねなかったが、死んでしまうよりは遙かにマシだ（カリストだって死ぬのは怖いのだ）。

（んう〜　なんかイタイのばっかしだなぁ……でも、早く帰ってイオに鉄十字章を見せてあげよっと♪）

イオに言われるまでもなく何かと面倒事に巻き込まれてばかりの自分の境遇を少しだけ奇妙に感じながらも、カリストは部屋に戻ってイオに勲章を見つけたことを報告し褒めてもらう気マンマンで、顔を覆って爆発に備えるのだった。

その時分、カリストから最も近い位置にいたのはエウロパであった。もちろん偶然ではなく、見失ったカリストの行方を捜していたのである。今日のエウロパは前にカリストと逢った時に着ていた可愛らしい制服ではなくて、戦闘用バイオロイドらしく、まったく肌の露出のない全身黒ずくめの戦闘服を身に付けていた。

「……こちらの方へ来たのは間違いないと思うんだけど……」

カリストのバイクは信じられない速度でポツダム郊外へと走り去り、遠目に監視し続けていたエウロパの虚を突いて置き去りにしてしまったのだ。すぐにＧＰＳ（エウロパは密かにカリストのバイクに小型の発信器を取り付けていた）で追跡したが、それでも追いつくのには相応の時間を費やしてしまったし、あまつさえバイクの傍らにカリストの姿はなく、その気配も感じられなかった。

エウロパはポツダム郊外の荒れ地の小高い丘の上に立ち、周辺を伺う。

その３－６７（後書き）

『今回はえらく説明的な内容だったわね……確かにバイオロイドは熱に最も弱いのよね』

「そだねぇ♪　そなことより……」

『ちなみにプロセッシングスイートの“スイート”ってのは、“甘い（ｓｗｅｅｔ）”って意味じゃなくて“組になった（ｓｕｉｔｅ）”って意味よ。ドイツ語では“Ｖｅｒａｒｂｅｉｔｕｎｇ－ｓｕｉｔｅ”って表記になるわ』

「そなんだねぇ♪　そなことよりクリス……」

『よく考えたら、この物語はドイツでのハナシなのに、表記に英語が多くて変よね？　タイトルからして“ＫａｌｌｉｓｔｏＤｒｅａｍＰｒｏｊｅｃｔ”だからね……ドイツ語だと“ＫａｌｌｉｓｔｏＴｒａｕｍＰｒｏｊｅｋｔ”になるわ』

「んう～？」

『と、とにかく、メリークリスマス＆ハッピーニューイヤー、カリスト！』

「えへへ♪　うん♪　メリークリスマス＆ハッピーニューイヤ～♪　イ～オ♪」

その３－６８（Ｈａｐｐｙ　ＩＯ　Ｘｍａｓ　Ｅｄｉｔｉｏｎ）（前書き）

クリスマス用の特別篇です。
現在進行している本篇とは直接の関わりはありません。
時系列的には去年の特別篇の続き、ですかねｗ

その３－６８（Happy IO Xmas Edition）

「し、しまったぁ……もうこんな時間……！」
年末も差し迫り「人間の社員」の多くがクリスマスホリデーに突入してしまったから、その穴埋めを会社に残ってる私らロボットがすることになる。もちろん私も明日からクリスマスホリデーはもらってるし、バイオロイドじゃない一般のアンドロイドたちがクリスマスだろうが年末年始だろうが関係ナシに無休で働き続けることを考えれば、私は文句を言えるような立場じゃない。
「……とは言え、何で私が普段やらないこんな事務処理だのメール対応だのしなきゃダメなのよっ！？」
今日は１２月の２４日、時間はもう１９時を回ってる。私は慣れない事務作業に手間取り、つい熱くなって時間を忘れて没入してしまっていた。でも、熱かろうが冷たかろうが、何にせよ今ある事務作業は今日のウチに終わらせないとダメなのだ。終わらせない限り私にクリスマスはやってこない。
「と、とにかく、カリストに連絡入れないと……」
私は急いで個人端末を起動して、カリストに繋ぐ。
「カリスト？　いる……わよね？」
『えへへ～♪　なあに～？』
いつも通り気の抜けたような物言いをしながらモニタに姿を見せたカリストは、どこで手に入れた（たぶん近所のスーパーマーケットだろうけど）のか、白いモコモコの付いた赤いサンタ服を着て、アタマにはサンタ帽まで被っていた。やたらと顔をテラテラさせている。
「かっ、ｋｗｉｉ……」
『ふぇ？』
「い、いや！？　べべべ別に何でもないわよっ！？」
しどろもどろになった私に、カリストは不思議そうな顔をしなが

らも笑って応えてくれる。
『どしたのかっ？』
「あ、あのねえ……ちょっと仕事に手間取っちゃって……もう終わりそうなんだけど、もっと早くに連絡すれば良かったかも……ゴメンね」
　こんなことでカリストが文句を言ったり不機嫌になったりしないことは判っているけれども、ちゃんと謝らないと。カリストは案の定というか、特に問題があるような素振りも見せずに、てれてれ笑う。
『えへへ～♪　だいじょぶだよ～♪　今日はいっつもよりも長くお昼寝したし、ぜんっぜん眠くならないから、イオが来るまでずうっと起きて待ってるよ～♪』
「そ、そう。ありがとう。なるべく急いで向かうから待っててね……って、あんた、普段より長く昼寝って、それ、今日はほとんど寝てたってことじゃないっ！？」
『あはは～♪』

　どうにか仕事を片付けて、プレゼントの包みを両手に抱きかかえながら、人混みを掻き分け掻き分けベルリンからポツダムに向かうシャトルに私が乗り込んだのは２０時頃だった。カリストへのプレゼントはお菓子の詰め合わせと、会社が発給している共通商品券の束……私は使う必要がないから貯め込んでいたんだけど、結構な額になっていると思う。これでカリストも少しの間はゆとりのある生活ができるかな。直接的にお金（クレジット）を渡すのもアレだしね。
　ベルリンからポツダムまでの高速シャトルは３０分くらい。車内は混んでいたけども、若いカップルや家族連れ、手にプレゼントを持ったスーツ姿の中年男性やＯＬさん、みんな幸せそうだった。中には仏頂面の独り身の若い男の人なんかもいたけど、まぁ、仕方ないわよね。来年はどうなってるか判らないし。

ポツダムの駅を出て、タクシーを拾おうと思ったけど、混んでてなかなか捉まりそうになかったから、仕方なく私はカリストのマンションまで走ることにした。そんなに寒くない夜だったけど、雪がパラつき始める。私は雪を舞い上がらせ、白い息を吐きながら懸命に走った。

カリストの待つマンションの下まで辿り着き、いざ中へ入ろうとした時、どこからともなく突然にカリストの声が聞こえてくる。

「イ〜オ〜♪」

「？」

周囲を見回し、それからハッとして上を見ると、カリストは自室のベランダから手を振っていた。私が気付いたことを確認したカリストは長い筒状の何かを取り出して肩に担ぐ。

「……あんた、まさかそれって……」

「イ〜オ〜♪　メリ〜クリスマ〜ス♪」

次の瞬間、凄まじい閃光と破裂音と共にカリストの担いだ筒から色とりどりのリボンと紙吹雪が発射された。キラキラと光を反射する綺麗な七色の紙吹雪がカリストを見上げる私に舞い降ってくる。

「もう……バカぁ……」

カリストは巨大クラッカーを片付けると、再び笑顔で手を振る。

「イ〜オ〜♪　はやく来るとイイよ〜♪」

どこかから「うるせえぞバカヤロー！」なんて悪態が聞こえたような気がしたけど、まぁイイわよね、今日くらいは。

その３－６８（Ｈａｐｐｙ　ＩＯ　Ｘｍａｓ　Ｅｄｉｔｉｏｎ）（後書き）

『念願叶って去年の続きね。今さらだけど』
「そいじゃ来年も続きになるのかなっ？」
『……この続きって……もしかして……まさか……』
「イ～オ～♪　どしたのかなっ？　お顔まっか～♪」

――――――――――

本年もお付き合いくださいましてありがとうございました。
それではみなさん、メリークリスマス＆ハッピーニューイヤー！

設定など（バイオロイドについて）　※ややネタバレ含む注意（前書き）

本篇中で詳細に説明できていない設定などを載せています。
随時、項目など加筆していく予定です。
基本的には、ある程度読み進めて頂いたことを前提に書いています。
過度のネタバラしはありませんが、本篇中では伏せられている事柄や裏設定なども含まれるかと思いますので、興が削がれるという方は見ないのが良いかと思われます。

設定など（バイオロイドについて）　※ややネタバレ含む注意

・バイオロイド

アストラル技研製の新世代アンドロイドの総称。製造が開始されたのは２１６５年頃で、実数は不明ながら現在までに４０～５０体ばかりがロールアウトしている。原則として一般に販売等は行われておらず社内外の関連部署で会社の管理下のもと運用されている。

その大半は極めて高い機動性能と近接格闘性能を持ち、また、人間の認識を遙かに凌駕した領域の反射速度と動体視力、従来のアンドロイドでは成し得なかった俊敏さと頑強さを誇る。小型軽量の対消滅炉と組成抽出炉を内蔵するため、外部電源に一切頼ることなくあらゆる環境下で独立稼働が可能。試算では一切のメンテナンスを行わない状態でも１００年以上の耐用年数を持つとされる。

全身はリニアリールと呼ばれる高トルク小型モータと超炭素鋼ワイアにより俊敏かつスムースに可動する。体格によらず総じて体重が３０～４０ｋｇ程度のバイオロイドであるが、総重量の１／３は、これらモータの重量で占められている。

バイオロイドの体内には自己修復のためのナノマシンが搭載されており、これによって体内の損傷や劣化などに対応する。軽微なフレームの破損（人間で言うならば単純骨折）程度ならば、安静にしていれば数日で相応に回復する。時間をかければ完全に修復することも可能である。

内部処理的にも従来機の追従を許さず、バイオロイドを独立稼働する端末だと考えれば、その処理性能はあらゆるスタンドアロンコンピュータにも勝ると言われている。多段階層化されたメインプロセッシングスイートの時間毎の接点数は人間の脳のそれを遙かに凌駕しており、リミッタが掛かった状態でもＩＱは２００を優に超える（カリストも、である）。

原則的に自律・自立稼働するように設計されており、初期段階からほぼ完璧な（ある面では人間を超えた）人工知能を有し、極めて高い精神性・人間性を持っている。バイオロイド自身に言わせれば「自分のどこかにココロがある」と感じているらしい。人工知能は学習性能にも優れているが、その学習速度は故意に極めて緩慢なペースとなっているため、ほとんど機能していないように感じられるほどで、これは性格や行動形態の急激な変化を防ぐためである（例外的に「人生観が変わるような体験」などによって急激に変化する場合もある）。また、身体的に成長することがないため、バイオロイドの思考や言動は外見年齢相応になるよう制御されている（そのため、多少の経験を積んでもカリストが老練な考え方をすることはない）。自由意志を与えられているため、状況によっては人間や他のロボットを殺傷することが可能である。また、何者かに助言や命令をされても常に自己で判断し、盲目的に従うことはない。道徳心は極めて高く、バイオロイドは総じて親切で善良であり、自らもそうでありたいと望む。心身清廉あることを旨とし、特に自らの処女性に対しては潔癖なまでにこれを堅持しようとする。回避できない状況で自らの心身に致命的な危険が迫った場合は自決することも厭わない。

バイオロイドは自分の製造元であるアストラル技研に対して強い信頼感を持っており、また、同胞である他のバイオロイドやアンドロイドに対しても深い愛情と信頼を示す。ことバイオロイド同士は偏愛的なまでに堅固な絆で結ばれており、自分の利益のために裏切ったり見捨てたりするようなことは原則的に考えられない。また、同胞を護るためなら自分の身の危険を顧みることも、死を恐れることもない。

従来の意味での「バイオロイド」は、「バイオ技術を生かした生体アンドロイド」の一般呼称であるが、当作品で言うところの「バイオロイド」は「バイオニクス（生体工学）に基づいたアンドロイ

ド」の略称であり、生体パーツなどは一切使用していない。なので映画「ブレードランナー」のレプリカントに代表されるような「寿命のある（＝死ぬ）」タイプのアンドロイドではなく、メンテナンスさえ受けられれば半永久的に機能を維持することが可能となっている。

その一方、そのコンセプトの根幹に「人間社会に適合して生活する」という大前提があるため、非戦闘時には能力の大半を制限されており、まったく人間と見分けが付かない思考と動作を示す。つまり外見年齢相応の体力と知識しか発揮することができない（ただしカリストのように常に特異な才能を維持し続ける場合も多い）。また、眠気や空腹に苛まれるし、体調も悪くなったりする。

カリストは慢性的な鼻炎を持っていることになっているので、いつも鼻が詰まったような喋り方をする。リミッタが掛かった状態だと体力的にも外見相応のチカラしか発揮できず、平素のカリストは頑張れば懸垂が２回もできるし、死ぬ気になれば１００ｍを１８秒という驚異的な速度で走破することも可能である。

その３－６９

エウロパは懐からＭＴを取り出すと、会社所有の静止通信衛星（とは名ばかりで事実上は監視衛星だが）にリンクする。さらに幾つかの衛星を起動して周囲のリアルタイム三次元映像を生成し、コネクタを介して直接自分の「アタマの中」に転送した。

キョロキョロと周囲を見回している自分の頭上からの姿を自分の視野に捉えるというのは、バイオロイドとしても奇妙な感覚ではあったが、このテの作業にエウロパは慣れている。要領よく周辺を捜索してみたが、やはりカリストと思われる人影は見当たらない。近くの農道を小型のバンが猛スピードで走っているだけだった。

「この辺は古い軍事施設の跡地……カリストは建物か地下に潜っている？」

カリストの「人となり」をそれなりに理解しているエウロパは、カリストが旧軍の兵器や設備に興味を持っていることは把握していた。それらしい建造物は周辺には存在しない。となれば、上空からは判りにくい半地下の掩蔽壕（ブンカー）やトーチカなどに潜り込んでいるだろうと直感する。

「……こんなことになるならカリストに直接ビーコンを撃ち込んでおけば良かった」

会社の衛星には熱源探知用のセンサも搭載されてはいたが、地下にいる人間大の目標の熱を測ることは事実上不可能だ。地表そのものが温まっているためだが、それ以前に大気越しではムリなハナシである。エウロパは頭上の静止衛星に見切りを付けて、地表に対して可能な限り角度の付いている衛星をサーチしたが、使えそうな位置にあった衛星はカメラ感度が悪く、雲も厚かった。

万策尽き、やむなく自力で地道にカリストを探そうと歩を進めたエウロパであったが、その時である。エウロパの５００メートルばかり前方で突然に地面から爆炎が噴き上ったのだ。

爆発の轟音が耳に届くよりも早くエウロパは胸元まである草木を蹂躙しながら疾走を開始していた。くぐもった爆音と共に顔を背けたくなるような熱風がエウロパを迎えたが、それは一瞬で通り過ぎる。当初はカリストが地雷を踏むなり不発弾に触ったりでもしたのかとも考えたが、いかに間抜けなカリストであっても戦闘用バイオロイドの端くれ、そんな安易なミスをするとは思えなかったし、なにより、その類の物事に関してカリストは充分な知識を持っていることをエウロパは知っていた。

「爆炎の温度が一瞬だけど２８００℃を超えていた……それに普通の爆発にしては煙がクリーン過ぎる」

エウロパが爆発地点に辿り着き見れば、そこにはクレーターのような大穴がポッカリと空いていた。もうほとんど炎や煙は見られなかったが、焼けたコンクリート片や土が熱気と湯気を放っている。

「……暑い。やっぱりガス爆弾ね。アセチレンか何かだと思うけど」

それよりカリストだ。カリストのことだから爆心地で逆さまになって地面に突き刺さって藻掻いているのではないかと思っていた（期待していた）エウロパだったが、ぱっと見渡してみても何者の姿も見当たらない。だが、バイオロイドが熱に弱いといっても、この程度の熱では蒸発するわけがないので、どこかに埋まっているか、少し離れた場所にでも吹き飛んでしまったのだろう。

「……イオが知ったら激怒するかしら？」

そんなことを呟きながらクレーターに足を踏み出そうとしたエウロパだったが、何かイヤな気配を感じて咄嗟に後方に飛び退き、伏せる。それと同時に頭上の空気を激しく振るわせながら弾丸が飛来した。エウロパは伏せたまま即座に横に転がり、爆発で飛び散った大きなコンクリート塊の後ろに身を隠す。弾丸の飛来から１０秒以上経ってから甲高い発砲音が聞こえた。

「……３ｋｍは離れてる」

立て続けに放たれた弾丸が身を隠しているコンクリート塊を激し

くノックし、粉砕されたコンクリート片がパラパラと降りかかってくる。そう長くは保たないと感じながらエウロパは思案する。
「発砲音が聞こえたということは電磁誘導銃（レールガン）の類ではなさそうね。とは言え、弾速からすると液状火薬を使った対物徹甲弾と大型の狙撃銃のようだから、直撃されれば少しは痛いかもしれない」
エウロパは発砲される瞬間を見ていた。「イヤな感じ」がしたのは、視界の遙か彼方で一瞬だけ何かが光ったのを感じたからだ。たぶん少し離れたところにある納屋か何かから狙撃されているようだ。３ｋｍも離れていることを考慮に入れれば、光学式スコープによる手動狙撃ではなく、ディジタル照準とコンピュータ制御による半自動狙撃だろう。
いかに高速徹甲弾でも質量を持つ限り光の速度よりは遙かに遅い。マズルファイアを確認してから回避できるバイオロイドの機動性能をもってすれば直撃されることはないだろうが、回避行動を続けながらカリストの安否を確認することはさすがに難しい。また、向こうの狙撃銃に搭載されているＦＣＳ（射撃管制装置）の種類も判らないため、ヘタをすれば「先読み」で当てられる可能性も皆無ではない。
一方、爆発で大きく窪みを作ったクレーター内に転がり込めば狙撃は容易に避けられそうだが、カリストを掘り返して無事に保護できたとしても、その後にカリスト（恐らく機能不全に陥って身動きできない）を伴ってクレーターから安全に脱出するのは困難だろう。
こちらにも狙撃銃があれば打開策も打てただろうが、あいにくエウロパは空手だった。こうして思案している間にもカリストは衰弱して死んでしまうかもしれないし、少なくとも確実に判ることは、このままだと身を隠しているコンクリート塊がアニメに出てくるエメンタールチーズのように穴ボコになっていくということだ。唯一の望みは、エウロパと同様にカリストの近辺で監視を続けているであろうガニメデが来てくれることだった。

その３－６９（後書き）

『年明け早々、ずいぶん派手に爆発したわね……』
「あはは～♪　バイオロイドは頑丈だから、こんくらいなら平気だよっ♪」
『あんたねえ……いちおう本篇は切迫した状況なんだから少しは自重しなさいよっ！』
「そだ～♪　あけましてオメデト～♪」
『ん……明けましておめでとう！　にしても、作者に関しては今年はもう少しペースを上げてもらいたいもんね……』

その３－７０

エウロパはカリストやイオとは姉妹機であり同世代の柔和そうな少女の態はしていたが、まったく異質の思考の持ち主であった。一見すると愚直なまでに職務に忠実で冷静で理知的、ロボットらしいと言えば実にロボットらしい性質である。しかしその実、拷問に関する本を読んでウットリするなど、カリストですら鼻白むほどの、どこか逸脱した部分があった。エウロパはファナティックな殉教者のように、苦境にあればあるほど「燃える」ような性質なのだ。

さらに、これに関してはエウロパに限ったハナシではないのだが、バイオロイドは総じて気高い。かつてのドイツ軍人気質そのままに、高慢とさえ言えるほどに誇り高いのである。いかに手強い外敵や苦境にあっても、これに屈するなどということはバイオロイドにとって「絶対に有り得ない」ことなのだ。それは、のんきで柔和なカリストであっても根底に流れる思想は同じなのである。

ゆえに、いつ来るのか判らない救援を待って身を隠しているコンクリート塊＝自分の身の安全が削り取られていくのをジッと耐えるだけという屈辱を、エウロパは黙って受け入れるわけにはいかなかった。

横たわったままＭＴを取り出すと、先ほどカリストを探す際に使用した衛星に再びリンクし、即座に狙撃位置を割り出す。思った通り、ここから北に３ｋｍばかり離れた丘の上の物置小屋に敵は潜んでいるようだった。

「……現状、敵から狙撃されてる。今のところ損害皆無。ただし長時間は保たない。カリストは高熱のガス爆発に巻き込まれて安否不明……たぶん死んではいないと思うけど。いちおう敵の座標を送るから、可能なら援護してほしい」

訥々とした口調で会社と通信するエウロパ。ポツダム界隈にガニ

メデがいるであろうから救援に来てくれることは疑うべくもないが、問題はそれが「いつ」になるかだ。やはり待ってはいられない。
「なら打って出る？」
狙撃地点まで３ｋｍも走る気にはならなかった。そんなことをするくらいなら、カリストの安否を先に確認したい。とりあえずクレーターに飛び込んで、カリストを捜すべきか。
だが、思いもかけない「音」に、エウロパはイヤでも行動を開始しなくてはならないことになってしまった。かなりの近距離でポンポンポン……と、少し間抜けな破裂音が連続して響いたのだ。
「……迫撃砲」
もう逡巡しているような時間は終わりだ。エウロパは直感的に反応し、横たわった状態から即座にダッシュしてコンクリート塊の陰から飛び出した。それと同じくして視界の片隅、遙か彼方で小さな光が明滅する。タイミングを合わせて狙撃されたのだ。細い光の糸が自分めがけて一直線に突進してくるのが見える……迫撃弾の着弾まで時間もない。もう身を伏して回避するのはムリそうだった。
「ふうっ！」
エウロパは短く息を吐き、まるでフィギュアスケートのようにムネの前で両腕を組んで回転を付けながら横様に飛び跳ねる。唸りを上げた対物徹甲弾が髪の毛を掠めながら傍を抜けていった。片足で着地すると同時に、そのまま地面を蹴って再び大きく前方に跳ぶ。
（間に合わ……ない？）
２度目の跳躍の着地を待たずにエウロパの背後、先程まで身を隠していたコンクリート塊の周囲に連続して迫撃弾が着弾し、爆炎を巻き上げながら炸裂した。いかにバイオロイドとはいえ、空中にいる間は自由を大きく制限される。人間には真似のできない圧倒的な機動性能で直撃こそ免れたが、爆風に押さえつけられたエウロパは体勢を崩したまま地面に引き倒された。
強い衝撃は受けたものの、ダメージと呼べるほどのダメージでもない。再び迫撃砲の発射音を感知したエウロパは、息つく間もなく

飛び起きてクレーターを迂回するように走り出す。不思議と狙撃される気配は止んでいた。あるいはもしかするとガニメデが到達したのかもしれないが今は確認の術はない。
（迫撃砲の発射点は近いはず）
狙撃との連携が失われた今となっては、緩慢に弧を描いて飛んでくるだけの迫撃砲弾など恐るるに足りない。さっきまで自分が転がっていた地点を目指して白い尾を曳きながら飛来する砲弾の弾道から素早く逆算し、発射点を割り出す。
（見つけた……！）
藪の向こうに小型のバンが止まっており、そこに人の気配がある。戦闘用アンドロイドの仕業だろうと思っていたエウロパだったが、温度分布を見る限り敵は生身の人間がひとりのようだ。特殊部隊が着るような戦闘服を身に付け目出し帽を被った男が、理解を超えた速度で機動するエウロパの位置を捕捉しかねて慌てたように計測用スコープを左右に振っていた。
「死にたくなければ即時投降しろ！」
まだ少し距離があったが、エウロパは猛スピードで藪を掻き分け進みながら大声で警告を発する。
「反抗の意志があるなら殺す！」
殺伐とした言葉を吐きかけながら迫るエウロパに、敵は逆の意味で観念したのか、サブマシンガンを手に取ると何かを叫びながら周囲に乱射し始める始末。
（やっぱりヘブル語ね）
敵が何者なのか概ね理解したエウロパは、まったく怯むことなく交戦圏内に足を踏み入れる。戦闘用バイオロイドにこの距離まで接近を許してしまったら、どのような武装をしていても生身の人間に勝機は無いことをエウロパは熟知していた。
「最後の警告だ！　投降しろ！」
「！！？？？　？？？」
藪草の向こう側から踊り出たエウロパに、男は絶叫しながらサブ

マシンガンを腰ダメで撃ってくる。狙いが定まっていない上に、エウロパが着ている戦闘制服は非常に高い防弾性能を持っているため、まったく損害を受けることはなかった。もっとも、人間が使用できる程度のサブマシンガンの銃弾ならば、露出した肌に至近弾を受けたところで、それこそ「蚊に刺されたような」ものであったが。

エウロパは勢いを落とすことなく、自分の顔を両腕で遮りながら一気に間合いを詰めた。

その３－７０（後書き）

『今回の本文には少しだけ特殊なフォントが使用されているわ。ＰＣの環境やケータイだと正しく表示されないかもしれないけど、その時は残念だけど諦めてもらうしかないわね……』

「ヘブライ（ヘブル）文字だねぇ♪　ぜえんぜん読めないや～♪」

『中近東の方の言語はほとんどが右から左に向かって読み書きするのよね？　ネイティヴ向けの中近東のインターネットサイトも同様だから、ちょっと違和感……』

「参考～♪　ｈｔｔｐ：／／ｈｅ．ｗｉｋｉｐｅｄｉａ．ｏｒｇ／ｗｉｋｉ／%Ｄ７%９０%Ｄ７%９Ｃ%Ｄ７%Ａ４%Ｄ７%９１%Ｄ７%９９%Ｄ７%ＡＡ_%Ｄ７%Ａ２%Ｄ７%９１%Ｄ７%Ａ８%Ｄ７%９９」

『ちなみに、本文中のセリフは“来るな！！”って言ってるらしいわ』

その３－７１

イオが執拗に食い下がった結果、ヴァレンタインは嫌々そうながらもエウロパとガニメデの「仕事」について語ってくれた。その言を信じるのであれば、エウロパもガニメデもカリストを外敵から直接的に護る任務に就いているとのことであった。

「エウロパたちが極秘裏にカリストを護ってるっていうの！？」

多くの通行人や観光客が行き来するパリ広場だということも忘れて、思わず語気を強めてヴァレンタインに食ってかかったイオだったが、ヴァレンタインは手をヒラヒラさせながら「まぁまぁ」と制する。

「あまり大声で話すようなコトじゃないよ。一般人に聞かれても問題は無いけど、このハナシを君が聞いたというコトを会社に知られるのは、お互いにマズイからね」

「あ……ご、ゴメン」

ヴァレンタインに釘を刺されたイオは、ボソボソと声を潜めるようにして会話を進める。

「で、でも、そんなハナシは聞いたこともなかったし……それに、前の一件からはカリストの周囲で不穏な動きは感じられないわ。それって本当に信用できる情報なの？」

「うん、まあ。でも、カリストの周囲で不穏な動きか感じられないってのは、それはエウロパとガニメデが事前に食い止めているからだよ？」

「はあ！？」

にわかには信じられないといった感じのイオであったが、ヴァレンタインは手にしていたＭＴを開くと、そこに記されているデータを読み上げる。

「えーと……前の一件以降、カリストを目的とした攻撃行動は確認できるだけでも３８回企図されて、実際に２７回実行されているん

だ。そのすべてはカリストに接触される前にエウロパとガニメデによって阻止されてる。阻止というか、まぁ、迎撃して倒してると言うべきだろうね」
「……そんな……」
イオは顔を青くしていた。
「それがホントだとすると、何でカリストばかりにそんなに敵が群がってくるってのよっ！？　完全に狙い撃ちされてるじゃない！？」
この期に及んで、自分が（そしてカリストも）何も会社から知らされないまま、「蚊帳の外」にいたということは不思議と気にならなかった。会社が何かと秘密主義的だということは重々承知しているし、その真意を問うことがどれほど無意味なことかをイオは良く理解しているつもりだ。
だが、そこに何か計り知れない意図があることは疑うまでもない。それが何なのか……ひいてはカリストに何か重大な危機や危険が及ぶようなことなのか否か、イオが気がかりなのはそれだけである。
「そりゃ、まあね。カリストは単独で社外にいるから、狙いやすいんだろうね」
「っていうか、エウロパとガニメデは会社の指示でカリストを護ってるって言ったわよね？　そこまでして護るくらいなら有無を言わさず会社に引き戻せばイイじゃない？　それ以前に会社だってカリストが狙われてるのは把握してるんだから、いくらでも手の打ちようが……」
そこまで言って、イオは恐ろしくイヤな予感がした。考えることすらおぞましい唾棄したくなるような、そしてカリストのことを誰よりも大切に想っているイオにしてみれば悪夢のような予感だった。自分が遠回しに伝えようとしていたことにイオが考え至ったのを悟ったヴァレンタインも、苦々しい表情だ。
「……ねえ、まさかとは思うけど……？」
「……うん、そうなんだ。君の考えてる通りだ」
「でも、どうして……！　何であのコなのよっ！？　こんなことに

何の意味があるっていうのっ！？」
　会社の真意を問うことに意味が無い、そう判っていても納得はできなかった。否、薄々は判っている。だが、それは余りに馬鹿馬鹿しく情けのない事情によるものなのだ。
「改めて説明する必要も無いかもしれないけど……」
　ヴァレンタインは動揺するイオを現実に連れ戻すために、敢えて詳細の説明を始める。
「会社は2世紀近くに渡って様々な国の様々な組織から妨害や攻撃を受け続けてる。それは君も知っての通り、会社がナチスの最後の末裔だからだ。“今”がどうとか関係ない。ナチスの末裔である限り永遠に攻撃の対象になるだろう」
「……うん。やっぱり“あの国”が絡んでるのね？」
「間違いなくそうだね。その某国の諜報機関なんだけど……向こうのネットワークやコミュニティも会社と同じくらい歴史があるし、恐ろしく堅固で膨大だ。なにせカネじゃ解決できない民族や宗教に関係したハナシだからね……そう易々とは手を引いてくれない。向こうの大本を叩けば済むかもしれないけど、そう簡単なハナシでもない。2世紀にも渡る意地の張り合いだ」
　つくづく人間の所業の浅はかさというか、くだらなさに幻滅するイオだったが、半永久的に生きることのできるバイオロイドと違い、寿命に限りのある人間のことだから仕方がないと言えば仕方がないと諦めるよりほかない。ずっとそうやって人間社会は発展し続けてきたのだし、それが発展の原動力でもあったはずだ。
　だからといって、そんな人間の営みのためにカリストを人身御供に捧げなくてはならない「いわれ」は無い。そんなことにカリストを付き合わせる必要は皆無なのだ。
「要は……会社はカリストを囮に使って、敵を誘引してってコトよね？」
「まぁ、そんなトコロだね。警戒心が薄くて戦意の低いカリストは適任らしいんだ」

敢えて隙を見せて誘い込み、個別に粉砕していく……いつ終わるとも知れないが、そうやって敵を炙り出して虱潰しにする算段なのだろうか。ひたすら不毛ではあるが、敵を掌中で転がし続けるのだから政治的には有効だろう。

「言うなれば、カリストを囮にした“ナチの残党狩り狩り”ってトコロかな」

「どうりで……」

合点がいくイオ。自分がカリストの傍らで共に暮らすことや、会社にカリストを連れ戻すことを頭ごなしに却下された理由がこれでハッキリした。しかし、たとえアタマで理解できたとしても、そんな会社の思惑や人間の所業なんかにイオは構っていられる気がしない。そんなことも知らずにホエホエと暮らしているカリストを救わなくてはならない。

その３－７１（後書き）

「なんだかむつかしい話だねぇ♪」

『なにを他人事みたいにっ！？　……とは言え、これでようやく物語が動き始めたって感じよね……まぁまだ先は長いらしいけど……』

「わたしってば、おとりロボットだったんだね～♪」

『……さ、さぁ……っていうか、爆発に巻き込まれて穴に埋まったまんまよね、あんた』

設定など（カリストについて）　※ややネタバレ含む注意（前書き）

本篇中で詳細に説明できていない設定などを載せています。
随時、項目など加筆していく予定です。
基本的には、ある程度読み進めて頂いたことを前提に書いています。
過度のネタバラしはありませんが、本篇中では伏せられている事柄や裏設定なども含まれるかと思いますので、興が削がれるという方は見ないのが良いかと思われます。

設定など（カリストについて）　※ややネタバレ含む注意

・カリスト

アストラル技研で創られたバイオロイド。型式は「ＸＸ４７ｃｚ－ＥｇＩＩ－Ｓ」。正式な呼称は「カリスト・イョフィエル・ウルサマヨル・フォン・アストラル」。「カリスト」は木星の衛星、「イョフィエル」はエデンの園の東に立ち警備をしているとされる智天使、「ウルサマヨル」はラテン語での大熊座に、それぞれ由来している。

公式には実用バイオロイドの第一号機ということになっているが、実際には「最初に設計された」という程度に過ぎず、イオやエウロパらの方が僅かに先行して完成している。また、社外で暮らしているカリストは各機関の更新が滞っているため、戦闘用バイオロイドとしての性能の陳腐化が進んでおり、身体能力に限っては一部の後発のアンドロイドにも劣る部分がある。

身長１３６ｃｍ、体重３４ｋｇ。設定されている年齢は１６歳だが、その幼い言動とも相まって外見上は１２歳前後に見られがちである。背が低いことや子供扱いされることに関して、カリスト自身は「みんなに優しくしてもらえるから」という理由で特に気にしてはいない。ただし、ムネが平板なままで大きくなる見込みがないということに関してのみ、多少は残念に思っている。また、カリストは自分が幼稚な外見と性格だということを理解した上で、それでもやはり自身を１６歳だと考えている。

設定上は左利きで、日常生活では「字を書く」「投げる」「打つ」「構える」などが左利きとなるが、「ナイフとフォーク（一応ハシも）」「ギターを弾く」は右利きである（カリストはギターを弾くことはできないが、イオに初めてギターを持たされた際に右構えだったため）。リミッタが外れた際には両手とも等しく使うことができるが、やはり左利きが基本となっている。

髪色は明るいプラチナブロンド（トウヘッド）で一般的な金髪よりも銀髪に近い。カリストの頭髪は背中までの長さであるが、毛先がすべて外側に跳ね上がっているため普段は短く見える。寝るとき以外は常に黒いヘアバンドを付けているが、これは手作りでいつどこで手に入れたのかすら判らないヘアバンドであるにも関わらず、カリストは相当に愛着を持って大切に使っている。瞳はコバルトブルーで深く明るい印象的な色合いである。顔立ちのモデリングと設定上の血統として、スラヴ系ゲルマン人と１／３２がラテン系の血統ということになっている。なお、ほとんど意味はないが、国民ＩＤの表記では血液型はＯ型で登録されている。

普段はオフブラックのノースリーブのウェアとスパッツを身に付け、その上にノースリーブの戦闘用ジャケットを着ている。いずれも強靱な特殊素材で作られたもので、防刃防弾性能に優れ、熱や薬品にも強い。本篇中でも本人が言及しているように、カリストは下着を着けるという習慣（常識）がないため、これらを素肌の上に直接に着ている。ほか、やはり特殊素材で作られた合皮のグローブと編み上げブーツを身に付ける。ソックスだけは市販品の黒いソックスを履いている。これ以外に私服と呼べるような服は持っておらず、せいぜい替えのウェアとスパッツ、ソックスが何組かあるくらいである。

イオから貰ったアストラル技研の内勤制服はイオに会うときに着ることが多い（本来、社外にいるカリストが身に付けること自体、推奨されることではない）。スカートを極端に短く詰めてしまったため、容易に下着が見えることを危惧したイオの勧めにより、スカートの下にはスパッツを穿くようにしている。

一応は戦闘用バイオロイドとして創られているが、攻撃意識や戦闘意欲が極端に低いため、戦闘行為にはまったく期待できない。戦闘用バイオロイドなので左腕には近接戦闘用のブレードが仕込まれており、自分の意志で展開させることができる（カリストは内なる

欲求に抗えず一度だけブレードをイモの皮むきに使ったことがある）。

戦闘意欲こそ低いものの、各種の兵器や兵装に関する知識（その多くは趣味の領域である）は豊富で、大抵の銃器や火器の扱いに長けている。戦闘心理学や戦略・戦術的な方面にも詳しく、参謀や指揮官的なポジションならば務まるかもしれない（そのような局面が訪れることは皆無であろうが）。

戦闘用バイオロイドとしては失格同然であるが、感受性が豊かで親和力に富む、順応力が高く機転が利く、思いやりが深く素直で朗らか、のんきで前向き、精神的に打たれ強くストレスに極めて強いなど、人間性という点ではバイオロイドの中でも群を抜いており、ある種のカリスマ性を持つ。その反面、猜疑心や警戒心が希薄な上に極度のお人好しということもあって、損得勘定やリスクを回避する意識が致命的なまでに低い。また、他者に対するのと同じくらい自分にも優しく、自堕落で快楽の誘惑に惰弱な部分もある。親和力や道徳心が高いため目立った欠点とはなっていないが、やや自意識が強い面もあり、こと自分の容姿に関しては根拠不明な自信を持っている一方で、自分のことをとてもアタマが悪いとも思っている。

好奇心が強く、興味を惹かれる物事に関しては非常に積極的に取り組むが、そうでない物事に関しては実に無頓着。自堕落ではあるが自分で決めたことに対してはムリのない範囲で貫徹しようとする傾向が強い。気の進まない物事に関して頭ごなしに強要や強制されることを嫌っており、消極的ながら遠回しにでも拒絶し、従おうとはしない。ただしイオなど信頼できる人物からの提言や提案に対しては何でも鵜呑みにすることが多い。

周りからの評価や外聞を気にすることは少なく、他者に迷惑を及ぼさない範囲内で自分の思うように生きたいと願っている。また前述のように好奇心が強いということもあり、他人からすればどうでもいいようなことに興味を持ったり没頭しがちであり（ツチノコ探

しやカエルの観察など）、それに対して侮蔑や偏見の目で見られてもまったく気にしない。反面、妙なことに恥じらいを感じることも多い。

明らかに同性愛志向が強く、男性に対しては敬愛や憧憬の情は抱いても恋愛感情を持つことはない。同世代の可愛らしい少女に惹かれやすいが、目下のところ強く愛情を向けるのはイオだけであり、決して気が多いというわけではない。また、カリストの場合、恋愛感情と言うよりも極度に強い愛着心であり、それが果たして恋愛感情と呼べるのかどうかすら怪しいものである。ただし、恋愛対象（この場合イオ）に対しては再三にわたってキスやハグを提言するなど、過度にスキンシップを求めたがる傾向にある。

カリストはリミッタの有無に関わらず幾つかの特異な才能を持つ。その大半は決して有意とは言えないようなものばかりであるが、先の緊急救命などが最たるものであろう。

医療全般に通じているわけではないが、カリストは緊急医療に詳しく、緊急時には適切な医療活動を行うことができる。また、緊急医療に限らず、野外活動全般の知識と実践力に長けている。リミッタがかかっている状態でも高標高登山や極地活動に極めて高い適正があり、天候や野草や野生生物の知識もある。つまり非常に高いサバイバル能力を持っている。バイオロイドなのでサバイバル知識など無くても野垂れ死になどするわけがないのだが、災害や戦争などの非常時には適切に人間を指導し、引率することが可能というわけであるし、一応はカリストにもその気概はある。カリストが緊急医療キットやアーミーナイフを常時携帯しているのは、こういう事情による。

自堕落ではあるが決してだらしがないというわけではなく、家事全般を得意にしている。掃除や炊事などは実に手際よく行えるし、その方法も効率的で適切である。自炊することは多くはない（カリストの主食はもっぱらお菓子である）が、自室の整頓や掃除は日々

欠かすことはなく、部屋は常に良く片付いている。手先も器用で、機械をいじったり模型を作るのが巧く、愛車の原付バイクもほとんど自作同然である。ただし、なぜかＭＴなどの情報端末の操作は苦手としている。

総じて知識量は豊かで、広範囲に及んでいる。主言語のドイツ語は当然だが、リミッタがかかっている状態でも英語・イタリア語・オランダ語・スペイン語・フランス語・ロシア語・ラテン語・日本語を、かなり拙いものではあるが初等教育程度になら読み書き会話することが可能である（日本語は平仮名や片仮名が理解できる程度）。意外と知識欲が強いため、気になったことや興味を感じたことは納得がいくまで調べたり実験したりする。本で得た知識だけで小型のロケットモーターを作り手製ロケットを翔ばしたり（リフトオフの直後に爆散したが）、ジュースから密造酒を造ったりと、思いついたら行動する実践力を発揮することもある。

多岐にわたる限定的な趣味を数多く持っているが、その最たるものは「ツチノコ探し」であろうか。ツチノコに限らず多くの爬虫類や両生類、虫や珍しい草花などを好んで探しては観察している。実在の疑わしいツチノコは別にして、小鳥、カエル、毛虫、マリモ、ドングリなどを特に愛している。ほか、読書や映画鑑賞、模型造り、昼寝、イオとのお喋りなどを趣味にしている。

最も不得手としていることはスポーツ全般で、いわゆる「運動音痴」である。リミッタが掛かっている状態だと身体能力も極めて貧弱で、同世代の人間の少女と比較しても群を抜いて劣っている。特に水泳はまったくダメで、浅瀬でも容易に溺れてしまう（水が怖いというわけではない）。ただし、伸びやかな四肢や立ち振る舞いは至って健康的であり、子供らしい溌剌とした元気に満ちている。

衣服類の他に常に携帯している物品として、「ドイツ連邦国民ＩＤカード」「ビクトリノックスのアーミーナイフ」「簡易医療キット」「赤十字社の旗と腕章」「アストラル技研の従事者証」などが

ある。
「ドイツ連邦国民ＩＤカード」は、この時代のドイツ人ならば誰でも携帯する身分証であり、各種の免許やパスポートとしての機能も内包している。カリストはバイオロイドであるため、「世を忍ぶ仮の姿」としてアストラル技研によって「カリスト・グロスベイア」という偽名で登録されている。年齢などに関しては年を越す度に偽装し続けることになるが、これに関しては会社が政府の管理ホストコンピュータに侵入して年次ごとに改竄することになっている。カリストは自動車、二輪車、大型特殊、なぜか牽引とクレーンの免許を持っている。実際に問題なく操縦を行うこともできる。
「ビクトリノックスのアーミーナイフ」であるが、いわゆる「十徳ナイフ」のことである。ビクトリノックス社製の９１ｍｍトラベラーライトモデルを、ジャケットのベルトループに付いているポーチに入れて常に携帯している。通常の各種ツールの他にＬＥＤライトや時計、気圧計、温度計などを内蔵しており非常に便利なナイフであるが、自室に帰れば立派な工具セットがあるため、実際のトコロはあまり使い途はない。また、リミッタが外れれば暗視したり周囲の環境を計測することも可能なので、ますます使い途は限られる。イオからのプレゼントで、一種の「お守り」である。
「簡易医療キット」は、軍隊などで兵士が携帯している類のサバイバルキットである。ガーゼや包帯、多少の医薬品、メスキット、鉗子、縫合キット、注射器、消毒薬と麻酔などが、アルミケースに入れられている。実際にカリストはこれを用いて人命救助に成功しているが、イオも言うように本来ならば推奨されるようなことではない。ただし、簡易医療キットをカリストに携帯させているのは会社の意向である。また、カリストは緊急救命活動に関して相応の知識を持ち合わせているのも事実である。このキットもベルトのポーチに入れている。
「赤十字社の旗と腕章」であるが、なぜかカリストはこれらを携帯している。カリストは正式に赤十字社員として登録されている（

「カリスト・グロスベイア」としてではなく、「バイオロイドのカリスト」としてである）のだが、それがイコール医療従事者だということにはならない。また、みだりに赤十字章を使用することも国際法で禁じられている。ただし、戦時下などの緊急時に怪我人の避難場所を示したり非戦闘員であることのアピールには使用できるであろう。

「アストラル技研の従事者証」は、「バイオロイドとしてのカリスト」の身分証であり、これを示せばベルリンのアストラル技研本社はもちろん、各国・各都市の支店で無償でサポートを受けることが可能になっている。会社でのバイオロイドの身分は非常に高く、人間の役員並みの待遇であるが、就いている職務を超える権限は持たされてはいない。当然のことであるが社外にいるカリストは「お客様」同然であり、アストラル技研本社に赴いた場合は下にも置かない接待を受けることはできるが、社内を我が物顔で闊歩できるというわけではない。バイオロイドであることは原則的に秘匿されているため、カリストの持つ会社の従事者証はスーパーマーケットの会員証のように擬装されている。また、バイオロイドやアンドロイドは瞳の奥のセンサ配列のパターン識別で最終的に個体を特定するため、従事者証を紛失などしても特に緊急の問題にはならない。

バイオロイドは基本的に信仰を持っておらず、特定の宗教を信仰するようには創られてはいない。ただし、ドイツはキリスト教圏（主にプロテスタント）だということもあり、強いて言うならばキリスト教の影響を最も強く受けており、バイオロイドの中には実際にプロテスタントの者もいる。カリストは何も信仰してはいないが、それなりの宗教的な知識と独自に構築した宗教観は持っており、いわゆるみんなが「神」と呼ぶ思念体なり意識体は存在していないものの、何か世界を緩やかに制御している不思議な「摂理」のようなものはあると考えているようで、どちらかというと道教や神道的な宗教観を持つ汎神論者である。また、バイオロイドは総じて自分に

は「タマシイのようなもの」があると感じており、そのためかカリストもオカルトや霊的な存在は信じる傾向にある。

政治思想的には本篇中にもあるように、やや右傾化した愛国者である。とは言っても、ゲルマン民族とドイツ連邦に愛着と敬意を持っているだけで、他国よりも優れているとか他民族を排斥するべきだなどという思想は微塵も持ってはいない。むしろ、互いが互いを助け合い、誰もが等しく幸福な生活ができる世の中になることを願っているなど、空想的社会主義のような考えを持っているとも言える。ただし、その実現が非常に困難であることも理解はしているようだ。

その3－72

「あと……もうひとつだけ教えてほしいことがあるんだけど……」
いつの間にか無意識に懐中からタバコの箱を取り出していたヴァレンタインの手から、素早くそれを奪い取り自分の制服のポケットに突っ込んで、苦渋の表情を浮かべているヴァレンタインに構わずイオはハナシを続ける。
「この前の、あのコ……なんていったっけ？　あ、そう、リリケラ？　あのコって何なの？　あんたの仲間？　敵ってワケじゃなさそうだったけど」
「ああー……まだ憶えてたんだ？」
今までとは打って変わって、露骨に嫌そうな顔をするヴァレンタイン。詳細を語ることが面倒だとか秘密にしておきたいとかいうわけではなく、どうにもリリケラの話題に触れること自体が忌々しそうであった。とは言え、こうもハッキリとイオに訊ねられてしまっては、さすがに適当に受け流すこともできない。
「うーん……あのコは、何というか……うーん……」
渋るヴァレンタインにイオは人差し指を立てる。
「じゃあ要点だけ訊くわ。要点1、あんたはリリケラに対して……そ、その……男性として潔白？」
こんなことを訊いてどうするのだと、イオは愚かなことを気にしている自分に違和感を覚える。だが、変態だ変態だと嘲罵してはいたが、やはりヴァレンタインには「マトモな男」であってほしいのだ。
「そりゃもちろん。あのコは周りから構ってほしくて虚言する貴族令嬢みたいなもんだよ。だいたい中身は“あんなふう”だけど、見た目が幼すぎる。どう考えても倫理的に問題があるし、オレにだって選ぶ権利はあるし、君が思っているよりもオレはずっとマトモな男だからね」

「……ふうん……ずいぶんと立て板に水な回答ね。とりあえず信じるわ」
空々しい口調と視線でヴァレンタインの答えに応じるイオであったが、内心ではホッとする。あの一件以来、当然リリケラの素性は気にはなっていたが、これが一番の心配事だったのだ。
「じゃ次ね。要点2、あのコはバイオロイド？　アストラル技研製の？」
「ああ。そういうことになるね。君たちとは少し違った部分も多いけど、分類上はバイオロイドだ」
これは言われるまでもなく真実だろう。リリケラが凄まじい身体能力というか性能を発揮するのを、イオも眼前で確認しているし、何よりリリケラの得体の知れない「抑制」を身を以て受け、よりにもよって最愛の人の前で、恐ろしい痴態を晒されかけた……。
「あぎゃっ！？」
「あー、イヤな思い出がフラッシュバック……」
手足を振り振り顔を真っ赤にして恥ずかしい記憶を振り払おうとするイオに、さもありなん、と、頷くヴァレンタイン。ひとしきりイオは身悶えしてから立ち直る。
「うう……よ、要点3、そ、それで、つまりはリリケラは敵じゃないって考えてもイイのよね？」
「うーん、ああ、まあ……味方ってワケでもないとは思うけど……オレのクチからは何とも言いにくいな……」
結局はヴァレンタインはすべてを話す気にはならないようだった。敵でもなければ味方でもない……確かに先の一件でのリリケラの態度、と言うか、カリストやイオに対する姿勢は、どう好意的に解釈しても決して愉快なものではなかった（実際のトコロは、すべてが完璧に不愉快だったワケでもないのだが、それをイオは認めるわけにはいかないのだ）。ただハッキリしているのはリリケラは一撃でイオやカリストの「魂」に触れ、融かし、浸蝕してきたのだ。ほんの一瞬だったとは言え、イオはカラダもココロも完全にリリケラに

支配さたのである。果たして、そんな芸当が並のバイオロイドに可能なのだろうか……。
「まさか、また襲いに来るなんてことないわよね？」
「さあ……あのコはああ見えて意外と深謀遠慮なトコロがあるから、何を考えてるかよく判らない……一応は釘は刺しておいたけど、どうだか」
ヴァレンタインの口ぶりからすれば、明らかに手に余しているという風であった。
「最後ね。要点4、あのコは何を企んでるの？　何か目的があって姿を現したんでしょ？」
「それは……なんだ……なんと言えばいいのか……」
と、ヴァレンタインはそこまで話して急にギョッとしたような顔をして絶句してしまった。その視線はイオの肩越しの向こう側に向けられている。
「え？　なに？」
思わず振り向こうとしたイオであったが、誰かが自分の背後に立って肩に手を載せるのを感じた。
「振り向く必要はないわ……ごきげんよう、私の可愛いイオ」
聞き覚えのある鈴のように玲瓏な、氷の剣のように冷たい声。それはリリケラの声だ。
「でも、お茶請け代わりに他人様のウワサ話をするのは感心できないわ……ほら、ウワサをすれば何とやら……と言うでしょう？　うふふ」
イオは恐ろしくて振り向く気にはならなかった。こんな人通りの多いところで何かされるとは思わなかったが、もう本能的にリリケラに懼れを感じるようになってしまっているのだ。それを感じ取ったのかリリケラはころころと嗤(わら)っている。
「あら？　華奢な肩が強張っているわ……肩こりかしら？　ムネは小さいのに？」
「あ、あんただって……」

ボソボソとした口調で強がってはみたが、ヒザが震える。見かねたヴァレンタインが思わず制した。
「……やめるんだリリケラ」
「うふふ……私が私の人形（オモチャ）で遊ぶのが、そんなにいけないことかしら？」
リリケラは面白そうに笑い声を漏らすと、ようやくイオの肩から手を退けた。
「だいたい、こんな人前に何をしに来たんだ？　また嫌がらせかい？」
「さあ、どうかしら？　私は今日はイオに大事なオハナシを持ってきてあげたのだけれど？」
それから唐突にリリケラはイオを後ろから抱くように手を回し、その耳元に顔を近付ける。
「ちょ……何を……！？」
吐息のくすぐったさと禁忌している相手に抱かれたという事実に二重の意味で寒気を覚えるイオであったが、ただ、なぜか不覚にも少しだけ安心感を覚えてしまった。それを知ってか知らずか、リリケラは悪戯っぽく含み笑いする。
「うふふ……ねえ、イオ。あなたの懸想の人が窮地に立たされているみたい……こんな場所で愚かしいウワサ話に興じている時間があるなら、早く助けに行ってあげてはどうかしら？」
「ええっ！？　まさかカリストがっ！？」
自分に回されていたリリケラの細い腕を振り払い、振り返って睨み付けるイオ。リリケラは相変わらずメイド服など着ていて、こんな街の中では浮いた存在に思えたが、よくよく考えたらベルリンには奇矯奇抜なファッションセンスの持ち主が多いため、そこまで違和感は感じられないのだ（今もなおドイツはゴシックファッションやゴスロリの中心地である）。リリケラは例によって例の如く、気品ある幼い顔立ちに傲岸かつ加虐的な微笑みを浮かべて真っ向からイオの瞳の中を覗き込んでいる。

「そう。事情は……今さっきヴァレンタインが伝えた通り。私の可愛いイオ、逡巡している時間はないわ……早く向かった方が良いのではないかしら？」
「……お、お礼なんか言わないわ」
言われるまでもない。イオはヴァレンタインに軽く頷いて見せてから急いで立ち上がった。

その３－７２（後書き）

「すっごく久しぶりにリリケラちゃんが出てきたねえ♪」
『ホントに久しぶりよね……物語の中ではたいして時間は経ってないけど、アホ作者の時間だと１年以上ぶり……』
「わたしも何ヶ月かくらい出てないねえ♪」
『……ホント、あんたは気楽よねえ……』
「えへへ～♪　だってこのオハナシのヒロインだも～♪」

その３－７３（前書き）

今回の物語は特殊フォントを含みます。
ケータイやＰＣの環境によっては一部が正しく表示されませんこと
をご了承ください。

その3－73

実のところ、エウロパには敵を殺そうなどという考えは毛頭なかった。半死半生にはするツモリだったが、捕らえて泥を吐かせる方が有益だと考えていたのだ。もちろん、たかが人間とはいえ、訓練されたテロリストなので、そう易々とクチを割るような連中ではないのは判っていたが、スペインの異端審問官ばりの苛烈さ（かなり誇張されているらしいが）でもって責め立てれば情報を吐かせる自信はあった。

ひと跳びで敵の目の前に躍り出たエウロパは、そのまま組み付いてウデの一本でも折ってやろうかと思ったが、そんなエウロパの考えを予測していたかのように、それよりも先に男は懐から何かを取り出して掲げた。それはカリストを吹き飛ばすのに使ったものと同じ跳躍爆雷だ。

「！！？？？　？？？　？？？？？」

ここまでバイオロイドに接近を許してしまっては、もはや逃げる術もなく、すでに殉死する覚悟を決めていたらしい。マスクを被っていたため血走った目以外の表情の詳細は窺い知れなかったが、男は断末魔にも似た罵声を上げると何の躊躇いもなく自爆するために爆雷を作動させた。エウロパは咄嗟に男の手ごと爆雷を叩き落とそうとも考えたが、明らかにもう手遅れだ……元から自爆用に爆雷のタイマーをセットしてあったのだろう。爆雷は瞬間で作動を開始した。

さすがよく訓練された生粋の狂信者（テロリスト）だけのことはある……などと妙に感心するエウロパであったが、同時に、どうして人間はその「底力」を、もっとマシなことに使えないのかと憐れみすら覚える。何にせよ、もはや男を救う手立てもない上に、このままでは爆発に巻き込まれてカリストの二の舞だ。すでに高純度のアセチレンガス

がエウロパと男の周囲に拡がりつつある。
（私たちの同胞を傷付けた人間に約束の地など未来永劫訪れることはない……でも、爆熱で焼け死ぬ前に酸欠で意識を失って安楽に逝けるのはあなたの得分なのかも）
エウロパの思ったように散布されたアセチレンガスを瞬間的に大量に吸引したため、男は酸欠で昏倒しかかっていた。エウロパは最後に冷たい一瞥を投げかけ、持てる限りのチカラを振り絞って可能な限り後方に飛び退き、転がり、伏せる。
それと同時に、爆雷は男を中心にして駐めてあった小型のバンや迫撃砲弾や諸々の銃弾もろとも、完全燃焼した可燃性ガス特有の蒼白の炎と熱を発して爆ぜた。爆発は一瞬のうちに行われたが、バンは大破炎上し、弾丸類は連鎖的に暴発する。四方八方に飛び交う鉄片や弾丸に居心地の悪い思いをしつつ、顔を上げられないほどの爆熱を全身に浴びながらもエウロパは良く耐えた。男は辛うじて人間だと判別できる程度に形は残っていたが、消し炭の付着した煮えたぎる油脂の塊のようになって頽れていた。
「……」
周辺の草木は爆熱で燃えるか吹き飛ぶかしてしまい、すっかり局地的な戦場のような様相になってしまった現場で、エウロパは自分のカラダに致命的な異常がないことを確認してからゆっくりと起き上がる。当座の危険は去ったようではあるが、かなりの熱を吸ってしまったようだ。
「はぁ……っ……！」
ヒザに手を突きながら大きく息を吐く。致命的なダメージこそ負わなかったが、体内の温度が安全域を越してしまっていたので、背中の隠しスリットから強制排気と体内に備蓄していた窒素の循環放出による熱交換が自動的に開始された。これらは恐ろしく電力を消費するため、充分に冷却されるまでは歩くのもやっとという状態だ。今すぐにでも氷水の張った浴槽に飛び込みたい気分だった。
動物性タンパク質がほどよく燃えた臭気に気分を滅入らせながら

も（エウロパは菜食主義者なのだ）、取り敢えず男の安否を確認すべく重い足取りで近寄ってみた。見事に焼けただれた「男の燃えかす」は、吸引したアセチレンガスが胸腔内で爆発したため、カラダの裏表をひっくり返したかのような惨たらしい有様で、やはりと言うかなんと言うか、どう考えても生きているようには思えない。

「まさしくゲヒンノム（ゲヘナ）の業火に灼かれた……という感じね」

さすがのエウロパも男に多少の憐れみを感じたが、望んで殉教したのだから本人は満足だったろうと自分を納得させるよりほかない。それよりも今はカリストだ。早くカリストを掘り返して然るべき処置を行わなければいけない。それに人の気配のない郊外の原野とはいえ、こうも立て続けに爆発が発生したからには当局や野次馬がいつ来てもおかしくはないのだ。

エウロパは懐中からＭＴを取り出す。外装は少しだけ熱で痛んでいるが、問題なく使用できるようだ。さっそく会社へ繋ぎ、救援を要請する。

「敵は自爆したわ。私は巻き込まれたけど、際だった損傷は無し。ただ、大量の熱を吸って今は熱処理中で上手くカラダが動かない。私は大丈夫だけど、一刻も早くカリストを救助しないと……できるだけ急いで救援をお願い」

ガニメデが近くにいるはずだが、なかなか来てくれない。しかし、交戦を開始してからまだ数分も経っていないのだから当然と言えば当然だろう。

「……カリスト……どこ……？」

まだ熱と煙が立ちのぼるクレーターに足を踏み入れたエウロパだったが、やはりカリストの姿は見当たらない。ただ土に埋もれているだけならば内蔵されている熱源センサでの探査も可能だったが、地面が放つ熱が凄まじく、まったく使い物にならなかった。

「とにかく……掘るしかない……」

エウロパは熱いクレーターの底でヒザを突いてしゃがみ込み、極

めて原始的ではあったが手を使ってコンクリート片を取り除きながら地面を掻き始める。だがエウロパ自身が熱処理の最中ということもあって、なかなかカラダが思うように動いてくれず捜索は思うように捗らない。それでもエウロパは重いカラダに鞭打って、カリストを捜し続けた。

その３－７３（後書き）

『そういえば、ＫａｌｌｉｓｔｏＤｒｅａｍＰｒｏｊｅｃｔも２周年を迎えたわね！』

「そだねぇ♪　楽しいねぇ♪　面白いねぇ♪」

『通読してくださってる方たちに申し訳ない有り難いとアホ作者が言っているわ……相変わらずの遅筆で誠意は感じないけどね……』

「ちょとずつ読者さんが増えてるのがフシギ～♪」

『まぁ、何事も継続が大事ってことよ……たぶん』

――――――――――――――――――――――――

お陰様でＫａｌｌｉｓｔｏＤｒｅａｍＰｒｏｊｅｃｔも２周年を迎えることができました。

特にスペシャルな催しなどありませんが、これからもよろしくお願いいたします。

その３－７４

今なお熱気を放つコンクリート片と土塊を手で掘り返しながらエウロパはカリストを捜した。もちろん呼べど叫べどカリストからの返事はない。心配ではあるが、高熱とはいえアセチレンガス爆発程度の熱でバイオロイドが影も残さずに蒸発するはずはないし、壕内での爆発なので遠くに吹き飛ばされたとも考えにくいため、カリストは必ず地中に埋まっているはずなのだ。

「うっ……熱が……」

万遍なく高熱で灼かれたクレーター内は、人間なら息も吸えないほどの熱気が立ちこめている。間断なく熱に晒されながら地面を掘るエウロパの内熱処理は捗らないどころか、ジリジリとその温度を上げつつあった。だが、まだ限界には少し猶予がある。

「それまでにカリストを捜し当てないと……」

今すぐに急いで待避して数十分ばかり安静にしていれば回復は容易だが、その数十分の内に自分以上に熱を持ってしまっているであろうカリストが焼き切れてしまうかもしれない。と言うか、試算では今すぐに発見できたとしてもカリストは相当なダメージを受けている可能性が高いのだ。

「カリスト……どこ……！」

土を掻く手にチカラが入らず、焦りばかりが募る。自分の背中から排出される排気が必要以上に喧しく感じられ、エウロパは思わず端正な顔を歪めて吐き捨てた。

「排気……ウルサイっ……！」

それは天佑だった。思わぬ名案にエウロパは涼しげな気分になった。排気音に苛立ち、それを煩く感じた自分に拍手を送りたい気分だ。

「……カリストがまだ生きているなら、強制冷却のための排気をしているはず。それを見つければ……」

カリストの排気音を聞くためには自分の強制排気を一時的にでも停める必要がある。もちろん、それはエウロパにとって危険な行為であった。対消滅炉の炉内温度は平時でも数千℃に達しているが、大量の熱を抱え込んでしまっている今、冷却を停止すれば炉温は爆発的に跳ね上がるだろう。だが、数秒間なら何とかなるかもしれない。

バイオロイドはバイオロイドを決して見殺しにはしない。たとえ共倒れになる可能性があったとしても（そして、その可能性が決して低くなかったとしても）、同胞を救う手立てを持ちながら同胞を見捨ててまでして生きていくのはバイオロイドとして最も忌避すべき罪悪なのだ。

「イオも、ガニメデも……誰だって、きっとこうするに決まっているわ……私はカリストを助けなくてはいけない」

正直、カリストのことは良くは判らない。数日前に、ほんの少しだけ話しをしただけで、イオのように深い関わりがあるわけでもない。むしろカリストを陰ながら護るという面倒事を会社から押し付けられている気がしないでもない。当のカリストなど、そんなことなど露ほども知らないままノホホンと暮らしているのだ。普通なら腹が立ってくるだろうし、実際問題、エウロパは軽く憤慨さえしていた。しかし、たとえ報われることのない職務であったとしても、否、「職務」などという義務感や報われる報われないの次元で捉えるような物事ではない。カリストが何であれ、大切な同胞、血と肉を分けた姉妹であり友だちなのだ。それを護ることに命を賭けるのは当然のことだとエウロパは考える。

よく判らない「何か」に縛られているのは重々承知していた。その縛めから決して逃れられないことも判っている。それでも、そんな「何か」に縛られていなかったとしても、エウロパはカリストを助けたいと願う。

エウロパは地面に顔を近付け、耳を澄ましながら自らの強制冷却と排気を停止する。停止したと同時に赤々とアラートが表示され、

グラフィカル化された油温計や炉内温度計の指針が冗談のような勢いで上昇を開始した。
だが、確かに聞こえる。地面の中から漏れてくる、か細く頼りなげなカリストの「吐息」をエウロパは聞き分けた。
（……いる！　カリストは生きて、そこにいる！）
カリストが吐き出す強制排気の音源はエウロパのいる場所から数メートルは離れた場所にあった。可能な限り正確な位と深度を計測し、エウロパは転がるように四つん這いで進み、自身の強制冷却を再始動を待たずに凄まじい速度でウサギのように地面を掘り始めた。
「カリスト……！　カリスト！」
その名を呼びながら数十センチばかり土とコンクリート片を掻き出すと、カリストのものと覚しきブーツのソールが覗く。予想はしていたが、どうやらカリストは爆圧に押し込められるようにして俯せで地面に潜り込んでしまったのだろう。そのまま掘り進むとブーツに続いて土と煤で汚れた白いフクラハギも見えてくる。エウロパは土を掘る手を止め、グローブを脱ぐとカリストの脚に触れた。
カリストのフクラハギは凄まじい熱を持ってはいたが、人間で言うところの心臓の鼓動に相当するバニシングモータの脈動が感じられた。それは通常では有り得ないくらい遅く弱々しいペースではあるが、カリストの生を確実に知らしめるものだ。少なくともカリストは脚と胴体、バニシングモータを制御している頭部も繋がった状態で埋まっている。
「カリスト……！　すぐに出してあげる……！」
エウロパは顔を擦って、懸命に土を掻く。フクラハギ、フトモモ、スパッツを穿いた小さなお尻まで見えたところで、重々しいコンクリートの一枚板がカリストの上半身に覆い被さるように埋まっていたが、エウロパは中腰に立ち上がると、小さな気合いの吐息と共に放り投げるようにして一気にはぐり除けた。
「はあ……はあっ……！」
熱に晒され表面が軽石のように多孔化していたコンクリート壁だ

ったが、決して軽くはなかった。それを持ち上げ脇に倒すと、ついに耐えかねてヒザを突くエウロパ。ムリを押し通し、もう熱処理も追いつきそうにない。

「カリスト……すぐに……涼しいトコロへ……」

カリストは意識もなくグッタリと、しかし五体満足で土の中に横たわっている。顔を煤で汚し苦しそうに浅く速い呼吸をしている。エウロパは残るすべてのチカラを使い果たす覚悟でカリストを仰向けに抱きかかえると、カリストともども自分のカラダをも引き摺るようにしてクレーターの外へ向かって這い出すのだった。

その３－７４（後書き）

『やるわね、エウロパ』
「ここんとこ、ずっと出ずっぱりだねえ♪」
『あんたは久々に出てきたと思ったら死にかかってるわ』
「わたしってば、ヒロインだからだいじょぶ～♪」
『まったく気楽よねえ、あんたって……長生きするわ……』

その３－７５

イオが社内で配属されている部署は「技術統括部渉外対策室」と称呼されている。表だっては、企業や省庁などにリースしているアンドロイドの技術的なサポートや苦情要望処理を行う、いわゆるコールセンターということになっている。在籍しているからにはイオも顧客からの問い合わせに対応したり、事務作業をしたりすることもあるが、そういう仕事は他のアンドロイドたちがしており、実質的にイオはカリストのサポートのみを専属で行っていた。

この「技術統括部渉外対策室」にはイオ以外に数名のバイオロイドが在籍しているらしいのだが、それぞれが勝手に接触しないようにセクション分けされて、社内の幾つかの場所に分散して配置されている。なぜ勝手に接触してはいけないのかは判らないのだが、結果的にイオはエウロパやガニメデに会ったことがないどころか、その存在すら関知できていなかったので、会社の思惑通りになっていると言えた。

それはともかく、イオが会社で直接にまみえることのできるバイオロイドは、上司であり室長のディオネだけである。そのディオネにしても、特に要件がない限りは直接に会うこともない。

リリケラにカリストの危機を知らされ、取り急ぎ会社に戻ったイオはダメ元でカリストのＭＴ宛に通信してみたが、音信不通だ。元からカリストはＭＴを持って歩くことをしないということもあり、外出しているのは間違いないだろう。

また、案の定というか何というか、セクションには何の報せも入っていない。カリストの事柄に関しては建前上はイオに一任されているので、同じセクションで働いている他のアンドロイドたちに訊いてはみたが本当に何も判らないようであった。

しかし、悔しいことにイオはリリケラを疑う気にはならないのだ。

その点ではイオはリリケラのことを信用している……自分たちを辱め、弄んだ、得体の知れない厭らしい存在ではあったが、嫌がらせや策謀でウソを言うようには思えなかったのである。
「時間がないわ……仕方ない」
イオはセクションルームの奥、ディオネが陣取っている室長室に向かった。ディオネはイオらと違って、もう少し大人びた成人女性の態をしているのだが、イオはディオネを苦手にしていた。というのも、それは同胞愛が堅固なバイオロイドの特性に起因することなのだが……。

「ねえ、ディオネ、入るわよ？」
イオが返事を待たずに室長室のドアを開けると、真ん中に置かれたデスクの向こう側でディオネが悠々とイスに座っていた。イオたちよりも半回りほど年上（ディオネは詳細を明言しない）で、プロポーションも非常にメリハリが付いているディオネは、少女じみた学生制服のような内勤服ではなくて、軍の女性士官服のような少しカッチリした制服を着ているのだが、スーツもブラウスも胸元を大きく開けて着崩しており、スカートも明らかに必要以上にタイトなものを着用していた。見れば見る度にイオはゲッソリした気分になるのだが、故意にサイズの小さいブラウスに押し込まれているディオネのムネは半分くらい露出しており、どこかちょっとおかしいのではないかとさえ思えてくる。要は、かなりアダルトな（そしてステレオタイプな）女性上司然とした風貌なのだ。
「あら？　あんたの方から顔を出すなんて珍しいわね？」
フンワリと巻いたロングヘアの毛先を退屈そうに弄っていたディオネだったが、そのハデな見た目に反してイオの到来に案外と朗らかな表情で応えた。イオは半ば呆れ気味に、半ば怪訝そうに言う。
「うん、相変わらずね……その恥ずかしいカッコやめたら？」
「あはは。服装くらい好きにさせてよ。あんた、よっぽど羨ましいみたいね」

サバサバとした笑顔でディオネは過剰に巨大な自分のムネを誇らしげに突き出してみせる。言われるまでもなくイオは羨ましい。いちおうは同じバイオロイドなのに、戦闘用と汎用の違いというだけで、こうもプロポーションに差が付けられるとはガッカリである。
「で、何か用があるんでしょう？」
「あっ！　ねえ！　カリストに関して何か上から報告は入ってない！？」
たちどころに現実に引き戻されたイオは、デスク越しのディオネに食ってかかる。その剣幕に怯む様子もなく、ディオネは冷静に応じた。
「漠然としていて意味が判らないわ」
「ん……情報の出どころは言えないんだけど、今、カリストが何かトラブルに巻き込まれているらしいのよっ！」
「……心身に危険が迫るような？」
「たぶん」
「それは大変」
ディオネは手元の端末を引き寄せてピアスコネクタを接続し、カリストに関する事象を調べ始める。それなりの権限を持たされているディオネは、イオらが知り得ない会社の情報にアクセスすることが許されているのだ。もっとも、それもかなり制限されたものなのだが……。
「ちょっと待ってね。バックドアをこじ開けてるから……あ～セキュリティキーが書き換えられてるわ……鬱陶しい！　このっこのっ！」
ディオネは楽しそうに端末を操作しているが、どうやら会社のホストをクラックしているらしい。
「ええっと……テトラナッチ数列の３０番目を知ってる？」
「たぶん１４５６４５３３」
「日本にいるというズンドウの幻の珍蛇の名前は？」
「ツチノコ！」

「今から私とエッチしない？」
「しっ、しないわよっ！　じょ、冗談言ってる場合じゃないのよっ！？」
だからイオはディオネに会いたくなかったのだ。
「まったく真面目なんだから……よし、っと」
アダルトといえばアダルトだが、やはりディオネはハデな外見の割には少し子供じみたところがあるようで、顔を真っ赤にしているイオに満足そうな笑顔を浮かべてから、急に口調を改めて端末のモニタを見せた。
「これはバイオロイドのリアルタイムモニタリング。現状のカリストの置かれている状況は判らないけど、見ての通り、５分くらい前から出力が半分以下にまで落ちてるわね……」
「ど、どうしてっ！？」
イオは目を剥いてモニタを見入る。そこにはカリストの現在の稼働状況が漠然と記されているのだが、それらの数値は明らかに通常では有り得ないものであった。
「この出力曲線を見る限り、４本あるシリンダのうち2本は止まっているか、ほとんど機能していないようね。あと、出力が急激に低下するのより一瞬だけ先に、体内に貯留してあったヘリウム・窒素・アルゴン・ネオン、すべてを放出しきっているわ」
「それって……」
愕然としているイオにディオネの表情も渋い。
「カリストの冷却性能の低さは以前から懸案事項だったけど、ここまで出力が落ちてしまったら、組成抽出炉を稼働させて冷却触媒用元素を抽出・再充填するのは非現実的……ただ、ハッキリ言えることは、このままだとカリストはバニシングモータ全基が自壊するか、内熱で内側から燃え尽きるわ……」

その３－７５（後書き）

「そゆえば、ディオネってば前に名前だけ出てたよねえ？」
『ずっと昔にね……いちおう私の上司ってことになるわね』
「ちょと珍しいオネーサンキャラなんだねぇ♪　おムネおっきいんだねぇ♪」
『見ての通り、頼りになると言えば頼りになるんだけどね……何というか……』
「イオってばモテモテなんだねぇ♪　わたしもイオとチュッチュってしたいなぁ♪」

――――――――――――――――

ご愛読ありがとうございます。
私事ですが、ご報告したいことがありますので、よろしければ「活動報告」をご覧くださいませいｗ

その３－７６

どうしてカリストの身にばかりロクでもないことが降りかかるのか、その理由をヴァレンタインから報された今、イオは会社に対して初めて明瞭な不信感と憤りを覚えていた。詳しい状況は判らないが、ヴァレンタインの言っていたことが真実だとすると、やはりまたカリストは「エサ」にされたのだろうか。

「会社は……！」

怒りに燃えた瞳をディオネに向けるイオだったが、ディオネは指で「しー」のゼスチュアをして遮る。

「待って……それ以上は上司として言わせない。あんたがどこまで知っているかは判らないけど、それでもあんたは会社に楯突くことはできないわ。それは私たち同胞を裏切ることになるもの……それはバイオロイドにとって絶対に赦されないことよ？」

「そ、そんなの判ってるわよっ！　でも、こんな理不尽なことが……！」

判っているからこそ口惜しいのだ。いま会社に異議を唱えたところで、カリストを取り巻く状況が好転するとは思えないし、互いを引き離すことになるのは必至だ。それ以上に、やはり会社と同胞たちを裏切れる気がしない。

イオは自分の不甲斐なさに歯噛みして、握りしめた拳をデスクに叩き付けようと振り上げたところで、誰かが室長室のドアをノックした。振り返って見れば戸口に知らない美少年が腕組みして立っている。少年は皮肉っぽい微笑と共に自らの到来を告げた。

「お取り込み中のようだけど、ドアが開いていたから勝手に入らせてもらったよ」

「誰？」

イオが訝しげに問うと、ディオネがフフンと鼻を鳴らす。

「ああ？　もしかしてガニメデ？」

「その通り。ええと……イオ？」
「私はディオネ。イオはこっち……あんた、判ってて訊いてるんでしょ？」
ディオネは少し面白そうにガニメデを一瞥する。ガニメデはその視線に気付いていないようなフリをして、イオをマジマジと見る。
「君がイオね……あのカリストの？」
「“あの”って何よ“あの”って！？　っていうか、あんた、カリストを……！」
ヴァレンタインが言っていたことが本当ならば、このガニメデも会社の思惑に一枚噛んでいるはずなのだ。敵愾心を露わにするイオだったが、意外にもガニメデは少し慌てたような表情を見せ、言う。
「待って。そんなことは後回しだよ。それに僕は君が思っているほど事情通でもない。僕だって同胞を謀るようなことはしたくないし……そんなことより、カリストを助けたいなら一緒に来てほしいんだけど」
「どこの誰が得体の知れないあんたに黙って着いて行くと思ってるのよっ！？」
なおさら激昂するイオであったが、ガニメデも心苦しいような苦笑いを続けるばかり。
「あ、いや……気持ちは判らなくもないけど、カリストを……」
「カリストの正確な状況と居場所を知ってるなら、黙って教えなさいよっ！」
イオは今にもガニメデに飛びかからんばかりの剣幕で、まったく取り付く島もない。ガニメデもガニメデで、自分の真意がイオに伝わらないことに嫌気が差してきたのか、苛立たしげに表情を曇らせた。さすがに見かねたディオネがムネを揺らして立ち上がり、イオとガニメデの間に割って入る。
「（“黙って教えろ”ってのも何だか変よね）……イオ、たぶん、このコは何も企んでなんかいないと思うわ。どうせ私たちだけじゃ状況も見えないし手詰まりになるのは目に見えてる。時間も無いし、

ここはカリストのためを考えて、ガニメデの言うことに従ってみたら？」
「んん……」
ディオネから冷静に諭され、少しはアタマの冷えるイオ。時間、確かに時間が惜しい。こんな押し問答をしている間にもカリストは大変な目に遭っているかもしれないのだ。
「……わ、判ったわ……そうする」
イオはバツが悪そうにガニメデに向き直り、伏し目がちに謝る。
「ちょっと気が立っていて……ごめんなさい。あんたの言うとおり、一緒に行くわ……行かせてほしい」
「うん。判った。もう手配は済んでるんだ」
急にしおらしくなったイオにガニメデも居心地が悪いのか、取って付けたような笑顔を浮かべて頷き、それからディオネに向き直り軽くアタマを下げる。
「信用してくれてありがとう」
「もちろん、立場上は信用はしてない。私の管轄で部外の誰かが勝手に動き回ってたり、こっちに累が及んだりすることは気分のイイもんじゃないわ……でも、個人的には信じてるけどね」
「それで充分だよ……じゃ、行こう」
ディオネとガニメデは互いに皮肉っぽい笑顔を交わし、それからガニメデはイオと連れ立って室長室から出て行った。後に残されたディオネは、ふうと溜め息を吐いて自分の安楽椅子に戻る。
「さて……これで少しは“片付け屋（エンゾーガー）”の正体が掴めるかしら？」

アストラル技研のすべての設備と工廠はベルリンの地下深くに秘匿されている。地上にあるのは人間社員が務めている形式的な社屋だけで、その外観は世界有数の企業のそれにしては非常に質素なものだ。地下設備の大半は無人化されており、人間の社員は滅多なことでは出入りできない。また、地下という閉塞された空間にあること、そして非常に重要な機密が多いことから、そのセキュリティチ

ェックは嫌気が差すほど厳重で、執拗なものだった。
そんな厳重なチェックを何度も受けながら、ガニメデとイオは大急ぎで地上を目指す。行き先は社有車を置いてある表層に近い地下駐車場だ。
「クルマで行くの？」
「そう。カリストは手酷いダメージを受けている可能性があるから緊急車両を使うよ。もう準備はできているから、すぐに出られる」
手短に説明しながら最後のチェックを通り抜け、ふたりが広い屋内駐車場に出ると、そこには何人かの整備アンドロイドと共に1台の救急車が停まっているのだった。
「あんたの言う緊急車両って……まさかこの救急車？」
「そう。これなら信号無視できるし」

その３－７６（後書き）

『しっかしバイオロイドってのはヒトクセもフタクセもあるのが多いわよね』
「イオだって、ちょと変わってるトコあるよ～♪」
『ぜんっぜん無いわよっ！』
「そっかなぁ？」
『んー……まぁ、ちょっとクチうるさくて文句ばっかり言ってるかもしれないけど……で、でも、それはあんたのためを思ってのことでっ！？』
「ツンデレちゃんだからねぇ♪」

その3－77

まさか救急車に乗ることになるとは微塵も考えていなかったイオは不機嫌そうに腕を組んでムッスリと佇んでいたが、ガニメデは意にも介さず整備を担当していたアンドロイドと事務的な手続きを交わす。

「急がせて申し訳ないね」

「いいえ。特に問題ありません。そのための我々ですから」

それっぽい事務服を身にまとった名も無き女性型のアンドロイドは、ロボットらしからぬ流暢な口調と態度で応じる。本社付きのアンドロイドは特に優れたモデルが多く、機動性能と動力以外はバイオロイドにも迫る性能を持っているのだ。

アンドロイドはガニメデの提示した従事者証を手持ちの端末でスキャンしてから、幾つかの書面にサインをするように促してきた。ガニメデがサインしている間、アンドロイドは救急車のリアゲートを示しながら言う。

「申請通りバイオロイド用の外部充電器と急速冷却装置、それに付属する備品類を積み込みました。ただ……本来は大型の装置であるところを姑息的にダウンサイジングした物なので、正直なところ安定した稼働や出力には期待できません。過負荷にも惰弱です。戦闘用バイオロイドのバニシングモータが致命的損傷を被ることは想定外でしたから……あくまで時間稼ぎ用で“無いよりはマシ”程度に考えてください。マニュアルは助手席にあります」

「ありがとう。充分だよ」

「あと、これは念のための緊急通行証と偽造の身分証です」

ガニメデとアンドロイドの会話を他人事のように聞きながら、一刻も早くカリストを救いに行きたいイオは、焦れったそうに咳払いをひとつして救急車の助手席側に回って勝手に乗り込んだ。実際の救急車の中身がどのようになっているのかは知らなかったが、パッ

と見た限りはホンモノの医療器具や装置が搭載されているように思える。車両の外装も完全にベルリン内務省純正規格に則ったデザインであり、このような車両まで用意できるとは、さすがアストラル技研だと思わずにはいられないが、同時にやはり底知れない抜け目のなさを感じずにはいられなかった。

「それじゃ行こう。これ持ってて」

手続きが済み、運転席に座ったガニメデは通行証だのを助手席のイオに手渡し、救急車のリニアエンジンを始動させた。僅かな振動音と共に各計器に明かりが点る。それを合図に前方のシャッターが開き、ベルリンの市街へと続くのであろう緩いスロープが現れた。ガニメデは見送るアンドロイドに軽く挙手で礼を送ってから洗練された運転技術で救急車を発進させ、長く緩やかな地下通路へ進める。

「これってどこに出るの？」

「エルンスト・ロイター広場とビスマルク通りの辺りらしいよ。あそこに会社の営業支店があるから、たぶん、そこの地下駐車場にでも繋がってるんじゃないかな」

やたらと明るい照明に照らされたコンクリート打ちっ放しの車路は延々と続く。当然のことながらまったく人間の気配はしないのだが、数１０メートル毎に衛所があり（ご苦労なことだが）武装した警備のアンドロイドたちが詰めていた。通り過ぎるたびに手まで振ってくれる。

「ずいぶんと厳重警戒ね……どこのＳＦに出てくる施設なのよ……」

「僕もこの通路から外に出るのは初めてなんだけど……会社の正面からならともかく、地下の工廠に直結している裏口からの侵入を許したら何かと面倒だからじゃないかな？　君も知っての通り、会社に敵対する勢力は強大で手段を選ぶような連中じゃないからね」

「前から思ってたんだけど、もしかして会社って動物園（ティーアガルテン）の地下にあるんじゃない？」

「うん、たぶんそう思う。そういえば、バッハ通りにあるケーキ屋さん知ってる？　シフォンケーキ屋さん」

「んん？　何だっけ……ブルーターメイヤー何とかっていうお菓子屋さん？　前にカリストと一緒に行ったところかも」
「そうそう！　あそこのケーキ美味しいよね」
「うん、まあまあ美味しかった気がする」
と、ここまでお喋りしてイオは少しムッとする。カリストが瀕死で助けを待っているはずなのに、なぜにガニメデと楽しくケーキ屋のハナシをしているのか、この状況と自分自身にハラが立ってきた。
しかし、そんな都合はともかくとして今はガニメデと意思疎通を図っておくべきだとも感じていた。要は仲良くするということだ。ガニメデは決して親しい存在ではなかったが、少なくとも敵ではないはずなのだから、依然として気に食わないところがあるけれども、多少のことには目を瞑って信頼を深めておいた方が後々も何かと便利だろう。これまでのヴァレンタインとのやりとりが少なからずイオを成長させていたのだが、こういうとき、何の打算も駆け引きもなく、誰とでも容易に打ち解けることができるカリストの脳天気さがイオは羨ましい。
「……あんたはケーキとか好きなの？」
「まあね。……どうせ誘ったって一緒に行ってはくれないだろうけど」
「よく判ってるじゃない」
さすがに突っぱねるイオに肩を竦めて苦笑いするガニメデ。ふたりを乗せた救急車は幾つかのシャッターゲートをくぐり、短いエレベータに乗り、表層に近付いていく。

その３－７７（後書き）

「イオってば、救急車に乗ったり、ガニメデとお喋りとかして、羨ましいなぁ♪」

『だっ、誰が好きこのんで！　だいたい、こうなったのも誰のせいだと思ってるのよっ！？』

「あはは～♪　でもこのあと、きっとわたしも救急車に乗れるんだよねぇ？」

『さあ？　死体袋に入れられて、かもしれないわね（そんなの私の命に代えても阻止するけどっ！）』

その３－７８

　イオとガニメデ、ふたりを乗せた救急車は地上へと至る最後の関門へと辿り着いたらしい。跳ね上げ式の大型シャッターの前には短機関銃を構え事務服を着た女性型アンドロイドが立ち、インコムで何か話しながら救急車の進行を制止する。事務服に短機関銃という組み合わせは実に奇妙であったが、アストラル技研らしいと言えばアストラル技研らしい。ガニメデが焦れったそうに運転席側の窓から顔を出すと、アンドロイドは何が言いたいのか理解しているような済まなさそうな顔で軽く会釈し、もう少し待つようにとゼスチュアで示した。

「何なのよ、もう！　工廠から上がってきた私らを信用してないワケっ！？」

　思わず苛立たしげな声を漏らすイオだったが、ガニメデは至って大人だ。

「さっきも言ったけど、地下へ直結で繋がっている唯一の出入り口だから警備が厳重なのは仕方ないよ。たぶん、外へ出られるタイミングを計っているんじゃないかな」

　ややしてアンドロイドは運転席側に回り、ガニメデに事情を説明する。

「お疲れさまです。いま周辺の保安を確認していますが、もうあと数十秒でシャッターを開けられると思います。出た先は我が社の営業支店の地下駐車場ですが、ここから工廠へ降りられることは一般の社員も知らないことですので……」

「ああ、万事諒解してるよ」

「シャッターが開いたら、５秒以内に６０ｋｍ／ｈまで加速して駐車場内を直進、２ブロック先の信号まで減速せずに進行してください。近隣の信号機はこちらで制御してますので大丈夫です。それからサイレンを鳴らして目的地までどうぞ」

「諒解。お疲れさま」
アンドロイドは引き続きインコムで会話しながら、いつでも発砲できる体勢でシャッターの前から脇に下がって立つ。よく見るとアンドロイドの腰の辺りにウエストポーチ状の何かが取り付けられており、イオは予備のマガジンにしては大きすぎると訝しがったが、どうやら自爆用の小型燃料気化爆弾の類であるらしかった。
「なにあれ……もし敵に突破されそうになったら自爆して自分もろとも敵を殲滅する……ってこと？」
「だろうね。途中にいた警備のアンドロイドたちも同じ装備をしてたよ」
「まったく……会社の考えることはイチイチ大袈裟よね……」
ブツブツと文句を言いながらも、イオは待機時間を利用して助手席と運転席の間に設置されているカーナビを起動する。緊急車両なので道路混雑の心配は不要（ドイツ人は社会道徳と法規は徹底的に遵守するのだ）であるし、運転はガニメデに一任するとは言え、念のために衛星誘導で目的地までの最短ルートを割り出すツモリであった。
「……って、あんた！　カリストはどこにいるのよっ！？」
「あ、そうか。こんなの使わなくても行けるけど……まあいいか。自分でセットするよ」
瞬く間に不機嫌顔になるイオをそっちのけでガニメデはカーナビに手際よく座標を入力し、再びハンドルを握ってシャッターが開かれるのを待つ。イオがナビの画面をチラッと見ると、目的地はポツダム近郊の番外地、つまり何の使い途もない荒れ地の真ん中であった。例の如くイオは憤慨する。
「……あのバカ……またこんな人里離れた場所にひとりでっ！」
「そろそろシャッターが開くみたいだよ」
ガニメデの声にイオが警備アンドロイドを見ると、こちらに向かって掌を突き出していた。何かと思えば指折りでカウントダウンしているのだ。4、3、2、1……。

「行くよ」
ガニメデはアクセルを軽く煽りながらクラッチを繋ぐ。タイヤが一瞬だけ空転して甲高いスキール音を放ち、それと同時に爆発的なスピードでシャッターが開いた。

カリストを地獄の釜の底から引き摺り出したエウロパであったが、カリストよりは遙かにマシとは言え相当に酷い熱に晒されながらの救出作業となったため、そろそろ本格的に各機関のクーリングに専念しなくてはならなくなっていた。助け出したカリスト共々クレーターの縁に倒れ込み、僅かな時間であったが身体を休める。それは本当に気休め程度のごく僅かな時間だ。
エウロパは一呼吸入れて重い身体を起こす。少しでも外気に触れさせて冷却を図るべきだと考え、ぐったりとノビているカリストを俯せに寝かせてノースリーブのジャケットを脱がしかけたが、その懐から何かが転がり落ちたのに気がついた。何かと思って拾い上げて見れば、大切そうにグローブに包まれた金属のケースである。エウロパにはそれが何かは判らなかったが、耐熱素材で作られたグローブに護られた金属ケースは、激しい熱気にも耐えきって美しい銀色に光っている。たぶんカリストの大切な物なのだろうと思い、取り敢えずジャケットの内側にしまい込んでおくことにした。
さらに上半身を完全に裸にしようと思いインナーウェアにも手をかけたが、そんなことを無断でやったらイオが怒るだろうと考え、あくまで背中側を捲り上げるだけにした。カリストの細い背中は有り余る熱気で空気を揺るがしていさえいる。肩胛骨辺りにある排気スリットからの排気は完全に停止しており、まったく排熱が行えていない深刻な状況だった。

その３－７８（後書き）

「作者さんってば、とうとう引っ越しするらしいねぇ♪」
『モタモタしてるから時間ばかりムダに費やして、いよいよ尻に火が付いたみたいよ』
「引っ越しするとネット環境とか仕切り直しで、ちょっと時間がかかるんだって～」
『だからモタモタしてるからよっ！　もっと段取りをちゃんとすればこんな慌ただしい目に遭わずに云々』
「仕方ないねぇ♪」

――――――――――――

→ふたりが言うように、今回の更新を終えた後、私は引っ越して新しい生活を始めます。
いちおうネットの切り替えやなんだは申し込みましたが、基本的な生活の環境を組むまで多少の時間もかかり、その間、そうでなくても緩慢だった執筆活動が停滞する見込みです。
ネットが使えない間も、いちおうケータイでの報告等は可能なので、長引くようでしたらそちらでお知らせいたします。
ご迷惑をお掛けいたしますが、なにとぞ宜しくお願いいいたします。

ＬＯＶ

その３－７９

それにしても救援の遅さにエウロパは閉口する。自分を狙ってきていた敵の狙撃ポイントは僅か３ｋｍ程度離れた場所だったはずで、そこをガニメデが急襲して脅威を排除したのであれば、もういい加減、こちらへ向かってきているだろうし、到着していても良いはずだ。しかし、ガニメデは到来しないどころか目視圏内に人影ひとつ見当たらないのである。

同胞が必ず助けに来ることは盲信と呼べるまでに確信していた。だが、今すぐにそれが得られないならば、やはり早急に独力でカリストの保護保全に努めるほかない。エウロパはカリストの耳元を探り、手際よくピアスコネクタを引き出すと端子をＭＴに接続し、バイオロイドのメンテナンスモードを起動する。バイオロイドの保全権限を持っていない身分なので大がかりなことはできないが、それでも何もしないよりはマシだろう……保全権限を与えられていれば直接的にカリストと接続して精密な状態管理も可能なのだが、その権限を与えられているバイオロイドには会ったこともないし、存在を確認したこともない。

ＭＴを覗き込むエウロパの表情が厳しくなる。カリストに搭載された４基ある対消滅炉（バニシングモータ）のうち、２基が内熱過多で実質的に停止してしまっているのだ。いわゆる完全な「片肺」である。幸運にもこれは熱でピストンやシリンダが変形したり焼き付いてしまったためではなく、内熱を少しでも軽減するために故意に制御されたセーフモードに切り替わっているためである。保全権限の有無に関わらず、この対消滅炉の燃調は、にわかには信じられないほどに悪魔的な次元での繊細な調整がなされているため、何者も触れることを許されてはいない。仮に、制御を失った対消滅炉が「暴走」を始めた場合、どのような顛末を迎えるのか、その終息手段も含めて、それを真に理解している者もいないのだ。

まったく動けなくなっているカリストではあるが、一応は生きた状態……いわば「昏睡状態」で安定していると言える。しかし発電量が上昇しない限り冷却に必要な充分な量の窒素や希ガス類を抽出することができないため、やがて内熱は飽和し、対消滅炉は焼き切れてしまうに違いない。炉が「暴走」するよりも遙かにマシな最期であるが、結果的にそれはカリストの「死」を意味する。

「とにかく今は消費電力を少しでも抑えて抽出炉を安定させないと……」

一般的なメンテナンスモードで制御できることは限られているが、とりあえず気を失っている現状のカリストに不要と思われる機関や機能を一時的に遮断していくしかない。ほとんど消費電力の増減には寄与しないだろうが、視聴覚機能や常駐の入出力機関のチェックを外してみる。どうせ気を失っていて脱力しているのだから全身の動作を制御しているリニアリールの稼働を遮断できれば相当な電力を稼げるはずなのだが、これはメンテナンスモードの一般権限を越えた部門らしく、残念ながら触ることができなかった。

「……これで０．４９％の電力を削れたわ……ほとんど意味が無いように見えるけど……」

僅かに絞り出した余剰電力を抽出炉の稼働に回してみるが、最も容易に抽出できる窒素でさえ、普段の抽出量の１０％未満だ。それでも内熱が飽和して対消滅炉が停止するまでの猶予を、時間にして５秒ばかり先延ばしにすることができた。エウロパが思うようにほとんど無意味なような気もするが、何もしないでいるよりも遙かにマシなのだ。

現場で待つエウロパとカリストのために、ガニメデは救急車の赤色灯を回し、時に道路を逆走し時に先行車をパッシングしながらアウトバーンへ昇るランプ目指す。交差点に進入する際には、助手席のイオが鬼気迫る表情で「カリストの敵」と言わんばかりにサイレ

ンのスイッチを連打していた。
「そこっ！　さっさと道を空けなさいよっ！　偉大なドイツ人の遵法精神はどうしたのよっ！？」
「いや、そんなに熱くならなくても……」
さすがのガニメデも殺気立ったイオの剣幕に鼻白む。ガニメデが思うに、やはりイオとカリストは互いに特別な存在なのだろう。同胞を救うためならば、真剣に、真摯な姿勢で事に当たりはするけれども、我を忘れて激情に突き動かされるまでの愛着を他者に感じる自信も、そんな対象も、ガニメデには無い。
だからと言って格別にイオとカリストが羨ましいかと言えば、そういうワケでもない。何もイオとカリストに限ったハナシではなく、互いに「そういう関係」になった際に抱え込むことになる苦悩や気苦労の多さに、憐れみにも近い心情と同情を感じてさえいた。その気苦労もろもろ……それをヒトは「恋愛感情」と呼ぶ慣例になっているのだが……それを（現時点では）感じることのないガニメデは、自分を気楽なものだと思う。
そもそも……ガニメデは助手席でワアワア言っているイオをチラリと見ながらハンドルを切りつつ考える。そもそも、バイオロイドは、ロボットは、「恋愛感情」なんか感じて良いのだろうか？　ガニメデは深く考えることもなく感覚的に「イオとカリストの恋愛（らしきモノ）」を是認していた。だが、それはロボットに本当に必要な要素なのだろうか……？

その３－７９（後書き）

『なによ、作者、その気になれば予定通り更新できるんじゃない！
ダメかもわからんなんて予防線を張っておくなんて卑怯よっ！』
「でも、もうストックが尽きちゃったんだって～♪　あはは～♪」
『……予定通りなんて言っても、よくよく考えたら月イチ更新だし、ぜんっぜんハードル低いわ……甘えよ、甘えっ！』
「来年の２月くらいにパパになるんだって～♪」
『こんなヘナヘナＳＦすらマトモに書けないんじゃ、先が思いやられるわ……』

――――――――――――――

こんにちは、ＬＯＶです。
どうにかこうにか引っ越し諸々も終わり、新しい生活にも慣れつつあります。
頑張って書いていくので、これからも宜しくお願いいたします。

設定など（イオについて）　※ややネタバレ含む注意（前書き）

本篇中で詳細に説明できていない設定などを載せています。
随時、項目など加筆していく予定です。
基本的には、ある程度読み進めて頂いたことを前提に書いています。
過度のネタバラしはありませんが、本篇中では伏せられている事柄や裏設定なども含まれるかと思いますので、興が削がれるという方は見ないのが良いかと思われます。

設定など（イオについて）　※ややネタバレ含む注意

・イオ

アストラル技研で創られたバイオロイド。型式は「ＸＸ４８ｃｚ－ＥｇＶＩ－Ｓ」。正式な呼称は「イオ・イャフキエル・ボスポラス・フォン・アストラル」。「イオ」は木星の衛星、「イャフキエル」は生命の樹を守護する智天使、「ボスポラス」はギリシア語で「牝牛の渡海（ギリシア神話のイオが牝牛の姿で渡った海峡にその名を残している）」の意味に、それぞれ由来する。なお、イャフキエル（ザフキエル）は別名をイョフィエルと称呼することもあり（と言うか、イョフィエルと同一か）、また、共に智天使の長としてエデンと生命の樹の守護者でもあるのだが、イョフィエルはカリストのセカンドネームでもあるため、イオとカリスト、ふたりの「存在の近さ」を反映していると言える。

型式から考えればカリストの後発機であるが、実際には僅かに先行してロールアウトしている。そういった事情もあってか、イオ自身はカリストよりも「年上」であるかのように考えているが、ふたりとも設定年齢は１６歳になっており、ほぼ双子と見なせるほどに設計思想も近い。ただし、社外にいるカリストとは異なり、会社に残っているイオは最新の機関や機構に更新し続けているため、その性能差は開いていく一方である。戦闘用バイオロイドとしては平均的な性能で、際だって特化された部分は無いが、それゆえに汎用性に優れ、カリストと同じく日常生活に良く適応する。

身長１４０ｃｍ、体重３５．５ｋｇ。前述の通り設定されている年齢は１６歳で、カリストよりは僅かに背も高いため年長に見えないこともないが、それでも１６歳には見えない。ただし、立ち振る舞いや態度はカリストに比べれば遙かに大人っぽいため、明らかに子供扱いされることは少ないし、ムネも少しは膨らんでいる（カリストに比べて、だが）。髪色はフラクスン・ブロンド（いわゆる亜

麻色）。髪型は前髪を切り揃えたストレートロングであるが、ロールアウト直後にカリストに勧められるままツインテールにし、現在もその際の記憶を消去されているにも関わらずツインテールに結わえている。また「エンケラティス時代」には結わえずにいた（本人的には変装のつもりだったらしい）。瞳の色は明るいブラウンだが、内心ではカリストのコバルトブルーの瞳色を羨ましく思っている。右利き。設定上の血統はスラヴ系ゲルマン人。設定上の血液型はＡＢ型。

カリストのことを自分より遙かにカワイイと思い込んでおり、また、イオとしてはそうであってもらわないと困る（？）ため、ほとんど自覚できていないが、イオ自身も相当に優れた人目を惹く美しい外見をしている。

もっぱらアストラル技研の内勤制服を着用し、戦闘が予想されるときにのみ戦闘制服に着替えるようにしている。カリストが言うにはイオの下着は「しましま」とのことである。

良く言えば非常にメリハリの付いた性格をしており、強気の時にはノリだけで何でもこなす勢いの良さを持ちながら、慎重さを要するときには徹底的に細心に振る舞うなど、良くも悪くも気分に左右されやすい。容易に激昂したり、一転して落ち込んだりと、気持ちのムラも比較的大きい。幼稚な言動ながらどこかしら超然とした部分さえ感じられるカリストに比して、イオの性格は思春期の少女に特有な不安定さと自信の無さを感じさせるが、そういった部分を自覚しながらも、それを外に出さないように努める気の強さも持ち合わせている。

一見すると誰に対しても常に無遠慮な物言いをしていると思われがちであるが、一線を越えないように自制はしているようである。常識的で真面目ではあるが高い自尊心を持っていると同時に恥ずかしがり屋でもあるため、誰に対してもなかなか素直になれない。時に攻撃的な言動が見られるのは、自分の真意を悟られるのを恥じて

いるためである（ただしカリストには変な部分で見透かされやすい）。意外と猜疑心が強く批判的で、何にでもまずケチを付ける傾向があり、どちらかと言えばネガティヴな考えに陥りやすい。意固地と言えば意固地であるが、何事にも強い信念を持って当たり、自分の判断や決めごとは容易には曲げようとはしない。正義感が強く、不正や御為ごかしを嫌っており、否定すべきは明確に否定する。

初対面の相手には付き合いにくそうな印象を与えかねない面もあるが、実際は高い道徳心を持ち情に篤く、優しい性格である。カリストほど感受性が強くないため、他者の心情を汲むようなことはあまり得意ではないが、信義や恩情に対しては万難を排してでも応えようとする。意外と耳年増なところがあり、アダルトな物事に対しては興味があるがゆえに過剰に反応しがちである。一見するとリアリストであるが、実際はかなりのロマンチストである。

カリストに対しては友情や姉妹愛を超えた心情で接し、すでに自覚するまでに深い愛情を向けている。そういった意味ではカリスト以上に同性愛志向が強いとも言えるが、実際のところ、恋愛感情を向ける同性はカリストのみであるため、厳密には同性愛者というわけではない。また、男性に対して「自分が女性」であるということを過度に意識しているため、なかなか上手く接することができないが、カリストがいなければ、普通に異性に好意を寄せていた可能性も否定できない。カリストとは双子とも言えるほどに近い姉妹機ではあるが「血の繋がった姉妹」という意識はほとんどなく、あくまで同胞であり親友である（これはカリストも同様である）。なので（同性だということの是非は別にして）近親恋愛という禁忌を犯しているという意識は互いに無い。根拠は不明ではあるが、本篇中にもあるように、イオはカリストの「おヨメさん」になると考えているようである。

イオはカリストへ無償とも呼べる愛情を持っている。本篇中では互いに相思相愛だと確認はしているものの、それ以降は特に具体的な進展はない。ただし、幼稚なカリストはさておき、耳年増なイオ

は「その先」へ進むことを念願しており、常にカリストに対して僅かに発情し続けている（本人もよく判ってはいないようだが）。

本篇中にもあるように、ギターなどの楽器を弾くこと、およびヴィンテージギターの蒐集を趣味としている。ギター以外の楽器（いわゆる「ロック楽器」）全般も巧く扱うことができ、作詞作曲や歌うことも得意である。ほか、古典的ＳＦ小説やジュヴナイル小説（いわゆる「ラノベ」）など、読書も趣味にしている。カリストの趣味趣向が特に珍奇なため、その陰になって目立たないが、イオも相当に偏った知識と趣向の持ち主であり、風変わりと言えば充分に風変わりである。

カリストのことを食いしん坊だと揶揄することも多いが、実際はイオも相当に食欲旺盛な方で、きちんとした健康的な三度三度の食事は欠かさない。空腹になるとあからさまに不機嫌になるという短所を持つ。自炊は得意ではないので、会社にいるときにはバイオロイド用の喫茶店を主に利用している。

その３－８０（Happy Twosome Xmas Edition &

クリスマス用の特別篇です。
現在進行している本篇とは直接の関わりはありません。
去年の続きかもしれないですw

その３－８０（Happy Twosome Xmas Edition &

クリスマスとは楽しいものである。細かな点で問題があったとしても、原則的には楽しくなくてはならない。楽しくないクリスマスは、それはもうクリスマスではないし、クリスマスを挙行しているという自覚があるのであれば、多少の不具合があろうが否が応でも楽しいと言わなければならぬ。

これは一種の子供じみた心意気だ。クリスマスを過ごす子供のマナーである。電飾で彩られた大なり小なりのツリーが飾られ、それなりのゴチソウが並べられ、プレゼントを貰える。これらはクリスマスに限って、ほぼ無償で子供に供されるものである。子供にだけ与えられたクリスマスの特権なのだ。その僅かな対価として子供はクリスマスを楽しまねばならぬ。

なので、イオは楽しいのだ。イオはカリストとふたりきりでクリスマスを過ごしている。キャンドルの向こう側でカリストは顔をテラテラさせて微笑んでいた。

カリストが丹精込めて作ったという数々の料理も、それは見た目にも豪勢で手間が掛かっていそうで、どこぞのレストランのシェフに頼んで代わりに作って貰ったのではないかと疑いたくなるような本格的なモノである。料理を苦手にしているイオにしてみれば、引け目にもなりかねないカリストの特殊技能ではあるが、その一方で、例えば骨なしのタンドリーチキン（カリストが言うには、正式には「チキンティッカ」と呼ぶらしい）などは、皿がパーティー用の紙トレーだったりするあたり、やはりカリストの仕事であると言わざるを得ない。そういう「カリストらしい落ち度」がイオを程良く和ませてくれるのだ。

「作ってから気がついたんだけど、おっきなお皿、なかったんだよねぇ」

「でも、これ、けっこう美味しいわ……初見じゃ真っ赤なチキンなんて食べる気がしなかったけど」
「えへへ～♪　まだい～っぱいあるから、好きなだけ食べるとイイよ～♪」
　カリストはイオに手料理を褒められて素直に喜んだ。ボウルから蒸かしたイモを取り分けながらテレテレと笑い、モリモリ食べる。料理上手なカリストではあるが、やはり作るよりも食べる方が遙かに好きなのだ。
「イオが遊びに来てくれでもしないと、あんまし自分でゴハン作ることないからねぇ」
「あんたはゴハンよりもお菓子の方が主食だからね……」
　イオが足下のゴミ箱を見れば、そこにはお菓子の空き袋や包装紙がギッシリだ。カリストはバツが悪そうに笑って、ゴミ箱から溢れそうになっているお菓子の包装紙をギウギウと押し込んだ。
「あはは～♪」
「あんたねえ……まったく……あはは」
　いつも通り幼気なカリストに思わずつられて笑い声を漏らしてしまうイオだったが、ふと我に返る。
「あ！　そうそう！　そんなあんたにプレゼント！」
　イオは数日前からに用意していた、可愛らしくラッピングされた包みを取り出し、少し無愛想な態度でカリストに差し出す。
「こっこれっ！　普通に売ってる普通のお菓子だけど……あんたって趣味が奇抜だからヘタなプレゼント用意しても不発に終わるかもしれないから、こういう実用的なモノの方がイイかなって思って」
「ウレシイ～♪　どもアリガト～♪」
　カリストは目を潤ませてイオから包みを受け取り、さっそく開けてみる。中には高級チョコレートや有名店の焼き菓子などが詰め込まれていた。
「ふわあ～♪　コレってばベルリンですっごく有名なお店のマドレーヌだよねぇ♪　おいしそだねぇ♪」

「あと、会社が発給してる商品券みたいなのも入れておいたから、好きに使ってね」

食事を終えたふたりはベッドの上に並んで座って、小雪のちらつく窓の外を眺めていた。うっすらと雲に覆われた夜空は、ぼんやりと明るい。地面には少しだけ雪が積もっているが、大雪にはならなさそうだった。

「ねぇねぇ♪　イ～オ♪　わたしからもプレゼントあるんだよねぇ♪」

カリストは嬉しそうに、少しだけ真面目な顔をしながらイオを顧みる。

「なあに？」

おカネのないカリストからプレゼントを貰えるとは夢にも思っていなかった（期待していなかった）イオは率直に驚いたが、平静を装って素っ気なく応えた。カリストはテレテレと笑いながらイオの手を握り、くちびるを突き出した。

「チュウ～♪　チュッチュってしてあげる～♪」

「なっ！？　バ、バカっ！　ちょ、ちょっとっ！？」

いきなり抱きすがってきて、腰にしがみつくカリストを引きはがしにかかるイオ。カリストはフワフワとイイ匂いがする。

「わたしをイオにあげる～♪」

「いっ、要らないわよっ！？　バカなこと言ってないで離れなさいよっ！？」

イオが藻掻いていると、唐突にカリストはしがみつくウデのチカラを弱めて、窓の外を見上げる。

「ふわあ♪　雲が切れてお月さまが出てきたよっ♪」

イオがカリストの視線の先を辿ると、薄雲の切れ目から真っ白な三日月が顔を覗かせていた。

柔らかな１２月の月の灯りが、ベッドの上のふたりを照らし続ける。

その３－８０（Happy Twosome Xmas Edition &

「もう年末恒例のクリスマス特別篇だねぇ♪」
『いやさ、だから、こんな駄文を書くくらいなら本篇を……』
「イオってば、なんでチュッチュってさせてくれないのかなぁ？」
『なっ！？　い、いや、だから、そういうのって誰にも見られてないところで……』
「そいじゃ、また来年ね～♪　メリークリスマ～ス♪」
『（あっ！？）　メリークリスマス！　また来年！』

――――――――――

今年最後の更新になります。
本年もご愛読ありがとうございました。
来年もズルズルと書いていきますので、よろしくお願いいたします。
それではみなさん、メリークリスマス＆ハッピーニューイヤー！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7062g/

KallistoDreamProject

2011年12月24日11時51分発行